山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

福岡県春日市大字上白水所在
原遺跡の調査

第 10 集

1979

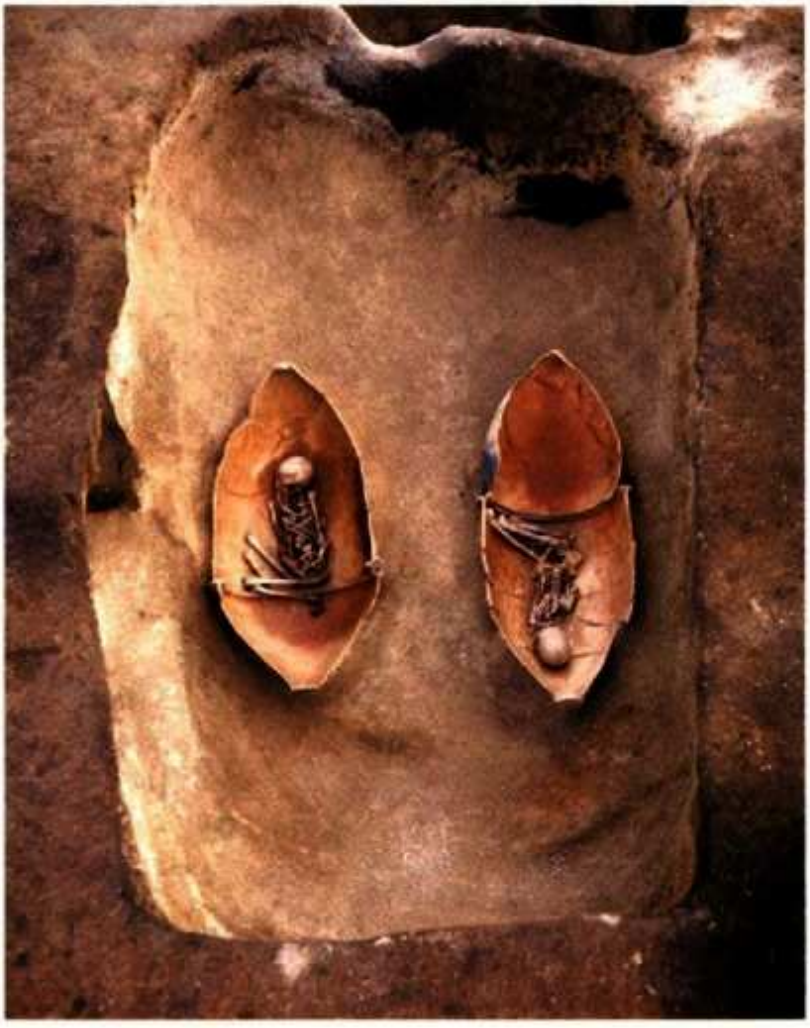
福岡県教育委員会

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

春日市大字上白水所在
原遺跡の調査

第 10 集

10号壺棺墓と溝状遺構



99・100号壺棺墓人骨出土状態

序

この報告書は，福岡県教育委員会が日本国有鉄道の委託を受けて，昭和46年度から実施している，山陽新幹線建設路線内および博多総合車輌基地内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は，春日市大字上白水所在の一大甕棺墓群遺跡である原遺跡についてのもので，『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第10集として刊行することになりました。

遺跡の一部は日本国有鉄道および地元春日市のご協力により保存されております。今後は文化財保護の立場からみた遺跡の活用についても関係者の方々と協議したいと考えております。

発掘調査の記録としては決して満足のゆくものではありませんが，本報告書を通して文化財に対する関心を深める方が一人でも増えれば，望外の喜びとするものであります。

なお，地元春日市・那珂川町の方々をはじめ，関係各位の御援助と御配慮により本書を発刊するはこびとなりましたことを心から感謝申し上げます。

昭和54年3月25日

福岡県教育委員会

教育長　浦　山　太　郎

例　　言

1. 本書は，昭和49・50年度に福岡県教育委員会が，日本国有鉄道下関工事局から委託されて，山陽新幹線建設のため破壊される埋蔵文化財を発掘調査した，10冊目の報告書である。
2. 人骨の調査・執筆にあたっては九州大学医学部永井昌文教授・木村幾多郎助手の協力を得た。
3. 本書の執筆はⅠ－2を柳田康雄，Ⅳ－1・2・5・6の土器ならびにⅣ－8－(1)を小林義彦，Ⅳ－7を永井昌文，Ⅳ－8－(2)を藤瀬禎博，他を木下が行なった。
4. 遺構の実測・写真は各担当者が行ない，遺物の実測・整図は木下・佐々木隆彦・小林義彦・河鍋洋子・白水千賀子・勝野素子・手嶋道子が行なった。
5. 航空写真では鍋久嗣郎氏，遺物写真は九州歴史資料館岡紀久夫氏の協力を得た。
6. 本書の編集は木下修があたった。

本　文　目　次

Ⅰ　序　　文 …… 1

1. はじめに …… 1

2. 調査の経過 …… 2

3. 保存に至る経過 …… 5

Ⅱ　遺跡の概要 …… 9

Ⅲ　縄文時代の遺構と遺物 …… 10

1. 層　　序 …… 10

2. 遺　　構 …… 11

3. 遺物の出土状態 …… 11

4. 遺　　物 …… 14

(1) 土　　器 …… 14

(2) 石　　器 …… 18

5. 小　　結 …… 23

Ⅳ　弥生時代の遺構と遺物 …… 25

1. 甕　棺　墓 …… 25

2. 墓壙内供献土器 …… 89

3. 土　壙　墓 …… 92

4. 溝状遺構 …… 96

5. 祭祀遺構 …… 98

6. 包含層出土の土器 …… 103

7. 出土人骨について …… 103

8. 小　　結 …… 107

(1) 甕棺について …… 109

(2) 埋葬傾斜について …… 112

Ⅴ　おわりに …… 119

図　版　目　次

巻頭図版10号甕棺墓，99・100号甕棺出土人骨

本文対照頁

図版 1　山陽新幹線博多車輌基地建設前の原遺跡航空写真1972.8（南から）……1
2　山陽新幹線博多車輌基地全景航空写真1975.5（北から）……1
3 (1)　原遺跡遠景……2
(2)　原遺跡と原古墳群航空写真……2
4　原遺跡全景航空写真……2
5 (1)　原遺跡全景航空写真……2
(2)　原遺跡甕棺墓群全景航空写真……2
6 (1)　原遺跡北半全景……10
(2)　原遺跡B6区全景……10
7 (1)　B6区土層断面……10
(2)　B8区遺物出土状態……10
8 (1)　2号石組炉跡……11
(2)　4号石組炉跡……11
9 (1)　5号石組炉跡……11
(2)　5号石組炉跡下底面……11
10 (1)　出土縄文土器……14
(2)　出土縄文土器……14
11 (1)　出土石器……18
(2)　出土石器……18
12 (1)　甕棺墓群全景……25
(2)　甕棺墓群全景……25
13 (1)　135・136号甕棺墓付近近景……25
(2)　131～134号甕棺墓付近近景……25
14 (1)　1号甕棺墓……25
(2)　5号甕棺墓……26
15 (1)　6号甕棺墓……26

(2) 7号甕棺墓と1号祭祀遺構……31
16 (1) 7号甕棺墓……31
(2) 9号甕棺墓……32
17 (1) 10号甕棺墓遺構検出状態……32
(2) 10号甕棺墓と溝状遺構及び重複関係……32
18 (1) 10号甕棺墓全景……32
(2) 10号甕棺墓全景……32
19 (1) 10号甕棺墓……32
(2) 10号甕棺墓の挿入方法……32
20 (1) 5・10号甕棺墓の埋置状態……32
(2) 10号甕棺墓人骨出土状態……32
21 (1) 30号甕棺墓……35
(2) 32号甕棺墓……36
22 (1) 37・38号甕棺墓……36
(2) 41号甕棺墓……37
23 (1) 42号甕棺墓……37
(2) 44号甕棺墓……37
24 (1) 53号甕棺墓……38
(2) 54号甕棺墓……39
25 (1) 61号甕棺墓と3号祭祀遺構……39
(2) 65号甕棺墓……39
26 (1) 101～106号甕棺墓……40
(2) 101～104号甕棺墓検出状態……40
27 (1) 99・100号甕棺墓付近全景……40
(2) 99・100号甕棺墓出土状態……40
28 (1) 99・100号甕棺墓墓壙埋土状態……41
(2) 99・100号甕棺墓と溝状遺構全景……41
29 (1) 99・100号甕棺墓……41
(2) 99・100号甕棺墓……41
30 (1) 99・100号甕棺墓人骨出土状態……41
(2) 99・100号甕棺墓人骨出土状態……41
31 (1) 99号甕棺墓人骨出土状態……41
(2) 100号甕棺墓人骨出土状態……42

32 (1) 101号甕棺墓 ……43
(2) 102号甕棺墓 ……43
33 (1) 103号甕棺墓 ……43
(2) 104号甕棺墓 ……44
34 (1) 105号甕棺墓 ……44
(2) 106号甕棺墓 ……45
35 (1) 109号甕棺墓 ……46
(2) 110号甕棺墓 ……46
36 (1) 111号甕棺墓 ……47
(2) 113号甕棺墓 ……47
37 (1) 114号甕棺墓 ……48
(2) 115号甕棺墓 ……48
38 (1) 115・116号甕棺墓 ……48
(2) 117・118号甕棺墓 ……48
39 (1) 120号甕棺墓 ……49
(2) 121号甕棺墓 ……50
40 (1) 125号甕棺墓 ……51
(2) 125号甕棺墓埋置状態 ……51
41 (1) 128号甕棺墓 ……52
(2) 128号甕棺墓人骨出土状態 ……52
42 (1) 120・130号甕棺墓・4号祭祀遺構近景 ……53
(2) 130号甕棺墓 ……53
43 (1) 130号甕棺墓埋置状態 ……53
(2) 133号甕棺墓 ……54
44 (1) 134号甕棺墓 ……54
(2) 134号甕棺墓埋置状態 ……54
45 (1) 134号甕棺墓人骨出土状態 ……54
(2) 134号甕棺墓人骨の苧麻付着状態 ……54
46 (1) 135号甕棺墓 ……55
(2) 136号甕棺墓 ……55
47 甕 棺 (1) ……26
48 甕 棺 (2) ……32
49 甕 棺 (3) ……34

50　甕棺(4)……30
51　甕棺(5)……38
52　甕棺(6)……40
53　甕棺(7)……43
54　甕棺(8)……43
55　甕棺(9)……44
56　甕棺(10)……46
57　甕棺(11)……50
58　甕棺(12)……51
59　甕棺(13)……53
60　甕棺(14)……54
61 (1) 1号土壙墓……93
(2) 4号土壙墓……94
62 (1) 5号土壙墓……94
(2) 6号土壙墓……96
63 (1) 7号土壙墓……96
(2) 10号土壙墓……96
64 (1) 47号甕棺墓と供献土器出土状態……38
(2) 溝状遺構全景……97
65 (1) 溝状遺構と119号甕棺墓……97
(2) 119号甕棺墓……49
66 (1) 1号祭祀遺構……98
(2) 2号祭祀遺構……101
67 (1) 2号祭祀遺構内丹塗甕形土器出土状態……101
(2) 3号祭祀遺構……102
68　祭祀遺構出土土器……102

挿　図　目　次

第1図　山陽新幹線の路線と博多車輌基地の位置……3
第2図　山陽新幹線関係主要遺跡分布図……折込み
第3図　山陽新幹線博多総合車輌基地付近地形図及び遺跡位置図
（日本国有鉄道原図）……折込み

第 4 図　原遺跡地形図……8
第 5 図　原遺跡全体図……折込み
第 6 図　縄文時代調査区実測図……折込み
第 7 図　B6・B9区土層断面図……10
第 8 図　2～5号石組炉跡実測図……12
第 9 図　B8区遺物分布図……13
第 10 図　縄文土器拓影1……15
第 11 図　縄文土器拓影2……16
第 12 図　石器実測図1……20
第 13 図　石器実測図2……21
第 14 図　墓壙検出状態……25
第 15 図　原遺跡弥生時代遺構配置図……折込み
第 16 図　7号甕棺墓実測図……31
第 17 図　10号甕棺墓墓壙内土層断面図……32
第 18 図　10号甕棺墓と溝状遺構実測図……折込み
第 19 図　99・100号成人棺と101～104号小児棺配置図……40
第 20 図　99・100号甕棺墓墓壙内土層断面図……41
第 21 図　5号甕棺墓実測図……56
第 22 図　6号甕棺墓実測図……57
第 23 図　7・9・13・14号甕棺墓実測図……58
第 24 図　10号甕棺墓実測図……折込み
第 25 図　22・23・37・38号甕棺墓実測図……59
第 26 図　41・42・44・52号甕棺墓実測図……60
第 27 図　53・54号甕棺墓実測図……61
第 28 図　58・65号甕棺墓実測図……62
第 29 図　99・100号甕棺墓実測図……折込み
第 30 図　101～104号甕棺墓実測図……63
第 31 図　105～107号甕棺墓実測図……64
第 32 図　109・111・112号甕棺墓実測図……65
第 33 図　110号甕棺墓実測図……66
第 34 図　113～115・117号甕棺墓実測図……67
第 35 図　118～120号甕棺墓実測図……68
第 36 図　121号甕棺墓実測図……69

第 37 図　122・123号甕棺墓実測図……70
第 38 図　125号甕棺墓実測図……71
第 39 図　127号甕棺墓実測図……72
第 40 図　128号甕棺墓実測図……73
第 41 図　130号甕棺墓実測図……74
第 42 図　131～133号甕棺墓実測図……75
第 43 図　134号甕棺墓実測図……76
第 44 図　135号甕棺墓実測図……77
第 45 図　136号甕棺墓実測図……78
第 46 図　5・6・10号甕棺実測図……折込み
第 47 図　13・22・23号甕棺実測図……79
第 48 図　37・38・44号甕棺実測図……80
第 49 図　52～54号甕棺実測図……81
第 50 図　101～103号甕棺実測図……82
第 51 図　99・100号甕棺実測図……折込み
第 52 図　104～106号甕棺実測図……83
第 53 図　107・109号甕棺実測図……84
第 54 図　110・121・125号甕棺実測図……折込み
第 55 図　111・117・118号甕棺実測図……85
第 56 図　119・120号甕棺実測図……86
第 57 図　122・126号甕棺実測図……87
第 58 図　131～133号甕棺実測図……88
第 59 図　127・128・130号甕棺実測図……折込み
第 60 図　134～136号甕棺実測図……折込み
第 61 図　墓壙内出土供献土器実測図 1……89
第 62 図　墓壙内出土供献土器実測図 2……90
第 63 図　1～5号土壙墓実測図……92
第 64 図　6・8号土壙墓実測図……93
第 65 図　7号土壙墓実測図……94
第 66 図　9・10号土壙墓実測図……95
第 67 図　溝状遺構土層断面図……97
第 68 図　溝状遺構内遺物出土状態実測図……97
第 69 図　1号祭祀遺構実測図……98

第 70 図　1～4 号祭祀遺構出土土器実測図……99
第 71 図　2 号祭祀遺構実測図……100
第 72 図　2 号祭祀遺構出土土器実測図……101
第 73 図　3 号祭祀遺構実測図……102
第 74 図　4 号祭祀遺構実測図……103
第 75 図　包含層出土土器実測図 1……105
第 76 図　包含層出土土器実測図 2……106
第 77 図　10号甕棺墓人骨実測図……108
第 78 図　99・100・128・134号甕棺墓人骨実測図……折込み
第 79 図　主要甕棺実測図……110
第 80 図　門田遺跡門田地区出土成人・小児棺の埋葬傾斜……113
第 81 図　各遺跡の甕棺埋葬傾斜……114
第 82 図　47号甕棺墓供献土器出土状態……123
第 83 図　99・100号甕棺人骨清掃風景……124

表　目　次

表　1　山陽新幹線関係遺跡一覧表……折込み
表　2　出土土器一覧表……14
表　3　主要石器一覧表……18
表　4　石組炉跡一覧表……23
表　5　弥生時代遺構一覧表……27～31
表　6　人骨一覧表……107
表　7　墓壙内供献土器一覧表……122

原遺跡の調査

I 序　　文

1. はじめに

本書は，山陽新幹線博多総合車輌基地建設に伴う側道工事により破壊された原遺跡の報告書である。当遺跡は山陽新幹線関係埋蔵文化財地点番号第33—1地点（表1参照）にあたり，調査は昭和49・50年度と2回にわたり実施し，対照面積は2,310㎡に及ぶ。

遺跡は福岡県春日市大字上白水字原に所在する。同一台地上には5世紀初頭に位置付けられ竪穴式石室・木棺直葬を内部主体とする円墳3基と円形・方形周溝墓8基・土壙墓3・古墳時代住居跡2・中世建物跡3が検出され，原古墳群の調査として『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第2集に報告している。今回の原遺跡の報告は台地の南端部に集中した弥生時代の甕棺墓を主とし，下層の縄文時代早期の包含層の調査を含めている。

なお，甕棺墓を中心とする地点については，日本国有鉄道との協議の結果，その大部分が保存されている。

調査期間及び調査関係者は下記の通りである。

昭和49年度　昭和49年11月25日～昭和50年2月15日　800㎡

昭和50年度　昭和50年10月27日～昭和51年1月10日・同年3月1日～3月10日　1,510㎡

人骨の調査

主　任　永井昌文（九州大学医学部教授）　　調査員　木村幾多郎（九州大学助手）

福岡県教育委員会

総　括

教育長	森田　實（前）	教育長（現）	浦山　太郎
教育次長	西村　太郎（前）	教育次長（現）	岩下　光弘
文化課課長	藤井　功	文化課課長補佐	平井　元治
文化課課長補佐	野上　保	文化課課長補佐	川崎　隆夫

文化課課長補佐	武久　耕作	文化課課長補佐	松岡　　史
庶務			
庶務係長	前田　栄一（前）	庶務係長	大渕　幸夫（現）
主事	加藤　俊一	主任主事	瀧　　龍二
主任主事	大神　　新	嘱託	吉村　源七
発掘調査			
調査第2係長	栗原　和彦	調査第1係長	宮小路賀宏
主任技師	柳田　康雄	主任技師	井上　裕弘
技師	木下　　修	技師	佐々木隆彦
技師	小池　史哲	嘱託	宮崎　貴夫
遺物整理嘱託	岩瀬　正信		

他に調査補助員として，藤瀬禎博・三津井知廣・高田弘信・小出輝雄氏，整理補助員として小林義彦・荒武麗子氏の協力を得た。

また，発掘作業には春日市・那珂川町在住各位の協力を得，調査の進行にあたっては，日本国有鉄道下関工事局，同南福岡工事区をはじめ，遺跡の範囲確認調査では日之出水道機器上白水工場の御理解をいただいた事を記し，感謝の意を表したい。

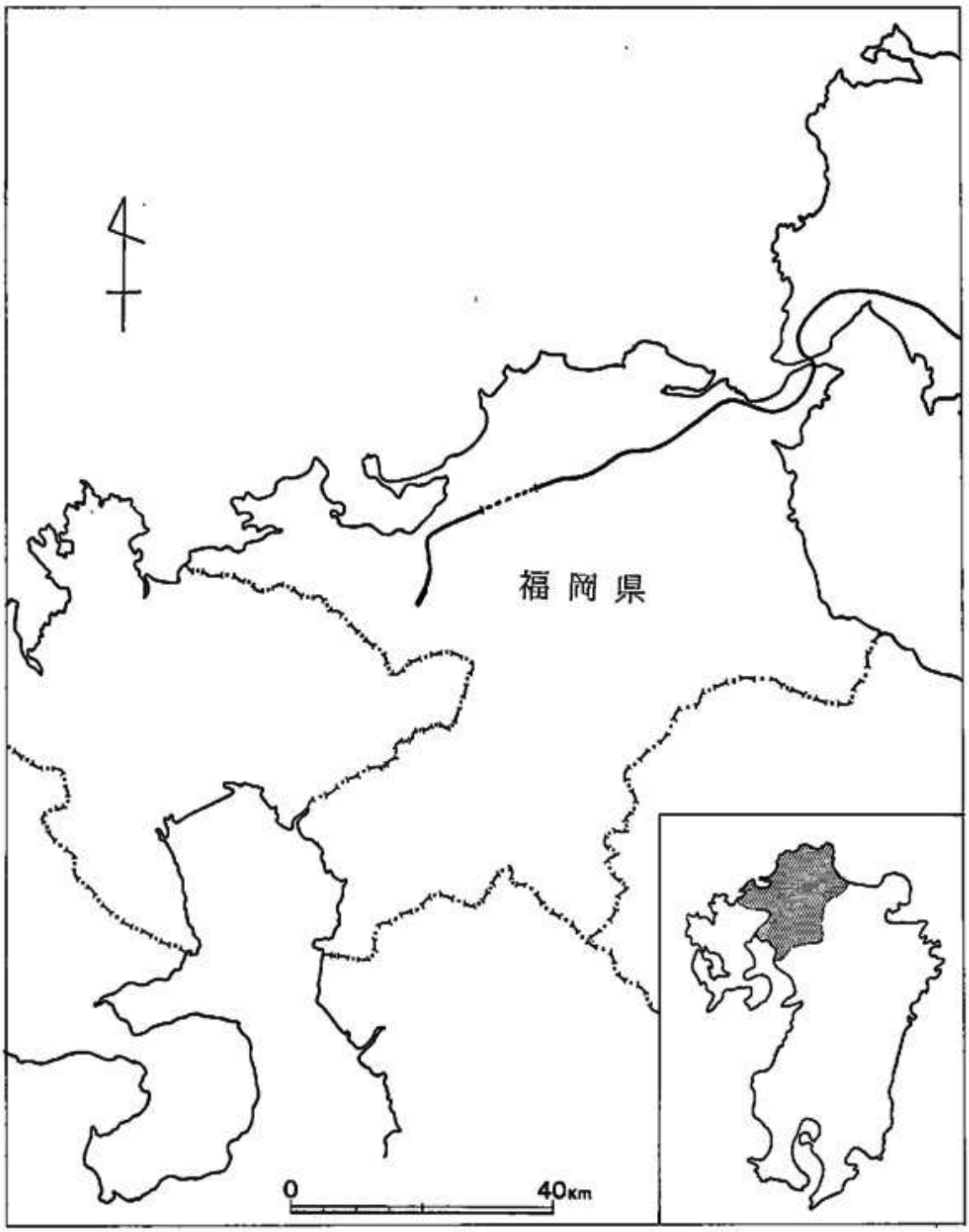
なお，国鉄関係者は「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第1・2・7集に示す通りである。

2. 調査の経過

昭和48年度に行なわれた原古墳群の調査で，3号墳の周溝中に破壊された甕棺が発見された。当時は車輌基地に係わる調査が優先されたため，古墳群及び削平される部分の調査に主力をそそぎ，側道敷にあたる甕棺墓群の調査は後回しの形となった。

昭和49年度の調査により200基以上に及ぶ弥生時代中期中葉～後葉の甕棺墓・土壙墓が約800㎡の範囲に密集して検出された。春日市を中心とする「なのくに」地域は重要な弥生時代の遺跡が集中するが，その大部分はすでに消滅している状態であった。車輌基地建設に関する調査もその例外ではなく，地元春日市をはじめとして，この遺跡を保存したいという声が大きくなった。文化課では日本国有鉄道に遺跡の重要性を説明し，保存の申し入れを行なった。2回の協議がもたれたが解決できず，12月15日をもって調査を一時中断した。従って，調査は上部から検出された小児用甕棺墓を主として行なった。

その後の国鉄・春日市・那珂川町・文化課の協議により側道迂回を基本とする案で，原遺跡



第1図　山陽新幹線の路線と博多車輌基地の位置（1/1,000,000）

の大部分が保存される事になった。しかし，側道側の20基についてはどうしても破壊せざるを得なかったので昭和50年度の調査は，側道迂回でもさけられない部分の甕棺墓・土壙墓の調査と台地全域にわたる縄文時代早期の包含層の調査を行なった。調査終了後，保存される地域全体にバイラン土をもって0.5～1m盛土をし，整地している。以下，日誌をたどってみたい。

昭和49年度

11月25日　調査開始，発掘区の清掃から始める

11月27日　3号墳南側の表土剝ぎを行なう。50基あまりの墓壙を確認する。

11月29日　重機を導入して，台地南東端の整地層を除去する。

11月30日　黒色土の上部で小児用甕棺墓がすぐあらわれたので，重機の使用を中止し，ベルトコンベアーを導入し，人力で表土を剝ぐ。

12月4日　ほぼ全体の表土剝ぎを完了した。

12月9日　台地全体を覆う黒色土面で一応遺構を確認していたが，不確実なので，茶褐色土まで下げたところ170基以上の墓壙を検出した。

12月10日　上部の小児甕棺から掘り始める。

12月12日　1・22号甕棺，1・3号土壙墓の写真をとる。

12月13日　10号甕棺墓を巡る溝状遺構を検出する。この溝状遺構は，5・6号甕棺墓によって切られている事が判る。

12月16日　台地の南側の大きな墓壙を掘り下げたところ，4基の小児甕棺を検出した。

12月19日　4基の小児甕棺（101号甕棺～104号甕棺）の写真をとる。

12月24日　4基の小児甕棺を実測し，下を掘り下げたところ，2基の成人甕棺（99・100号甕棺）を検出。

12月25日　遺構の全容が大体把握でき，当遺跡が車輌基地と直接係わりのない側道敷にあたるため，保存の方向に調査を進めることにする。

12月26日　保存の為の資料として調査途中であるが，全景写真ならびに遺構配置図を作成する。

12月27日　上部に露出している小児甕棺墓の実測。それ以外の甕棺には土をかぶせる。

1月7日　台地北側の縄文時代の包含層の調査を開始する。押型文土器・石鏃出土。

1月16日　第1回原遺跡保存対策会議を行なう。

1月28日　春日市・教育長井上萬治氏に原遺跡の保存問題について説明する。

1月31日　第2回原遺跡保存対策会議を国鉄・春日市・那珂川町・文化課の四者で行なう。

2月1日　99・100号甕棺墓の実測。

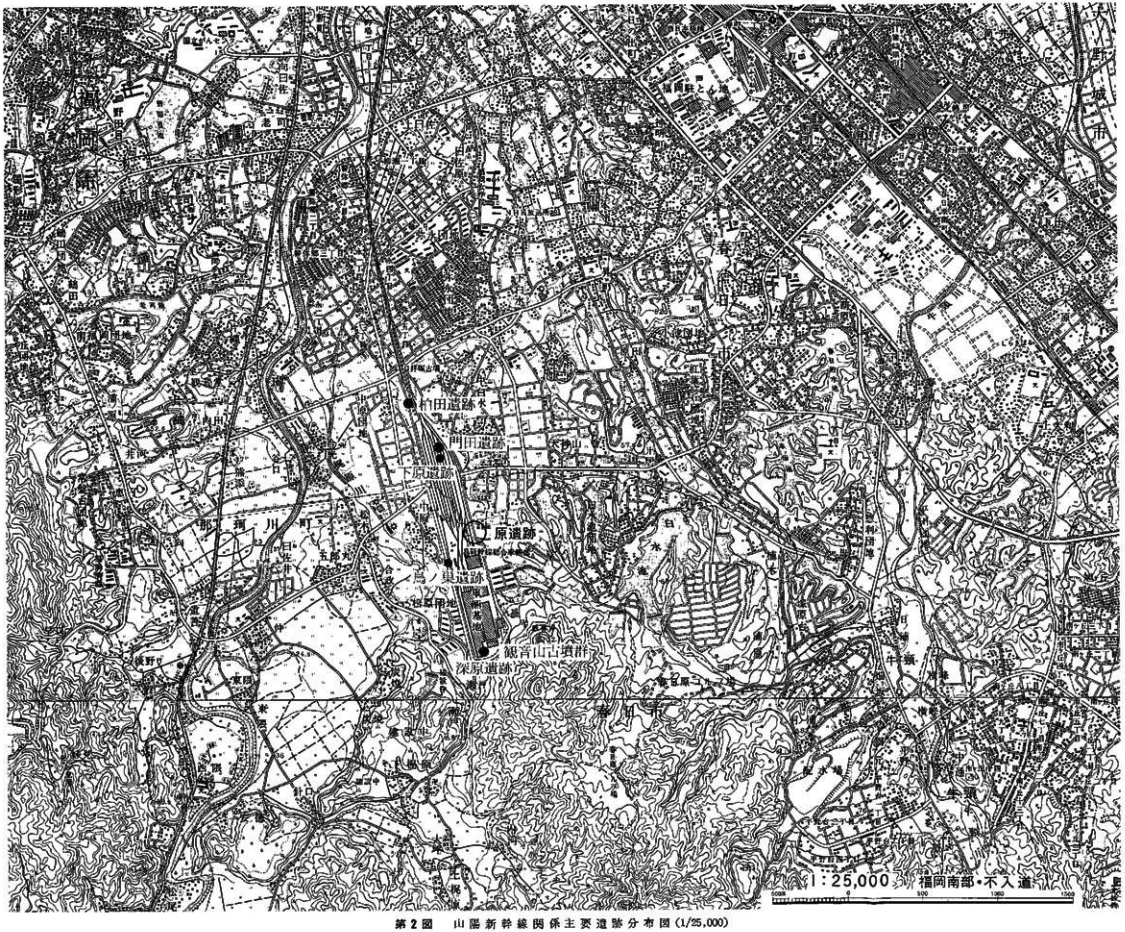
2月3日　99・100号甕棺内に保存のよい人骨が残存した。しかし副葬品等は持たなかった。

2月10日　残っている部分の実測を行なう。

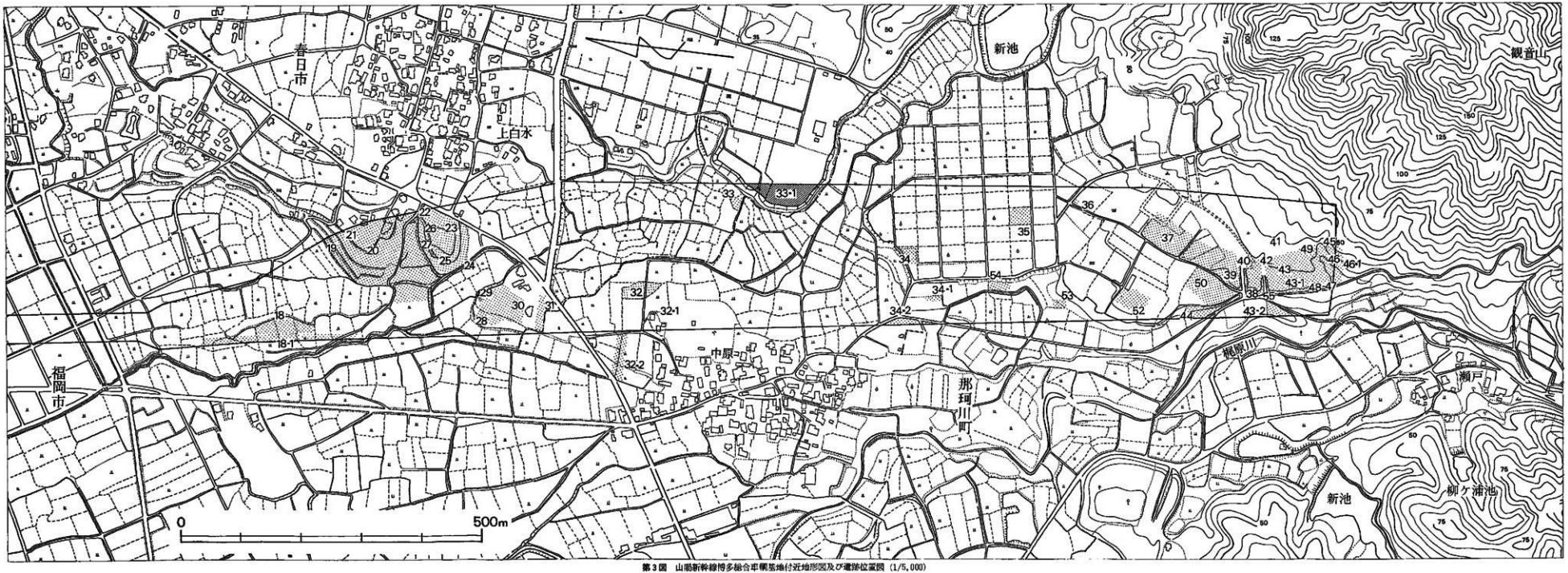
表 1　山陽新幹線関係遺跡一覧表

地点番号	遺跡名	所在地	内容	調査終了面積 46年度	47年度	48年度	49年度	50年度	51年度	52年度	53年度	備考	報告書
				㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡		
3	小田山墓地	糸島郡志摩町中山	近世墓地										1集
4	下松尾墓地	〃　〃　〃	近世墓地		—								〃
5	京尾遺跡	〃　〃　宮木	中世配石遺構		—								〃
6	若宮条里	〃　若宮町	条里遺構		229								〃
6—0		〃　〃　金丸	近世墓地			—						調査前に工事のため破壊	〃
6—1	田尻遺跡	〃　〃　金丸・水原	古墳，歴史時代：住居跡		2,035		3,000						〃
6—2	剣当塚	〃　〃　竹原	古墳		146							遺構，遺物なし	〃
6—3	八幡塚	〃　〃　〃	古墳		16			300					
7	杉岡遺跡	〃　〃　猫光	土壙：散布地									遺構なし	1集
8		粕屋郡久山町山田	条里遺構		100							調査の結果，条里ではなかった	〃
18	柏田遺跡	春日市上白水	先土器～歴史時代：住居跡8軒，円形遺構，溝状遺構			790							4集
18—1							2,100	1,000				昭和49年度は，別府大学に一部調査委嘱	〃
18—2	辻田遺跡	〃　〃	弥生，古墳時代：住居跡，木器							2,375	1,882		
18—3	井手ノ元遺跡	福岡市南区上日佐								720			
19—27及び周辺	門田遺跡	春日市上白水	先土器～歴史時代：住居跡，貯蔵穴，甕棺墓，石棺墓，土壙墓，古墳6基		予備調査(4,500)	7,170	9,700	4,570				昭和48年度に門田2号墳の調査を平安博物館に委嘱	1・3・6 7・9集
28—31	下原遺跡	〃　〃	古墳時代：住居跡	2,784									3集
32	袖田遺跡	筑紫郡那珂川町中原	古墳時代：散布地		690								〃
32—1	〃	〃　〃　〃	古墳時代：甕棺墓				300						〃
32—2	久保遺跡	〃　〃　〃	縄文，歴史時代：溝状遺構						700				
33		春日市上白水	古墳時代：散布地			197							2集
33—1	原古墳群原遺跡	〃　〃	円墳3基，周溝墓8基，土壙墓4基			1,725	800	1,510					〃
			縄文時代早期，弥生時代甕棺墓									一部保存	10集
34		筑紫郡那珂川町中原	弥生時代：散布地		135							遺構，遺物なし	
34—1	鳥ノ巣遺跡	〃　〃　〃	先土器，縄文時代：散布地		267								
34—2						288						別府大学に調査委嘱	
35		〃　〃　〃	中世：散布地			200							
36		〃　〃　〃	近世：遺構（かんのん道）			—							
37，39 50，55	井手ノ原遺跡	〃　〃　〃	中世：方形区画遺構，溝状遺構	1,814	1,515	1,500							2集
38，40～43 45～49 49—1～4，51	観音山古墳群中原支群	〃　〃　〃	古墳31基	707	6,400	220							5集
43—1	深原遺跡	〃　〃　〃	縄文時代：石組炉跡32基，円形竪穴遺構		1,840	2,540							
43—2						104						昭和47年度は別府大学に一部調査委嘱	8集
46—1									1,021				
44		〃　〃　〃	中世：散布地		271								
52		〃　〃　〃	中世：散布地		452								
53		〃　〃　〃	古墳時代：散布地		123							遺構なし	
54		〃　〃　〃	弥生，古墳時代：散布地		150								
54—1		〃　〃　〃	古墳時代：散布地			95							
	合計			5,305	14,369	14,829	15,900	7,380	1,721	3,095	1,882		

註 1．地点番号1，2は北九州市教育委員会，9～17は福岡市教育委員会が調査を担当した。
2．路線以外の付帯施設にかかわる調査地点は上表に含めてある。
3．面積欄に（—）で示したものは調査面積としてはあげないが当該年度に調査したことを示す。



第2図　山陽新幹線関係主要遺跡分布図(1/25,000)



第3図　山陽新幹線博多総合車輌基地付近地形図及び遺跡位置図（1/5,000）

2月15日　保存に対する回答が出るまで，調査を中断し，遺構の保存のため土を入れる。

昭和50年度

6月4日　第3回原遺跡保存対策会議を行なう。前回から進展がみられず難行する。

8月18日　第4回原遺跡保存対策会議を行なう。

8月26日　第5回原遺跡保存対策会議を行なう。この結果，国鉄の側道迂回案を了承し，やむを得ず破壊される部分の調査を行う事になった。

9月16日　側道迂回案に沿った杭打ち作業を行なう。

10月5日　新幹線関係の遺跡説明会を那珂川町中央公民館にて開催する。

10月27日　調査を再開する。

10月30日　99・100号甕棺墓の北側にあった長方形の掘方を調査したところ，7号方形周溝墓の主体部であることが判明した。

11月1日　墓域確認のため，日之出水道機器の空地を掘る。その結果，東側へ3～5m程墓域が延びることが判明した。

11月4日　台地南端斜面の調査を行なう。横穴を穿いて挿入する小児用甕棺墓を検出した。

11月7日　航空写真の撮影。

11月10日　10号甕棺墓群の発掘作業を終り実測に入る。

11月24日　実測終了する。

11月25日　B6区の下層の調査を行なう。土器は小破片が多く出土。

12月10日　B8区は比較的多くの押型文土器・縄文土器や石鏃，削器等が出土する。各遺物の出土地点を記録し，写真撮影も行なう。

12月24日　B6～B9区の下層の調査を続行する。石組炉跡の実測，写真撮影を行なう。

1月10日　土層断面図の作成及び，甕棺の墓域内は1m前後の盛土をし，整地作業を行なう。

3月1日　台地の北端部が急拠削平されることになったため，縄文時代の調査を開始する。

3月5日　縄文土器が出土するが，あまり量は多くない。ピットもあるが散在している状態でまとまらない。

3月10日　土層図の作成，写真撮影を行ない調査を終了する。

3. 保存に至る経過

原遺跡は弥生時代の甕棺墓・土壙墓の墓地群である。文化課では，その重要性を説明し，5回にわたる協議の結果，墓地の8割以上が保存される事が決った。その経過については，すでに柳田康雄氏によって報告されているが（註1），ここに再録しておきたい。

原1号墳付近のピット群の調査から始める。ピット群と縄文時代石組炉の調査後，3号墳南側の甕棺群の検出にかかったところ，27日には50基を確認した。工場側が埋立てていた整地層はブルドーザーによって排土し，12月4日から遺構の検出にかかった。甕棺墓は保存がよく，その数は170基以上に達した。その中には2基の大型の墓壙があり，それぞれ一部に方形の溝をめぐらすことも判明した。この甕棺群は側道用地外の工場敷地にも存在するものと思われ200基以上に達することが予想される。このような大甕棺墓群は福岡平野にはもう存在しないであろうし，重要な遺構も含まれることから，文化課では国鉄に対し側道の一部設計変更による原遺跡保存の申し入れを行なうことになった。

第1回原遺跡保存対策会議　1月16日，文化課は国鉄に対し，原遺跡の重要性を説明し，協議の結果，2本の側道を部分的に2階建とし遺跡を迂回するという文化課の保存案に対し，国鉄側も検討を重ね設計変更案をあげ，それに伴う地元住民や工法および経費等の問題点を次回の会議までに整理し用意することになった。

第2回原遺跡保存対策会議　1月31日，国鉄・文化課・春日市および那珂川町の新幹線対策室が出席。

国鉄の側道一部設計変更案

(1) 遺跡の上を橋梁で渡る。経費3億円。

(2) 基地側の道路を一部ボックスにし，遺跡の上を通る道路をその上にまわして一部2階建とする。経費2億7千万円。

(3) 遺跡の下をボックスで通る。経費2億円。

(4) 側道を1本にする。この場合歩道が遺跡の上になる。

以上4案を検討することになった。

那珂川町の意見――地元住民と協議の結果，2本の側道を造ることで基地建設を受け入れた。しかも，基地の下を通るボックスから南側の那珂川町分は，博多開業までの期限付で。

春日市の意見――車輌基地建設で失われた道路の代りをするのが側道の使命であるが，側道を一部かえても影響が少ないので，地元との協議のうえ解決できるのではないか。しかし，ボックスにすると照明等の管理面で問題があるので賛成できない。

協議の結果，那珂川町は直接関係なく，春日市はブロック工場が取り付きの問題はあるが，工場の東側の道路を使用しているので問題なく第1案の橋梁で渡れば，地元も影響が少ないということになった。しかし，国鉄側は，設計変更は現場の担当者では決定できないので，上層部に説明し，決定を待たなければならないとして，今回の協議を終った。

その後，国鉄は博多開業におわれ，協議ができないままで，49年度を終った。

昨年度2回行なった原遺跡保存対策会議は，(1)遺跡の上を橋梁で渡る，(2)基地側の道路を一部ボックスにして，遺跡側の道路をその上に一部2階建にする，(3)遺跡の下をボックスで通

る，(4)側道を１本にする，以上４案で地元を混じえ国鉄側を協議してきたが，その後年度内には何の解答もなく終った。昭和50年度になってもなかなか解答がなく，我々は，原遺跡の保存決定が確定するまでは，破壊を前提とした調査には応じられないという気構えで対処していた。

第３回原遺跡保存対策会議　６月４日，国鉄・文化課・春日市および那珂川町が出席。

ここで文化課は再度この貴重な原甕棺墓群を保存してほしい旨を強く要望したが，国鉄側は設計変更を前提としているものの，前回とほとんど変らない４案の再提出であった。

(1)基地側の道路を提供する構内通路案。(2)道路を２階建にする案。(3)盛土案。(4)橋梁案。

これでは，前２回の協議から進展がないとして，当文化課は強く要望して検討した結果，今後(1)・(2)の案にしぼって協議することに決定した。

第４回原遺跡保存対策会議　８月18日，国鉄・文化課・春日市・那珂川町出席。

国鉄側は，現地の測量を基にした設計図を提出した。それは，前回までと違った大幅な設計変更により，車輌基地内通路を一部側道として使用し，遺跡側の側道をこの上に２階建として通ずるもので，国鉄側に譲歩のあとが見られた。

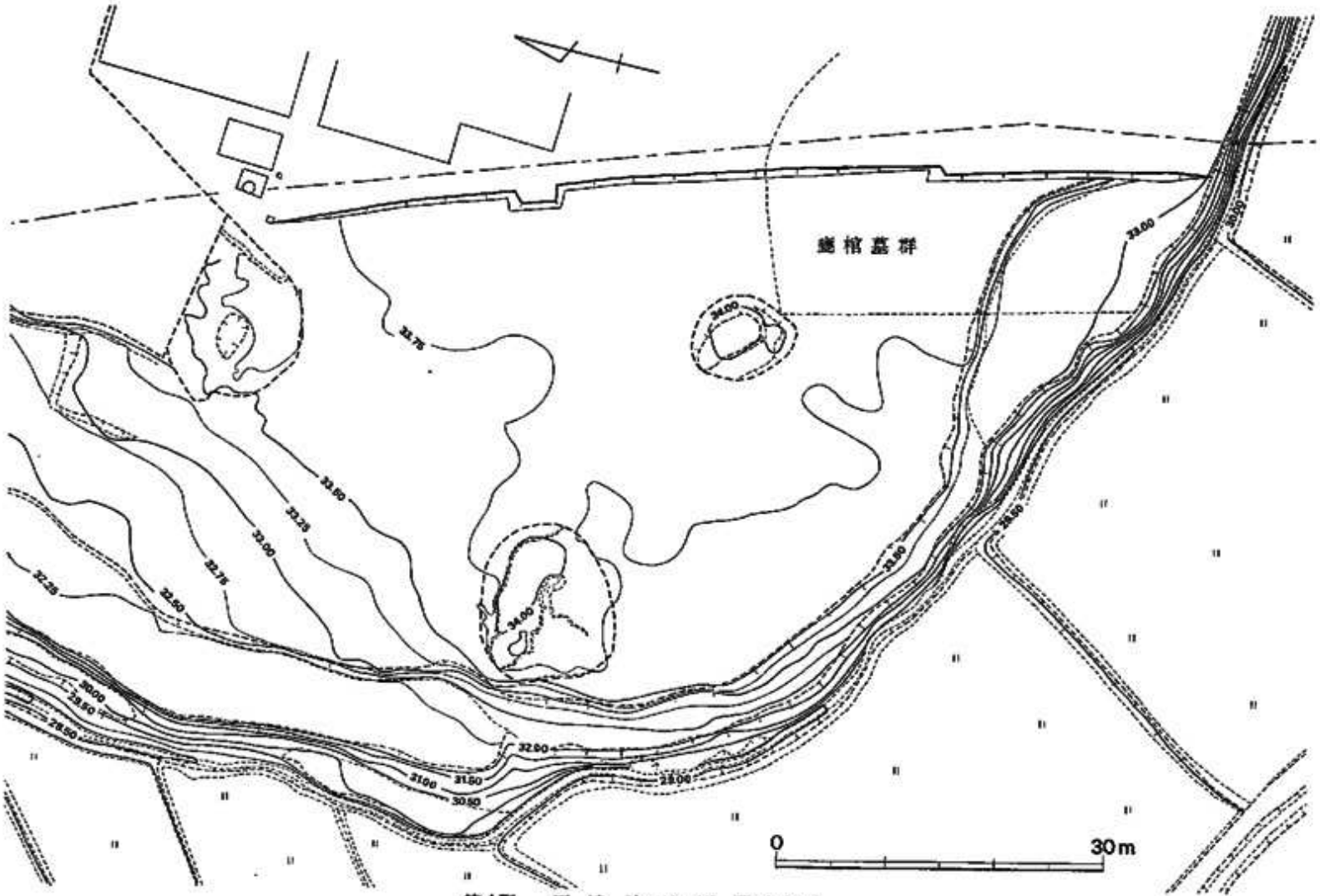
しかし，実際の側道は原遺跡でも最も重要な遺構（溝を巡らす甕棺墓）を保存できない構造であった。したがって，文化課は遺跡を保存するに値しないとして，側道をあと４m程車輌基地側に寄せることを主張し，再度の設計変更を要望した。その結果，国鉄は可能なかぎり側盤などの設計変更を行なって，次回に示すことで今回の協議を終った。

第５回原遺跡保存対策会議　８月26日，国鉄・文化課・春日市・那珂川町出席。

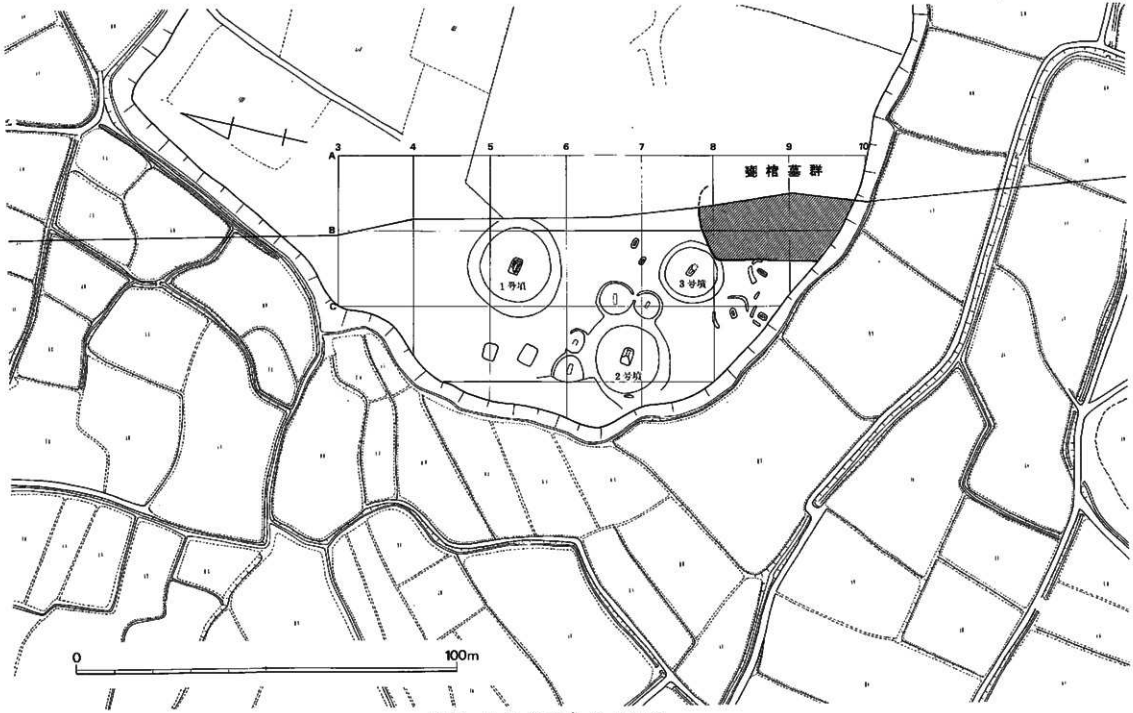
国鉄側は，前回の会議に示した設計変更案より2.5m程側道を車輌基地側に寄せる設計図を提出した。その結果，20基前後の甕棺墓が破壊されるが，原遺跡の主要な遺構である「L」字形の溝を巡らす甕棺墓と同一墓壙内に成人２，小児４を同時に埋葬した遺構が確実に保存されることから，この国鉄側の側道迂回案を了承した。なお，那珂川町から地元住民に対して文化財問題で設計変更された経緯を説明するように要望があったので，文化課は遺跡説明会などを通じて行なうよう約束した。

文化課は，現地にて実際に破壊される甕棺墓が何基となるか確認するために，正確な抗打ちを行なうよう国鉄側に依頼していたが，９月16日国鉄は文化課立合いのもとに抗打ちを実行した。その結果，側道側の20基が側道に直接かかるか，その工事のために破壊されることになるが，他は全て保存されることになった。

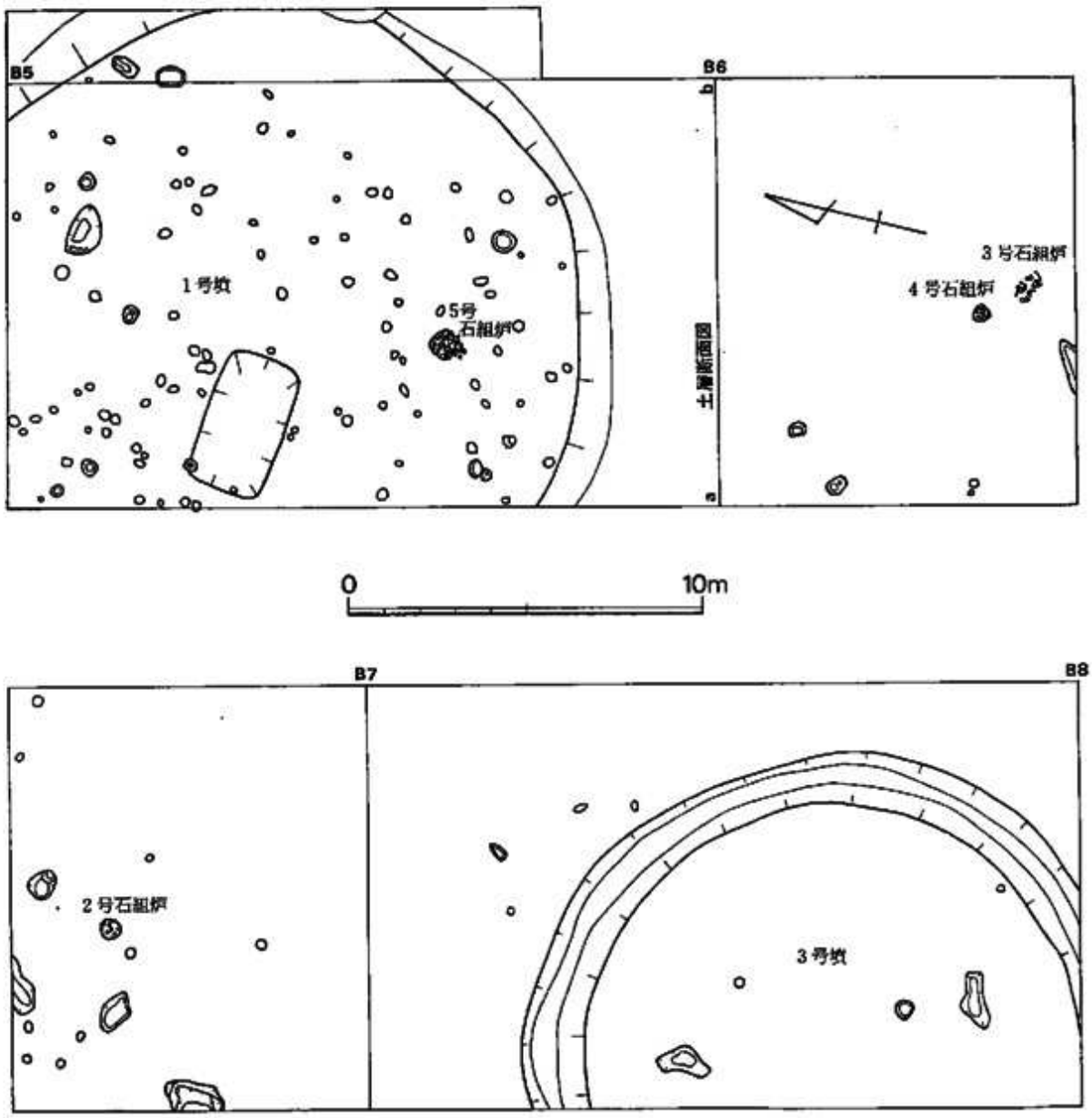
註１　木下　修編『昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』福岡県教育委員会　1975
　　桐田康雄編『昭和50年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』福岡県教育委員会　1976



第4図　原遺跡地形図(1/600)



第5図　原遺跡全体図（1/1,000）



第6図　縄文時代調査区実測図(1/200)

Ⅱ 遺跡の概要

当地域周辺の立地ならびに，環境については山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第１～４集に詳しいので，そちらを参照していただきたい。

遺跡は春日市・那珂川町にまたがる博多総合車輌基地のほぼ中央部，東端に位置する。標高34mを測る半円状に突き出た平坦な台地の西端部で，中位段丘Ⅰ面にあたるであろう(註１)。現水田面との比高は５m前後で，台地の北端崖下に小湧水が，また，東へ入り込む小さな谷の奥にも湧水がみられる(註２)。

縄文時代の包含層はほぼ台地上全域に及ぶ。Ｂ６・Ｂ７区では３層の茶褐色土層上部より５基の縄文早期石組炉跡が検出され，那珂川町深原遺跡と同様な炉を中心とした遺物の出土状態が認められる。また性格不明の落ち込みや，Ｂ６～Ｂ８区にはピット状遺構があり，特に５号石組炉付近にまとまる。また，Ｂ９区から南側でも，かなりの押型文・無文・縄文土器や石鏃・石匙等の石器が出土したが，甕棺墓域が保存されたので調査していない。

弥生時代の甕棺墓は原３号墳の南側周溝に一部破壊されて出土し，３号墳東側から台地の南端崖下にかけて密集してみられる。完掘した訳でないので，すべてが甕棺墓とは限ぎらないが，墓壙は200基以上に達している。また，墓域は東側の用地外へ３～５m程延びる事が判明している。甕棺墓は台地南端から上へ延びる溝状遺構から北側に連なる約２mの空間によって東西に分離されそうである。

墓域の北と南側に大きな墓壙が検出されている。10号甕棺墓は墓壙の北西に「Ｌ」字状に溝を巡らす甕棺墓で，溝は５・６号甕棺墓に切られている。一方，南側の99・100号甕棺墓は同一墓壙内に並行して納められた甕棺墓で，墓壙上部には，なお４基の小児甕棺墓が検出された特異なものである。

東側の墓域については，10基程の小児甕棺を除いて未調査である。

その他の弥生時代の遺構については，土壙墓10・祭祀遺構４・溝状遺構１が存在する。土壙墓は墓域の西・南端に偏在し，祭祀遺構も同様な位置状態がみられるが，これは，調査が破壊される西側に集中した事に起因する可能性が強い。

註１　古川博恭「板付上巻本編２－１地形・地質」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』35　1975

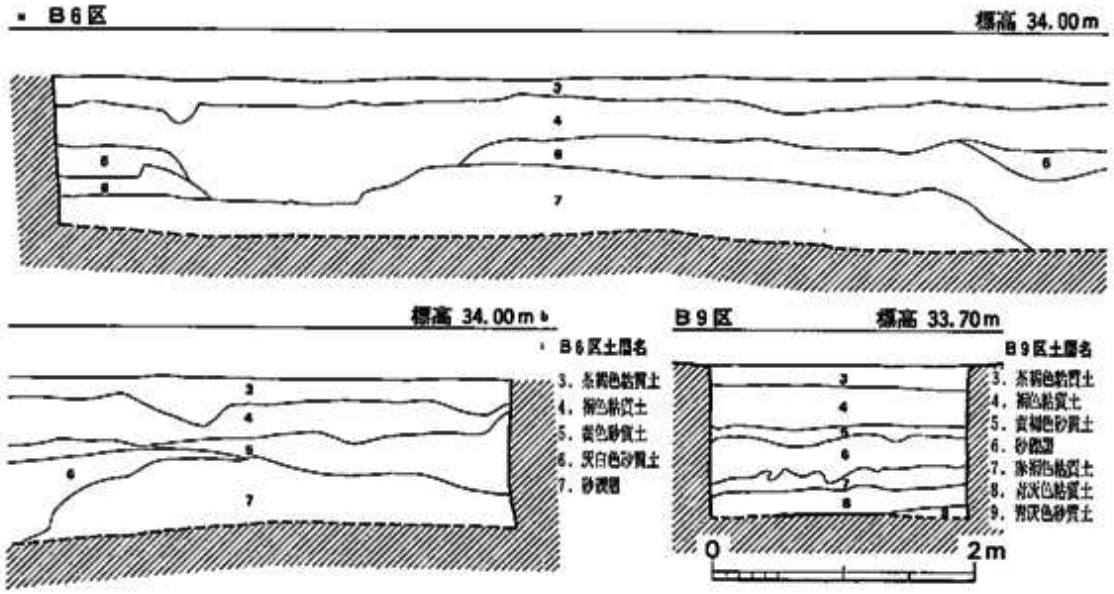
２　福久嗣郎「Ⅱ　第33地点の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』２　1976

Ⅲ　縄文時代の遺構と遺物

1. 層　　序

古墳時代の遺構検出のため，上部の表土層は除去されている。またＢ８区以南では３層の茶褐色土層の上に黒色土層の堆積約10cmほどがみられ，弥生時代の甕棺墓は，この層から掘り込んでいた。第７図はＢ６区の土層断面図で遺跡の東西方向の堆積状態を示す。

(3)層は茶褐色粘質土で，遺跡全体を覆う。厚さ15～20㎝で長石・石英等の小粒子を多く含む。縄文時代早期の包含層で石組炉跡が見られ，弥生時代の各遺構はこの面まで下げて掘方が検出できた。(4)層は褐色土で，粘質にとんでいる。厚さ30㎝前後。Ｂ６・７区で細石刃１点が出土した。(5)層は黄褐色砂質土で厚さ５～15㎝前後。Ｂ９区から台地南端部では薄く堆積する。(5)層以下は無遺物層である。(6)層は灰白色砂質土で20～50㎝の堆積。(7)層は白色層と互層をなす砂利層である。一方，Ｂ９区の土層堆積は３層以下で異なり，(6)層が砂礫層で層厚30㎝前後。(7)層が赤褐色の粘質土。(8)層は青灰色粘質土で厚さ20㎝。(9)層は青灰色砂質土と続く。



第7図　Ｂ６・Ｂ９区土層断面図(1/60)

原遺跡では春日市門田遺跡で観察されたオレンジ色軽石質火山灰，八女粘土層は認められず，灰白色の砂質土，砂礫層，青灰色砂質層が下部に表われ，中位段丘Ⅰ面の特色を表わしていると思われる。

2. 遺　　構

縄文時代の遺構には5基の石組炉跡がB6・B7区で，他に柱穴と思われるピット状遺構がある。ピット状遺構は確実に縄文時代に認定できるものと，できないものとがある。特にB6区では5号石組炉跡周辺にまとまって検出され，このピット群が石組を伴う住居跡の柱穴と考えられない事もないが，住居跡の掘り込み面及び，床面の検出ができない点，保留しておきたい。

1号石組炉跡

2号炉跡の東に並んで検出されたが，調査途中で盗掘にあい，全容は不明。

2号石組炉跡（図版8—1，第8図）

B7区で検出された。径60×53㎝の不整円形に近い掘り込み内に，拳大より小さい焼けた花崗岩の礫が散在している。当初は礫が密集していたが，調査中に盗掘を受けた。炉内より少量の炭化物が認められたが，炉内で火を焚した痕跡ではない。

3号石組炉跡（第8図）

やはり盗掘を受け破壊された炉跡である。南側に若干掘り込みが残存した以外，規模・形態等については不明である。原遺跡で確認された5基の炉跡中では最も大きいもので，炉を形成した礫も深原遺跡と類似している。

4号石組炉跡（図版8—2，第8図）

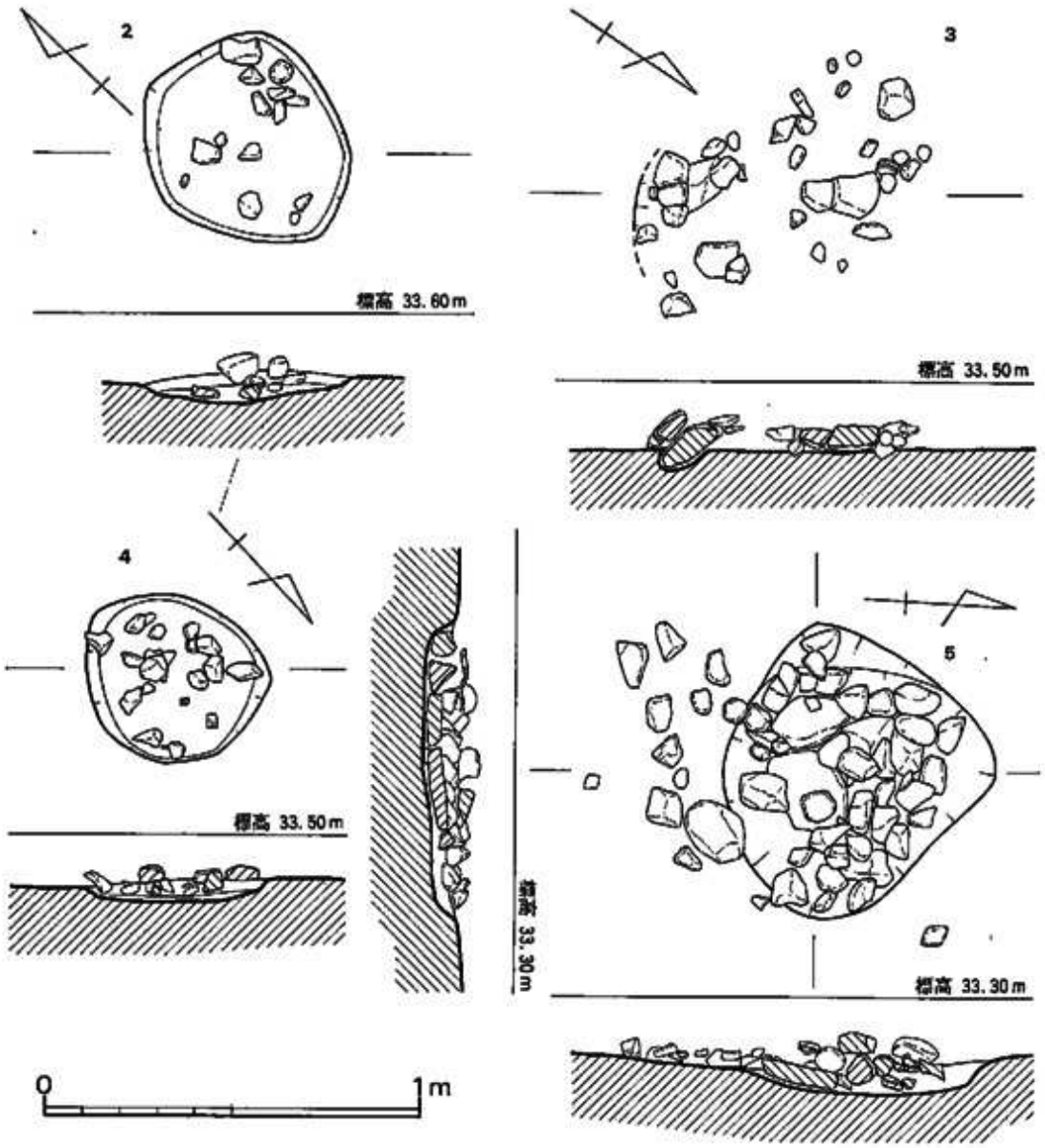
3号炉の北側B7区で検出された。径50×43㎝前後の不整円形を呈し，深さ5㎝内外の掘り込みを有す。炉内には2号炉と同様，焼けた礫が認められたが，礫の状態は不規則で，炉底に敷いた形跡は無い。炉底面より炭化物が若干検出された。

5号石組炉跡（図版9，第8図）

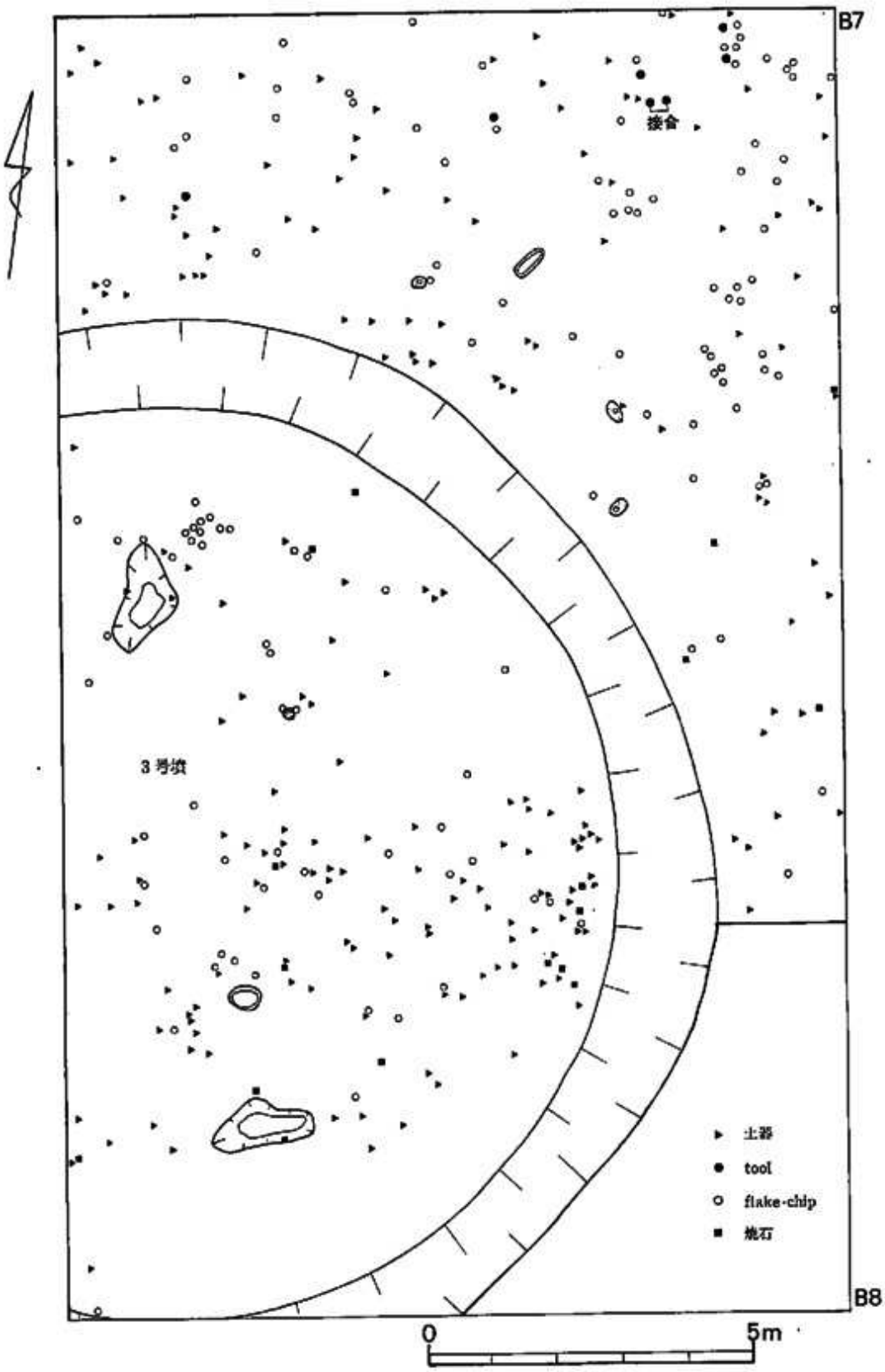
B6区に1基だけ離れて存在した炉跡で，当遺跡では最も調った形態を有する。南北73㎝，東西80㎝の台形状を呈す。深さ10㎝内外の炉底面に厚さ4㎝と扁平な花崗岩の礫を敷き，炉内には火を受け，赤く脆くなった拳大の礫が投入されていた。形態的には那珂川町深原遺跡1号石組炉跡(註1)に類似する。炉内には炭化物等は認められなかった。

3. 遺物の出土状態

B５～B８区の調査区について遺物の出土状態を記録した。包含層は３層の茶褐色粘質土で，その上半部に限って出土している。第９図はB８区の遺物出土状態である。B８区は原３号墳の墳丘下を主とした調査区で，深さ30cm～50cmの不整形の落ち込みや柱穴が検出された。



第8図　2～5号石組炉跡実測図(1/20)



第9図　B 8 区 遺 物 分 布 図 (1/100)

遺物は縄文早期の押型文・無文・縄文・撚糸文等の土器や石鏃・削器・剥片・削片・焼石が出土したが，遺物が伴う住居跡・石組炉跡等は認められなかった。遺物では安山岩製の削器の接合資料がある。他の地区ではＢ６区の５号石組炉周辺で石鏃が５点まとまって出土し，土器・石器の出土量も多い。全体的な出土量を見ると，土器ではＢ８区が最も多く，次いでＢ７・Ｂ６区の順となる。石器ではＢ６区に30点と最大で，Ｂ７区22点，Ｂ８区14点となる。縄文時代の遺物分布は調査区全域に及ぶが，出土量は深原遺跡に比べて少なく，比較的短時間の生活活動がしのばれる。また，その範囲も，台地の中央部へは延びないようだ。

4. 遺　　物

(1) 土　　器　（図版10，第10・11図）

総数312点出土した。層位的内訳は３層とした茶褐色土層に182点，それ以外の表土及び古墳の墳丘盛土内等に130点である。量的には無文土器が最も多く，次いで楕円押型文土器・撚糸文土器・縄文土器・山形押型文土器・貝殻文土器・条痕文土器の順になる。このうち，無文土器として分類したものには器面風化しているものも多く，他類土器を含んでいる可能性がある。層位・文様別出土量は表２の通りである。

Ⅰ類土器

押型文土器で山形文押型文と楕円押型文に分けられる。

〈Ⅰ類―１〉（第10図１～５）

山形押型文で12点出土した。いずれも胴部小破片で器形は不明な点が多い。１は細かく彫刻された原体で横方向に施文した胴下半部の破片。２・３は比較的荒い原体で，同一個体であろう。茶褐色を呈し，焼成は良好。Ｂ５区出土。４は縦位施文で，下半に施文のずれがみられる。黄褐色を呈し，器面は風化している。Ａ９区，表土層出土。５は横位施文であるが，器面が比較的乾燥した段階で原体を回転させている。

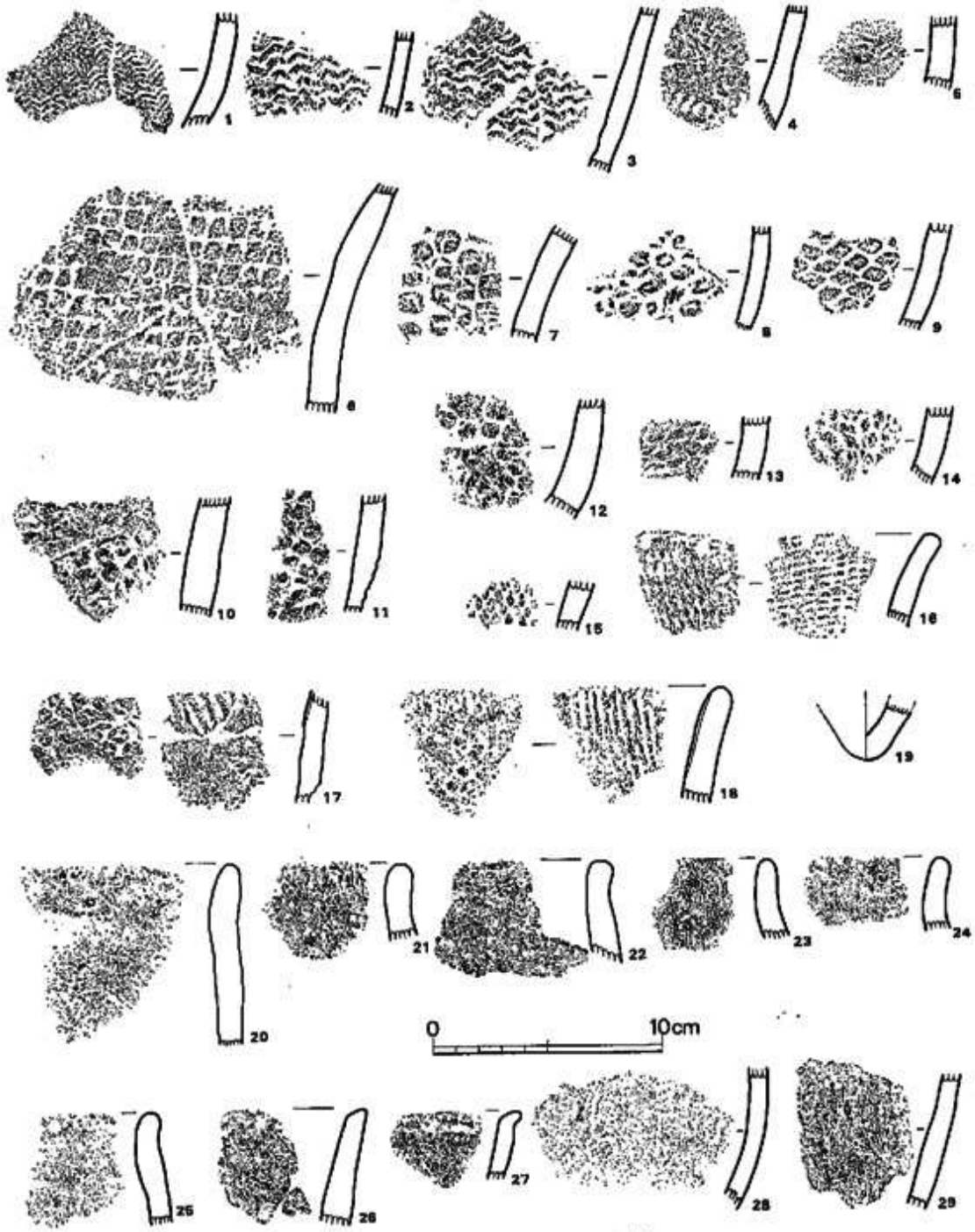
〈Ⅰ類―２〉（第10図６～19）

総数64点，うち茶褐色土層から21点出土した。口縁部は文様構成から次の４つに分類できる。

ａ．器外面に楕円文のみを施文したもので，２点の口縁部と53点の胴部破片がある。胴部破片については，当然ｃ～ｄにあてはまる部分も多いが一

表２　出土土器一覧表

分類		３層	その他	計	割合(%)
Ⅰ―１	山型押型文	2	10	12	3.8
Ⅰ―２	楕円押型文	21	43	64	20.5
Ⅱ	無文	129	61	190	60.9
Ⅲ	撚糸文	16	6	22	7.1
Ⅳ	縄文	8	6	14	4.5
Ⅴ	貝殻文	4	1	5	1.6
Ⅵ	条痕文		4	4	1.3
Ⅶ	その他	1		1	0.3
合計		182	130	312	100

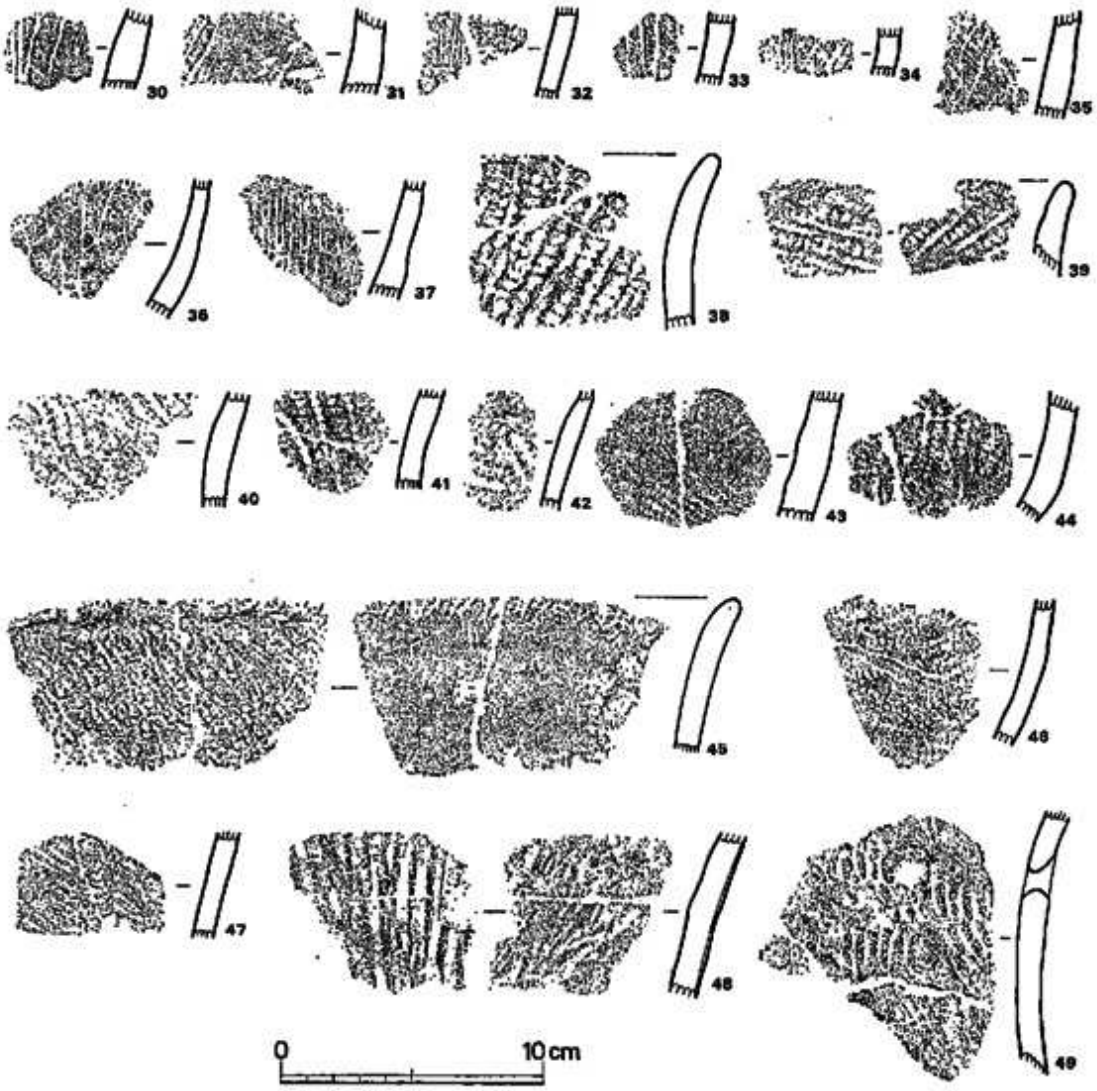


第10図　縄文土器拓影 1 (1/3)

応ここに入れて置く。6は粗大な楕円文を横位施文する口縁直下の大型の破片。器形は胴部上半から大きく外反し口縁部にいたり，胴中央部で若干膨るものと思われる。7も同様な器形であろう。8～12も一粒子径1㎝以上に達する粗大な楕円文を施文する。13は器壁が1.1㎝と部厚いが比較的端正な原体である。15は殻粒文と呼ばれるもので縦位施文。

b．器内面にも楕円文を施文したもので2点出土した。16は口縁部が外反する器形で口唇部は平坦に近く納められる。外面は縦方向に近い斜位施文，内面は同一原体による横位施文である。原体の一粒子径4㎜前後。B8区茶褐色土出土。

c．器内面に縦方向の沈線文を施こすもので5点出土した。17は口縁直下の破片で，あまり外反しない器形である。外面の施文は乱れが目立つ。内面には幅5～6㎜の沈線文が斜行す



第11図　縄文土器拓影2（1/3）

る。同一の原体による条痕ではない。18は若干外反ぎみの口縁部破片で，口唇部は丸みをもつ。器外面は風化し文様が不明瞭だが7㎜前後である。内面の縦走沈線文は幅4㎜前後。B7区，茶褐色土出土。黄褐色を呈し，胎土に石英粒を多く含む。

d．図示していないが，器内面に横方向の沈線がみられるもので2点出土した。

その他，19は唯一の尖底の底部破片で器壁は1.1㎝と比較的薄い。B8区，黒色土出土。

Ⅰ類土器（第10図20～29）

押型文土器に共伴する無文土器を一括した。本遺跡で最大190点の出土量を持つ。口縁部の形態から3つに分けられる。

a．口縁部が若干外反し，胴部の膨る器形で，尖底の底部を持つのであろう。口唇部を丸くおさめる20・21・23～25と，肥厚させる22がある。器壁はいずれも1㎝以上と厚く，灰褐色・茶褐色を呈す。

b．胴上半部から直行して立ちあがり，口唇部を斜めに切ったもので26が該当する。灰黒色を呈し，器外面にススが付着している。

c．内彎ぎみに立ちあがり，口唇端部で反転するものである。器壁が7㎜と他に比べて薄手なのが特色（27）。

その他に多くの胴部破片があり薄手と厚手の二者が存在する。底部は出土しなかった。

Ⅱ類土器（第11図30～37）

撚糸文土器でⅠ類土器に共伴する。22点出土した。30・31は胴下半部の資料で粗い縦方向の施文がみられる。原体はRである。35・36は原体を一回転させて，器面から離し，再び回転施文する資料で原体は器面が風化し不明瞭だがRであろう。

Ⅳ類土器（第11図38～44）

縄文土器を一括した。総数14点と比較的多くの出土をみる。口縁部が大きく外反する器形で胴部は若干膨るようだ。38は口縁部破片で口唇部になるに従い薄手作りとなる。外面は縦方向のRL，内面の口唇直下にも横方向のRLの施文。39は外面が縦位施文でLR，内面は横位のLRにてかざられる。43・44は胴下半ないし底部に近い破片で，43はRL，44はLRの原体。

Ⅴ類土器（第11図45～47）

貝殻文で器面を飾る土器で5点出土した。従来，北部九州にはあまり出土しない資料である。45は口唇直下でやや膨らみ，口縁部の外反する土器で，外面は口唇部直下よりハイガイ・サルボウ等のアナダラ属の放射肋を用いた右下りの貝殻圧痕文を施こす。内面は口唇部及び口縁部から7㎜程同様な貝殻圧痕文を施こす。A8区，黒色土出土で茶褐色を呈し，焼成の良い土器である。46・47は胴部破片で45と同様のアナダラ属の放射肋による施文を施こしている。

Ⅵ類土器（第11図48）

条痕文土器で4点出土した。48は胴部上半部に近い破片である。外面には粗い縦方向の沈線状の条痕文を施こし，内面にも同様な条痕文を施こすが，外面より弱い。この種の条痕文は，押型文期によく伴出するが，原体については不明な部分が多い。

Ⅲ類土器（第11図49）

49は補修孔を有す胴部上半部の破片で，口縁部はかなり外反する。器面は多方向から，長さ1～1.5㎝の短かい弧状の沈線文がみられる。内面は丁寧に横方向のナデ調整がみられる。従来出土例は知らない。また，原体についても不確実で，あるいはⅤ類の貝殻文の中に含められるものかもしれない。

(2) 石　　器（図版11，第12・13図）

出土した石器は，石鏃・尖頭状石器・削器・石斧・磨石・砥石・礫器・石核の他に先土器時代の台形石器・細石刃の2点がある（表3）。

台形石器（第12図1）　縦長剥片の鋭利な一辺を刃部とし，他の3辺に直角に近い刃潰し加工を加え，刃部の両端は耳部を形成する。表面には2本の稜が走り，いわゆる百花台型に属す。幅2.1㎝，長さ1.7㎝，厚さ0.55㎝を測り，漆黒の黒曜石製。

表3　主　要　石　器　一　覧　表

地区	石鏃		尖頭状石器		削器		石斧		礫器		磨石		砥石		石核		先土器		合計
	3層	その他	3層	その他	3層	その他	3層	その他	3層	その他	3層	その他	3層	その他	3層	その他	4層	その他	
A 5		2																	2
8		1				1										1			3
9		1				2													3
10						1						1							2
B 5	1					1													2
6	16	5			1	2		1				2				2	1		30
7	8	8			1	2			1		2								22
8	7	2	1	1	1			1				1							14
9	3		1			2													6
10		1																	1
C 5		1						1											2
6		2																	2
7		1										2							3
その他		6			2	3								1		1		1	14
合計	35	30	2	1	5	14	0	3	1	0	2	6	0	1	0	4	1	1	106
	65		3		19		3		1		8		1		4		2		

細石刃（第12図２）　Ｂ６区で，４層より１点出土した。頭部と尾部を欠いた中間部の細石刃で，長さ2.2㎝，幅0.6㎝。断面は台形を呈す。黒曜石製。先土器時代の包含層についてもＢ６・７区で深層掘りを行なったが，この２点のみしか出土しなかった。

石　鏃（第12図３～51）　65点出土し，３層から35点，その他から30点出土した。石材は黒曜石29点，安山岩36点で他の石材は用いられていない。地区別では，Ｂ６区に21点，Ｂ７区に16点出土し炉跡と密接な関係が窺われる。

出土した石鏃は形態により平基無茎式・凹基無茎式・凸基有茎式（51）に分けられる。

平基無茎式は７点出土した（３～８）。３は７㎜と部厚な横長剝片を用いたもので黒曜石製。４は正三角形を呈し，長さ1.9㎝，幅2.1㎝，厚さ0.3㎝。５・６は二等辺三角形を呈し，７・８は５・６に比べて小型同形でいずれも安山岩製。

凹基無茎式は54点と最も多く出土し，形態差が大きく分類するのに困難なものが多いが，ａ～ｄの４つに分類した。

ａ．基部が孤状を呈し，脚部を有さないもののうち，幅に比べて極端に長さが目立つもので９点出土した。９～16が該当する。９は基部の一端を若干欠損するほぼ完形品。周辺から比較的粗い調整剝離を施こしている。全長3.1㎝，幅1.2㎝，厚さ0.3㎝を測る。安山岩製。10は最大幅が中央部近くにあるもの。11は基部を欠損するが，長さ，幅とも一回り大きいもの。12・13は10・11でみられた脚中央部の最大幅が肩状になったもので両者とも完形品。12は全長2.81㎝，幅1.54㎝，厚さ0.32㎝を測る。13は全長3.68㎝と当類では最大で，幅1.6㎝，厚さ0.28㎝を測る。15・16は当類の小型品で16は縦長剝片を利用したもの。当類はすべて安山岩を用いているのが特色である。当種の石鏃の形態は縄文早期ではあまり類例を見ず，注目される。

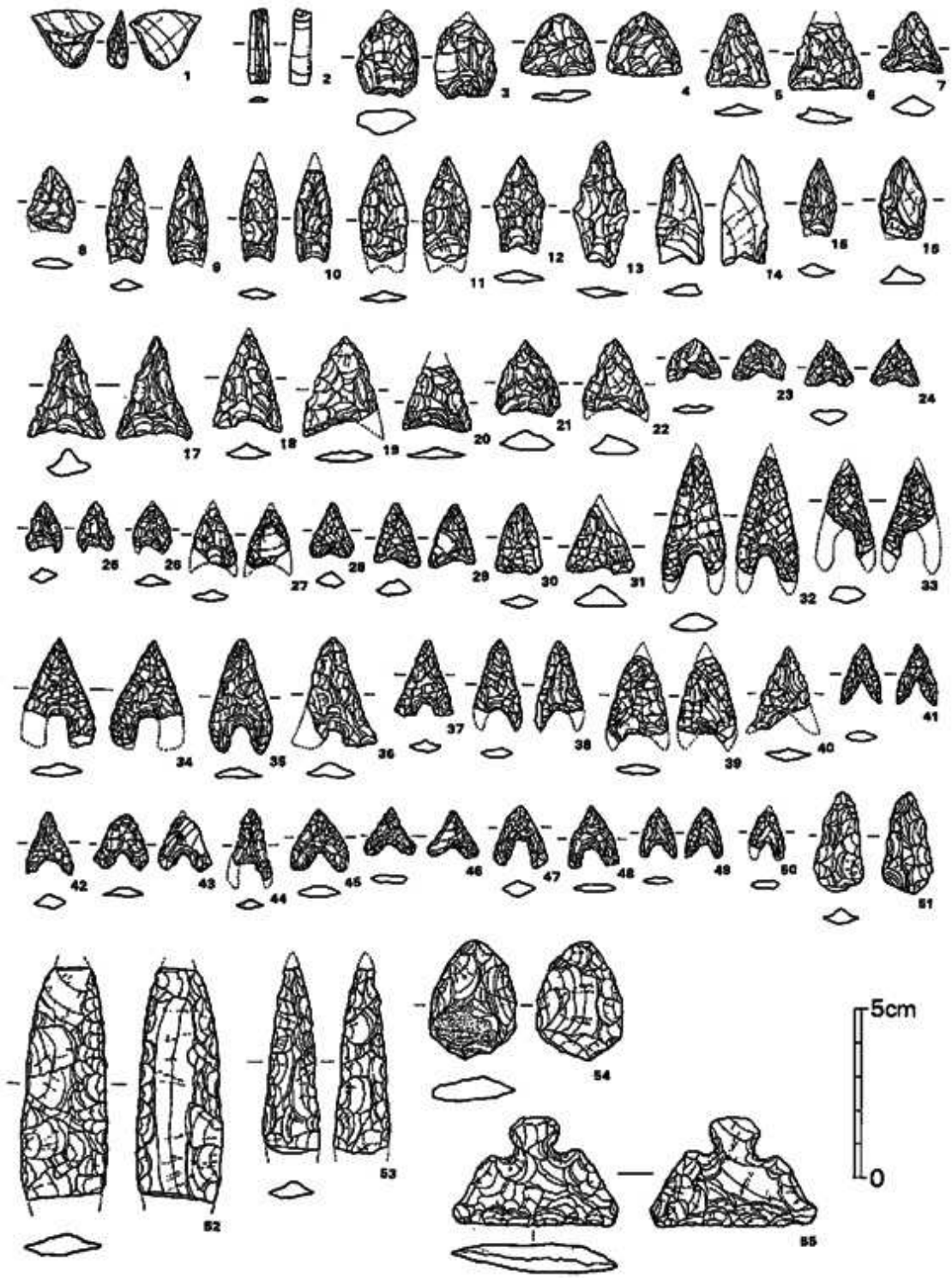
ｂ．基部が孤状で，全体が二等辺三角形状を呈すもので16点出土した。大（17～22）小（25～29）の二者がある。17は大型品でＢ７区，３層出土で安山岩製。全長3.04㎝，幅2.25㎝，厚さは0.8㎝で，脚中央部が部厚い。25は乳白色の黒曜石製でＢ６区３層出土。側縁は鋸歯状に近い。全長1.49㎝，幅1.1㎝，厚さ0.45㎝の小型品。

ｃ．基部に浅い梯形状の抉りを有すもので23・24・30・31等５点出土した。23は逆心臓形を呈す完形品で薄手。24は比較的厚味のある剝片を素材としており，先端が鋭に尖る。両者とも安山岩製。

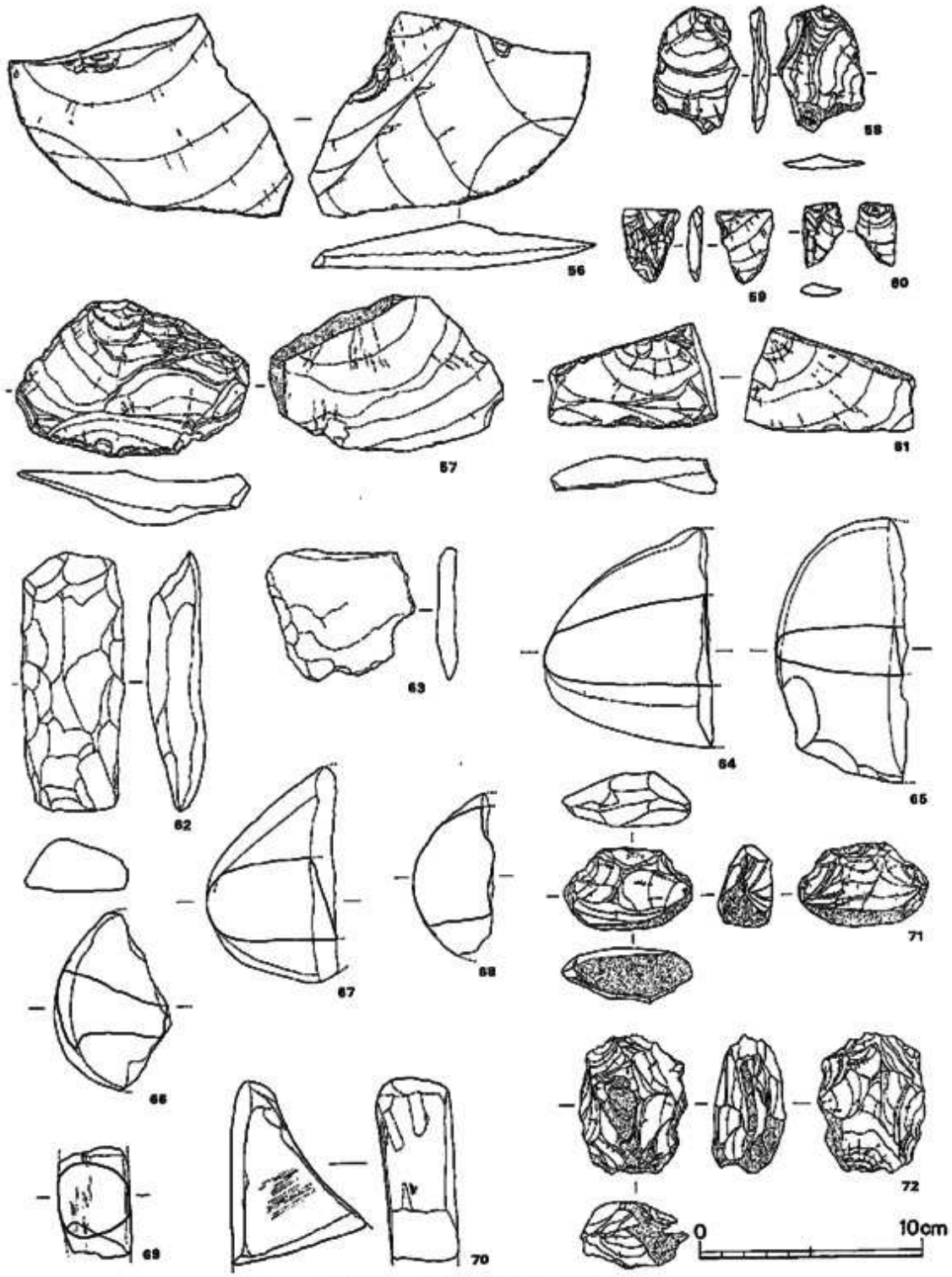
ｄ．基部の抉りが深いものを一括した。細かく分類すれば，脚部，側縁部の形態で分離できる。32は狭長な二等辺三角形を呈す。全面に押圧剝離を施こしている。先端・脚端部を欠損する。漆黒の黒曜石製。41～50は全長が1.4㎝から1.8㎝の小型の石鏃で，46は縦長剝片の打点側を鏃の先端部としている。黒曜石製。44は有茎鏃。

尖頭状石器（第12図52～54）　いわゆる槍先と，石鏃を大型化したものの２種がある。

ａ．打製の石槍で２点出土した。52は表土層出土で先端・基部とも欠損する。幅広の横長剝



第12図　石器実測図 1 (1/2)



第13図　石器実測図 2 (1/3)

片を素材とし，大きく主要剝離面を残し，両側縁は特に丁寧な剝離を施こしている。残存長6.9cm，幅2.6cm，厚さ0.75cmを測る。53は先端部に近い破片でB９区３層出土。比較的粗い剝離を施こしている。断面三角形を呈す。両者とも安山岩製。

b．54は幅広の横長剝片を利用した尖頭状石器で，基部は舌状になる。押型文期に特徴的に出土する。片面に表皮を残す。全長3.51cm，幅2.6cm，厚さ0.6cm，重さ7.6 gを測る。B８区３層出土で安山岩製。

縄文早期の石槍は福岡県那珂川町深原遺跡，長崎県岩下洞穴(註２)。同泉福寺洞穴(註３)。同つぐめのはな遺跡(註４）に出土し，前期では佐賀県白蛇山岩陰７層(註５）に出土例が知られる。

石　匙（第12図55）　１点のみ出土した。直線刃をもつ横型石匙でA９区黒色土出土の安山岩製。つまみ部以下は台形状を呈し，周縁のみに剝離を施こす。つまみ部は剝片の縁辺そのままで，ノッチは１回の剝離で形成。

削　器（第13図56～61）　縁辺に若干の剝離を加えたものを含めて19点出土した。56・57は大型の安山岩製横長剝片を素材としたもので，打点と反対側の外湾縁に二次加工を加え刃部としている。深原遺跡の削器ｂ類としたものに類似する。56はＢ８区３層出土で，接合資料（第９図）である。61は直線刃。60は縦長剝片の一線に刃部加工を施こしたものでＣ６区表土層出土。黒曜石製。

石　斧（第13図62・63）　３点出土した。62は断面台形に近い刃部磨製石斧。刃部は背面側のみ磨いており，「ノミ」状を呈す。63は緑泥片岩製の扁平な打製石斧片で時期的に下る資料と考えられる。

磨　石（第13図64～69）　８点出土した。64・65・67は不整円形を呈す磨石で，周縁に磨痕がみられる。64・65が玄武岩製で，67は花崗岩製。66・68は長円形で，断面が球状を呈す。全体に磨痕が顕著である。66が花崗岩製で，68は玄武岩製。69は特異で，棒状で断面が卵形に近い玄武岩質の磨石。

砥　石　（第13図70）　唯一の出土品で表採品。硬砂岩製であまり使用減りはしていない。

石　核　（第13図71・72）　４点出土した。71は安山岩製で１号墳の盛土内より出土した。円礫の一端から礫を３分割する如く剝片の剝離を行なったもので，片面は多方向，反対側は上方向のみの剝離工程を持っている。72も71と同所出土で安山岩製。円礫の多方向から幅広の剝片を剝出している。

5. 小　　結

石組炉跡について

縄文時代の遺構として，石組炉跡５基と柱穴と考えられるピットを検出した。時期は出土した遺物から縄文時代早期後半頃に位置付けられる。

縄文早期，特に押型文期に見られる炉跡には素掘りの炉跡，石囲い炉・石組炉跡等がある。そのうち，石組炉跡については深原遺跡で発見された32基の例があり，その形態からA～C類と３つに分け，また，用途についても若干述べている(註６)。そこで，原遺跡で検出された炉跡をみると，大きく２つに分けられる。１つは２・４号炉で径50cm内外の不整円形の浅い掘り込み内に径５～10cmと拳大ないしそれより小さめの火を受けた花崗岩礫がみられたもので，炉内には若干の炭化物が認められた。周壁・底石等の施設がない点，石組炉跡と呼ぶには適正ではない。もう一方は５号炉で拳大の礫の下，つまり炉底面ないし周囲に厚さ５cmの扁平な花崗岩を配するものである。炉内には焼土・炭化物とも検出されない。調査前に破壊された３号炉も似た形態を有していた。この２つの炉形態を深原遺跡と比較すると，後者はB類に類似している事が判る。B類は周壁が30度前後の傾きを有し，浅いすり鉢状を呈すとされるもので５・11号炉が代表例である。一方，前者については，形態上ではA類に近いが，花崗岩の扁平な石材を基本とする差異が看取できる。あえて，類似した遺構をさがせば深原２号炉であろうか。２号炉については，分類基準から除外しているが，石組炉の一種の形態として把えられる可能性が指摘でき，一応D類と分類しておきたい。なお，長崎県岩下洞穴Ⅴ・Ⅵ層でみられる炉址や大分県二日市洞穴の集石炉(註７)とされる遺構については，炉内に焼土・炭化物が認められる点，原・深原遺跡の石組炉跡と差異が認められる。この様な洞穴遺跡にみられる炉跡と原・深原遺跡等のオープン・サイトとの炉形態の差は生活環境によるものであろうか。今後の資料の増加を待ちたい。

表４　石組炉跡一覧表

	地区	層位	規模(cm)	形態	備考
1	B７	３層			盗掘破壊
2	B７	〃	60 × 53	不整円形	炭化物少量
3	B７	〃			盗掘破壊
4	B７	〃	50 × 43	不整円形	炭化物少量
5	B６	〃	80 × 73	台形状	焼土・炭化物なし

土器について

出土した土器は押型文（山形文・楕円文）無文・縄文・撚糸文・条痕文・貝殻文土器がある。押型文土器では格子目押型文を欠く点が注意される。全体の量的割合をみると総数312点のうち無文土器が最も多く60.9%と過半数以上を占める。次いで楕円押型文が20.5%，撚糸文が7.1%，縄文4.5%の順になる。山形文を含めた押型文は24.3%を占める（表2）。出土した押型文土器の器形は，口縁部が外反し，胴部にて膨り，尖底の底部を有す土器が主体である。文様も原体が粗大なものが多く，内面に沈線文を有す。従って大分県田村遺跡出土の土器群(註8)に近いと思われる。この点は無文土器の器形についても同様である。当遺跡の特色は押型文土器に伴出した撚糸文・縄文土器の存在があげられる。撚糸文土器については深原遺跡・大分県早水台遺跡(註9)・田村遺跡・長崎県岩下洞穴Ⅴ層等量的に少ないが押型文土器に共伴している。一方，縄文土器については，近接する深原遺跡の3層と，大分県成仏岩陰3層(註10)の出土を見るだけで，早水台遺跡・田村遺跡等には出土していない。器形的には深原遺跡3層のそれによく類似しており，時期的にもほぼ同時期に当たる所から，押型文土器に共伴する資料であろう。

貝殻文土器（Ⅴ類土器）については，器外面全体をハイガイ等のアナダラ属の貝放射肋を用いて全面施文し，内面は，口唇部から1回のみの施文を施こす資料である。器形は口径34cm前後で，口縁が外反して立ちあがる深鉢土器で，器形・文様構成とも押型文土器に類似するところから，この貝殻文土器も共伴する可能性が大きい。しかし，当種の土器については，類例を知らず，今後，注意される土器群である。

この様に，出土した土器群は，すべて押型文土器に共伴するものであるが，その組成をみると各遺跡間で大きな変化を具備している。南方へ800mに近接する深原遺跡3層では楕円押型文土器が主体で60%以上を占め，押型文全体で70%を越すが，無文土器は23.8%を占めるにすぎない。これは，原遺跡が無文土器を主体とする点との大きな相違である。原遺跡の土器組成は東九州の早水台遺跡2層（押型文39.3%，無文59.3%）や田村遺跡（押型文37.6%，無文56.6%），岩下洞穴に近く，押型文期では一般的な組成(註11)を示していると思われ，一層，深原遺跡の土器組成有り方が注目されるのである。

註1　木下修「深原遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』8　福岡県教育委員会　1978

2　麻生優「岩下洞穴の発掘記録」佐世保市教育委員会　1968

3　麻生優　白石浩之「泉福寺洞穴の第六次調査」『考古学ジャーナル』116 ニューサイエンス社 1975

4　正林護他「つぐめのはな遺跡の概要」『長崎県考古学会会報』2　長崎県考古学会　1974

5　森醇一郎「白蛇山岩陰遺跡」『佐賀県立博物館研究書』1　佐賀県立博物館　1974

6　註1に同じ　P.144～146

7　橋昌信「大分県九重町二日市洞穴の調査（第1次～第3次）」『九重町文化財調査報告』2　1978
8　賀川光夫・羽田野一郎「大分県大野郡朝地町田村遺跡調査報告」朝地町教育委員会　1960
賀川光夫「九州東南部一縄文文化の発展と地域性」『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』河出書房新社　1965
9　八幡一郎・賀川光夫「早水台」『大分県文化財調査報告』3　1955
10　坂田邦洋「縄文時代に関する研究　成仏岩陰の調査」国東町教育委員会　1972
11　註1に同じ　P.149

Ⅳ　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は甕棺墓・土壙墓・祭祀遺構・溝状遺構で，地形的には舌状に突き出た台地の南端部に位置する。遺構は原3号墳南側周溝から台地の南崖面までで，東側の墓域は調査区外の日之出水道機器上白水工場用地に延びる。推定墓域は約800㎡で，約200基以上の墓壙が存在する。従って，非常に密集した墓地群である事が判る。

甕棺墓は墓域の中央部を東西に走る空間部で東西に分けられる。大部分が台地上に墓壙を形成するが，K123・125～127・D7・D10のように崖面を利用した墓壙も存在する。

調査した遺構は側道にて破壊される墓域西端部と，東側の小児甕棺墓で，完掘は甕棺墓52，土壙墓10，祭祀遺構4，溝状遺構1である。

1. 甕　棺　墓

第2層の黒色土を切って墓壙を形成しているが，ここで確認できた遺構は小児甕棺墓を中心としたものだったので，第3層の茶褐色土まで掘り下げ，墓壙を検出した。調査した甕棺墓は東側で14基，西側は保存区域外を主として38基の合計52基である。なお，甕棺墓タイトル後の〔No.〕は第15図の番号に一致し，遺構番号をあらわす。

第14図　墓壙検出状態

5号甕棺墓〔No.8〕（図版14—2・47—1・2，第21・46図）

墓域の北端の一群に属し，10号甕棺墓を巡る溝を切って墓壙を施設させる鉢＋甕の接口式成人用甕棺墓である。上面の長辺1.86m，短辺1.62mの隅丸長方形の墓壙南側に深さ1.37m斜抗を掘り，下甕を挿入している。下甕の口縁部の一部を除いて大部分が隠れる。下甕の底部は10号甕棺墓の下甕底部と対峙する位置関係（図版20—1）にある。上甕と下甕の接口部は目貼り粘土を巻いている。実測図では上甕の大部分を欠いているが，これは実測図をとる直前に破壊したものである。主軸方位はN—1°—Eの南北にとり，約30度の角度で埋置されている。甕棺内に残存した人骨より被葬者は熟年の女性である。

上甕は，口径71.8cm，底径11.6cm，器高44.6cmを測る鉢形土器である。口縁部はわずかに内傾した「T」字状を呈する。口縁直下に1条の断面三角形の凸帯が巡り，上げ底の底部まで若干膨らみぎみにつながる。内外面ともにナデ仕上げされているが，底部外面には粗い刷毛目が残存し，胴部下位には丹がわずかに付着している。胎土に砂粒・雲母を含み，焼成は良好で，暗明褐色を呈す。

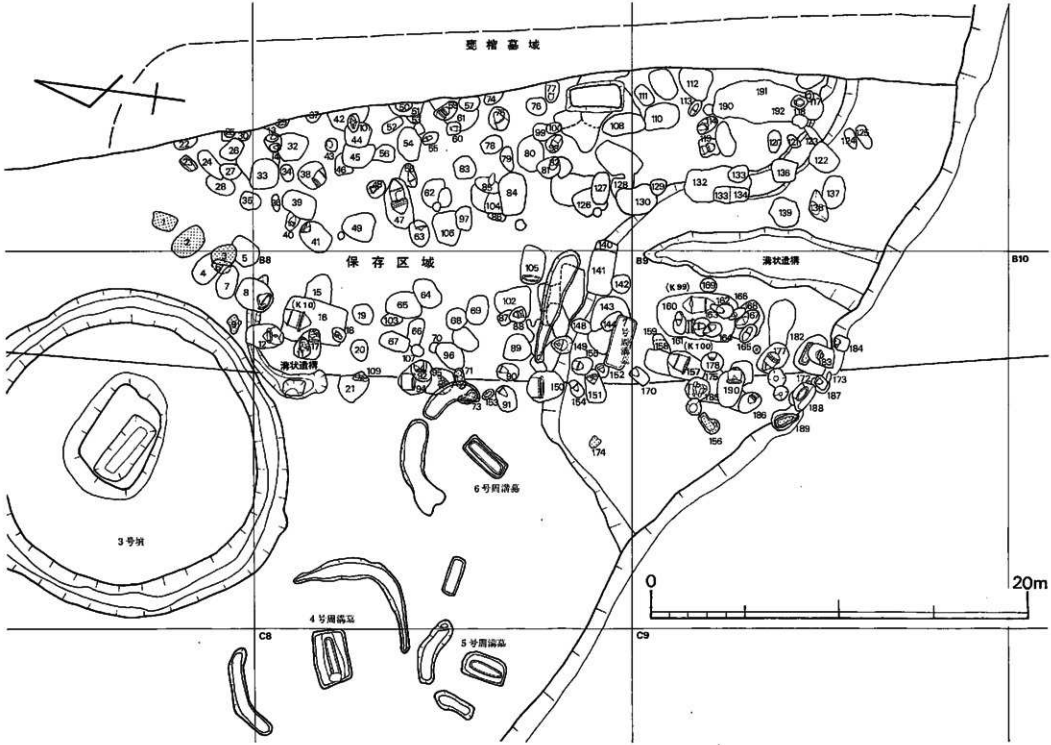
下甕は，口径75.6cm，底径12.0cm，器高110.7cmを測る大型の砲弾状を呈す甕形土器である。口縁部は内側に若干張り出した「T」字状の口縁で，端部外面はヨコナデによりわずかに凹み，口縁直下に1条の断面三角凸帯を貼り付けている。胴部には下向きの断面「コ」字形凸帯が2条巡り，最大径はこの凸帯よりやや上部に位置し72cmを測る。胴上半部には斜行のタタキ痕が観察される。外面には炭様の黒色顔料が塗布されている。調整は，口縁部内外と凸帯部がヨコナデし，他は内外面ともにナデ仕上げされ，胎土に石英・長石・雲母を含む。焼成は良好で，色調は明赤褐色を呈す。

6号甕棺墓〔No.12〕（図版15—1，47—3・4，第22・46図）

5号甕棺墓と同様に10号甕棺墓を巡る溝を切って墓壙を施設した。成人用甕棺墓である。長辺1.88m，短辺1.23mと楕円形の墓壙で，この墓壙北端部が溝を，南端部が10号甕棺墓の北西隅の墓壙を切っている。墓壙の南側に横穴を穿ち，下甕を入れ，埋置は約21度の角度を有す。上甕は胴上半部以上を打ち欠いた甕形土器で，下甕との接口部には粘土等は認められない。主軸はN—15°—W。上・下甕とも細かく破砕し，甕棺内には土が充填しており，人骨は遺存しなかった。

上甕は，底径11.0cm，現存高50cmを測る大型の甕形土器で，胴部上半を打ち欠いている。胴部は凸帯上から内弯度が強くなる。やや下向きの断面「コ」字形凸帯を1条貼り付けている。凸帯下に刷毛目を残し，凸帯部はヨコナデの他はナデで仕上げている。胎土に砂粒を含み，焼成は良好で，色調は淡黄褐色を呈す。

下甕は，口径78.5cm，底径11.2cm，器高105.4cmを測る大型の甕形土器であるが，土圧による歪みが著しく，口縁部は66.0～80.0cmの楕円形を呈す。口縁部はほぼ平坦で，逆「L」字状



第15図　原遺跡弥生時代遺構配置図 (1/200)

表5　弥生時代遺構一覧表　　K：甕棺墓　D：土壙墓　祭：祭祀遺構　（丹）：丹塗り土器

墓壙No.	遺構No.	合口形式	上甕・下甕	成人小児	性別	墓壙形態	主軸方位	埋置角度	備考
1	D1					不整長方形	N-38°-E		2段掘り
2	K1								
3									
4	K2								
5	K3								
6									
7	K4								
8	K5	接口	鉢・甕	成人	女	隅丸長方形	N-1°-E	30°	K10を巡る溝を切る，人骨
9	D2						N-109°-W		素掘り
10									
11	祭1		楕形土器(丹)			隅丸方形			K7より新しい
12	K6		甕・甕	成人		楕円形	N-15°-W	21°	上甕胴上半打欠き
13	K37	覆口	甕・椀(丹)	小児		〃	N-78°-W	29°	
14	K38	接口	甕・甕	〃		〃	N-21.5°-W	45°	
15									
16	K10	接口	鉢・甕	成人	男	長方形	S-3°-W	水平	溝が巡る，K5～7より古い
17	K7	単棺	甕	小児		楕円形	N-78.5°-E	15.5°	K10より新しい
18	K9	接口	甕・甕	〃		円形	S-14°-E		〃
19									
20	K12								
21	祭2		甕棺片・甕(丹)						
22									
23	D3					隅丸長方形	N-31°-E		素掘り
24									
25	K48								
26	K35								
27									
28									
29									
30	K34								
31									
32									
33									
34	K43								
35	K36								
36									
37	K21	接口	壺・甕	小児					保存
38	K47	木蓋単棺	甕	成人		不整円形	N-68°-W		〃
39	K45								
40	K44	接口	甕(丹)・甕	小児		楕円形	N-82°-W	17.5°	№39より新しい
41	K46	〃	鉢・甕	成人	男	隅丸長方形	S-14.5°-W	35°	保存・人骨
42	K24								
43	K22		壺(丹)			円形？			祭祀遺構か？
44	K25								
45	K26								

46	K62								
47	K30	接口	壺 ・ 甕	成人	男	不整楕円形	N-58°-E	ほぼ水平	保存・上壺口縁打欠き
48	K29	〃	甕 ・ 甕	小児	不明	隅丸長方形	S-39°-E		保存・幼児骨
49	K33								
50									
51									
52	K28								
53									
54									
55	K13	覆口	壺・壺(丹)	小児		円 形	N-37.5°-W	18°	上壺口縁打欠き
56	K27								
57	K17	挿入	甕 ・ 甕	小児					保存
58	K31	接口	甕 ・ 甕	〃		不整楕円形	S-66.5°-W	ほぼ水平	〃 ・人骨
59	K15	〃	壺(丹)・壺(丹)	〃		〃	S-65°-E	24°	〃 ・上下壺口縁打欠き
60	K14	〃	甕 ・ 甕	〃		円形?	N-12°-W	28°	
61	K16	挿入	甕 ・ 甕	成人					保存
62									
63	K32	接口	傘蓋・ 甕	成人		隅丸長方形	N-66°-W		保存
64	K57								
65									
66	K61								
67									
68	K50								
69	K49								
70									
71	D4					隅丸長方形	S-85°-E		素掘り
72									
73	D8					楕 円 形	N-22°-W		
74	K63								
75	K18	挿入	甕 ・ 甕	成人		不整円形	N-65.5°-E		保存 人骨
76	K55								
77	K54	木蓋単棺	壺			不 整 形	S-80.5°-E		
78	K19								
79									
80									
81									
82	K41	木蓋単棺	甕	小児?		不整方形	S-53°-E	29°	
83	K20								
84									
85									
86									
87	K59								
88	K58	挿入	壺 ・ 壺	小児		楕 円 形	N-28°-W	16.5°	上下壺口縁打欠き
89	K51								
90	K52	接口	甕 ・ 甕	小児		楕 円 形	S-2.5°-W	8°	
91	K53	〃	甕 ・ 甕	小児		〃	S-30.5°-W	7.5°	
92	祭4		甕形土器(丹)			不整円形			K120・130より新しい
93									

94	K130	木蓋単棺		甕		成人		不整円形	S-2.5°-E	23.5°	K120より古い
95	K120	接口	甕	・	甕	〃		不整楕円形	N-33°-E	22°	
96											
97	K39										
98	K42	接口	甕	・	甕	小児		不整長方形	S-72.5°-E	24°	
99											
100											
101	K23	接口	甕	・	甕	小児		楕円形	N-67.5°-E	34°	
102	K60										
103											
104											
105	K56	木蓋単棺		甕		成人	男	隅丸長方形	N-70°-E		保存・人骨
106	K40										
107	祭3		甕形・甕形土器(丹)								
108											
109											№21と同じ
110											
111											
112											
113	K114	接口	甕	・	甕	小児		楕円形	S-76°-E	23°	
114	K115	〃	鉢	・	甕	〃		〃	S-55°-E	16.5°	
115											
116											
117	K117	単棺		甕		小児		楕円形	N-68°-E		穿孔
118	K118	〃		壺		〃		不整長方形	N-10°-W	25°	
119	K116	挿入	壺	・	甕			不整楕円形	N-63.5°-W		保存・人骨
120											
121											
122											
123											
124											
125											
126											
127											
128											
129											
130											
131											
132											
133											
134											
135											
136											
137											
138											
139											
140											
141											

142									
143									
144									
145									
146									
147									
148									
149	K65	接口	壺・甕	成人		楕円形	S-7.5°-W		上壺口縁打欠き
150	K128	木蓋単棺	甕	〃		〃	S-32°-E	7.5°	
151	K134	覆口	鉢・甕	〃	女	長方形	S-65°-W	12°	骨に亨麻布着・40才代
152	K133	接口	甕(丹)・甕	小児		不整円形	S-64°-W	−2°	K134より新しい
153	D9					楕円形	N-48°-W		素掘り
154	K131	接口	甕・甕	小児		〃	S-50°-W	3°	
155	K132	〃	鉢・甕	〃		隅丸長方形	S-7.5°-E	22°	K134より新しい
156	D6					長方形	N-41°-E		素掘り
157	K135	木蓋単棺	甕	成人		不整楕円形	S-11°-W	ほぼ水平	K109・121より古い
158									
159									
160	K99	接口	鉢・甕	成人	女	隅丸長方形	N-21°-W	−11°	K100と同一墓壙
160	K100	〃	甕・甕	〃	女	〃	S-15°-E	ほぼ水平	上壺口縁打欠き
161	K101	〃	甕・甕	小児		不整形	S-72°-W	〃	K99・100と同一墓壙
162	K102	〃	甕・甕	〃		楕円形	S-7°-E	〃	〃
163	K103	〃	甕・壺	〃		〃	S-2°-W	6°	〃
164	K104	〃	甕・甕	〃		不整楕円形	S-36°-E	ほぼ水平	〃
165	K105	〃	壺・壺(丹)	〃		楕円形	N-77°-W	11.5°	
166	K106	〃	甕・甕	〃		〃	S-61°-E	4°	K99～104より新しい
167	K107	〃	鉢・甕	〃		〃	S-45°-E	5.5°	
168	K108								
169									
170	K111	接口	甕・甕	小児		楕円形	S-32.5°-W	7°	
171									
172	K112	接口	?・甕	小児		横穴			
173	K113	〃	甕・甕	〃		〃	N-12°-W		上甕盗掘
174	D5					不整長方形	N-45°-W		2段掘り
175									
176									
177	K110	覆口	壺・甕	成人		楕円形	S-60°-E	13°	上壺胴上半上打欠き
178	K109	挿入	甕・甕	小児		不整円形	S-82.5°-W	52.5°	
179	K119	接口	甕・甕				N-83°-W	ほぼ水平	溝状遺構内
180									
181									
182	D10					不整長方形	N-62°-W		K125より古い
183	K123	単棺	壺(丹)	小児?		隅丸長方形	S-18.5°-W	40°	
184	K125	接口	鉢・甕	成人		隅丸方形	S-14.5°-W	40°	
185	K121	接口	甕・甕	成人		楕円形	S-2°-W	19°	上甕口縁打欠き
186	K122	〃	壺・甕	小児		〃	N-65°-E	12°	
187	K126	挿入	甕・甕	〃		横穴	S-6°-W	32°	
188	K127	木蓋単棺	甕	成人		〃	S-22°-W	30°	

189	D7				不整長方形	N-26°-W		2段掘り・K127より古い
190	K136	木蓋単棺	甕	成人	〃	S-79°-W	7.5°	
191								
192								

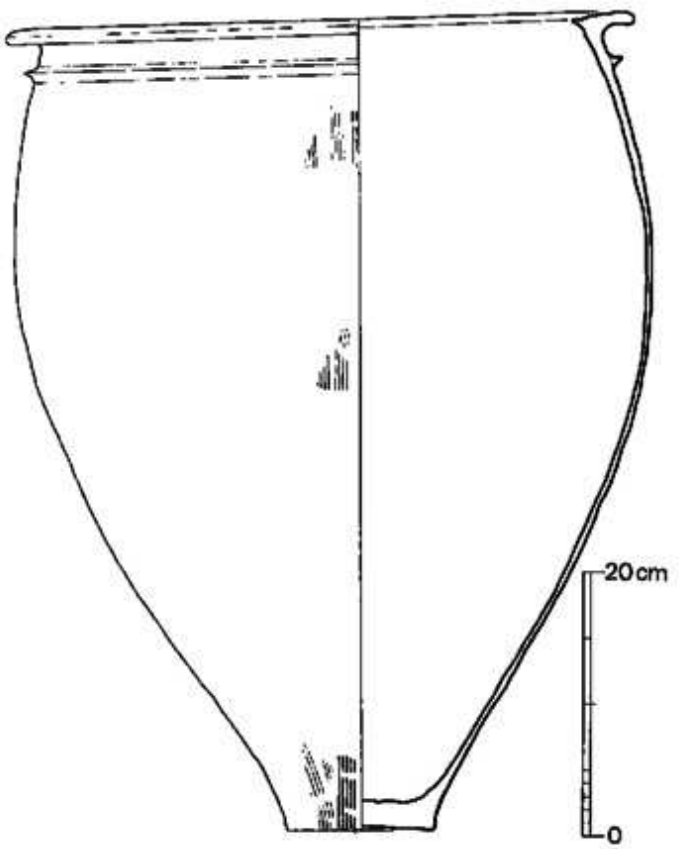
※ 墓壙番号があっても未記入のものは，遺構だが性格が不明なもので，いずれも保存されている。

を呈し，口縁直下に1条，胴部中位に2条の断面三角形の凸帯を貼りつけている。胴部上位に炭様の黒色顔料が塗布されているが摩滅が著しい。口縁部内外と凸帯部上下がヨコナデの他は内外ともナデで仕上げている，胎土に石英・長石・雲母を含み，焼成は良好。色調は淡明褐色。

7号甕棺墓〔No.17〕（図版15—2・16—1，第16・23図）

10号甕棺墓の墓壙西側中央部を切って，東西方向の墓壙を施設し器高61.8cmと大きめの甕形土器を用いた単棺式の小児用甕棺墓である。墓壙の西に丹塗壺形土器のみを納めた1号祭祀遺構があり，この墓壙に切られている。墓壙は楕円形を呈し，長辺1.78m，短辺0.8m前後を測る。2段掘りに近く，5～7cm前後の段がある。甕形土器は全体が10号甕棺墓の墓壙内に入る。甕の口は木蓋をした可能性が大だが，その痕跡は不明瞭である。主軸をN-78.5°—Eとほぼ東西方向に近くとる。深さは約50cmだが，上部が削平されていよう。人骨は遺存しなかった。時期は中期後葉頃であろう。

口径47.5cm，底径11.2cm，器高61.8cmを測る。中型の甕形土器である。わずかに内傾した逆「L」字形の口縁直下に1条の断面三角形の凸帯を巡らしている。胴部上半に最大径を有し，48.2cmを測る。口縁部内外面と凸帯はヨコナデ，内面はナデで仕上げ，外面は刷毛目調整を施こしている。胎土に砂粒・雲母を含み，焼成は良く，淡褐色を呈す。



第16図　7号甕棺墓実測図（1/6）

9号甕棺墓〔No.18〕（図版16—2，第23図）

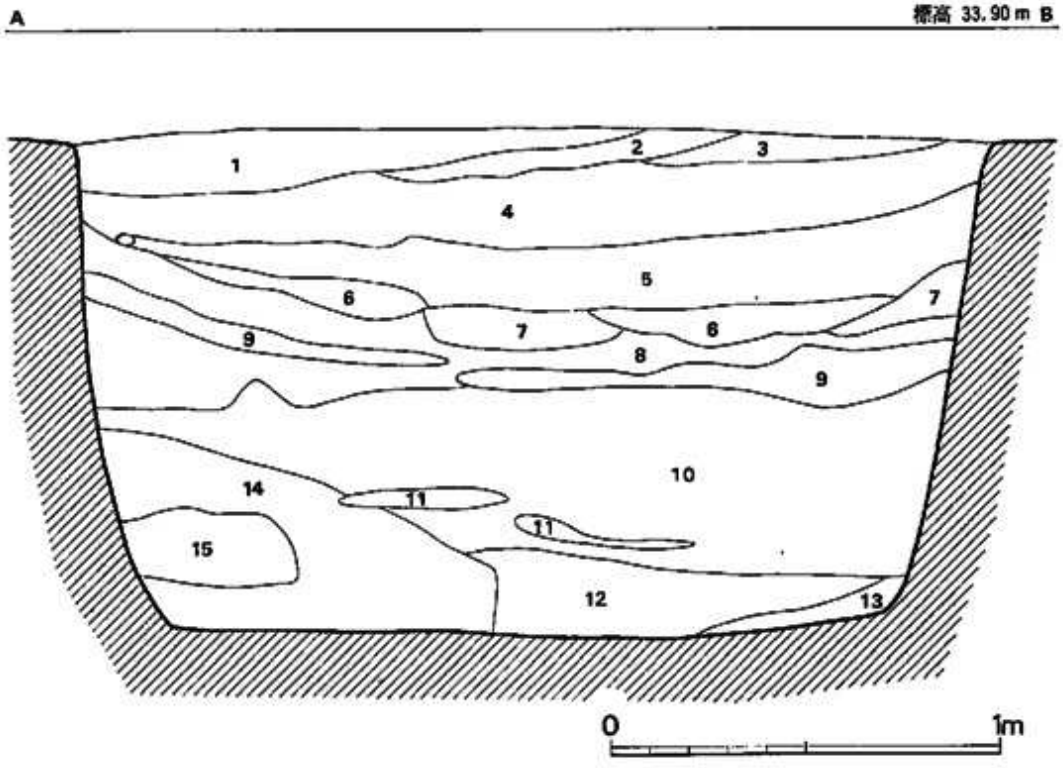
10号甕棺墓墓壙南辺を切った甕＋甕の接口式小児用甕棺墓である。上甕は若干の口縁部破片を残すのみで，大部分が削平されていた。墓壙下部は不整円形を呈し，甕棺はその西側に寄ってやや上甕を高く埋置している。主軸はS—14°—Eを指す。

上・下甕とも逆「L」字形口縁部を呈す同形の甕形土器で，下甕の器高は約39cmを測る。

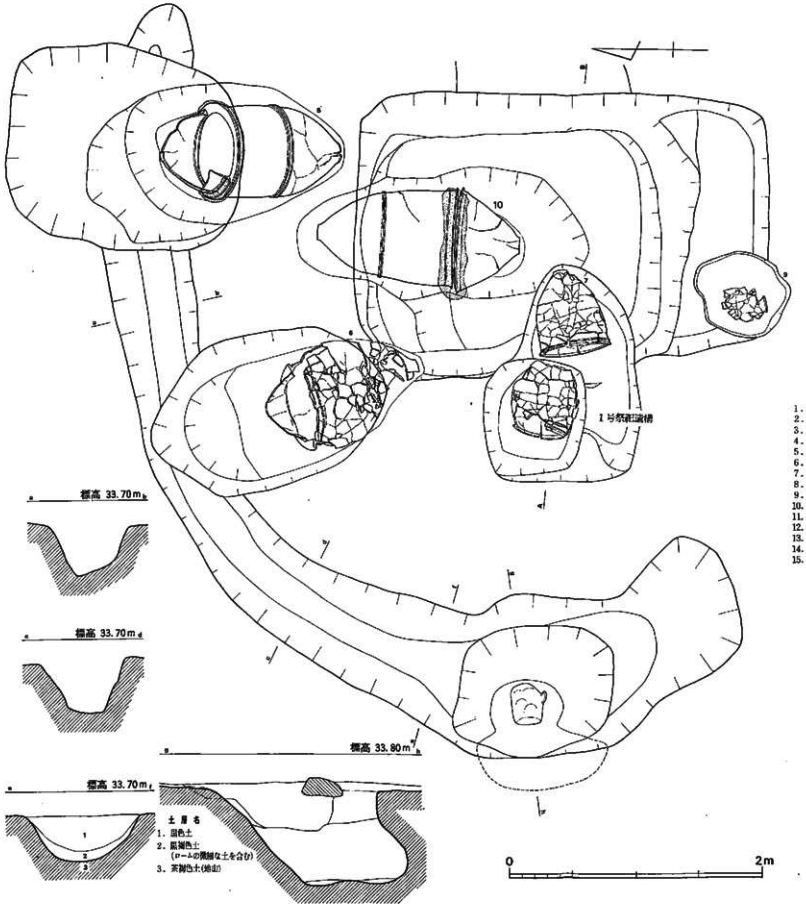
10号甕棺墓〔No.16〕（図版17～20・48—1・2，第17・18・24・46図）

墓域の北側に位置し，当甕棺墓群では2番目に大きな墓壙を有す。また，注目すべきは，墓壙の北から西にかけて「L」字状の溝を巡らすことである。隅丸長方形を呈す墓壙は，その上部で6・7・9号甕棺墓，1号祭祀遺構，No.15号墓壙と，溝では5・6号甕棺墓と重複し，いずれの墓壙からも切られている（第18図）。特に6号甕棺墓には溝・墓壙の両者とも切られており，溝が10号甕棺墓に伴う事は確実である。

墓壙は長辺3.27m，短辺2.29mで，やや北側で幅広な大きなもので，南側は3段掘りである。上段は—60cmから，幅50cm程のテラス面を有し，中段は再び60cmほど斜めに下がり，幅30cm前後のテラスを作り，底面へは約20度の傾斜を持ちながら達し，この部分に甕棺を埋置する。一方，北側は上面から直に70cm掘り下げ，そこから北へ下甕を挿入する横穴を45cm穿つ。



第17図　10号甕棺墓墓壙内土層断面図（1/20）



第18図　10号竪穴墓と溝状遺構実測図(1/30)

第17図は墓壙内の中央部の東西方向の断面図である。最下層は黒色土で，60cmほどは淡茶褐色土（ロームブロックを少量含む），黒褐色土で一気に覆う。この高さは甕棺の上端部高とほぼ等しい。その上は4・5層を除いて比較的薄く，中ほどでは東西両方向，上部では東方向からの埋め方が認められる。

甕棺墓は上甕に鉢形土器，下甕に甕形土器を用いほぼ水平に埋置した接口式の成人用甕棺で接口部には良質の粘土で目貼りをしている。5・6号甕棺墓と上甕の方向を反対にし南側で，主軸方位をS—3°—Wにとる。従って図版20—1のように下甕では5号甕棺に近接した状態が認められた。甕棺内には人骨が遺存し，頭部が下甕の胴下半の凸帯部に位置した仰臥屈葬で，被葬者は熟年の男性である。なお，頭骸骨に赤色顔料の塗布が認められた点は注意される。

10号甕棺墓を巡る溝は墓壙の北側で1.3m離れ，「L」字状に南へ曲折する。西側では1.7mの間隔を有す。全長8.8mを測り，墓壙の北・西に沿い，南端は南へ曲がろうとして切れる。前述の様に北側で5・6号甕棺墓によって切られる（図版17—1）。北側で幅0.65m，深さ0.4mで断面U字形を呈し，西側に行くに従い幅広くなる。特に第18図g—h断面付近で幅1.3mと最大になる。この部分には溝上面に32×25cm，厚さ14cm大の花崗岩が置かれ，底部は西方向への横穴を穿いていた。溝内堆積土は2枚で，上部は厚く黒色土が，底面に沿ってはロームの微細な土を含んだ黒褐色土が認められた。上層の黒色土は墓域の全域を覆っていた土と同じである。この様に甕棺墓で墓壙の周囲に溝を巡らす例は現在のところ知られていない。葬制上でも重要な意味を持つと思われる。

上甕は，口径81.6cm，底径12.8cm，器高46.6cmを測る鉢形土器である。平坦で外傾した「T」字状の口縁直下に1条の断面三角形凸帯を巡らし，膨らみをもって平底の底部へ移行する。外面には炭様の黒色顔料を塗布し，口縁部はヨコナデ，他は内外面ともナデで仕上げている。胎土には砂粒・雲母を含み，焼成は良好。色調は淡明褐色。

下甕は，口径79.2cm，底径13.1cm，器高108.3cmを測る大型の甕形土器である。わずかに外傾し，内部への突出が著しい「T」字状の口縁直下にシャープな「コ」字形凸帯を1条巡らし，直線的に胴部中位の2条の断面三角形の凸帯を巡らした胴部へと移行する。口縁部内外と凸帯部はヨコナデの他はナデで仕上げ，淡明褐色を呈す。胎土に砂粒・雲母を含み，焼成は良好。内傾へ著しく突出した口縁部は古期の様相を示しているが，口縁直下の「コ」字形凸帯を有するやや感じの異なる口縁部の形態である。時期は中期中葉であろう。

13号甕棺墓〔No.55〕（図版48—3・4，第23・47図）

墓域の北東側に検出された，壺＋壺の覆口式小児用甕棺墓で，上甕は胴上半部以上を打ち欠き，下甕は完形の丹塗り土器を用いる。墓壙は径62cm内外の円形に近いが，上部が削平されており，南東側も木の根により撹乱されている。底面は浅いU字形を呈す。図面上の上甕底部の位置はずれて下っているものと思われる。甕棺は約18度の角度で埋置され，主軸方位はN-37.5°

—W。

上甕は，口縁部を打ち欠いた底径10.0㎝，現存する器高34.1㎝を測る壺形土器である。球形に近い胴部中位に２条の断面三角凸帯を巡らしている。凸帯部上下はヨコナデ調整し，他はナデで仕上げている。胎土に砂粒・雲母を含み，焼成は良好で，内面は淡黄褐色，外面は暗明褐色を呈する。

下甕は，口径22.3㎝，底径 8.8㎝，器高 38.6 ㎝を測る無頸の壺形土器である。内傾する逆「L」字状の口縁直下に断面三角形の凸帯を１条巡らし，内部に明瞭な稜を有する。胴部中位で最大径36.8㎝を測り，上げ底の底部から反りながら球状の胴部へ移行する。外面はヘラ先状の磨きで器面を調整し，内面はナデ。口唇部と外面全体には赤色顔料が塗布されており，一部内面へのこぼれが認められる。内面は明褐色を呈す。胎土は精選され器肉は 8㎜ 前後と薄いが，焼成は堅固である。

14号甕棺墓〔No.60〕（第23図）

13号甕棺墓の南側，No.61遺構を切った甕＋甕の接口式小児用甕棺墓である。梯形状の墓壙は長辺が87㎝，短辺77㎝を測り，南側に直に掘り込んでいる。深さは約20㎝で，北側へ斜めに上がる。従って上甕を北側とし，主軸を N—12°—Wにとる。埋置角は約28度と傾斜がきつい。人骨等は残っていなかった。

上甕・下甕とも，「く」字状の口縁部をもつ甕形土器である。

18号甕棺墓〔No.75〕

墓域の中央，東端部近くで検出された。甕＋甕の挿入式の甕棺墓で成人用であろう。不整円形の墓壙は長辺1.19m，短辺1.03mで，甕棺は墓壙の西側に横穴を掘って埋置される。上甕は東側で，主軸をN—65.5°—Eにとる。 棺内には上甕に頭骨が残存し，足から遺骸を納めたことが判る。被葬者は成人であるが性別不明である。なお，墓壙内には丹塗りの壺形土器の口縁部・胴部，甕形土器の胴部が出土し，甕棺に対する祭祀行為が窺われた。この甕棺墓は平面図作成後，保存している。

22号甕棺墓〔No.43〕（第25・47図）

47号甕棺墓（No.38）の東側に検出された丹塗り壺形土器の底部から胴下半部にかけての破片である。削平が極めて著しく，この土器が甕棺であるか，又，祭祀的な遺構であるかも不明である。丹塗り壺形土器を甕棺として用いる場合も存在するので，一応甕棺墓の内に含めておく。

口縁部及び，胴部の半分を欠失するため全体の形状は明確ではないが，現存する底径 9.4㎝，器高27.1㎝，最大径31.0㎝を測る壺形土器である。底部は上げ底で，やや反りぎみに球形状の胴部へと移行する。外面は全体に赤色顔料が塗布され，内面はナデで仕上げられ，淡黄褐色を呈す。胎土は良質で，細砂・雲母粒を含み，焼成は良好。

23号甕棺墓〔No.101〕（図版49—1・2，第25・47図）

墓域の北東端側で検出された，甕＋甕の接口式小児用甕棺墓で，№42・44遺構上に位置する。楕円形の墓壙は長辺1.03m，短辺0.6mで，素掘りであり，深さ40cmを測る。この墓壙の形状は甕棺の掘り方内にある為，不確実である点は否定できないが，甕棺は墓壙の中央部に約34度の急角度をもって埋置されている。主軸方位はN—67.5°—Eを指す。人骨は遺存しなかったが，墓壙内より丹塗りの無頸壺の小破片と甕形土器の口縁破片が検出された。両者とも小破片で確実に供献土器であるとは言えない。

上甕は，口径32.6cm，底径8.8cm，器高35.8cmを測る甕形土器である。外唇が肥厚し，ゆるやかに内傾する口縁は，「く」字状を呈し，弱い稜を有する。胴部は，ゆるやかに膨らみをもって上げ底の底部へ移行する。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデ仕上げであるが，外面には下から上方向の刷毛目を施こしている。胎土・焼成ともに良好で，色調は淡褐色を呈す。

下甕は，口径31.9cm，底径9.0cm，器高36.3cmを測る甕形土器である。わずかに内傾する口縁は，「く」字状を呈し，内側で弱い稜を作り，胴部は緩やかに膨む。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げられ，外面は刷毛目調整。胎土に砂粒・雲母を含み，焼成は良好で，色調は淡褐色を呈す。

29号甕棺墓〔№48〕

30号甕棺墓〔№47〕の北側に近接して検出された。長辺0.95m，短辺0.85mの隅丸長方形の墓壙内の北側に横穴を穿ち，下甕の大部分を挿入した，甕＋甕の接口式小児用甕棺墓である。主軸は S—39°—Eを指す。下甕内に遺存した頭骸骨より，被葬者は2才前後の幼児である。なお，甕棺は埋め戻し，保存している。時期は中期後葉に属そう。

30号甕棺墓〔№47〕（図版21—1）

墓域の北東側で，32号甕棺墓により南西隅の墓壙を切られている。墓壙は不整楕円形を呈し，長軸2.62m，短軸1.27mを測る。墓壙は約1mの深さでU字形を呈し，東に寄って壺＋甕をほぼ水平に埋置した接口式成人用甕棺墓である。主軸をN—58°—Eにとる。棺内には人骨が遺存し頭骨は下甕内にあった。被葬者は熟年の男性である。

上甕は頸部以上を打ち欠いた大型の壺形土器で，球形に近い胴部には4条の山形凸帯がある。

下甕は「T」字状口縁下に1条，胴下半部に2条の三角凸帯を有す甕形土器で，胴上半部は直に近く立ちあがる。時期は中期後半でも古期の頃であろう。この甕棺墓は人骨を取り上げた後，埋土をし保存した。

31号甕棺墓〔№58〕

甕＋甕の接口式小児用甕棺墓で30号甕棺墓の南東に位置し，墓壙を切られている。墓壙は長軸1.02m，短軸0.72mの不整楕円形を呈し，西側に若干掘り込んで下甕を入れている。従って甕棺は西傾し，ほぼ水平に埋置されている。主軸は S—66.5°—W を指す。接口部に目貼り粘

土はなかったが，幸いにも頭骸骨が下甕内に遺存した。時期は中期中葉頃であろう。この甕棺も人骨を取り上げた後，埋め戻した。

32号甕棺墓〔No.63〕（図版21—2）

30号甕棺墓の西側で，その墓壙を一部切っている傘蓋＋甕の接口式成人用甕棺墓である。長辺1.37m，短辺1.03mとやや隅丸の長方形の墓壙を約1m程掘り下げ，東側へ横穴を掘り込んで，下甕の大部分を挿入する。なお，西側墓壙の下部は内側にへこんでおり，ここは甕棺を埋置する場合の丁度，腰の部分に当たる所から意識的な掘り込みと思われた。甕棺は若干，下甕の方に下がりぎみに埋置し，主軸はN—66°—Wにとる。接口部は粘土で目貼りされる。この甕棺は非常に残存状態がよく，開口せずに保存した。

37号甕棺墓〔No.13〕（図版22—1・49—3・4，第25・48図）

38号甕棺墓の東側に接して検出された甕＋樽の覆口式小児用甕棺墓で，北側は38号甕棺墓と共通の墓壙を有す。墓壙上面は小さな卵形を呈し長辺50cm，短辺43cmを測る。東側へ斜抗を掘り込み，その長さは28cm，深さ47cmで，下甕の口縁部以下がすっぽり入ってしまう。甕棺は29度の角度で埋置される。下甕に用いた樽形土器は外面丹塗りである。主軸はN—78°—Wにとる。この甕棺の下になお甕棺が存在する事が確認されている。

上甕は，口径32.2cm，底径34.7cm，器高34.7cmを測る甕形土器で，ゆるやかに内傾する口縁は，「く」字状を呈し，外唇で肥厚する。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げ，外面は刷毛目調整を施している。胎土に砂粒・雲母を含み，焼成は良好。色調は内面で淡褐色，外面で明褐色を呈す。

下甕は，口径21.3cm，底径11.3cm，器高40.2cmを測る小型の樽形土器である。大きく内傾してすぼまる口縁部で口唇部はヨコナデによりわずかに凹む。口縁直下に上向きの断面「コ」字形凸帯を1条巡らす。口縁部と凸帯間には全周する縦位の暗文帯をつくる。胴部の器壁は，4～5mmと極めて薄いが口縁付近は厚くなる。外面は，横方向のヘラ磨きを施こし，全体に赤色顔料が塗布される。内面は口唇部がヨコナデの他はナデで仕上げられ，暗明褐色を呈する。胎土は良質で，砂粒・雲母を含み，焼成は普通。特異な器形で，類例としては，立岩遺跡15号甕棺墓の下甕に用いられ壺Cと分類された土器や，板付遺跡H—5地点出土土器などがあげられる。

38号甕棺墓〔No.14〕（図版22—1・50—1・2，第25・48図）

37号甕棺墓の西側で検出された，甕＋甕の接口式小児用甕棺墓である。主軸はN—21.5°—Wを指す。墓壙は小さな楕円形を呈し，長辺51cm，短辺39cmを測る。下方へほぼ直に近い斜抗を掘り下げ甕棺を埋置する。従って，その傾斜は非常に強く45度を測り，当遺跡では直立したものの1つで，この埋置方法からして，足部を下にして被葬者を納めたのであろう。合せ甕の全長は66cmである。

上甕は，口径29.1㎝，底径9.1㎝，器高34.3㎝を測る小型の甕形土器である。口縁は平坦な逆「L」字状を呈し内側は肥厚して丸味をおびる。底部は上げ底気味の平底でゆるやかに膨らみをもって倒卵形の胴部へと移行する。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げられ，外面は下から上方向への刷毛目を上から下へ施している。

下甕は，口径28.6㎝，底径9.0㎝，器高34.4㎝を測る小型の甕形土器である。内傾する「く」字状の口縁は端部が若干肥厚し，内側に稜を有する。やや上げ底気味の底部から反りながら倒卵形の胴部へ移行する。器壁は厚い。口縁部内外は刷毛目の後にヨコナデで仕上げられ，各々斜め，縦方向の刷毛目が残存する。内面はナデ調整，外面は下から上方向への刷毛目調整を施す。上下甕とも胎土は良質で細砂・雲母を含み，焼成は良好。色調は淡明褐色を呈する。

41号甕棺墓〔No.82〕（図版22—2，第26図）

墓域の中央，東側で42号甕棺墓の西側に位置する甕形土器を用いた単棺墓である。墓壙は不整方形を呈し東西1.11m，南北0.99mを測り，南東側に拡くなる。上部は削平されているが上辺から6㎝ほど下がって，蓋受け部と思われる段部を形成するので木蓋を施こしたのであろう。西側はNo.81遺構内にあるため不確実な掘り方である。甕は約29度の角度を持ち，主軸はS—53°—Eを指す。人骨は遺存しなかった。

甕形土器は逆「L」字状の口縁部を有し，直下に1条の三角凸帯が巡る。胴中央部へやや膨らみながら移行し，平底の底部へすぼまる。器高68㎝前後で底径9㎝を測る。

42号甕棺墓〔No.98〕（図版23—1，第26図）

41号甕棺墓の東側で検出され，甕＋甕の接口式小児用甕棺墓である。不整長方形の西に偏して甕棺を埋置し，主軸はS—72.5°—Eにとり，角度は24度傾斜する。

上甕は小型の甕形土器で，下甕は逆「L」字形の口縁部を持つ甕形土器である。

44号甕棺墓〔No.40〕（図版23—2・50—3・4，第26・48図）

墓域の北側で10号甕棺墓の東に位置し，上甕に丹塗甕形土器，下甕に甕形土器を用いた接口式小児用甕棺墓である。主軸はN—82°—Wにとる。上部が削平され，上甕が墓壙上部に出てしまう。写真撮影後，上甕底部が壊われ，図では表わしていない。墓壙は楕円形を呈し，東側へ斜抗を穿く。埋置角度は17.5°で接口部は目貼りされていない。No.39遺構より新しい。

上甕は，口径32.4㎝，底径6.1㎝，器高31.1㎝を測る小型の甕形土器である。平坦な逆「L」字状の口縁端部には竹管状工具による斜めの刻目を施こしわずかに外傾する。口縁下には縦位の暗文を施こし，口縁直下と胴部中位には各々1条の「M」字形凸帯を貼り付けている。底部は上げ底で，反りぎみに膨らみをもって倒卵形の胴部へ移行する。外面と内面上端部には全体に赤色顔料が塗布され，更に口縁部内外は横方向，胴部は斜め，縦方向の研磨が加えられている。また，内面には丹のこぼれが著しい。内面はナデ調整が施され，淡明褐色を呈する。胎土は良質で精選され，細砂・雲母を含み，焼成は良好・堅緻。

下甕は，口径30.5㎝，底径8.8㎝，器高 35.9 ㎝を測る小型の甕形土器で，ゆるやかに内傾する「く」字状の口縁は，外唇が肥厚し，内側は丸味を帯びた弱い稜を有する。やや上げ底気味の底部から反りぎみに膨らみをもって倒卵形の胴部へ移行する。調整は，口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げ，外面は刷毛目調整。色調は内面が淡明褐色，外面は淡褐色を呈す。胎土には石英砂・雲母を含み，焼成は良好。

46号甕棺墓〔No.41〕

44号甕棺墓の南側に接して検出された鉢＋甕の接口式成人用甕棺墓である。主軸をS-14.5°—Wにとる。墓壙は隅丸長方形を呈し，南側は階段状に掘り下げている。棺は35度の急角度で埋置している。平面図作成後，埋め戻した。

47号甕棺墓〔No.38〕（図版64—1，第82図）

墓域の北東側に検出された，甕形土器を用いた単棺墓である。墓壙は不整円形を呈し，長径1.37m，短径1.26mを測る。口を西に向けて埋置し，口縁に接して木蓋で封した痕跡が認められる。棺は墓壙の南側に寄り，主軸はN—68°—Wにとる。墓壙内より，丹塗りの壺形土器が出土し，甕棺に対する供献品であろう。供献土器の出土状態は第82図の通りである。平面図作成後，埋め戻している。

52号甕棺墓〔No.90〕（図版第26・49図）

墓域の中央部西側に位置し，墓壙が保存区域外になるため調査をした。棺は甕＋甕の接口式小児用甕棺墓である。墓壙は楕円形を呈し，長径1.13m，短径0.85mで，南側にテラス面を有す。棺は墓壙の北側に横穴を穿いて下甕を納めたもので，主軸はほぼ南北のS—2.5°—Wを指す。傾斜は8度である。なお，墓壙内に2点の土器が出土した。内1点は丹塗り傘蓋形土器で，8号土壙墓出土の破片と接合した。時期は中期中葉に属す。

上甕は，口径32.0㎝，底径8.5㎝，器高34.8㎝を測る小型の甕形土器である。逆「L」字状を呈する口縁は厚く平坦で，端部を丸くおさめ，内側に弱い稜を有する。底部は上げ底気味の平底で，倒卵形を呈する胴部へつながる。調整は，口縁部内外がヨコナデ，内面はナデで仕上げ外面は，下から上方向へ粗めの刷毛目を上から下へ施している。胎土に石英砂・雲母を含み，焼成は良好で，外面は暗黄褐色，内面は淡褐色を呈する。

下甕は，口径34.9㎝，底径9.2㎝，器高39.2㎝を測る小型の甕形土器で，外唇の伸びのよい平坦な逆「L」字状を呈する口縁は，内側に鋭い稜をもつ。底部は上げ底気味の平底で胴部は倒卵形を呈す。調整は口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げ，外面は下から上方向への刷毛目を下から上へ施している。胎土には石英砂・雲母を含み，焼成は良好・堅緻。色調は明赤褐色を呈するが，内面はやや濃い。

53号甕棺墓〔No.91〕（図版24—1・51—1・2，第27・49図）

52号甕棺墓の西側に位置する甕＋甕の接口式小児用甕棺墓である。幅広の楕円形の墓壙の北

側寄りに横穴を施設して棺を埋置する。主軸をS—30.5°—Wにとり，傾斜も7.5度と緩い。墓壙は南西側に拡く，3段掘りである。なお，墓壙内に3点の成人用甕棺片が出土し，うちP2の口縁部は溝状遺構内出土のものと接合した（第61図6）。

上甕は，口径29.3㎝，底径8.0㎝，器高34.7㎝を測る小型の甕形土器である。内傾する口縁は「く」字状を呈し，内側に丸く弱い稜を有する。底部はやや上げ底気味の平底で，胴部は倒卵形を呈する。口縁部内外はヨコナデ，内部はナデで仕上げられ，外面は下から上方向への細かい刷毛調整を施している。胎土は石英砂・雲母を多く含み，焼成は良好・堅緻。色調は内面が明褐色，外面は淡褐色を呈し，底部に黒斑がみられる。

下甕は，口径33.5㎝，底径8.6㎝，器高35.9㎝を測る小型の甕形土器である。外傾の良く伸びた逆「L」字状を呈する口縁は，ほぼ平坦で，内側に張り出した稜を有する。底部はやや上げ底気味の平底で，倒卵形をした胴部の器壁は厚く，上甕ほど張らない。調整は，口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げている。外面は下から上へ刷毛調整を施しているが，異なる種類の工具を用い，上半は粗く，下半は細かい。胎土は石英・長石・雲母を含み，焼成は良好・堅緻。色調は内面が淡褐色，外面が明赤褐色を呈する。

54号墓棺墓〔No.77〕（図版24—2・51—3，第27・49図）

墓域の中央東端部に位置し，墓壙の一部は調査区域外へ延びる。不整形の浅い墓壙の西端に壺形土器を埋置した単棺墓で，棺の口縁下には幅5㎝，長さ28㎝の溝があるところから木蓋で密封したのであろう。主軸をS—80.5°—Eにとる。

口径25.8㎝，底径9.5㎝，器高34.8㎝を測る小型の無頸壺形土器である。逆「L」字状を呈する口縁は平坦で，内側に鋭い稜をもつ。胴部中上位で最大径33.0㎝を測り，上げ底の底部からやや球状を呈する胴部へゆるやかにつながる。胴部中位には，1条の凸帯（三角凸帯と考えられる）が貼り巡らされていたが，剝落し現存しない。調整は，口縁部・胴部外面上半はヨコナデ，内面はナデで仕上げられ，外面下半は下から上方向への刷毛目を残し，摩滅が著しいが炭様の黒色顔料がわずかに観察される。胎土に砂粒・雲母を含み，焼成は良く，色調は暗褐色を呈する。

58号甕棺墓〔No.88〕（第28図）

墓域の中央部西側に位置する，上下とも口縁部を打ち欠いた壺形土器を用いた挿入式小児用甕棺墓で，主軸をN-28°-Wにとり，埋置角は16.5度を測る。上部はかなり削平を受けている。

65号甕棺墓〔No.149〕（図版25—2・51—4，第28図）

墓域の中央部西側で，7号周溝墓の溝南側で検出された。墓壙の北から西にかけて3個の花崗岩が見られた。壺＋甕の接口式成人用甕棺墓で上部は削平を受け，上壺の底部を欠損する。墓壙は楕円形を呈し，北側へ横穴を穿ち下甕を挿入しているので，主軸をS—7.5°—Wにとる。

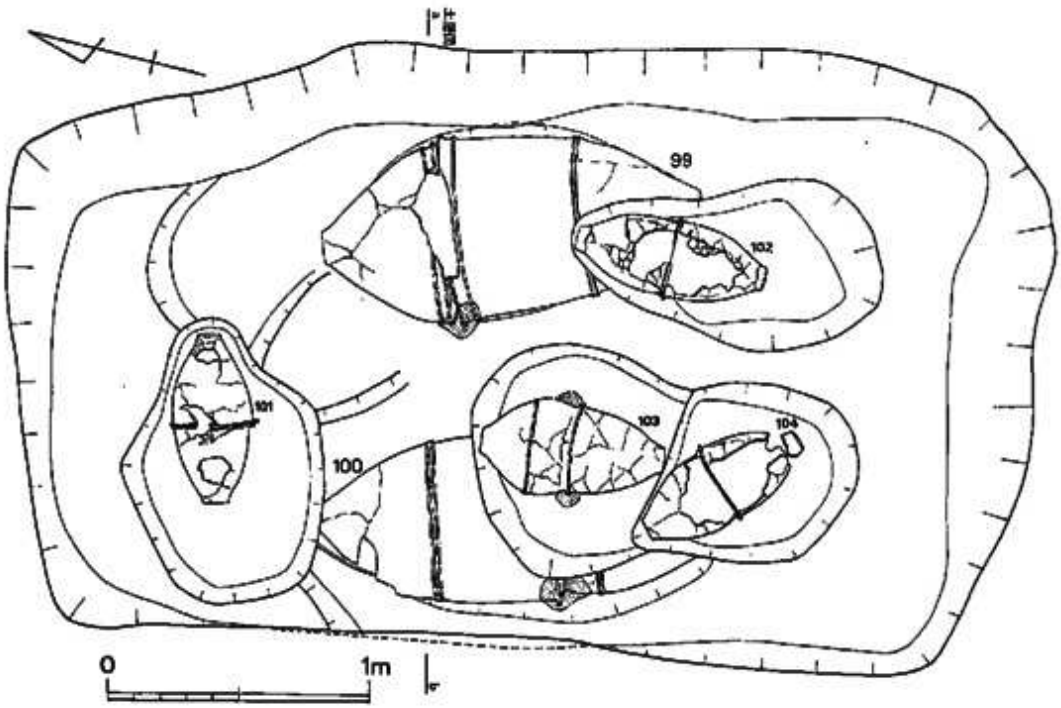
上甕は壺形土器の口縁部を打ち欠き，球状の胴部に1条の「コ」字状凸帯を有す。

下甕は逆「L」字状口縁で，直下に２条の三角凸帯を有す甕形土器である。中期後葉に属す。

99号甕棺墓〔No.160〕（図版27・31—1・52—1・2，第19・20・29・51図）

墓域の南部西側に位置し，台地の南端から台地上へ南北に延びる溝状遺構の西側で検出された長辺3.87m，短辺2.23mの隅丸長方形の墓壙内に存在する。この墓壙内上部には4基（101～104号棺）の小児棺，下部に２基（99・100号棺）の成人棺と合計６基の甕棺が埋葬された特異な墓である。

墓壙は当墓域では最も大きい。南東側上部は106号甕棺墓によって切られ，南辺壁はNo.168遺構の成人用甕棺墓を切っている。本遺跡では墓壙の大小に係わらず，大部分が墓壙に重複関係を有しているがこれも例外では無かった。第19図は墓壙内の甕棺配置図である。墓壙を約10cmほど掘り下げたところ，南半から102～104号と３基の小児棺が検出された。そのうち103号と104号は墓壙を接している。北半では20cm下げた中央部で，東西方向に主軸を有す小児棺（101号）が検出され，計４基が墓壙内に存在し，一時は墓壙の確認を見誤まったかとも思われた。４基の小児棺は103号の下甕に壺形土器を用いていた以外はすべて甕形土器であった。４基の小児棺をとり除き，墓壙中央部に断面ベルトを残して掘り下げた（図版28—１）。墓壙は周壁を内彎ぎみに穿ち，南側で深さ１m，北側で1.2mと台地の傾斜に沿ったもので，底面は中央

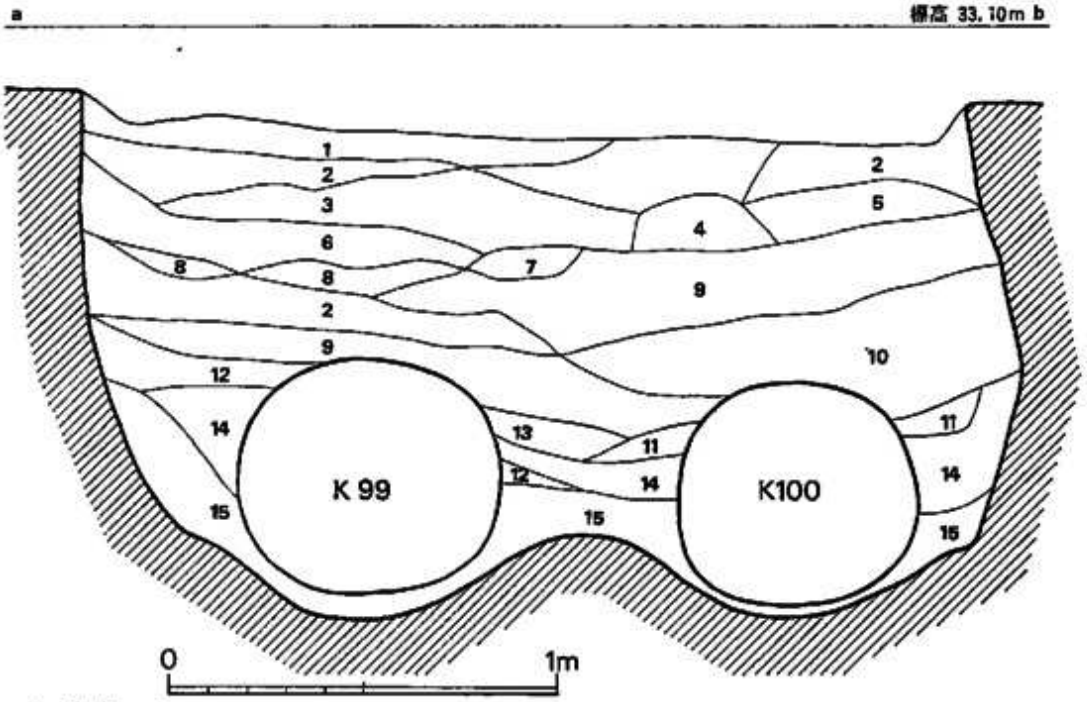


第19図　99・100号成人棺と101～104号小児棺配置図（1/30）

部を除き平坦に近い。この底面に南北方向に主軸を持つ2基の成人用甕棺墓（99・100号甕棺墓）が中央部に並列して検出された。人骨の保存状態も良好で，頭部の位置が逆転している点が注目される。

第20図は墓壙内の土層堆積図である。甕棺の下部は地山を削った黄褐色パイラン土で，他はすべて砂質土で埋めている。その方向をみると中央部に低く下がる所から，墓壙の周囲から埋めた事が判る。この墓壙の上部の小児甕棺を埋置するための特別な墓壙の整地作業等の工程は認められない。

99号は2基並列した東側に位置し，北に鉢，南に甕の接口式成人用甕棺である。主軸はN—21°—W にとり，埋置角度は下甕の方に高く11度の傾きを有している。接口部には粘土目貼りを施しており，上鉢の下部には焼成後の穿孔が見られるが位置的に高い。甕棺の上・下甕の認定は一方が鉢形土器である事と北側に広く掘り方が残る点から決定した。棺内には良好な人骨が遺存し，頭部を下甕，つまり南に向けた仰臥屈葬で，永井教授により20才前後の女性と鑑定されている。副葬品はなかった。



土 層 名

1．茶褐色砂質土。
2．黒色土砂質土。
3．黒褐色砂質土（黄褐色砂粒ブロック含）。
4．暗茶褐色土（黄色砂質ブロック含）。
5．黒褐色土（黄色砂質粒子含）。
6．茶褐色土（黄色砂質ブロック含）。
7．暗茶褐色砂質土。
8．黒褐色砂質土
9．茶褐色砂質土（黄褐色砂質ブロック含）。
10．暗茶褐色砂質土（黄褐色砂質・黒色ブロック土含）。
11．黒色砂質土層（茶褐色砂質ブロック含）。
12．黒色土砂層。
13．暗茶褐色砂質土。
14．黄褐色砂層。
15．黄褐色パイラン土。

第20図　99・100号甕棺墓墓壙内土層断面図（1/20）

上甕は，口径71.0㎝，底径11.6㎝，器高49.2㎝，を測る鉢形土器である。外傾する「T」字状の口縁部は内唇が良く発達し，口縁直下に断面三角形の凸帯を1条貼り巡らしている。胴部はわずかな膨らみをもち，底部近くでやや反り気味になる。胴部中位下半には焼成後に外面から二次穿孔が穿たれている。調整は，口縁部内外がヨコナデの他は内外面ともにナデで仕上げている。凸帯下には炭様の黒色顔料が塗布されている。胎土に砂粒・雲母を多く含み，焼成は良好。色調は，内面が暗明褐色，外面は淡褐色を呈する。

下甕は，口径70.4㎝，底径11.3㎝，器高98.0㎝を測り，砲弾状を呈する大型の甕形土器である。内唇の張り出しが強く，ゆるやかに外傾する「T」字状の口縁部を最大径として，胴部凸帯までは若干内彎ぎみに直口し，凸帯下ですぼまり底部に移行する。口縁直下に断面「コ」字形凸帯を1条と胴部中位に断面三角形の凸帯を2条貼りつけている。口縁部内外と凸帯上下がヨコナデの他はすべてナデで仕上げている。外面には風化による摩滅の為に不明瞭ではあるが，全体に炭様の黒色顔料が観察され，胴部上半に黒斑がみられる。胎土には石英砂・雲母を多く含み，焼成は良く，淡褐色を呈する。いわゆる典型的な須玖式の甕棺であろう。

100号甕棺墓〔№160〕（図版27—30・31—2・52—3・4，第19・20・29・51図）

99・101～104号甕棺と同一墓壙内に検出され，99号の西側に位置する。上甕は口縁部を打ち欠いた甕，下甕に甕を用いた接口式成人用甕棺墓である。接口部には丁寧に目貼り粘土を填てている。ほぼ水平に埋置されている。棺内には良好な人骨が遺存した。頭部を北傾と，99号と反対に置く仰臥屈葬で骨はすべて北甕内に存在した。被葬者は40才前後の女性である。

水平埋葬時の甕棺に対する上・下甕の認定は難しいが，通常では頭部から納棺するので，99号と反対に北を下甕とした。主軸方位は従ってS—15°—Eを指す。

上甕は，胴部上半以上を打ち欠いているため全体の形状は不明であるが，現存する底径10.6㎝，器高69.4㎝を測る大型の甕形土器。やや上げ底気味の平底から倒卵形の胴下部へ膨らみをもって移行し，2条の断面三角形凸帯を巡らすところで最大径50.7㎝を測る。凸帯上部から上部はかなり内彎する。凸帯上下はヨコナデの他はナデで仕上げている。外面には剝落が著しいが炭様の黒色顔料の塗布が観察される。胎土に石英砂・雲母を含み，焼成は良好で，色調は暗明褐色。

下甕は，口径63.2㎝，底径12.0㎝，器高98.0㎝を測り砲弾状を呈する大型の甕形土器である。口縁は内唇が厚く良く発達した「T」字状で，口縁直下から胴部中位に巡らされた複合三角凸帯へゆるやかな膨らみをもってほぼ直線的につながり，ゆるやかに径を減じながらやや凹んだ平底へ移行するスマートな器形である。調整は口縁部内外・凸帯上下はヨコナデで仕上げ，その他は内外ともにナデで仕上げている。胎土に石英・長石・雲母を多量に含み，焼成は堅固で，色調は暗明赤褐色。

101号甕棺墓〔No.161〕（図版26・32—1・53—1・2，第19・30・50図）

99・100号甕棺墓と同一墓壙内で100号甕棺墓の上部に検出した。102～104号甕棺墓から1基のみ離れ，レベルも10cmほど低い。甕＋甕の接口式小児用甕棺墓で，不整形の墓壙内東側にほぼ水平に埋置されている。主軸はS—72°—Wにとる。

上甕は，口径28.9cm，底径8.6cm，器高29.1cmを測る小型の甕形土器である。逆「L」字状を呈する口縁はわずかに外傾し端部は丸くおさめ，内唇がわずかに張り出して稜を有する。胴部はゆるやかな膨らみをもつが胴部上半は直線的に立ち上がる。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデ，外面は下から上へ細かい刷毛調整を施している。胎土は石英砂・雲母を含み，焼成は良好。色調は内面が暗赤褐色，外面は淡褐色を呈する。

下甕は，口径30.2cm，底径8.2cm，器高34.2cmを測る小型の甕形土器である。逆「L」字状を呈する口縁部はほぼ平坦で丸味をもち外唇が垂れる。内唇は肥厚して弱い稜を作り口縁直下の器壁は厚い。底部は平底で胴部上半は直線的に立ち上がる。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデ，外面は下から上への細かい刷毛調整を施している。胎土には石英砂・雲母と若干の赤土を含む。焼成は良く，色調は内面が淡褐色，外面は明赤褐色を呈する。

102号甕棺墓〔No.162〕（図版26・32—2・53—3・4，第19・30・50図）

99・100号墓壙の南部東側で検出された。主軸をほぼ南北S—7°—Eにとる甕＋甕の接口式小児用甕棺墓である。墓壙は楕円形を呈しているが，本来は下甕（北甕）の半分程度の横穴を穿いていたものであろう。ほぼ水平に埋置され，容量は全長72cmを測る。

上甕は，口径31.0cm，底径8.1cm，器高35.7cm，を測る小型の甕形土器で，端部を丸くおさめた口縁部は平坦な逆「L」字状を呈し，内側が張り出す。底部は平底でゆるやかに膨らみながら倒卵形の胴部へ移行する。口縁部内外と内面はヨコナデ，外面は粗めの刷毛調整を施し，胴部上半には炭様の黒色顔料が塗布されている。また胴部下半には二次的な焼成を受けており，日常雑器からの転用が考えられる。胎土は砂粒を含み焼成は良好。

下甕は，口径28.7cm，底径7.7cm，器高36.6cmを測る小型の甕形土器である。平坦で丸味をもつ「T」字状の口縁は端部を丸くおさめる。厚い底部は平底で反りぎみに倒卵形の胴部へ移行し，上半はやや内彎する。調整は，口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げ，外面は下から上へ刷毛目を施こしている。胎土は石英砂・雲母を含み，焼成は良く，明赤褐色を呈する。

103号甕棺墓〔No.163〕（図版26・33—1・54—1・2，第19・30・50図）

99・100号の墓壙内で，104号甕棺の北に位置し，墓壙を接する。実測図では104号に切られているが，これは甕棺の検出順序によるもので，同時に埋葬されたと思われる。甕＋壺の接口式小児用甕棺墓で主軸をS—2°—Wにとる。上甕が6度高く埋置され，接口部には目貼り粘土を施している。

上甕は，口径30.6cm，底径8.3cm，器高33.3cmを測る小型の甕形土器で平坦な逆「L」字状

を呈する口縁部は端部を丸くおさめている。内唇の発達は弱く，上面はやや凹む。底部はやや上げ底気味で倒卵形の胴部へ反りぎみに移行し，上半は直線的に立ち上がり，口縁直下の器壁は厚みを増す。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げ，外面は下から上への細かい刷毛調整を施こしている。胎土は石英砂を多く含み，焼成は良いが，風化による磨滅が顕著である。色調は明赤褐色。

下甕は，口径28.3cm，底径9.2cm，器高36.1cmを測る無頸壺形土器である。「T」字状を呈する口縁は平坦で端部を丸くおさめる外唇はやや薄く，内唇はナデのためわずかに凹む。胴部は大きく膨らみ，中位に下向きの断面三角形の凸帯を1条貼り付けている。調整は，口縁部内外と凸帯部はヨコナデの他はナデで仕上げられている。口唇部および外面には風化が顕著なために不明瞭ではあるが，全体に炭様の黒色顔料が観察される。胎土は石英砂と少量の雲母を含み，焼成は良好。色調は暗褐色であるが外面はやや赤味をおびる。

104号甕棺墓〔No.164〕（図版26・33—2・54—3・4，第19・30・52図）

103号甕棺墓と墓壙を接して南側に検出された壺＋甕の接口式小児用甕棺墓である。不整楕円形の墓壙の北西側に下甕があるもので，主軸をS—36°—Eにとる。ほぼ水平に埋置され，接口部には粘土は認められない。

99・100号甕棺と同一墓壙内に検出された101～104号の4基の小児棺は，成人棺と同時に埋葬されたもので，家族墓的な性格を有していよう。時期はいずれも中期中葉であろう。

上甕は，口径29.7cm，底径7.6cm，器高34.4cmを測る小型の甕形土器である。逆「L」字状を呈する口縁は，ほぼ平坦で上面がわずかに凹み外唇が垂れる。底部は上げ底で，胴部は倒卵形を呈する。調整は，口縁部内外がヨコナデ，内面はナデで仕上げられ，外面は下から上へ粗めの刷毛目を施こしている。胎土には石英砂を含み，焼成は良好，堅緻。色調は淡褐色を呈するが，外面はやや明るい。

下甕は，口径28.9cm，底径7.6cm，器高33.3cmを測る小型の甕形土器である。平坦な逆「L」字状を呈する口縁は厚味をもち端部を丸くおさめている。胴部は倒卵形を呈し，上げ底の底部からやや反りぎみに移行する。調整は口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げ，外面は下から上方向への粗めの刷毛目を底部から口縁部へ施こしている。胎土は石英砂・雲母を含み，焼成は良好。色調は内面が淡褐色，外面は淡明褐色を呈し，口唇には黒斑がみられる。

105号甕棺墓〔No.165〕（図版34—1・55—1・2，第31・52図）

99・100号の墓壙南側で107号甕棺墓の西に検出された壺＋広口壺の接口式小児用甕棺墓である。長径96cm，短径65cmと小さい楕円形の墓壙に棺を約11.5度の角度で埋置し，主軸方位はN—77°—Wにとる。下甕は丹塗りで底部近くを穿孔している。上甕に頭骸骨少片が残存し，小児甕で埋葬方法が判明した貴重な例である。時期は中期後葉であろう。

上甕は，底径9.6cm，器高40.0cmを測り，口唇部を欠く無頸の壺形土器である。内傾する口

縁部は「く」字状を呈し，内唇は，若干肥厚して稜を有する。底部は上げ底気味で，大きく膨らむ胴部は中位で最大径37.1cmを測り，断面三角形の凸帯を1条貼りつけている。調整は，口縁部内外と凸帯部上下がヨコナデの他はナデで仕上げられている。凸帯下には不明瞭ではあるが，炭様の黒色顔料がわずかに観察される。胎土には砂粒・雲母を含み，焼成は堅く，色調は暗黄褐色を呈する。

下甕は，口径30.7cm，底径7.6cm，器高28.5cmを測る広口の壺形土器で，ゆるく外反して立ち上がる頸部につながる鋤先状口縁は，内側への張り出しが弱く，ゆるく外傾する。頸部下位に断面三角形の凸帯を1条貼り付け，胴部は大きく膨らみ，底部近くはやや反りぎみになる。頸部と胴部との接合部は厚みをもつ。口唇部および外面は全体に赤色顔料が塗布されているが風化による磨滅が顕著で，底部近くには外面からの二次穿孔がみられる。調整は口縁部および頸部内外はヨコナデ，胴部はナデで仕上げている。また頸部中位から胴部上半にかけて炭様の黒色顔料がわずかに観察される。胎土はには多くの石英砂と雲母を含み，焼成は良く，内面の色調は淡明褐色を呈する。

106号甕棺墓〔No.166〕（図版34—2，第31・52図）

99・100号の墓壙南壁上部を切って墓壙を施設した甕＋甕の接口式小児用甕棺墓である。細長い楕円形の墓壙は長径107cmで，短径50cmで，棺は西に寄って埋置され，下甕の胴下半部は99・100号の墓壙内に入る。主軸はS—61°—Eを指す。接口部には目貼り粘土を施こす。

上甕は削平により口縁部から胴上半部しか残存しない。口縁は逆「L」字状を呈し，口唇部は丸味を帯びている。

下甕は，口径33.3cm，底径7.8cm，器高37.6cmを測る小型の甕形土器である。平坦な逆「L」字状の口縁は端部を丸くおさめ，上面は内側が凹む。底部は上げ底で，ゆるやかに膨らむ胴部は倒卵形を呈する，調整は，口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げられ，外面は下から上への細めの刷毛目を施こしているが，口縁下の刷毛目は，ナデ消されている。胎土は石英砂と少量の雲母を含み，焼成は良好。色調は淡明褐色を呈し，内面はややくすみ，胴部下半には黒斑がみられる。

107号甕棺墓〔No.167〕（第31・53図）

105・106号の間で，No.168遺構内に墓壙を施設する鉢＋甕の接口式小児用甕棺墓である。棺に対し広い墓壙は長径1.4m，短径0.71mの楕円形を呈し，西北に寄って約5.5度の角度で埋置する。主軸方位はS—45°—Eにとる。接口部の目貼り粘土は無く，遺骸も残存しなかった。

上甕は，口径35.4cm，底径9.6cm，器高21.6cmを測る小型の鉢形土器である。「T」字状を呈する口縁部は，内側に張り出して丸味を帯びた稜を有し，端部はナデて平坦に整えている。やや厚みのある底部は上げ底気味で，胴部は膨らみ，口縁直下の器壁は厚みを増す。調整は，口縁部内外がヨコナデ仕上げの他はナデで仕上げている。胴部上半に黒斑を有し，胎土は石英

砂・雲母を含む。焼成は良く，内面は明褐色，外面は褐色を呈する。

下甕は，口径40.5cm，底径10.0cm，器高43.3を測る甕形土器である。ゆるやかに内傾する逆「L」字状の口縁部は，内側に丸味をおびた稜を有し，肥厚する外唇はナデによりわずかに凹む。底部は上げ底で，倒卵形を呈する胴部は口縁下に断面三角形の凸帯を一条貼りつけている。口縁部内外と凸帯部はヨコナデで仕上げ，内面は口縁下に斜め，胴部下位に縦方向の刷毛目を残し，他はナデ消している。外面は下から上への粗めの刷毛調整を施こした後に全体に炭様の黒色顔料を塗布している。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成は良く，色調は内面が暗黄褐色，外面は暗赤褐色を呈する。

109号甕棺墓〔No.178〕（図版35—1・55—3・4，第32・53図）

99・100号甕棺墓の西側に位置する甕＋甕の挿入式小児用甕棺墓である。不整円形の墓壙は約1m前後で，東側に1.1mと深く掘り下げて棺を埋置する。従って甕棺は52.5度と急傾斜である。主軸はS—82.5°—Wにとる。遺骸は残存しなかった。

上甕は，口径33.3cm，底径14.7cm，器高44.7cmを測り，逆「L」字状の口縁部は平坦で，内側に弱い稜をもつ。やや厚い口縁端部は，ナデによりわずかに凹み，口縁直下に1条の断面三角形の凸帯を巡らせている。大きい上げ底の底部は中央が厚みを増し，胴部はゆるやかに内彎する。器形的には4号祭祀遺構出土の土器と類似し，棒形に近い甕形土器である。調整は口縁部内外と凸帯部はヨコナデで仕上げ，他はナデで仕上げているが，胴部内面下半にはわずかに刷毛目が残る。胎土は石英砂を含み，焼成は良好。胴部中位に黒斑を有し，色調は淡明褐色を呈する。

下甕は，底径8.9cm，器高43.3cmを測る小型の甕形土器であるが，土圧による歪みが著しく口縁部は39.2～42.5cmの楕円形を呈する。内側に弱く張り出す逆「L」字状の口縁部はわずかに外傾し端部は丸くおさめている。倒卵形を呈する胴部は口縁直下に断面三角形の凸帯を1条巡らし，底部近くはやや反りぎみになる。口縁部と凸帯部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げられ，外面は下から上への刷毛調整を施こしているが，凸帯下は刷毛目をナデ消している。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成は良く，暗明褐色を呈するが，内面には大きな黒斑がある。

110号甕棺墓〔No.177〕（図版35—2・56—1・2，第33・54図）

墓壙の南西部で10号土壙墓の北に位置する。胴上半部以上を打ち欠いた壺と甕の覆口式成人用甕棺墓である。墓壙は楕円形を呈し，長辺は1.83mを測る。ほとんど平坦な底面の西側に寄って棺を埋置し，主軸方位はS—60°—Eを指す。墓壙内より丹塗りの高杯杯部が出土した。

上甕は，胴部上半以上を打ち欠いているため全容は知り得ないが，復原底径14.8cm，現存する器高43.3cmを測る大型の壺形土器である。球形状の胴部に2条の断面「M」字形凸帯を巡らし，上方の凸帯で最大径69.6cmを測る。調整は，凸帯部上下がヨコナデの他はナデで仕上げている。胎土は良質で，石英砂を含み，焼成は良好。色調は明淡褐色を呈するが，内面は暗赤色

をおびる。

下甕は，砲弾形の甕形土器で，口径58.2cm，底形11.8cm，器高88.6cmを測る。ゆるく外傾する「T」字状の口縁は厚く上面がわずかに凹む。胴部中位に断面三角形の凸帯を2条巡らし，その凸帯を境として上は器壁が厚く下ではやや薄手となる。調整は，口縁部内外と凸帯部がヨコナデの他はナデで仕上げているが，底部近くは刷毛目を残す。凸帯下から胴部上半には風化による剝落が著しいが，炭様の黒色顔料が塗布されている。胎土は良質で，砂粒・雲母を含み，焼成は良好。色調は内面が暗赤褐色，外面がくすんだ淡褐色。

111号甕棺墓〔No.170〕（図版36—1，第32・55図）

7号周溝墓の南西側で検出され，切り合いの無い墓壙内にある甕＋甕の接口式小児用甕棺墓である。甕棺は楕円形の墓壙の北側に横穴を掘って下甕を納めたもので主軸はS—32.5°—Wにとる。

上甕は，口径34.9cm，底径9.3cm，器高36.1cmを測る小型の甕形土器である。逆「L」字状を呈する口縁は，端部がやや肥厚し，ナデによりわずかに凹む，内弯は強く屈曲し，丸味をおびた稜を有する。倒卵形の胴部は底部近くで反りぎみになり，底部は中央が凹む平底である。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げられ，外面は刷毛調整を施こしたのち，全体に炭様の黒色顔料を塗布しているが，剝落が顕著である。胎土は石英砂を多く含み，焼成は良好。色調は暗赤褐色を呈するが，内面はややくすみ，胴部中位に黒斑がある。

下甕は，口径36.8cm，底径10.4cm，器高38.6cmを測る小型の甕形土器である。逆「L」字状の口縁部はわずかに内傾し，端部は丸くおさめ内側への張り出しは未発達である。上げ底の底部からやや反りぎみに倒卵形の胴部へ移行する。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げられ，外面は下から上方向への刷毛目を底部から口縁部へ施こしている。胎土には多くの砂粒と雲母を含み，焼成は堅固で色調は淡明褐色を呈し，底部には黒斑がある。

112号甕棺墓〔No.172〕（第32図）

墓域の南端西側で，台地の崖面に横穴を穿いて甕棺を埋置している。残存するのは下甕のみで，台地端部が削平されているものと思われる。

下甕は底部から胴上半部を残す甕形土器である。

113号甕棺墓〔No.173〕（図版36—2，第34図）

112号甕棺墓の東に接して検出された，甕＋甕の接口式小児用甕棺墓で，台地の崖面に横穴を穿いて埋置している。不幸なことに調査中に上甕が盗掘にあってしまい全容は不確実な点が多い。

下甕は口径32.0cmを測り，口縁部は「く」字状に近く，比較的胴部が膨らむ甕形土器である。口縁部・胴部内外面に丹の付着がみられるが，いわゆる丹塗り土器ではない。同様な例はK5上甕・K128下甕の成人用棺にも見られる。丹塗り磨研土器と甕棺が同じ場所で製作されたこ

とが判る好資料である。

114号甕棺墓〔№113〕（図版37—1，第34図）

墓域の南部東側に位置し，115号甕棺墓の東側，№190遺構の北側に検出された甕＋甕を用いた接口式小児用甕棺墓である。上部は削平を受けている。主軸はS—76°—Eを指し，埋置角は23度。

上・下甕とも口縁部が逆「L」字形を呈す同形の甕形土器である。

115号甕棺墓〔№114〕（図版37—2・38—1，第34図）

114号甕棺墓の南西に検出された鉢＋甕の接口式小児用甕棺墓である。上部はかなり削平を受けている。楕円形の墓壙の西側に斜抗を穿ち，約16.5度の傾きで埋置している。主軸方位はS—55°—Eをとる。接口部は目貼り粘土を施こしている。

上甕は鉢形土器で，逆「L」字形の口縁部の直下に1条の三角凸帯を持ち，口縁は内側へ張り出している。下甕は甕形土器でやはり逆「L」字形の口縁直下に1条の三角凸帯が巡る。器高は62cmといわゆる小児用甕棺に用いられる甕より大きい。

117号甕棺墓〔№117〕（図版38—2，第34・55図）

墓域の南東端に甕形土器が単独に検出された。甕棺は径47×34cmの楕円形の墓壙内に納められ，口縁部を東に向けている。甕形土器の胴下半部に二次的な穿孔が認められ，乳児用の甕棺墓であろう。木蓋の痕跡は認められない。

口径24.9cm，底径11.4cm，器高26.9cmを測る甕形土器である。口縁部は，肥厚して内側に弱い稜をもつ「く」字状を呈し，端部は丸くおさめている。胴部の張りは弱く，徐々に径を減じながら，中央部が厚味を増す大きな平底へ移行する。胴部下半には径および1.5cmの水ぬき孔が焼成後に外面から穿たれている。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデ調整で仕上げ，外面は粗めの刷毛調整を施こしている。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成は堅固。明褐色を呈するが，外面は暗く，内面はやや淡い色調を呈する。

118号甕棺墓〔№118〕（図版38—2，第35・55図）

117号甕棺墓の北に近接して検出された壺の単棺墓である。墓壙は不整長方形を呈し，長辺80cm，短辺58cmを測る。底面は緩いU字形で，約25度の角度を持って埋置される。口縁部は北に開く。

口径33.9cm，底径11.0cm，器高58.7cmを測る壺形土器であるが全体に歪みが著しい。肥厚した鋤先状口縁は内唇が発達し，外唇には刻み目を施こす。朝顔状にひろがる短い頸部には9～11本を単位とする暗文を施こしている。頸部凸帯は断面段状となり，胴部上半に断面「M」字形の凸帯を2条貼りつけている。底部は上げ底で厚く，反りぎみに大きく膨らむ胴部へ移行する。口縁部と頸部内外および凸帯より上部がヨコナデ調整の他はナデで仕上げている。風化による摩滅が著しいが，頸部と胴部外面中位に炭様の黒色顔料が観察され，恐らくは外面全体に

塗布されていたものと思われる。胎土は砂粒・雲母粒を含み，焼成は良好。色調は明褐色を呈するが内面は暗く，外面はやや淡い。

119号甕棺墓〔No.179〕（図版65，第35・56図）

台地の南崖下から台地上へ登ぼる溝状遺構のほぼ中間部で，溝底部にほぼ接して検出された。甕＋甕の接口式甕棺で，主軸は溝を横断する方向のN—83°—Wにとる。この土器の上部には，他の器形の多くの土器が混在しており，墓壙も確認出来なかった。また，棺内に成人用甕棺片が出土した点，これを甕棺墓と認定するのに否定的である。

上甕は，口径32.3cm，底径8.4cm，器高34.7cmを測る甕形土器である。逆「L」字状を呈する。口縁はゆるく外傾し，端部を丸くおさめている。底部は中央部がわずかに凹む平底で胴部は倒卵形を呈し，器壁は薄手である。調整は，口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げられ，外面は細かい刷毛目調整を施している。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成は良く，色調は暗明褐色を呈するが，外面はやや淡い。

下甕は，口径33.7cm，底径8.3cm，器高38.3cmを測る小型の甕形土器である。平坦な逆「L」字状を呈する口縁部は上面がわずかに凹み，内側に稜を有する。倒卵形の胴部はやや反りぎみに平底の底部へつながる。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げ，胴部外面上位は刷毛目を施こした後ヨコナデ調整を施しているが，刷毛目のナデ消しは不完全である。胴部外面は中位に細かい刷毛目，下位には粗い刷毛目を施し，ナデ消された胴部上位の刷毛目を加えると3種類の工具が使用されている。胎土は，石英砂・雲母を含み，焼成は良く，色調は暗赤褐色を呈するが外面は明るい。

120号甕棺墓〔No.95〕（図版39—1・56—3・4，第35・56図）

墓域の中央部西端に位置し，4号祭祀遺構及び130号甕棺墓と重複している。墓壙は不整楕円形を呈し，長径は1.5mを測るが西側は撹乱を受けている。甕＋甕を用いた接口式成人用甕棺墓で，主軸方位をN—33°—Eにとる。棺は墓壙の南側に寄り22度の角度で埋置している。埋土内より甕の口縁部破片が出土した。

上甕は，口径39.0cm，底径9.7cm器高47.2cmを測る甕形土器で，内傾する口縁部は肥厚し逆「L」字状を呈する。端部は丸くおさめ，口縁直下に断面三角形の凸帯を1条巡らす。胴部は倒卵形を呈し，ゆるやかな膨らみをもって，底部へつながる。口縁部内外と凸帯部はヨコナデ，内面はナデで仕上げられ，外面は刷毛目調整の後全体に炭様の黒色顔料を塗布しているが，風化による剝落が著しい。また刷毛目は上半が細かく，下半はやや粗い2種類の工具を用いる。胎土に石英砂・雲母を含み，焼成は堅緻。色調は外面が暗黄褐色，内面は淡褐色を呈する。

下甕は，口径46.7cm，底径10.3cm，器高56.0cmを測る甕形土器である。口縁部は内唇の発達した逆「L」字状を呈し，上面がゆるく凹む。口縁直下にはやや上向きの断面三角形の凸帯を

1条貼り巡らし，器壁は胴部上位で厚みを増す。胴部上位で最大径47.9cmを測りゆるやかに径を減じながら上げ底の底部へつながる。口縁部と凸帯部内外がヨコナデ，内面はナデで仕上げられ，外面は粗い刷毛調整が施こされている。胴部外面中位には風化による剝落が著しいが炭様の黒色顔料が観察され，恐らくは，上甕同様に全体に塗布されていたと考えられる。胎土は多くの石英粒と雲母を含み，焼成は固く，色調は明褐色を呈するが，内面はやや赤味をおびる。

121号甕棺墓〔№185〕（図版39・57—1・2，第36・54図）

墓域の南西部で135号甕棺を切っている。甕＋甕の接口式成人用甕棺墓で，上甕は口縁を打ち欠いている。墓壙は不整円形を呈し，径1.3m前後を測る。この上部に47×20×11cmの花崗岩角礫が存在する。墓壙は東側へ若干抉れて掘り込まれる。この抉れた方に下甕を置き，主軸はS—2°—Wに指す。墓壙の上部の石は墓標の可能性もある。また，丹塗り土器2個体分が出土し，P1とP4の広口壺が接合し，№175遺構内出土の壺形土器とも接合する。他の個体はK136と接合する。時期は中期中葉頃であろう。

上甕は，底径11.6cm，現存する器高59.2cmを測る胴部上半を打ち欠いた大型の甕形土器である。底部は上げ底で，膨らみをもって倒卵形の胴部へ移行し，「コ」字形に近い断面三角形の凸帯を2条巡らすところで最大径41.8cmを測る。調整は凸帯部上下がヨコナデの他はナデで仕上げ，胎土に砂粒を多く含む。焼成は良く，色調は明褐色を呈するが，内外面とも底部近くは淡褐色を呈する。

下甕は，口径40.7cm，底径12.0cm，器高74.3cmを測る甕形土器である。「T」字状の口縁部は平坦で，内唇を丸くおさめ端部は肥厚する。口縁直下に1条の断面「M」字形凸帯と最大径59.0cmを測る胴部中位に断面三角形の凸帯を2条貼りつけている。底部から徐々に膨みながら胴部凸帯にいたり，その上部は急激に内彎し，すぼまった口縁部に移行する器形である。調整は口縁部内外と凸帯部上下がヨコナデの他はナデで仕上げている。胴部外面上半に黒斑を有し，胎土に多くの石英砂と雲母を含む。焼成は良くやや赤味をおびた淡褐色を呈する。

122号甕棺墓〔№186〕（図版13—1・57—3・4，第37・55図）

墓域の南西部で136号甕棺墓の南側で検出された。壺＋甕の接口式小児用甕棺墓である。墓壙は台地の傾斜に直交して施設され，長径1.25m，短径0.83mの楕円形を呈す。西側で2段のテラス面を持ち，東側はほぼ直に75cmほど掘り込む。下甕を東側に置く主軸は，N—65°—Eにとる。棺は12度と緩く埋置する。人骨は遺存しなかった。墓壙内より丹塗り壺形土器の胴部片が出土した。

上甕は口径30.7cm，底径9.7cm，器高41.5cmを測る無頸壺形土器である。「T」字状を呈する口縁部は厚く，端部はナデのためわずかに凹む。胴部上半にはほぼ等間隔に断面三角形の凸帯を3条巡らし，器壁は厚く重量感のある土器である。胴部は大きく膨らみ，底部は平底であ

る。口縁部および胴部外面はヨコナデ，内面はナデ上げて仕上げられているが，胴部外面下半には細かい刷毛目がわずかに残る。胎土は石英砂・雲母を含み，焼成は堅固。内面は暗灰褐色，外面は，明赤褐色を呈す。

下甕は，口径36.1cm，底径9.1cm，器高39.0cmを測る甕形土器で，平坦な逆「L」字状を呈する口縁部は上面がわずかに凹む。ややあげ底気味の底部から反りぎみに倒卵形の胴部へ移行し，器壁は胴部下半で厚みを増す。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げられ，外面は下から上へ粗い刷毛調整が施こされている。底部に黒斑を有し，胎土は石英砂・雲母を含む。焼成は堅く，明赤褐色を呈するが，外面はやや淡い。

123号甕棺墓〔№183〕（第37図）

台地の南端斜面部に位置し，10号土壙墓の上部に検出された丹塗り壺形土器の単棺墓である。墓壙は隅丸長方形を呈し，南側は削平されて不明。ほぼ直に掘り下げた墓壙の中央部に口縁部を南方に向けて，40度の角度で埋置される。木蓋の痕跡は無く，確実に甕棺墓である証左はなく，祭祀遺構の可能性もある。

壺形土器は球形に近い胴部に2条の複合三角凸帯が巡り，頸部は大きく外反し，口縁部は内側に張り出る。

125号甕棺墓〔№184〕（図版40・58—1，第38・54図）

台地の南崖斜面に位置し，123号甕棺墓の東側に検出された鉢＋甕の接口式成人用甕棺墓である。台地の傾斜に沿って，ほぼ南北に隅丸方形の墓壙を施設する。そして，斜面に横穴を穿ち下甕の大部分を埋置する。主軸はS—14.5°—Wにとり，40度の急角度を有す。下甕内に頭骸骨が遺存した。時期は中期後葉であろう。

上甕は，口径52.8cm，底径12.4cm，器高32.0cmを測る大型の鉢形土器である。口縁部は平坦な逆「L」字状を呈するがやや丸味をおび，口縁直下に断面三角形の凸帯を1条巡らす。底部は平底で反りぎみに立ち上がり膨らみをもつ胴部へつながる。口縁部内外と凸帯部はヨコナデ，内面はナデで仕上げているが，凸帯部内側に横位の刷毛目を残す。外面は刷毛調整を施こし，胴部下半に黒斑を有する。胎土に多くの砂粒と雲母を含み，焼成は良く，淡褐色を呈するが胴部上半は明るい色調をおびる。

下甕は，口径63.0cm，底径12.0cm，器高102.9cmを測る口縁がすぼまり，胴部の張る大形の甕形土器であるが全体に歪みが著しい。口縁部は内唇の発達した「T」字状を呈し，上面と外唇端部はナデによりわずかに凹む。胴部凸帯からほぼ直に近く立ちあがり，口頸部凸帯付近で急に内彎する器形である。断面三角形の凸帯を口縁直下に1条と胴部中位に2条各々貼りつけているが，胴部の凸帯はややだれている。調整は口縁内外と凸帯部がヨコナデの他はナデで仕上げられ，淡褐色を呈する。胴部外面上半を底部近くに炭様の黒色顔料が観察されるが風化による剝落が著しい。胎土に石英砂・雲母を含み焼成は良好・堅緻。

126号甕棺墓〔№187〕（図版58—2，第57図）

墓域の南端部で，台地の崖面上部から横穴を掘り込んだ甕＋甕の挿入式小児用甕棺墓である。主軸方位はS—6°—Wを指す。墓壙内に甕形の壺形土器片（？）が出土した。

上甕は，口径29.3cm，底径8.2cm，器高33.4cmを測る小型の甕形土器である。「く」字状の肥厚した口縁部はゆるく内傾し，内側に丸味をもった弱い稜をもつ。底部は中央がわずかに凹む平底で，胴部は倒卵形を呈し，器壁は全体に薄い。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げ，外面は下から上へ刷毛調整を施こしている。胎土は多くの砂粒と雲母を含む，焼成は良好。内面は褐色，外面は淡黄褐色を呈する。

下甕は，口径35.1cm，底径10.2cm，器高37.6cmを測る小型の甕形土器である。口縁部は肥厚して内側に弱い稜をもつ「く」字状を呈する，底部は内面中央部が強い指頭押圧により凹み，反りぎみに胴部へ移行する。胴部は中央部で器壁が薄くなる。調整は，口縁部内外がヨコナデの他はナデで仕上げている。胎土には石英砂・雲母を含み，焼成は良好。色調は淡褐色。

127号甕棺墓〔№188〕（図版58—3，第39・59図）

126号甕棺墓の西に位置し，台地の崖面下部に横穴を掘り込んだ成人用単棺墓である。墓壙は7号土壙墓を切り，斜めに約1.25mと甕が丁度挿入出来る深さである。甕の口縁に沿って幅26cm，長さ1.4mの木蓋をあてる溝がある。主軸をS—22°—Wにとり，30度の傾斜で埋置している。墓壙内に丹塗りの壺形土器の頸部・胴部の破片が出土した。時期は中期後葉に属す。

口径78.7cm，底径14.6cm，器高117.6cmを測り，砲弾形を呈する大型の甕形土器である。平坦で内唇が発達した「T」字状の口縁部は端部がナデにより凹み口縁直下に1条の断面三角形の凸帯を貼りつけている。最大径82.8cmを測る。胴部中位に2条の断面「コ」字形凸帯を貼りつけ徐々に径を減じながら底部へつづく。器形的にはK 125号甕に類似する。調整は口縁部内外・凸帯部がヨコナデの他はナデで仕上げ，凸帯下は刷毛が残る。胎土に石英砂・雲母を含み，焼成は堅固で，色調は明褐色。

128号甕棺墓〔№150〕（図版41・58—4，第40・59図）

墓域の中央部西側に位置し，53号甕棺墓の南側に検出された成人用単棺墓で，主軸をS—32°—Eにとる。長径2m，短径1.66mの楕円形の墓壙は北側に横穴を，南は斜めに掘り込む。棺は口縁部を南東に開口させ，木蓋で密封する溝が走る。棺内には人骨が残存し，頭部を北へ，つまり底部の方へ向けて安置した仰臥屈葬である。なお，墓壙内には筒形器台・広口壺の口縁部が供献されていた。

口径76.6cm，底径15.1cm，器高119cmを測る大型の甕形土器である。ゆるやかに内傾した「T」字状の口縁部は内唇が厚く発達している。口縁直下に1条の断面「コ」字形凸帯と砲弾形の胴部中位に長めの断面三角形凸帯を二条貼りつけている。口縁直下ですぼまらないのが特長である。また胴部外面下半と三角形凸帯上部には丹塗り土器製作のときに飛び散ったと思わ

れる赤色顔料が付着している。調整は口縁部内外と凸帯部はヨコナデの他は内外ともナデで仕上げられ，底部内面に黒斑を有する。胎土は石英砂・雲母を含み，焼成は堅固で，色調は明褐色。

130号甕棺墓〔No.94〕（図版42・43—1・59—1，第41・59図）

墓壙の中央部西端に位置し120号甕棺墓，4号祭祀遺構に切られた成人用単棺墓である。甕形土器は南に開口し，主軸方位はS—2.5°—Eとほぼ南北を指す。墓壙は不整円形を呈し，東西に1.7mと細長い。南側は3段掘り，北側は横穴状に穿つ。棺は23.5度の角度で埋置されている。木蓋をして密封したのであろう。時期は中期中葉であろう。

口径77.4cm，器高106.4cmを測り，底部を欠損する大型の甕形土器である。ほぼ水平に外反する「T」字状の口縁下に，一条の断面三角凸帯を貼りつけその口縁下から胴中位への膨らみはゆるやかでほぼ直線的につながる。胴部は砲弾状を呈し，中位にシャープな2条の断面三角形の凸帯を巡らす。調整は，口縁部内外と凸帯上下がヨコナデの他はナデで仕上げ，口縁下には，炭様の黒色顔料の付着が観察される。胎土には石英・長石・雲母を含み，焼成は良好で，色調は暗赤褐色を呈する。

131号甕棺墓〔No.154〕（図版13—2，第42・58図）

122号と134号甕棺墓の間に位置する甕＋甕の接口式小児用甕棺墓で，上部は削平されて保存状態不良である。楕円形の墓壙は長径93cm，短径59cmで，底面はほぼ水平になり若干東側を掘り込んでいる。棺は西を上甕とし，主軸をS—50°—Wにとる。遺骸は残存しなかった。

下甕は，口径33.4cm，底径9.2cm，器高34.1cmを測る小型の甕形土器である。口縁部は口唇が肥厚して弱い稜をもつ「く」字状を呈し，反りぎみに外反し，外唇部近くは平坦になる。底部は中央がわずかに凹む平底で，反りぎみに倒卵形の胴部へ移行する。口縁部内外はヨコナデ仕上げ，内面は上から下へ，，外面は下から上へ刷毛調整を施こしているが，内面と外面の刷毛目は異なる。更に外面は上半が粗く下半は細かい。口縁下と底胴部下半には剥落が著しいが炭様の黒色顔料が観察され，恐らくは全体に塗布されていたと考えられる。胎土は砂粒・雲母を含み焼成は良好。色調は外面が淡褐色，内面は淡暗褐色。

132号甕棺墓〔No.155〕（図版13—2・59—2，第42・58図）

墓域の中央部西側に位置し，134号甕棺墓の墓壙の東端を切って施設された鉢＋甕の接口式小児用甕棺墓である。隅丸長方形を呈す墓壙の北側寄りに棺を埋置したもので，主軸はS—7.5°—Eにとり，22度の傾斜を有す。

上甕は，口径36.0cm，底径11.8cm，器高25.2cmを測る小型の鉢形土器である。口縁部は上面がやや凹んだ「く」字状を呈し，内側に稜をつくる。底部は平底で，胴部はゆるやかに膨らみ，口縁直下に断面「コ」字形の凸帯1条を貼りつけている。口縁部内外と凸帯部はヨコナデ，内面は丁寧にナデで仕上げられ，胴部外面は刷毛調整を施こす。胎土に石英砂・雲母を含

み，焼成は良好。色調は内面が淡灰褐色，外面は淡褐色。

下甕は，口径34.8cm，底径7.9cm，器高38.6cmを測る小型の甕形土器で，平坦な逆「L」字状の口縁は内側に鋭い稜をもち，丸くおさめた端部はわずかに垂れる。上げ底気味の底部から反りぎみに倒卵形の胴部へ移行する。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げ，外面は下から上への刷毛調整を施こす。胎土の砂粒・雲母を含み，焼成は良好。色調は明褐色を呈するが内面はやや淡い。

133号甕棺墓〔No.152〕（図版43—2・59—3・4，第42・58図）

132号甕棺墓と同様に134号甕棺墓の南東端を切り7号周溝墓の主体部に切られた丹塗り甕＋甕の接口式小児用甕棺墓である。径75cmの不整円形を呈す墓壙の東側に横穴を掘り下甕を挿入する。主軸はS—64°—Wにとり，棺は－2度と下甕の方に若干高い例である。

上甕は，口径31.2cm，底径6.7cm，器高32.3cmを測り，2号祭祀遺構出土の甕（第70図2）と同形の小型の丹塗り甕形土器である。逆「L」字状の口縁部はゆるく内傾して内側に弱い稜をもち，端部には刻み目を施こす。上げ底の底部から反りぎみに倒卵形の胴部へ移行し，口縁直下と胴部中位に各々1条の断面「M」字状の凸帯を巡らす。外面と内唇直下に赤色顔料が塗布され，胴部下位は縦，それより上は横方向に丁寧に研磨されている。内面もまた丁寧にナデで仕上げられ明褐色を呈する。胎土は精選され石英砂を含み，焼成は良好。

下甕は，口径30.2cm，底径14.2cm，器高33.5cmを測る底部の大きい小型の甕形土器である。「く」字状の口縁はわずかに肥厚して内面に弱い稜をもち，口縁直下に断面三角形の凸帯を1条貼りつけている。上げ底の底部は大きく，胴部はゆるやかに内湾する。全体にその形状は109号上甕にきわめて類似し，樽形に近い要素を有している。口縁部内外と凸帯部はヨコナデ，内面はナデで仕上げ，外面は粗めの刷毛調整を施こし，明褐色を呈する。胎土は砂粒・雲母を含み焼成は良好。

134号甕棺墓〔No.151〕（図版44・45—1・60—1・2，第43・60図）

墓域の中央部西側に位置し，132・133号甕棺墓に切られている。長辺1.75m，短辺1mの長方形の墓壙内に埋置された鉢＋甕の覆口式成人用甕棺墓である。墓壙は西から東側へ傾斜させて掘り込んでいる。上甕の鉢形土器は土圧でかなり歪んでいる。主軸方位はS—65°—Wにとり約12度の傾きである。棺内の人骨遺存状態は当遺跡で最も良好で，被葬者は頭部を上甕に，つまり西側にした熟年の女性で，埋葬方法は仰臥屈葬である。なお，右脛骨及び腸骨に布状の繊維が付着して残存した（図版45—2）。この繊維について京都繊維工芸大学教授布目順朗氏に同定していただいたところ苧麻とのことである。その他に遺骸を素巻きにしたと考えられる席片も小量残存した。

上甕は，口径75.4cm，底径12.8cm，器高51.7cmを測る大型の鉢形土器である。ゆるく外傾する「T」字状の口縁は，内唇の発達が弱く，ナデて平坦に仕上げた口縁端部はわずかに凹む。

胴部の張りに対して，器高が高く，細身の器形で，断面三角形の凸帯を１条巡らす口縁直下は厚みを増す。調整は口縁部と凸帯部の内外面がヨコナデの他はナデで仕上げているが，底部近くは刷毛目を残す。胎土は多くの石英砂と雲母を含み，焼成は良好。凸帯下と底部に黒斑を有し，内面は明赤褐色，外面は淡褐色を呈する。中期中葉頃であろう。

下甕は，口径48.8㎝，底径12.6㎝，器高90.2㎝を測る大型の甕形土器であるが，全体に土圧による歪みが著しい。肥厚した「T」字状の口縁部は急激にすぼまり，胴上半部は大きく膨らんで胴中位の凸帯部へつながる。口縁直下に断面三角形の凸帯を１条と最大径65.2㎝を測る胴部中位に断面「コ」字形凸帯を２条各々貼りつけている。全体に器壁は薄手である。調整は口縁部内外はヨコナデの他は丁寧にナデで仕上げ胴部外面上半には炭様の黒色顔料を塗布しているが，下半は風化による剝落が顕著である。胎土に砂粒・雲母を含み，焼成は良く，暗明褐色を呈する。この下甕は121号下甕に類似している。

135号甕棺墓〔№157〕（図版13—１・60—３，第44・60図）

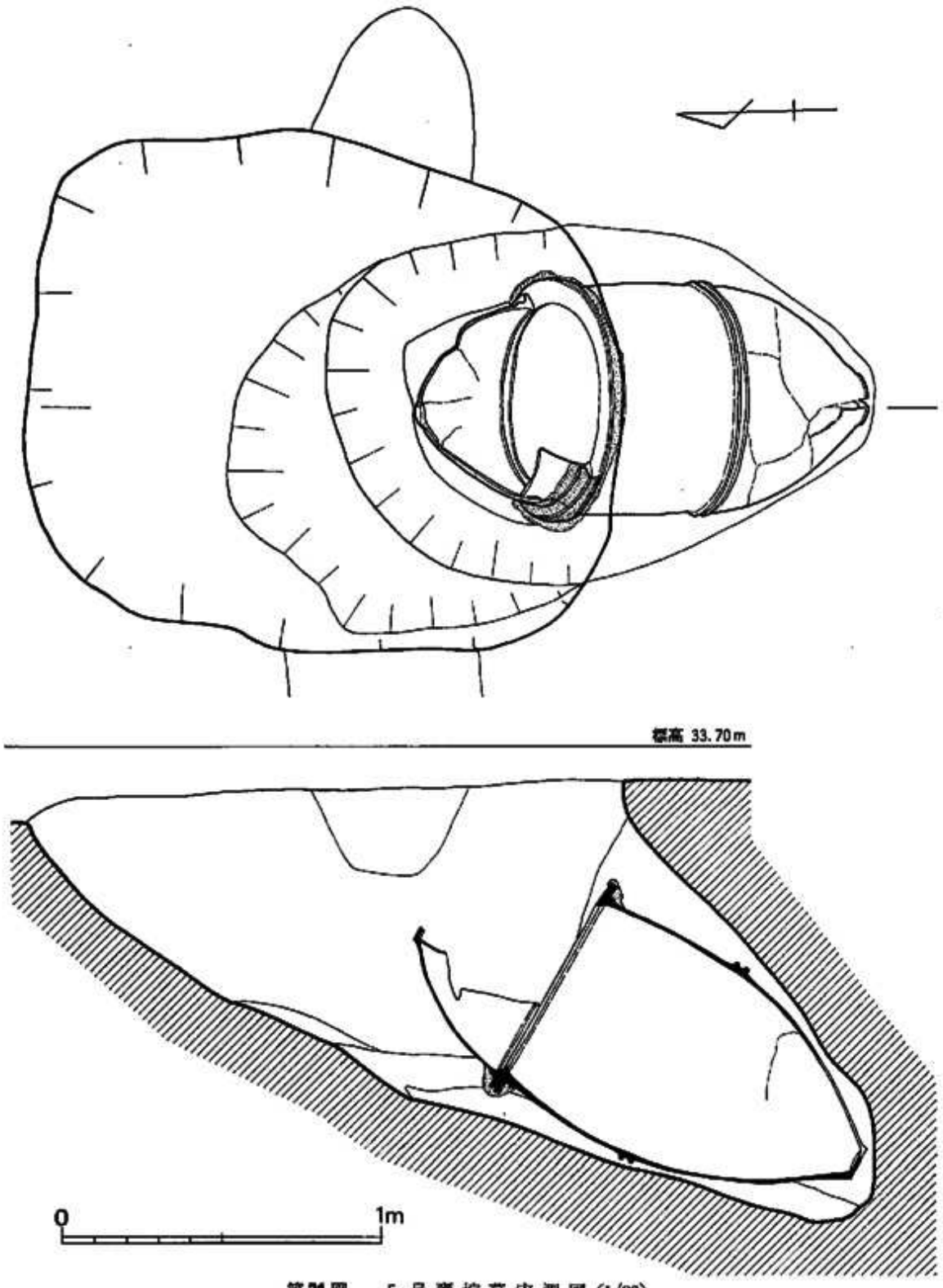
墓域の南部西側に位置し，109・121号甕棺墓に切られ，甕形土器を用いた成人用単棺墓である。不整楕円形を呈す墓壙に口縁部を南側に，ほぼ水平に埋置する。口縁部に沿って幅20㎝程の溝状の掘り込みがあるのは木蓋をした痕跡である。主軸方位はS—11°—Wを指す。

口径67.4㎝，底径12.0㎝，器高105.6㎝を測る大型の甕形土器で，砲弾形を呈す。口唇が肥厚する「T」字状の口縁から胴部下位に巡らされた２条の断面「コ」字形凸帯へほぼ直線的に移行する。口縁部内外と凸帯部がヨコナデの他はナデ仕上げされている。胎土に砂粒・雲母を含み，焼成は堅固で，明淡褐色を呈す。

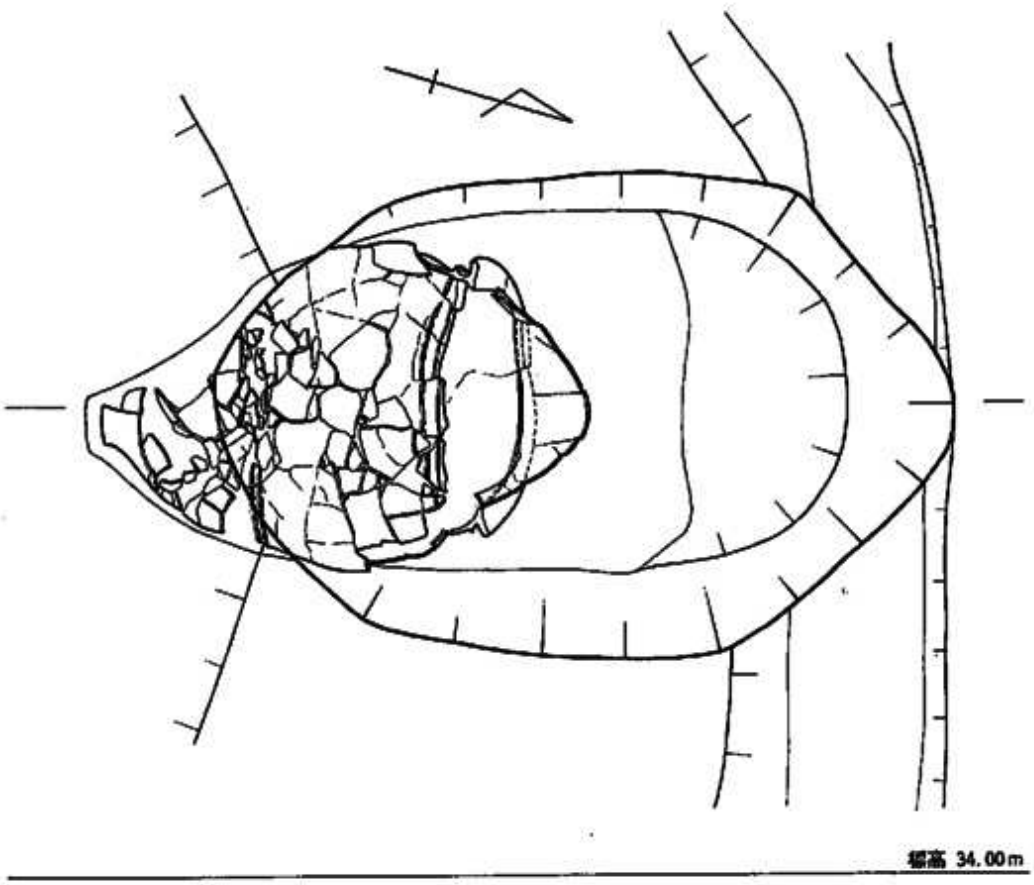
136号甕棺墓〔№190〕（図版46—２・60—４，第45・60図）

墓域の南部西側に位置し，121号甕棺墓の南側に検出された。台地の傾斜と直交した墓壙内に埋設された成人用単棺墓である。墓壙はほぼ東西方向の不整楕円形を呈し，東側に横穴を穿ち，甕を挿入している。主軸はS—79°—Wにとり，7.5度と緩い傾きを有す。頭骨が底部近くに残存し頭部から納めた事が判る。墓壙内には丹塗り壺形土器の破片が検出され，K121内出土の破片と接合した。

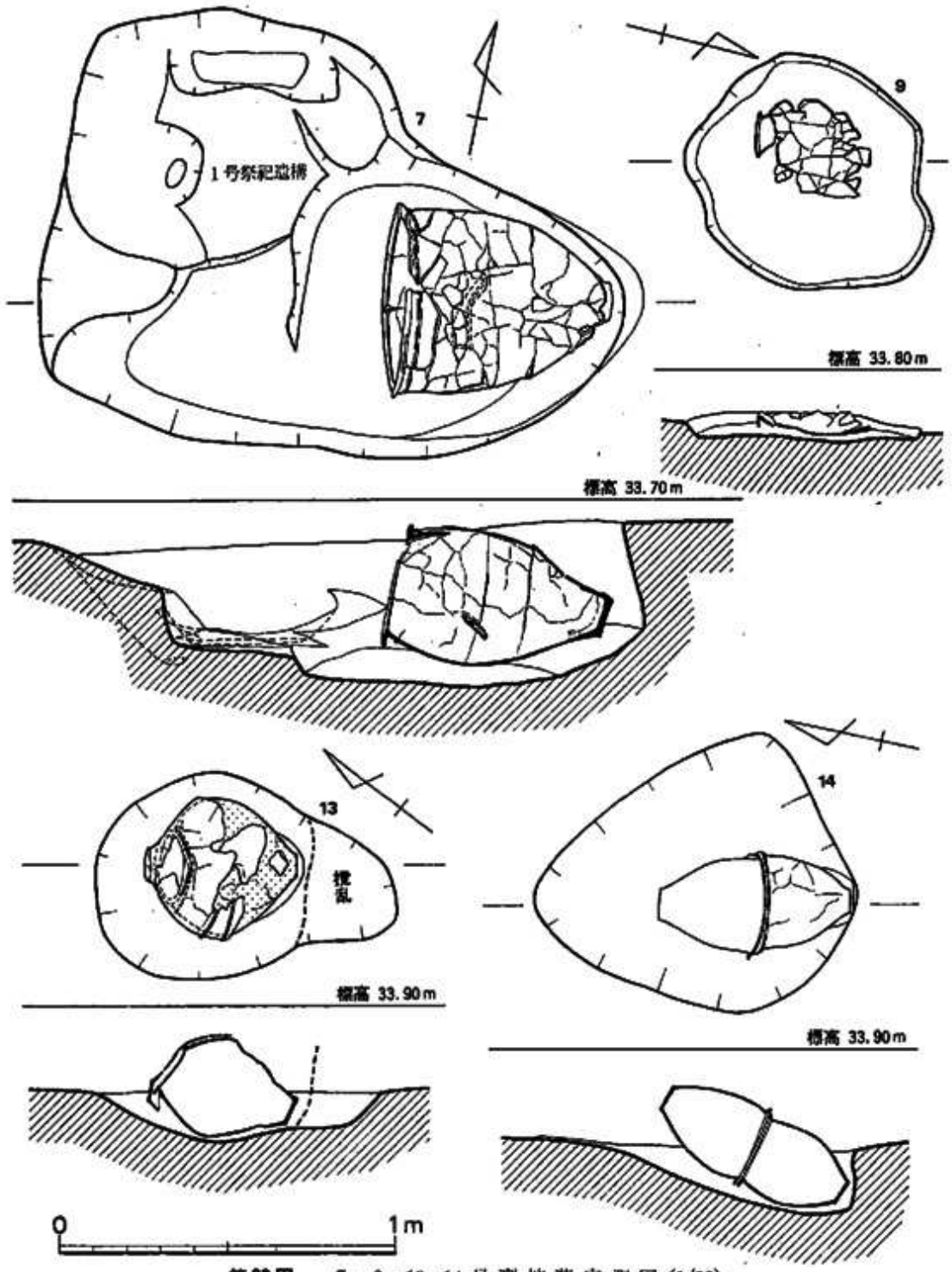
口径79.4㎝，底径13.4㎝，器高119.6㎝を測る大型の甕形土器で砲弾状を呈する。比較的薄手の「T」字状口縁の直下に１条の断面「コ」字形凸帯を貼りつけ，胴部下位に巡らす上向き加減の２条の断面三角形凸帯へわずかに膨らみをもって直線的につながる。口縁部内外と凸帯部がヨコナデの他はナデで仕上げている。胎土には砂粒・雲母を含み，焼成は堅固で，色調は明褐色を呈する。



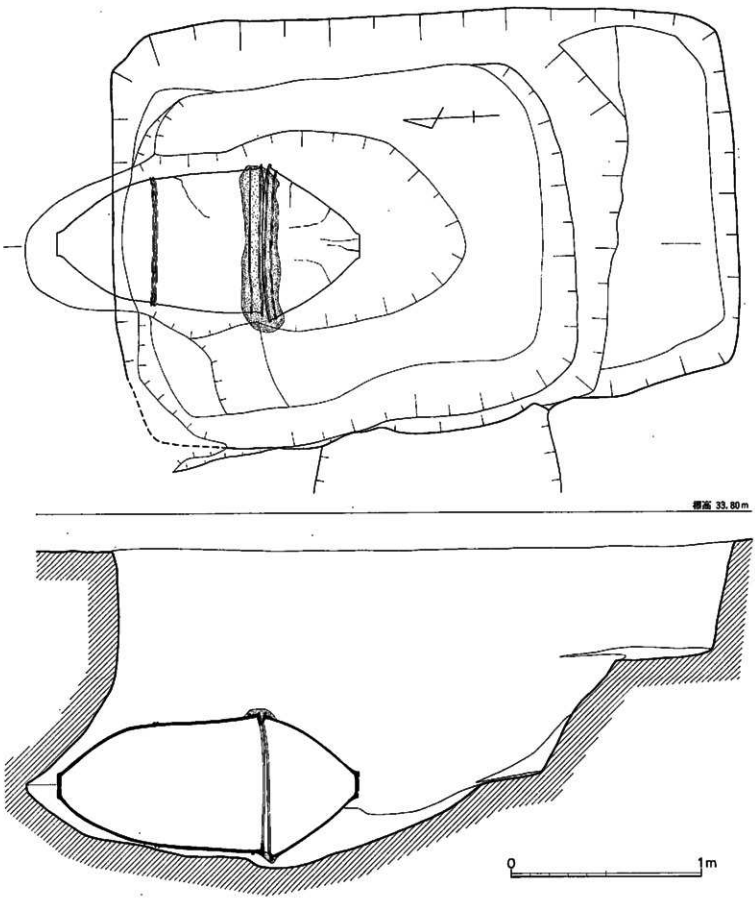
第21図　5号墓棺墓実測図(1/20)



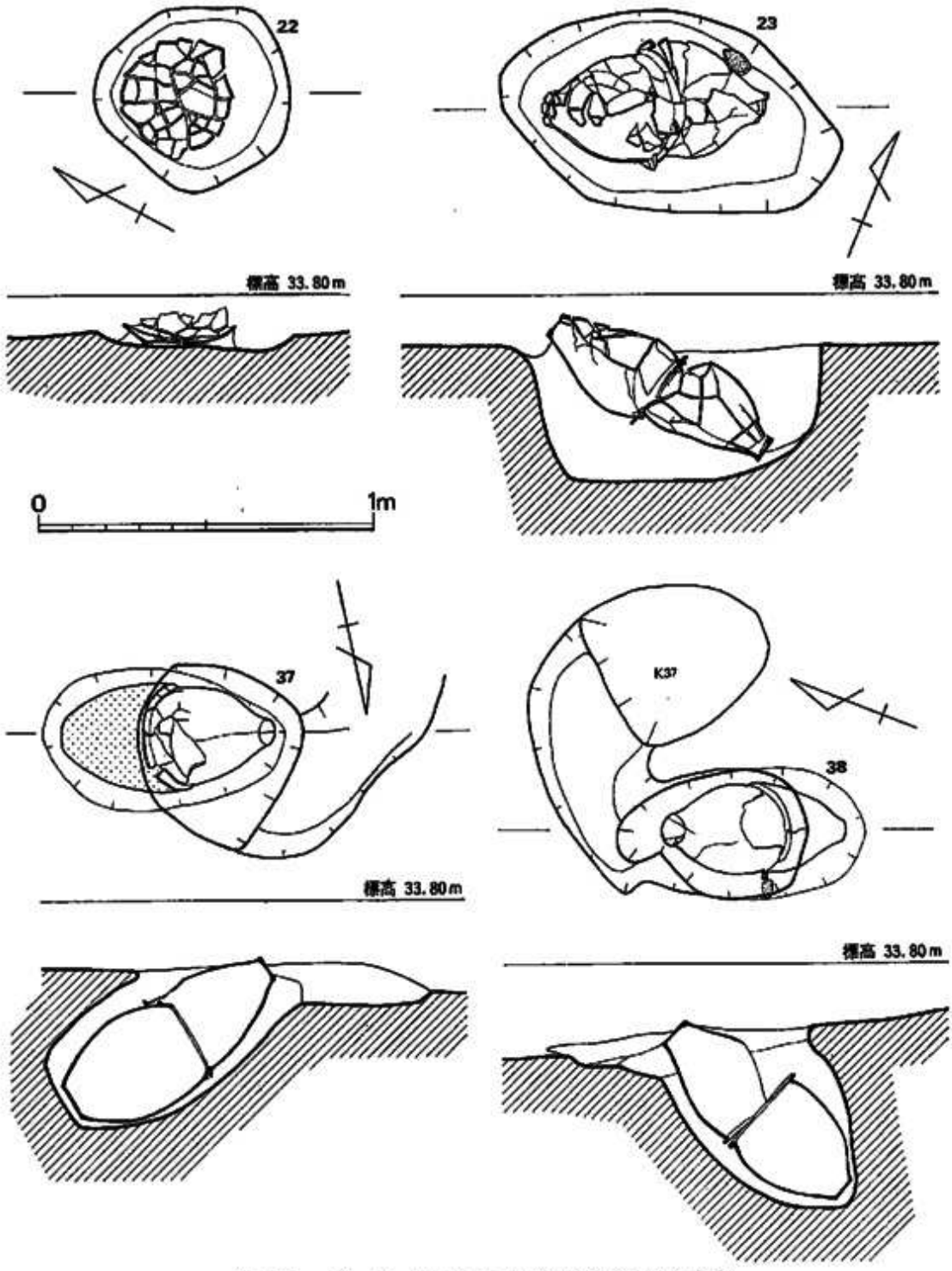
第22図　6号甕棺墓実測図(1/20)



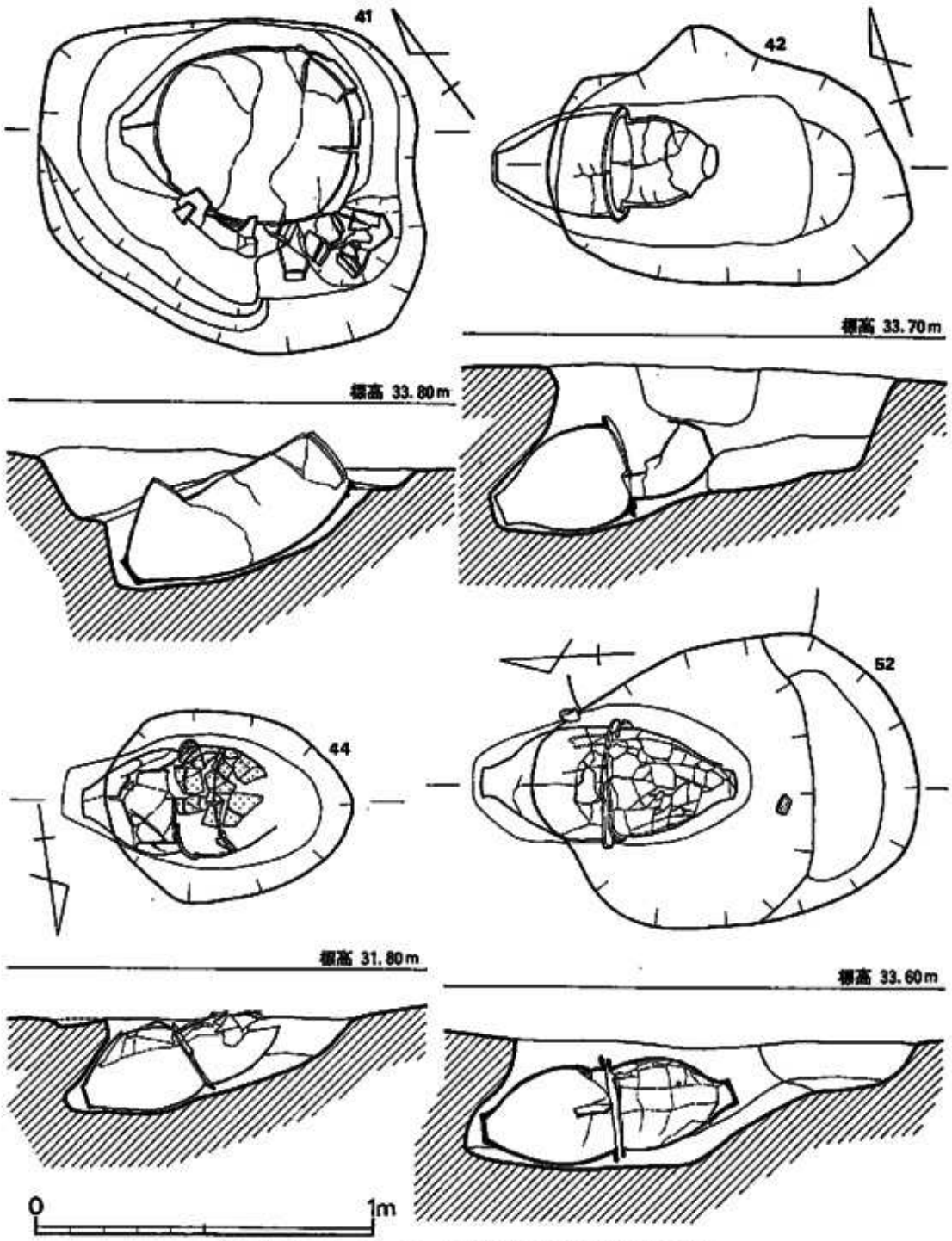
第23図　7・9・13・14号甕棺墓実測図(1/20)



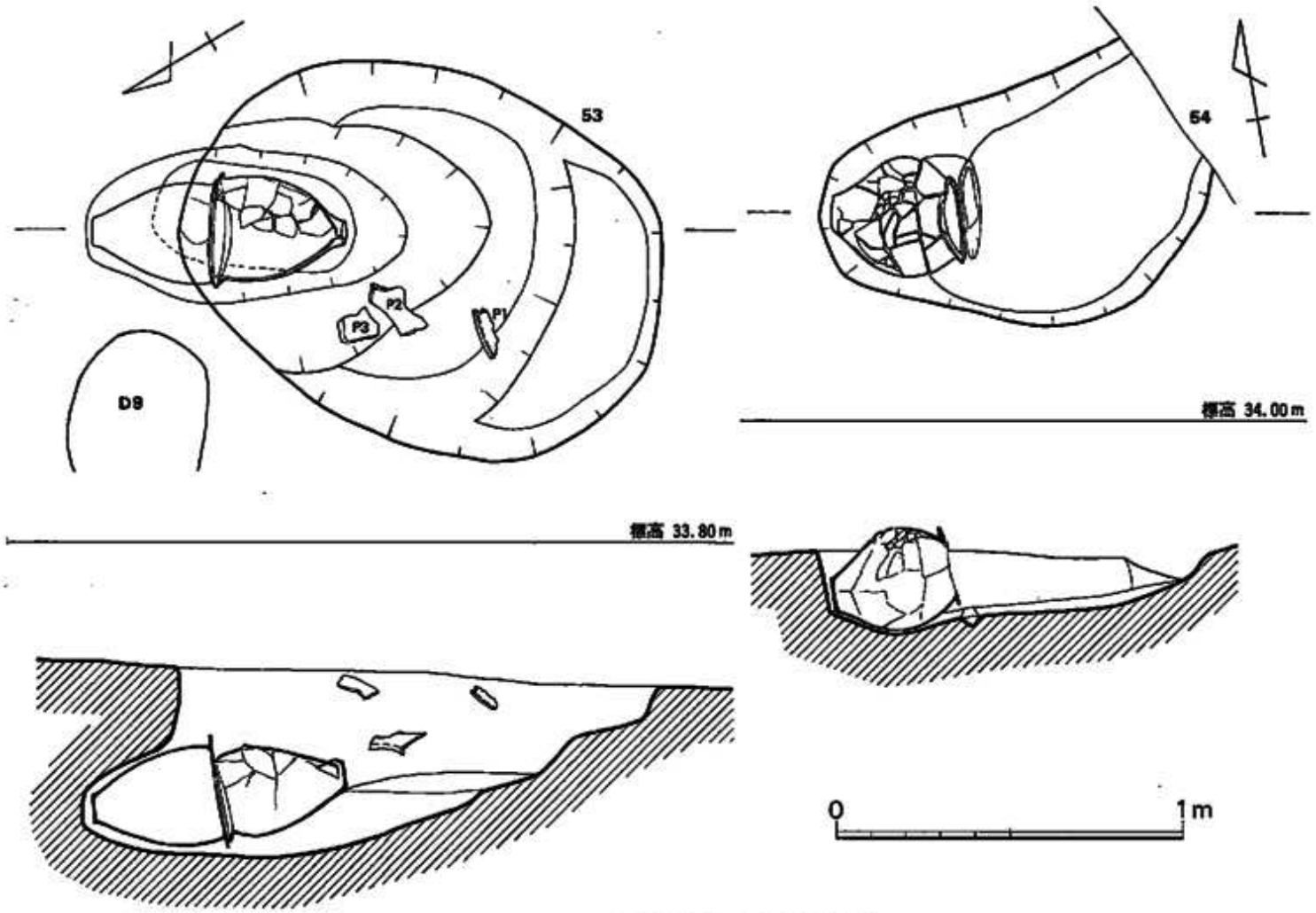
第24図　10号甕棺墓実測図(1/20)



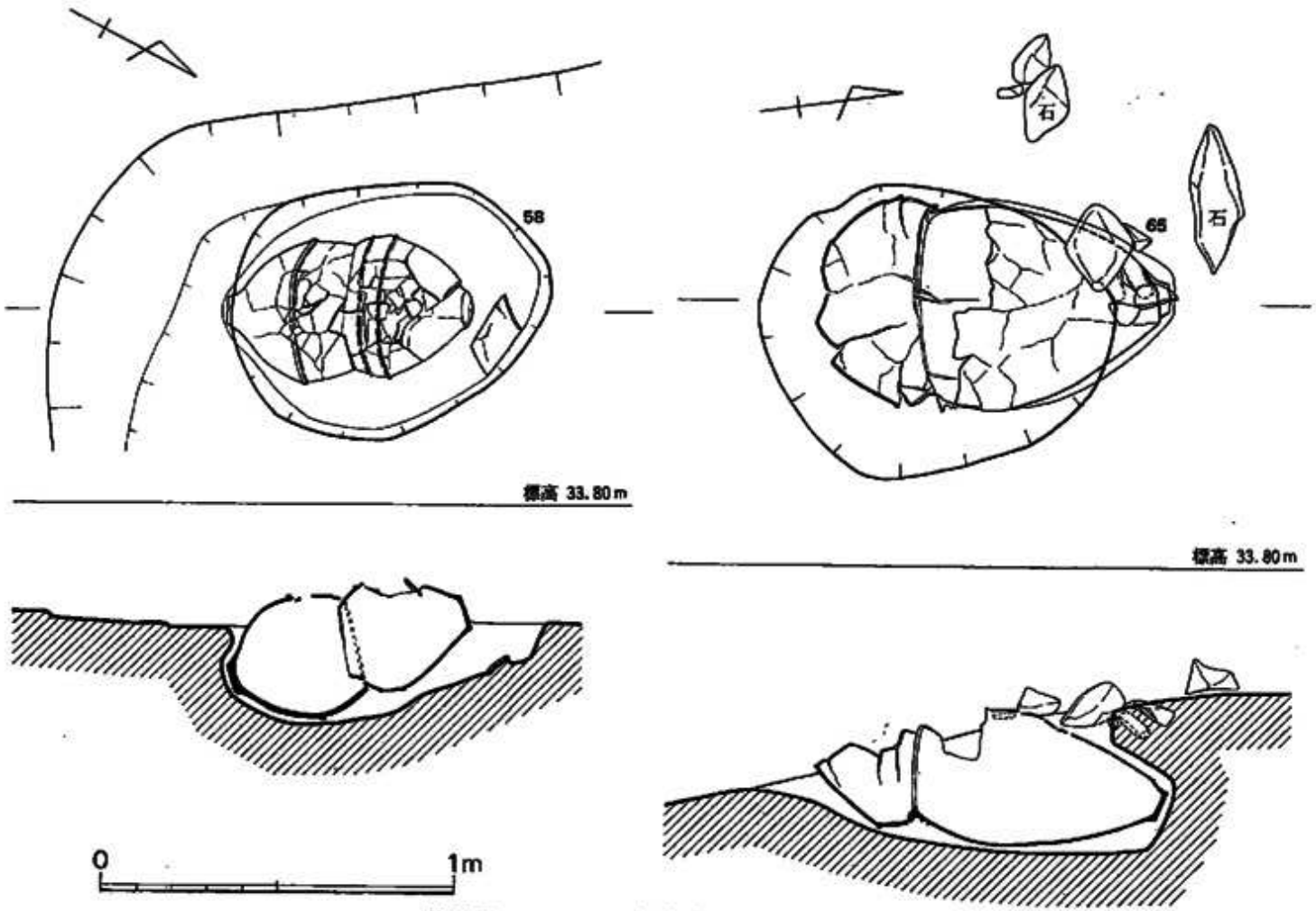
第25図　22・23・37・38号甕棺墓実測図 (1/20)



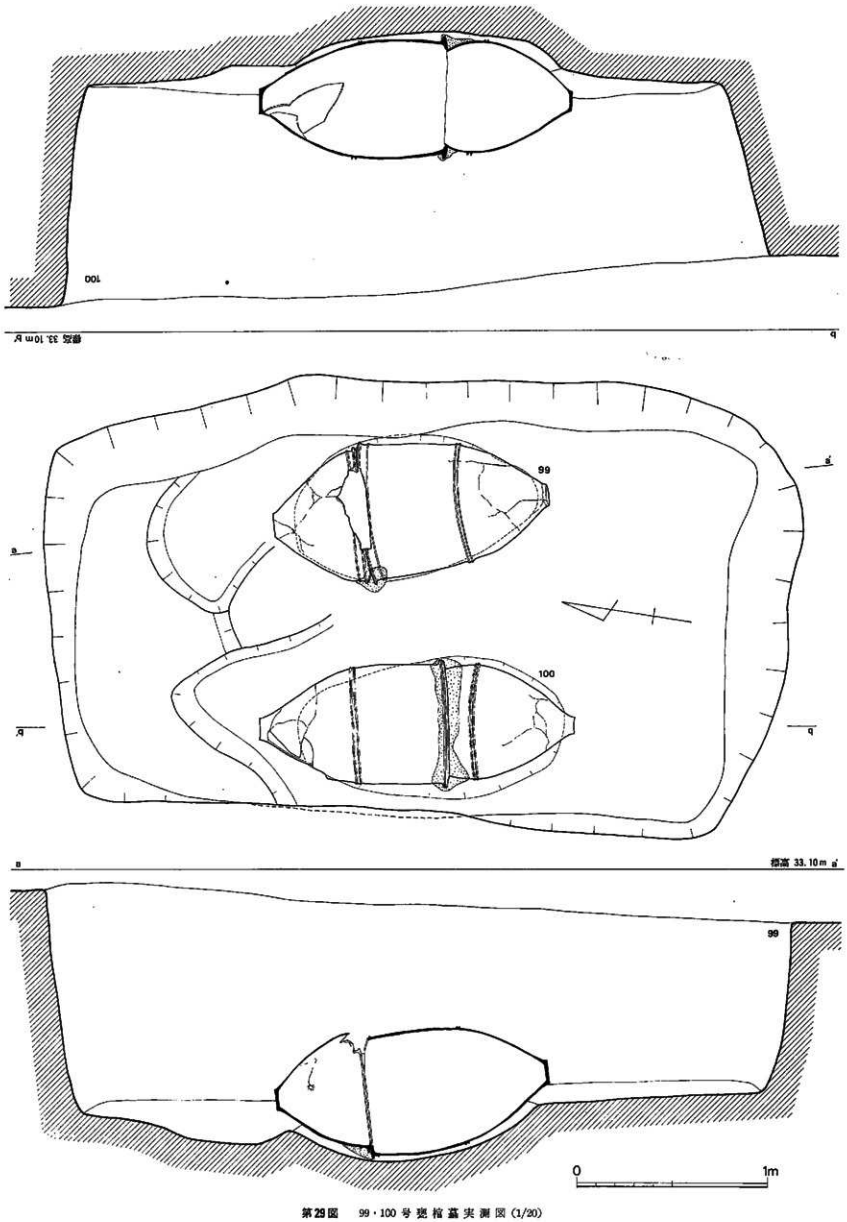
第26図　41・42・44・52号甕棺墓実測図 (1/20)



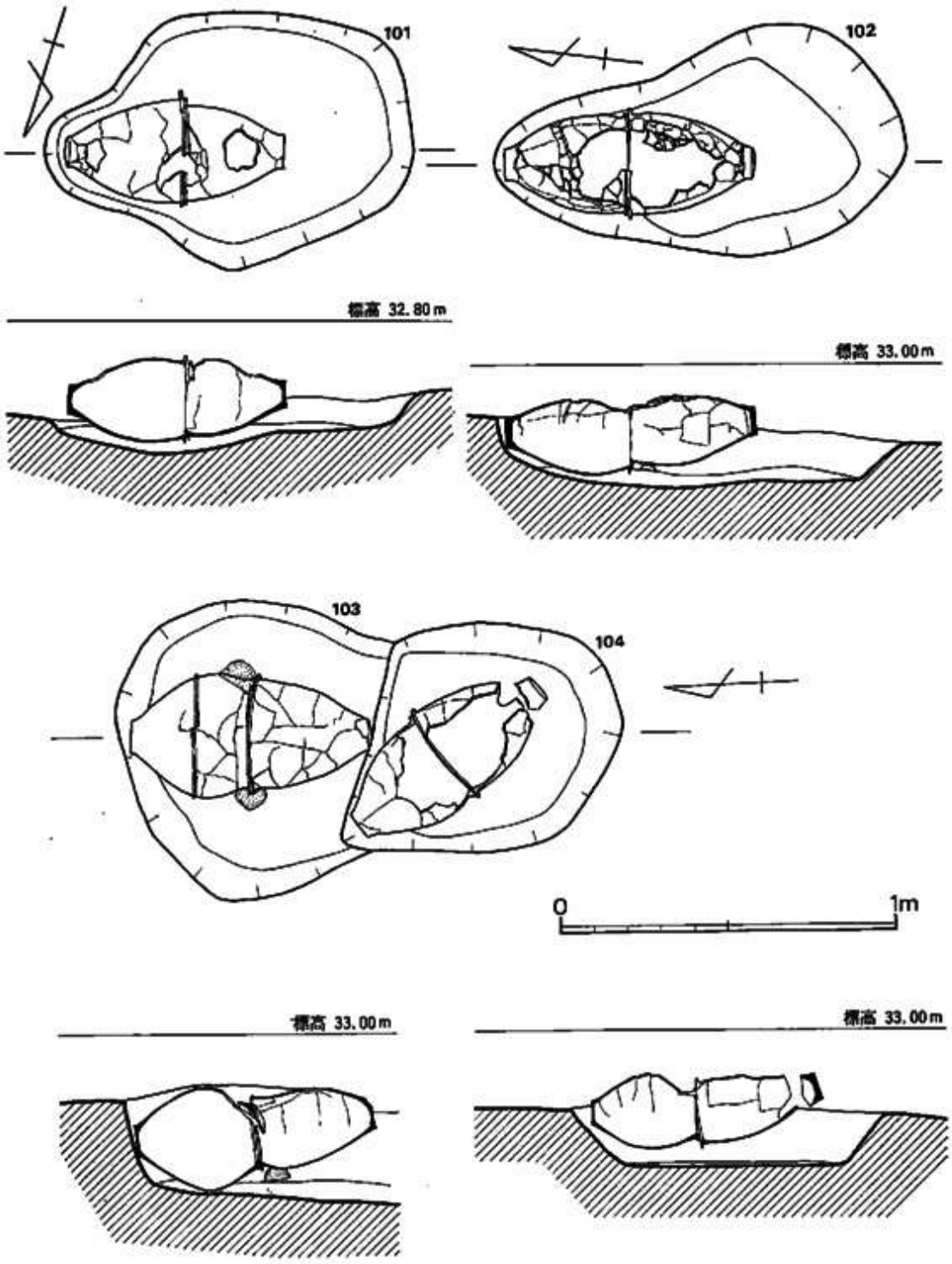
第27図　53・54号甕棺墓実測図(1/20)



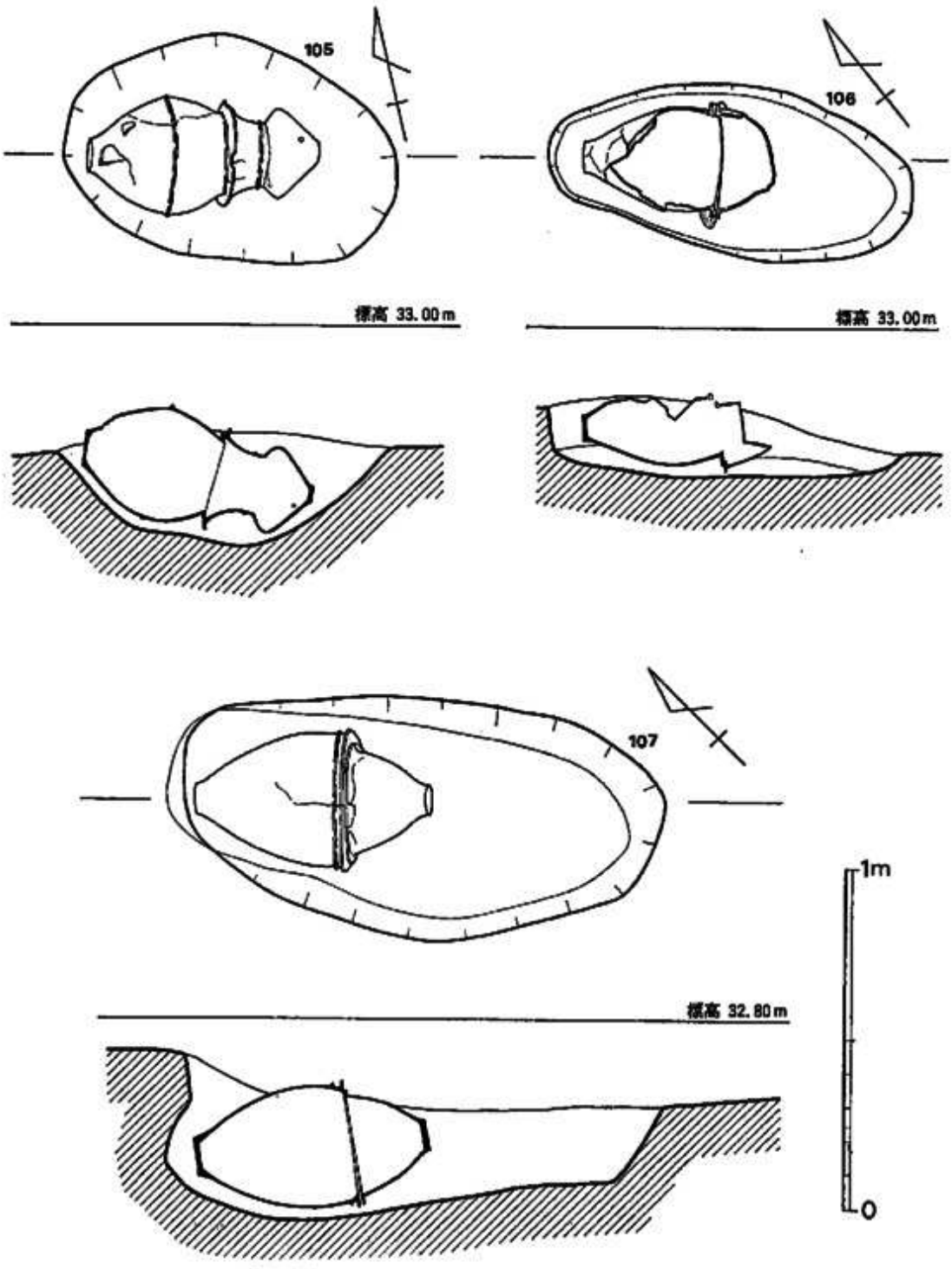
第28図　58・65号甕棺墓実測図(1/20)



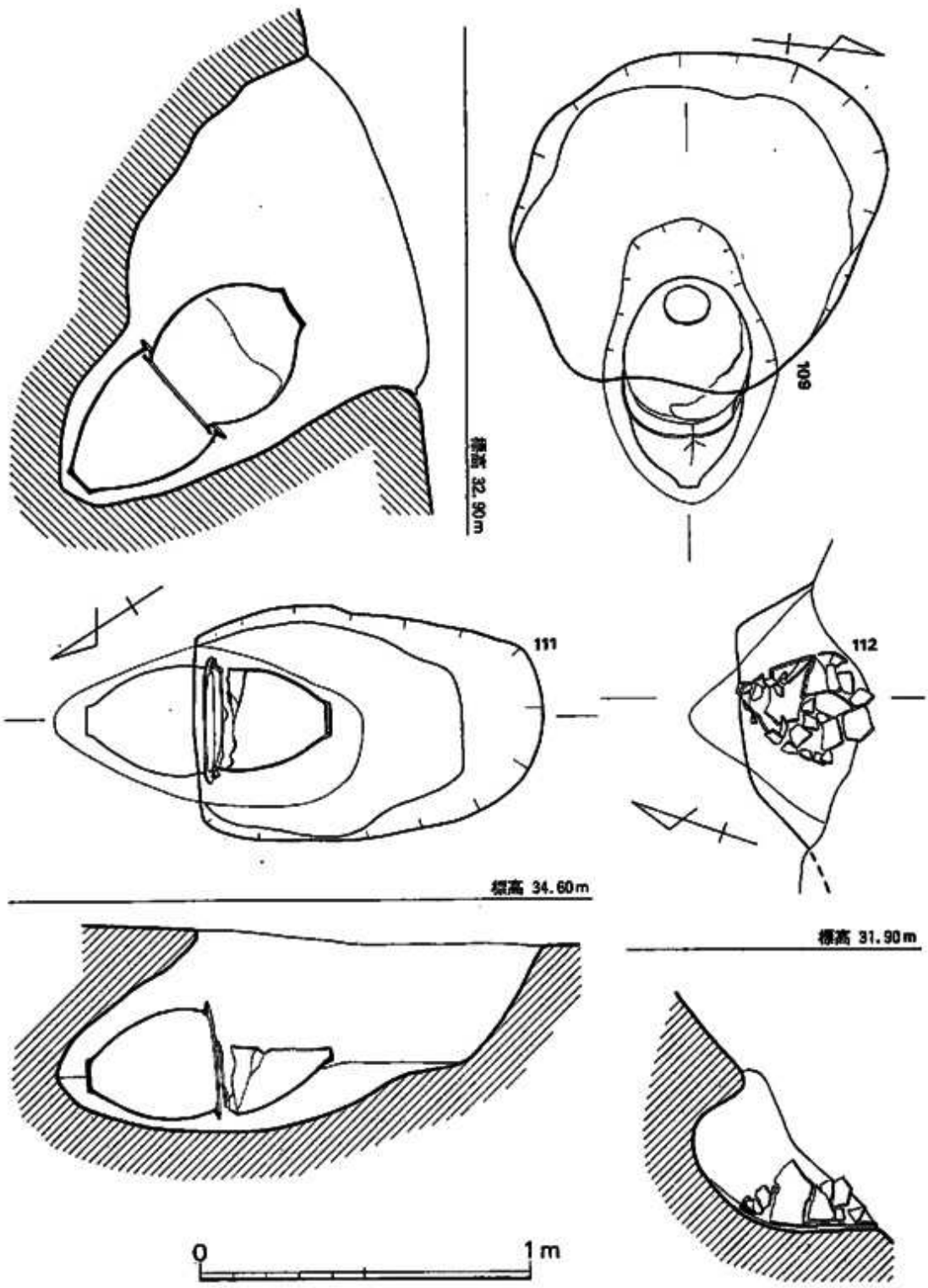
第29図　99・100号甕棺墓実測図(1/20)



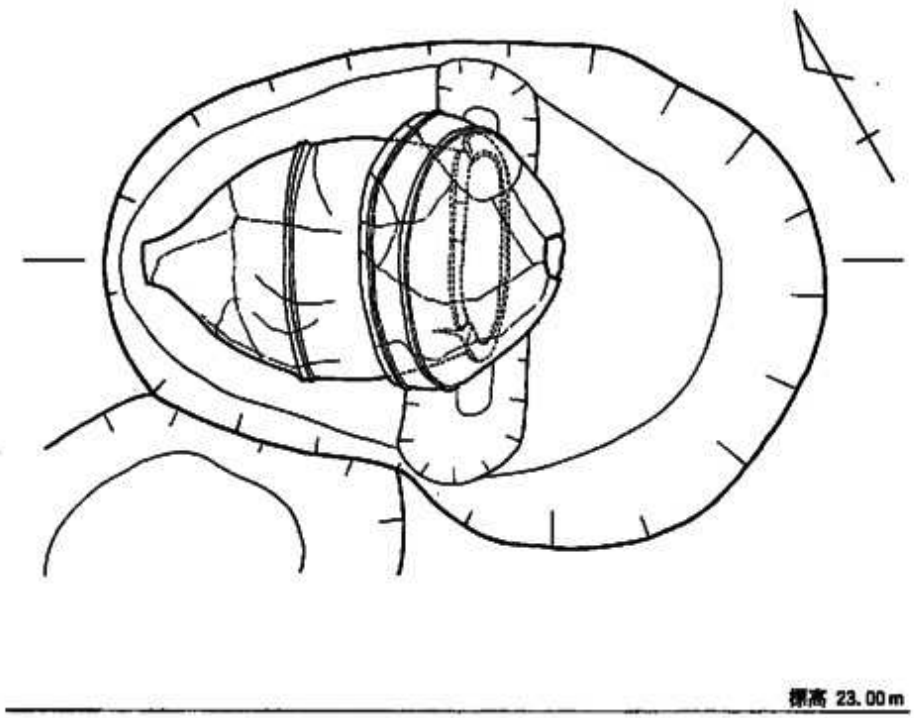
第30図　101～104号甕棺墓実測図(1/20)



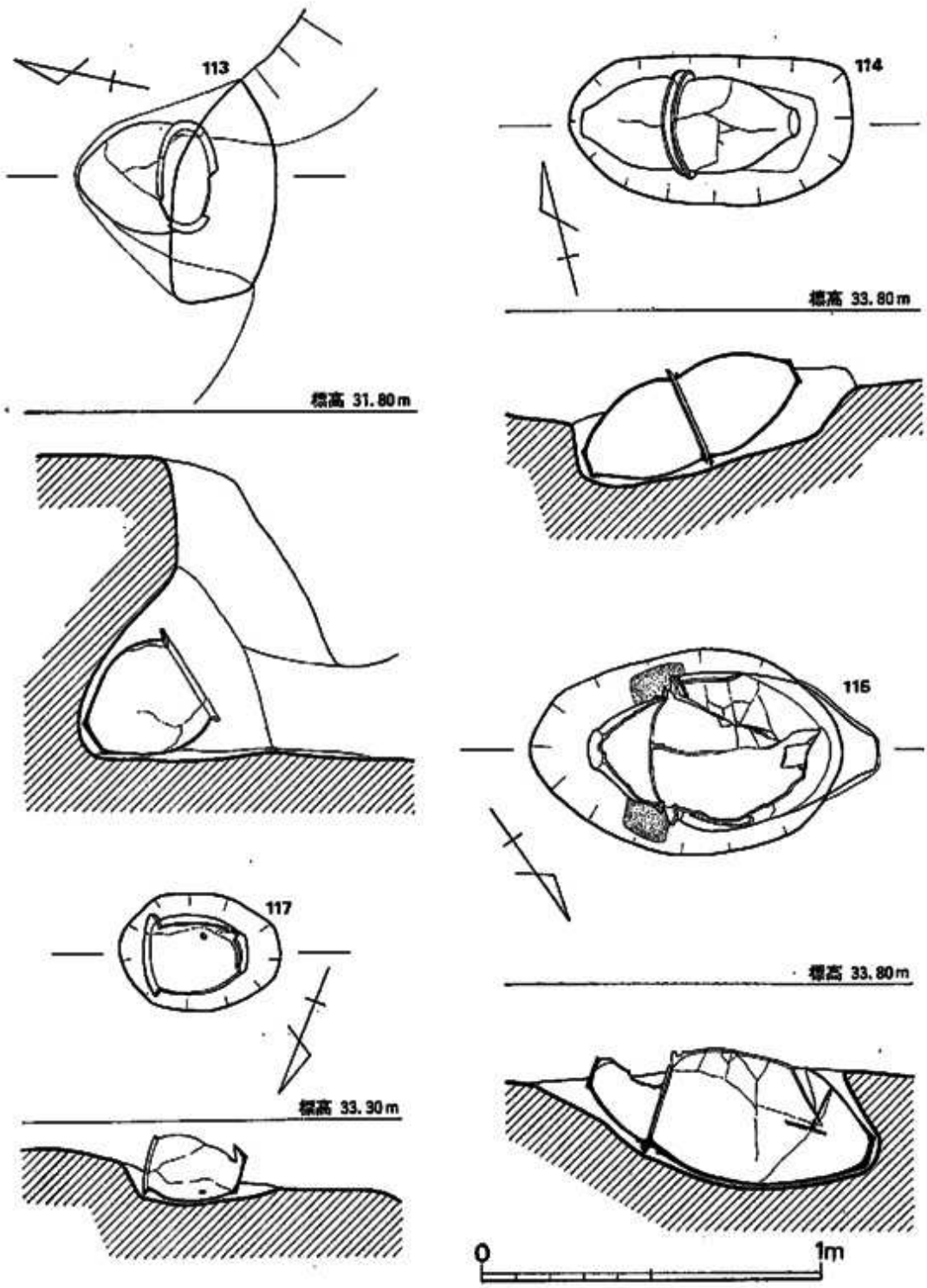
第31図　105~107号甕棺墓実測図 (1/20)



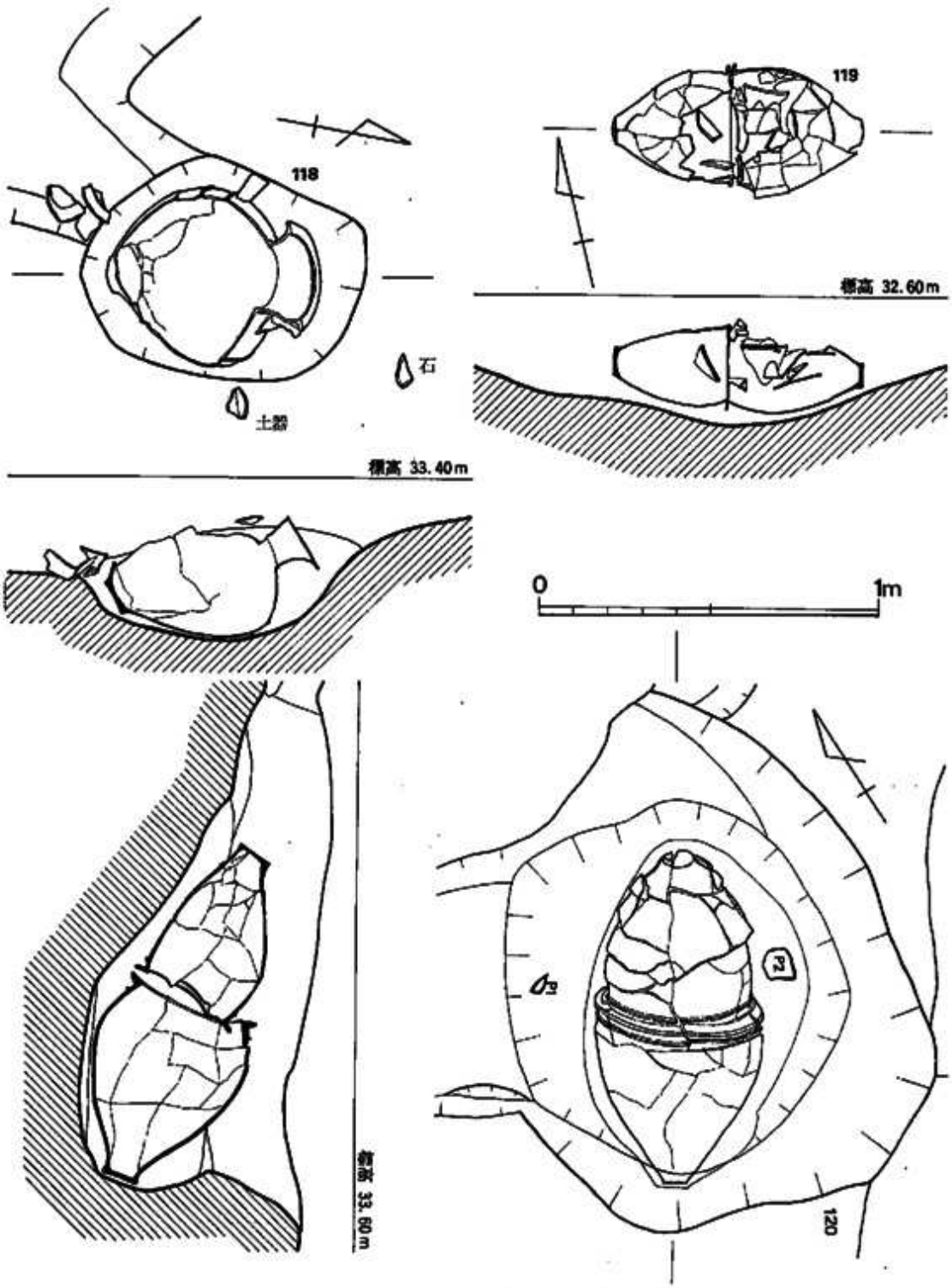
第32図　109・111・112号甕棺墓実測図 (1/20)



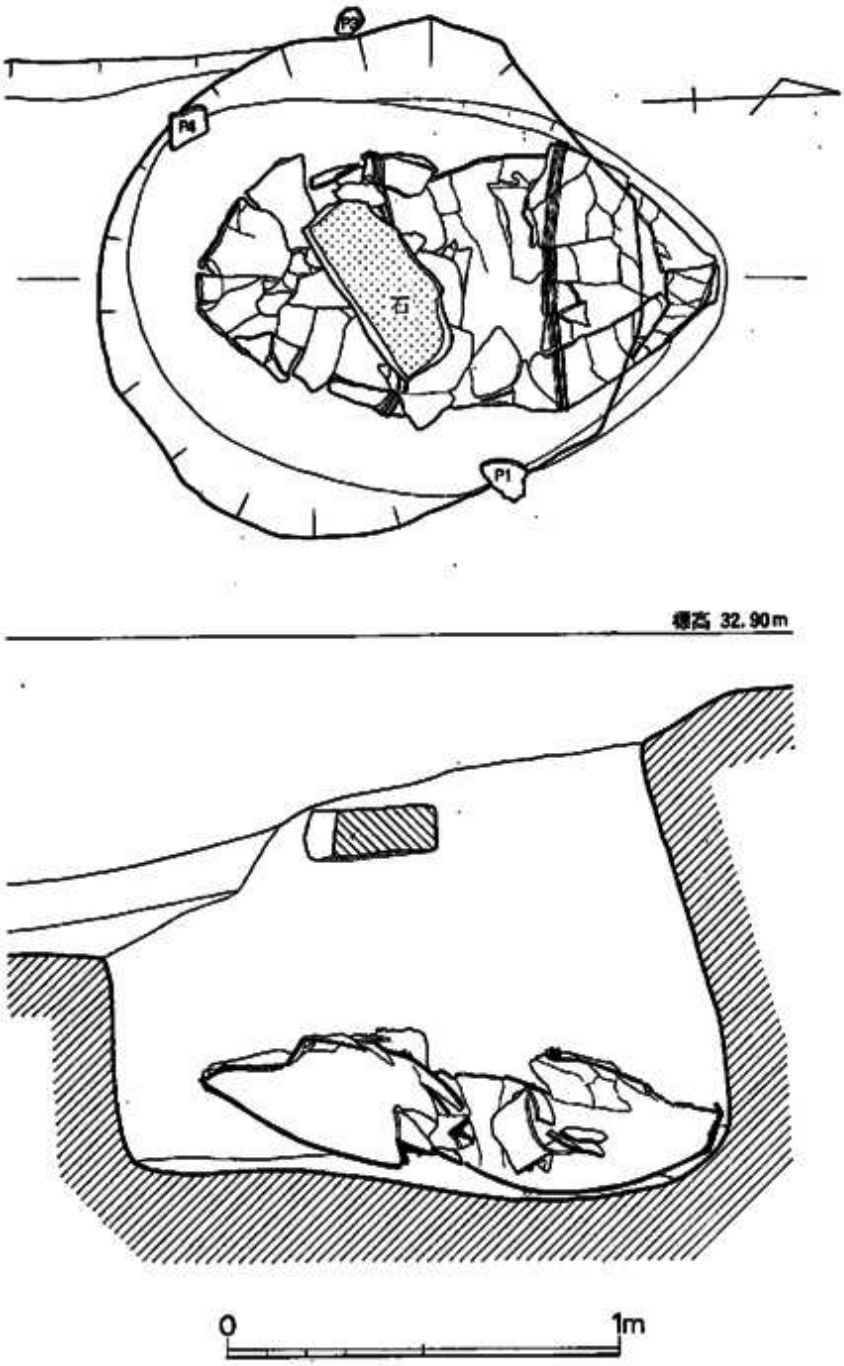
第33図　110号甕棺墓実測図(1/20)



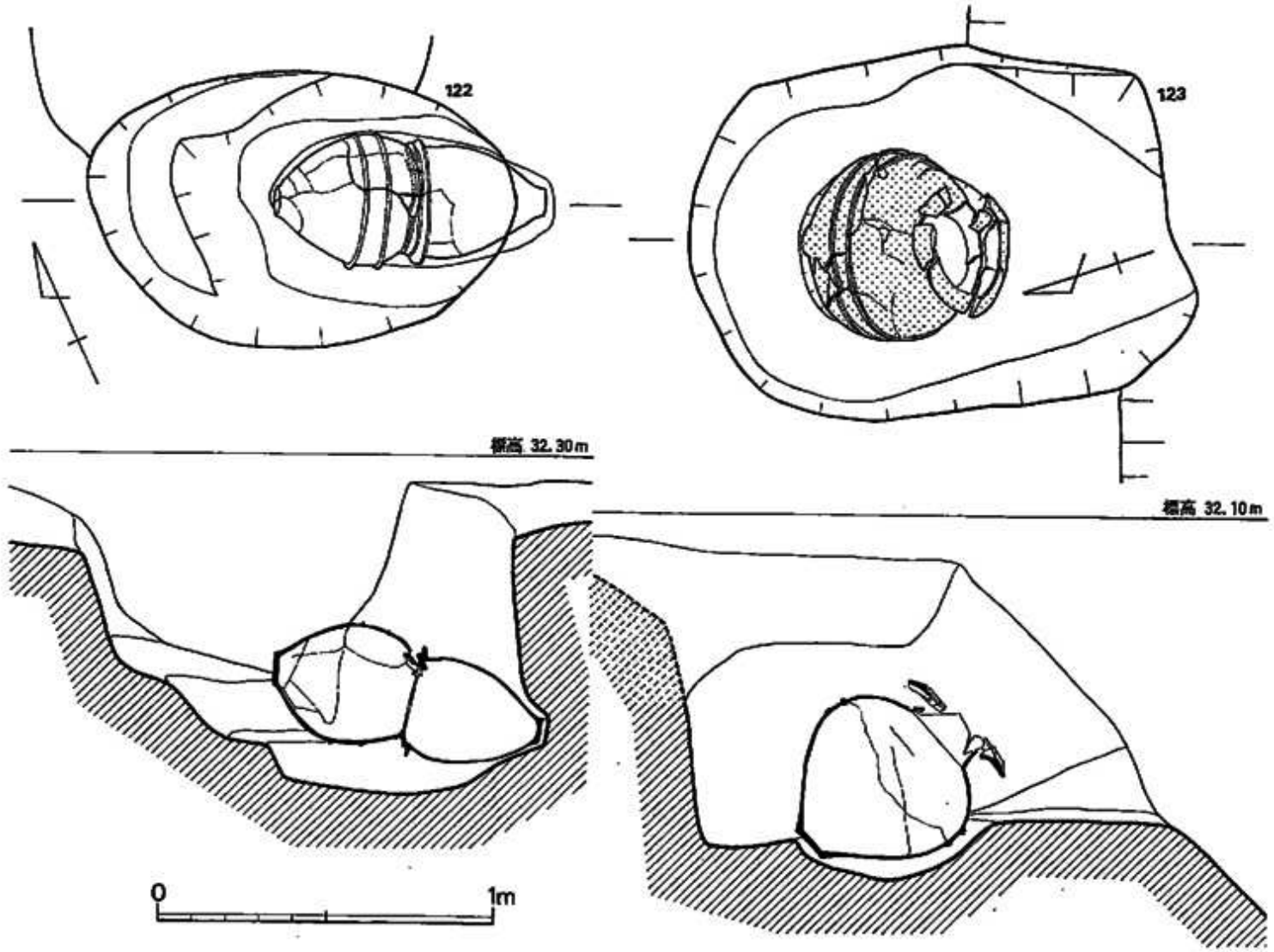
第34図　113~115・117号甕棺墓実測図 (1/20)



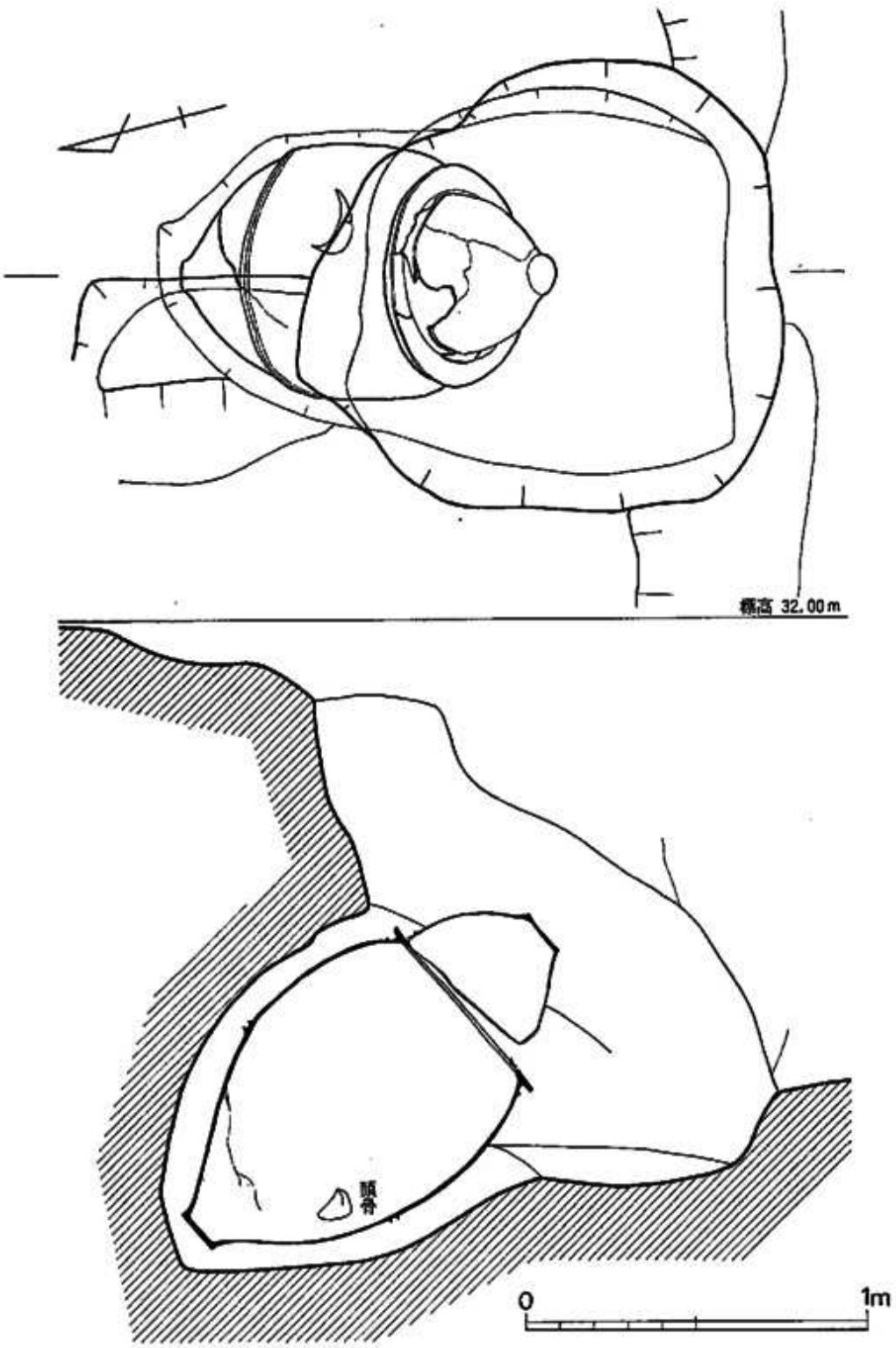
第35図　118~120号 甕棺墓実測図 (1/20)



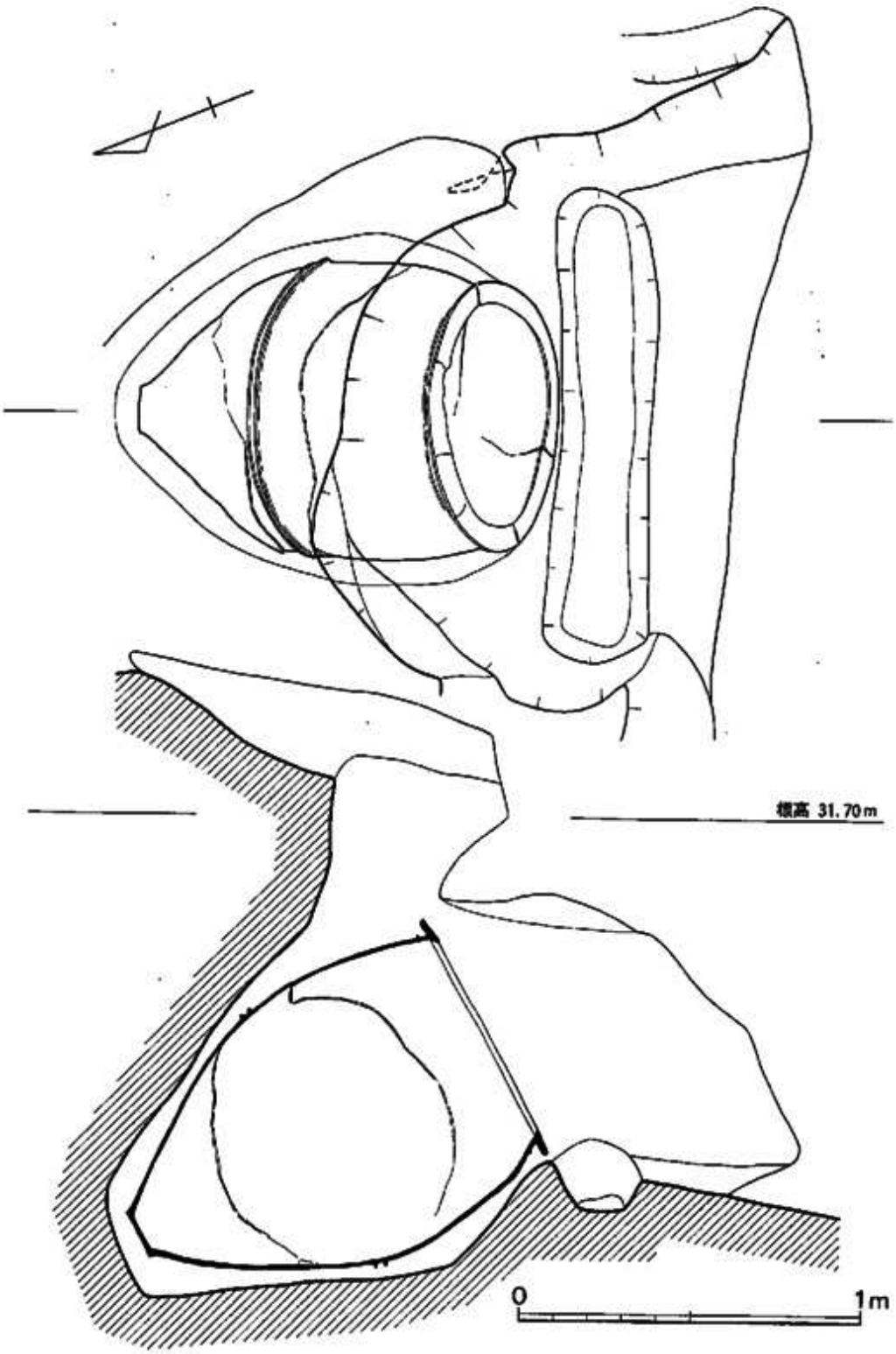
第36図　121号甕棺墓実測図(1/20)



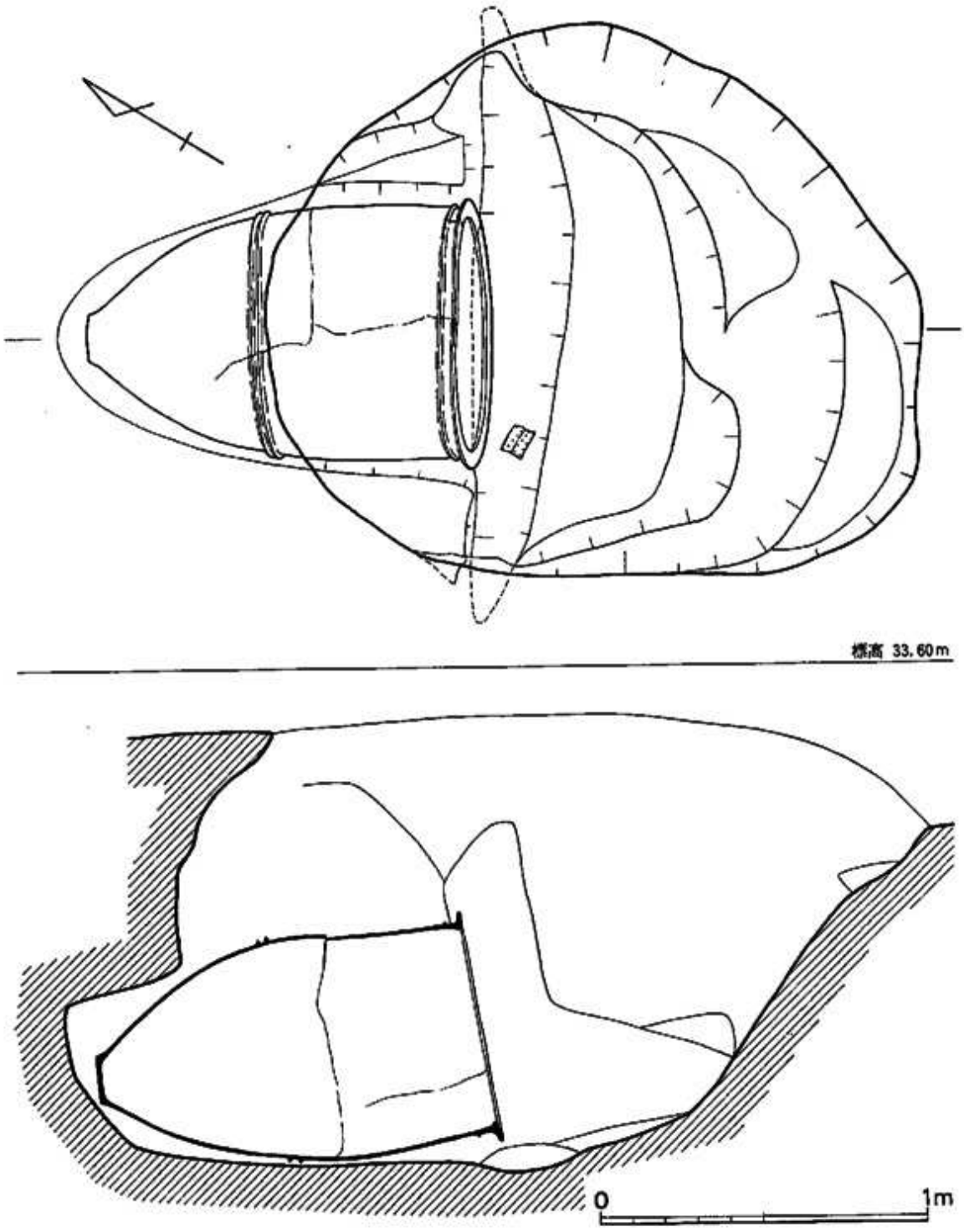
第37図　122・123号甕棺墓実測図(1/20)



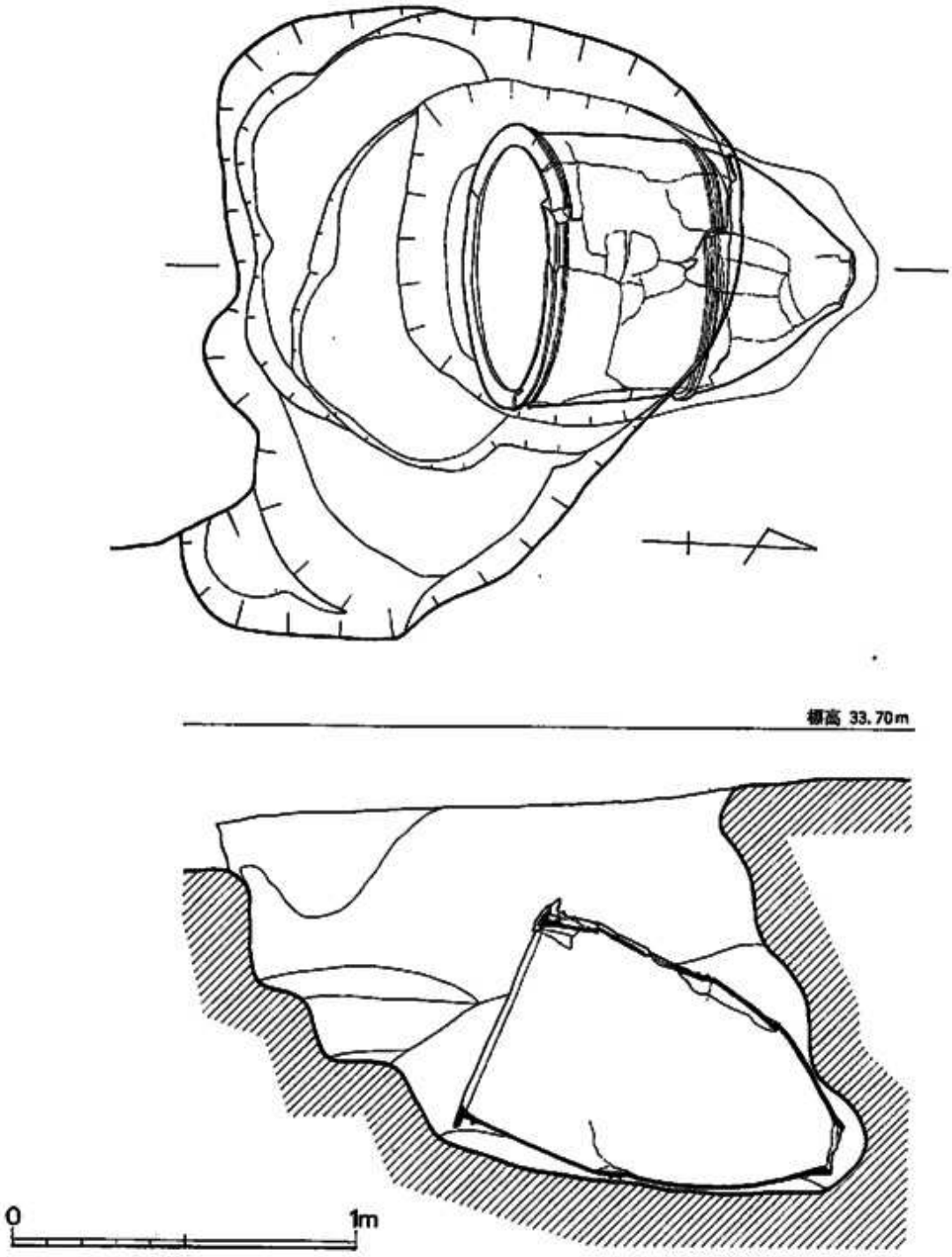
第38図　125号甕棺墓実測図(1/20)



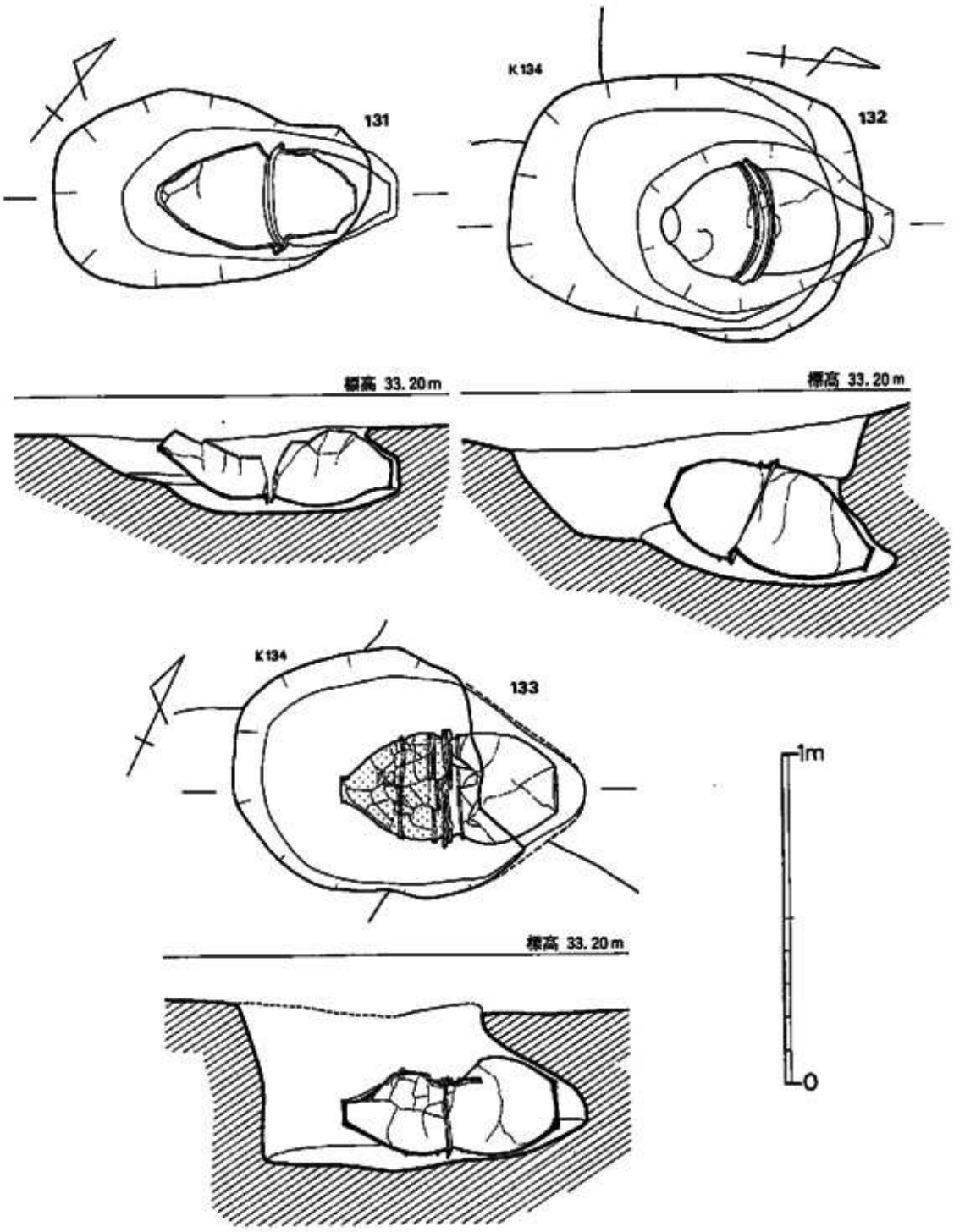
第39図　127号甕棺墓実測図 (1/20)



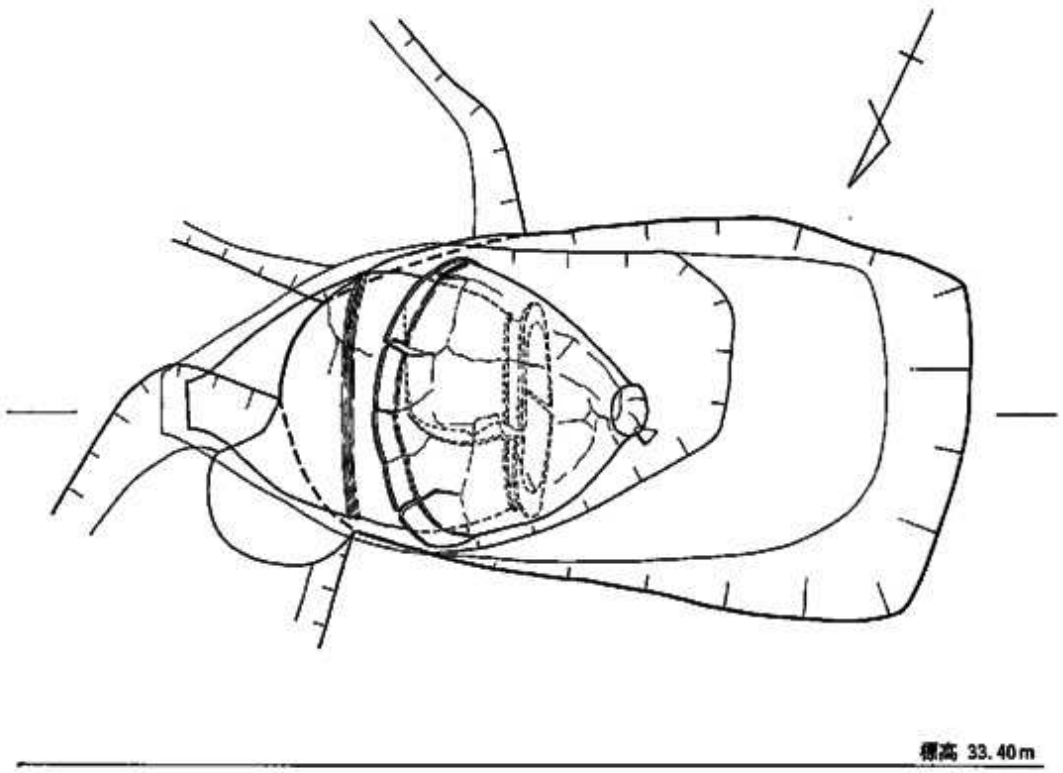
第40図　128号甕棺墓実測図(1/20)



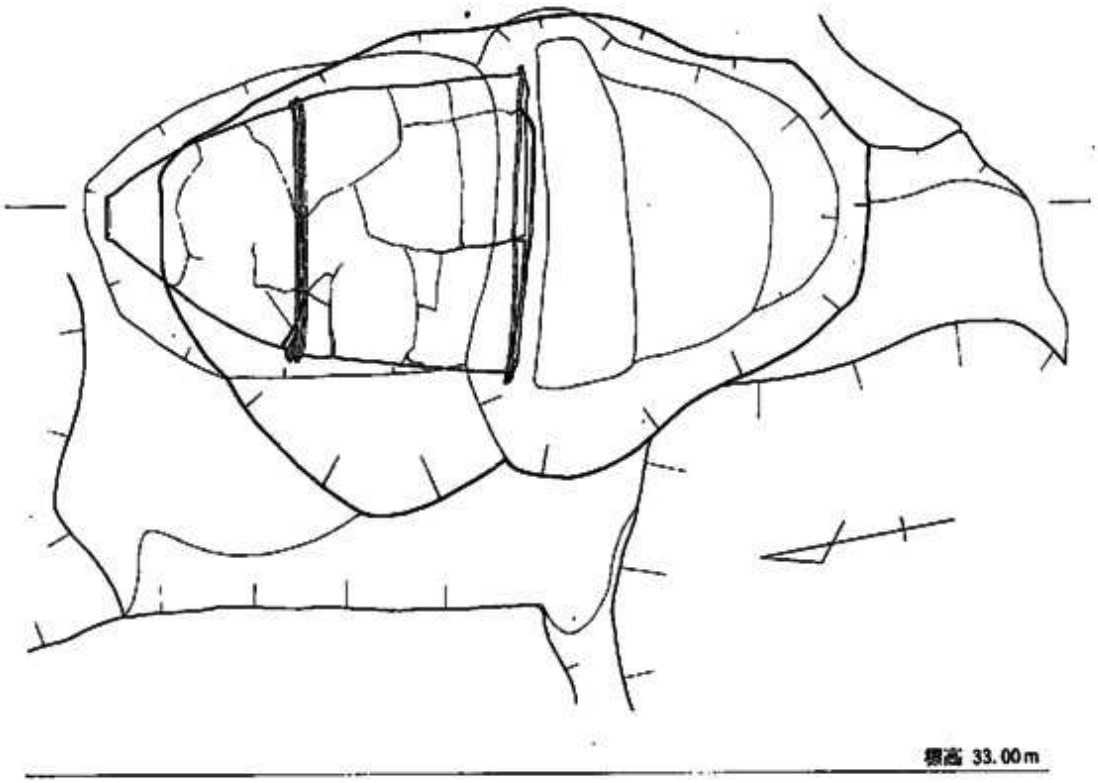
第41図　130号強棺墓実測図(1/20)

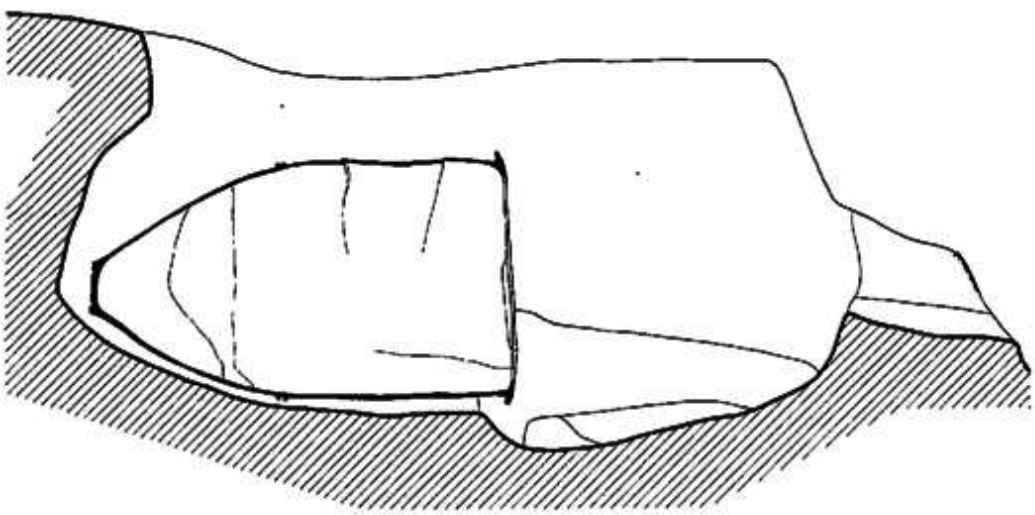


第42図　131～133号墓棺蓋実測図(1/20)

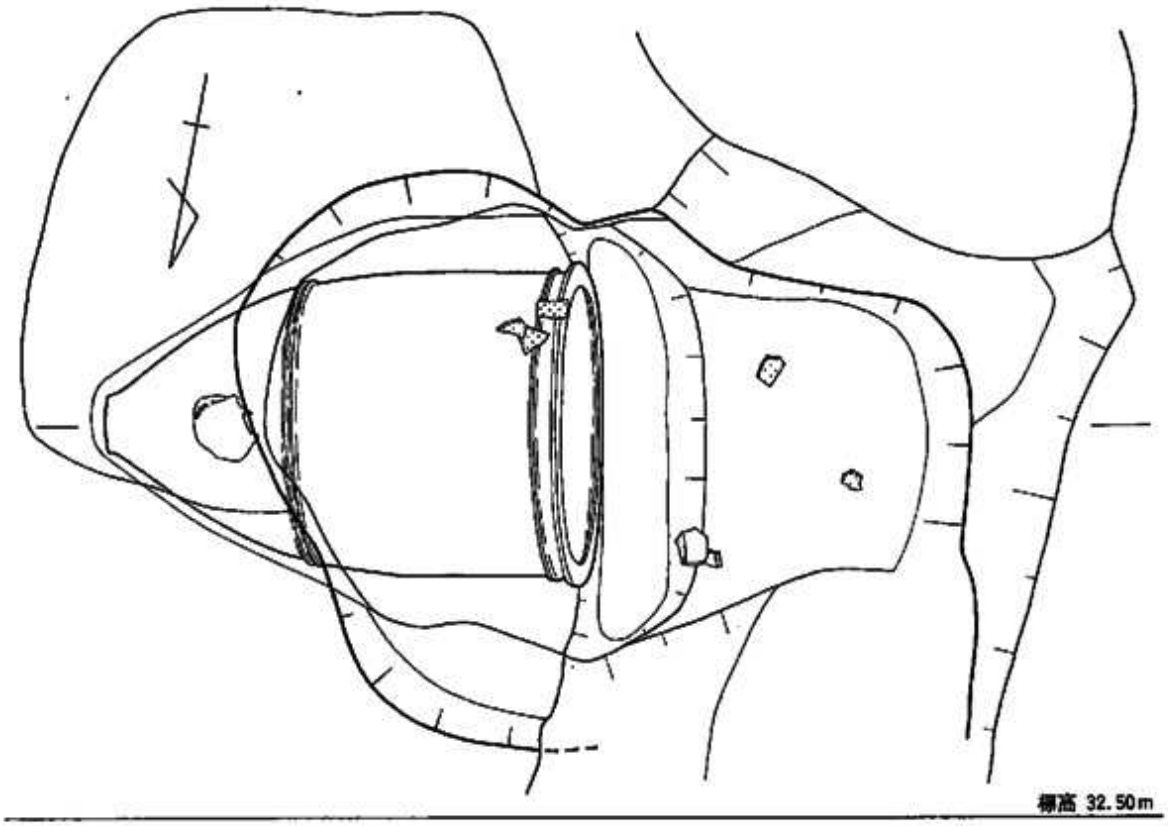


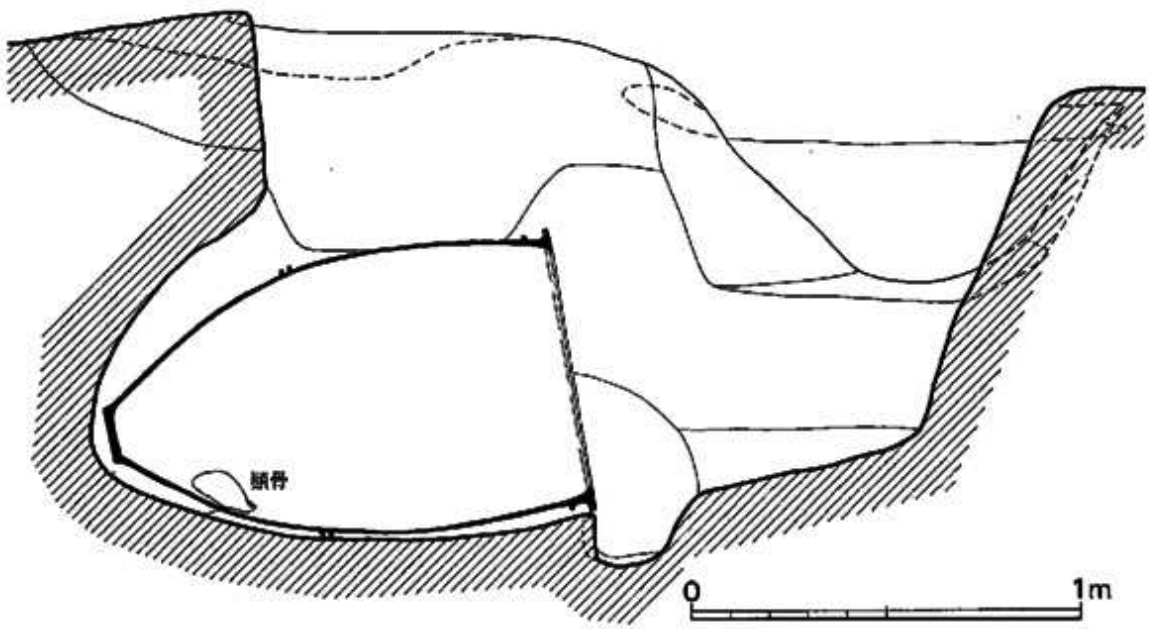
第43図　134号甕棺墓実測図 (1/20)



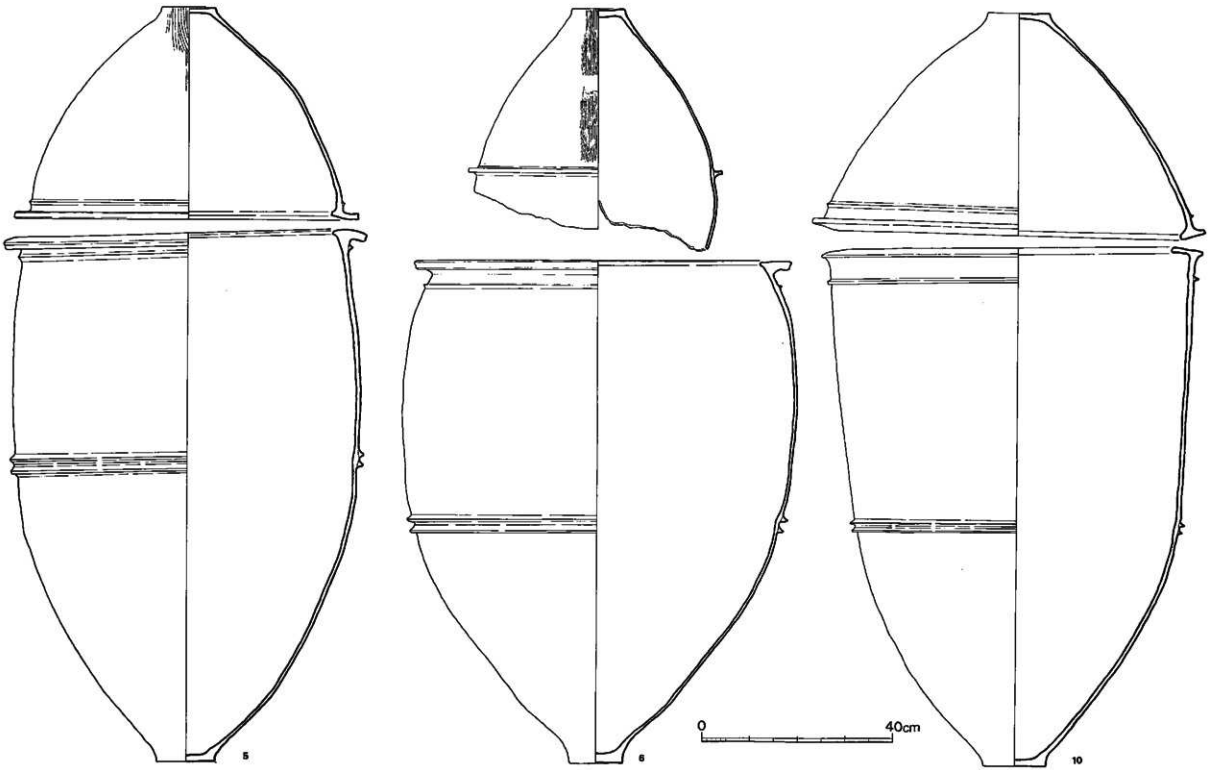


第44図　135号甕棺墓実測図(1/20)

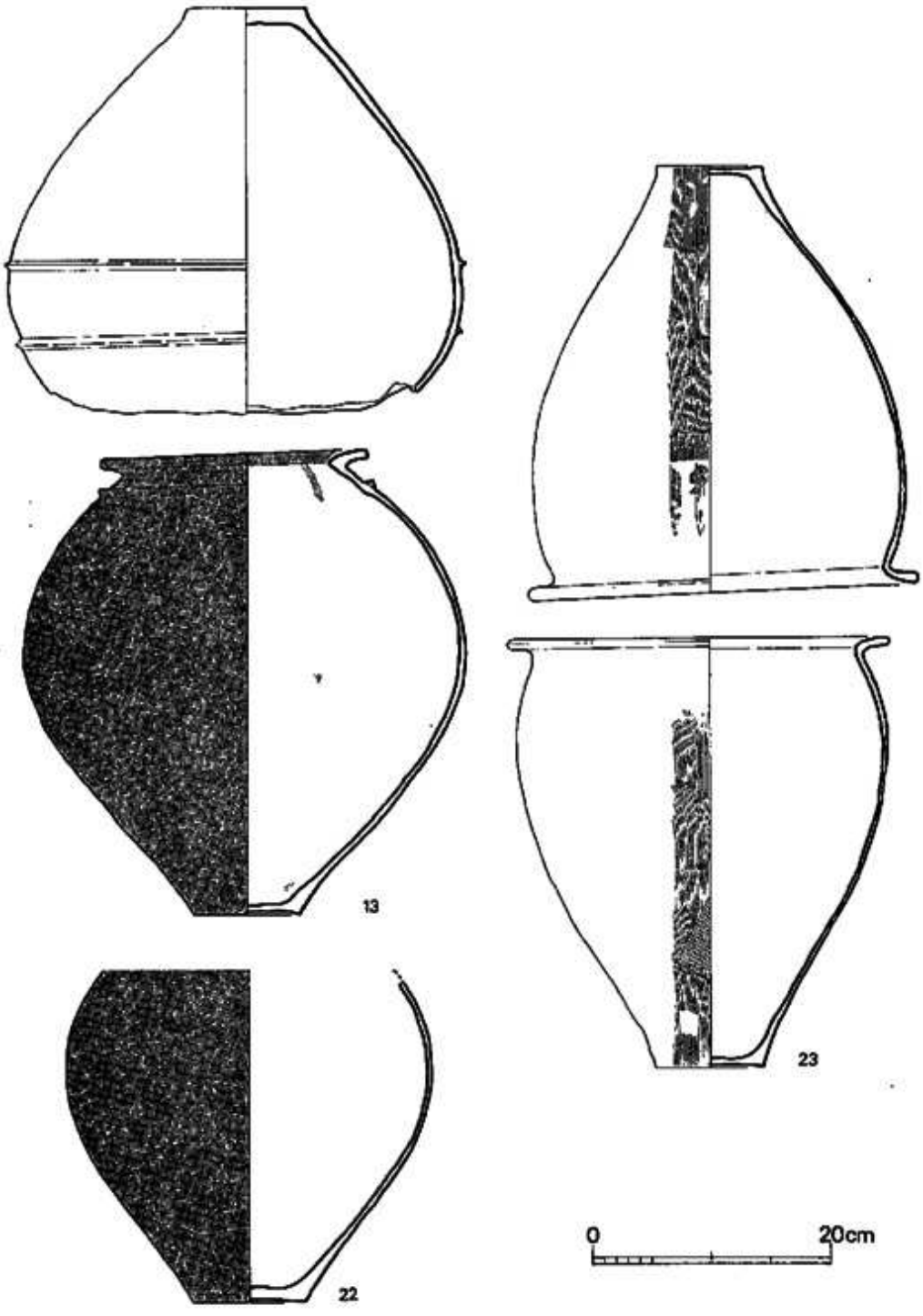




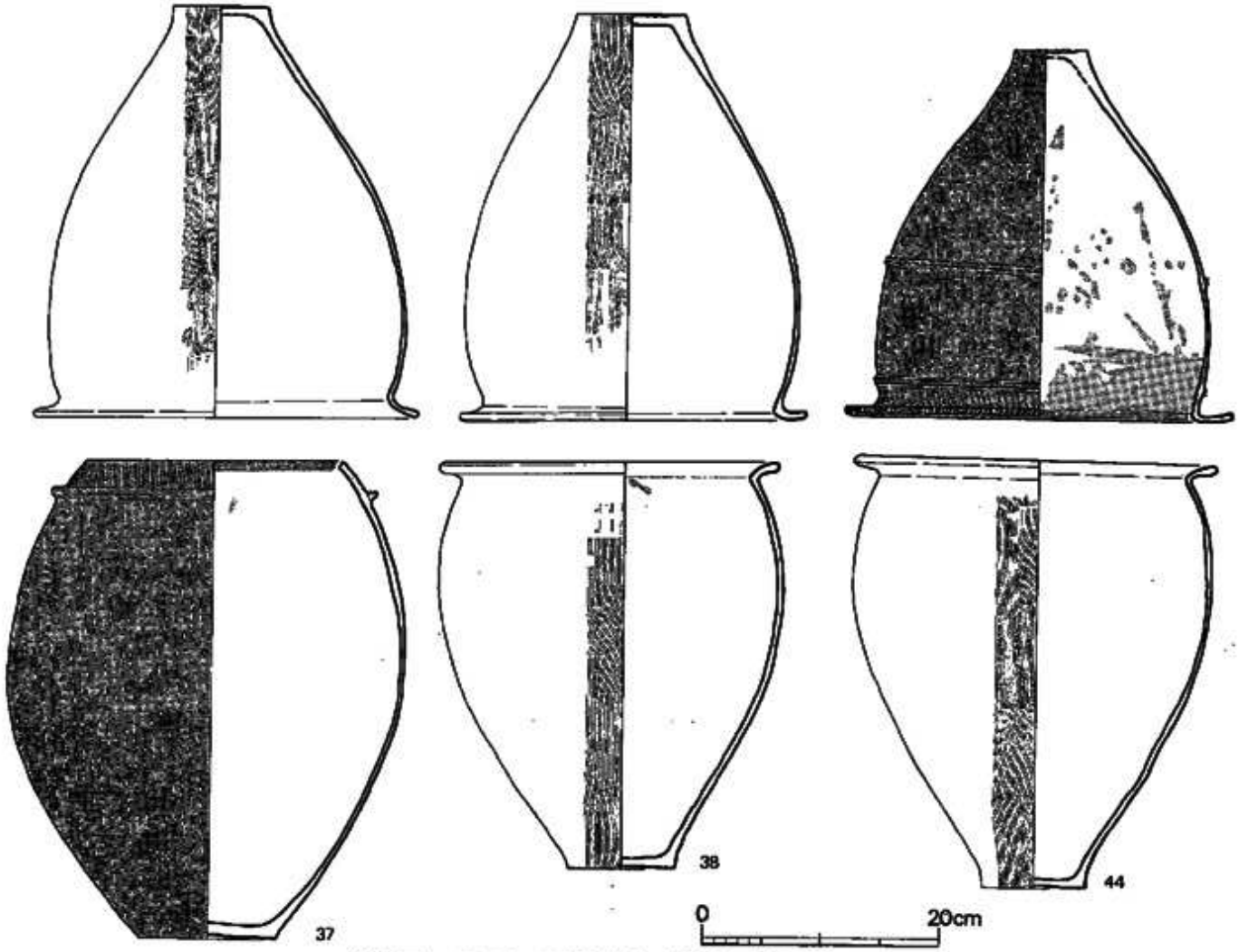
第45図　136号甕棺墓実測図(1/20)



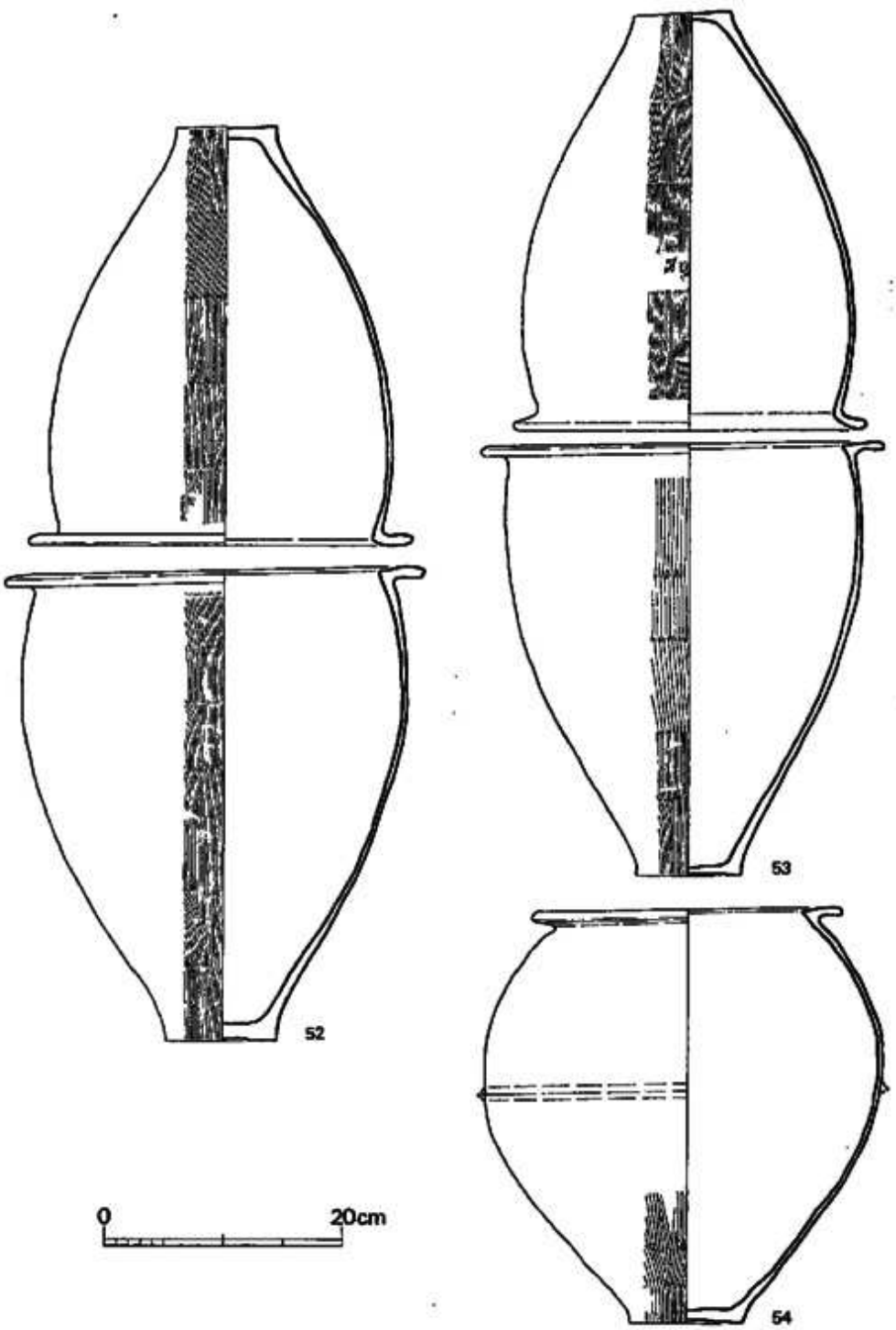
第46図　5・6・10号甕棺実測図(1/8)



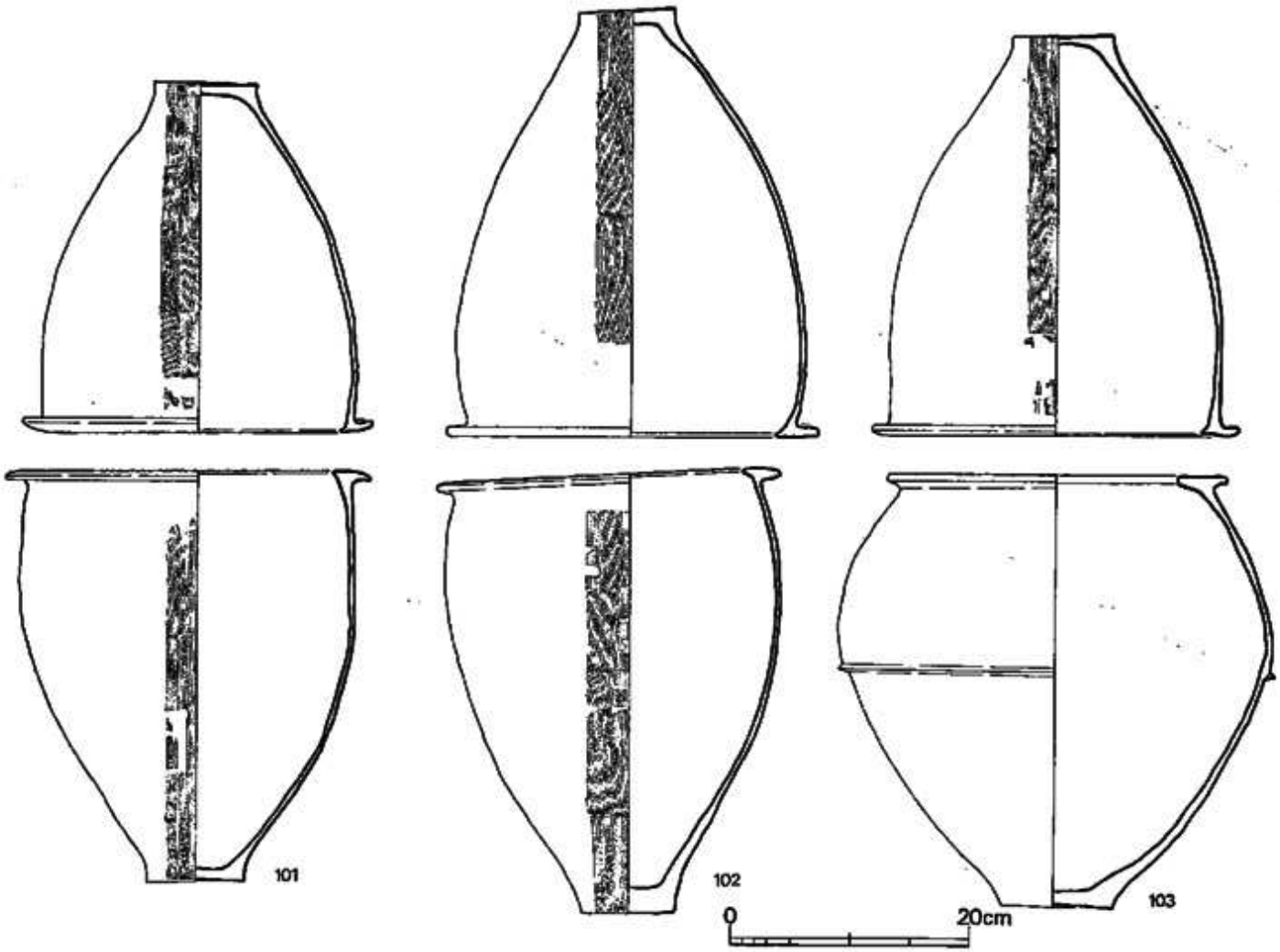
第47図　13・22・23号甕棺実測図(1/6)



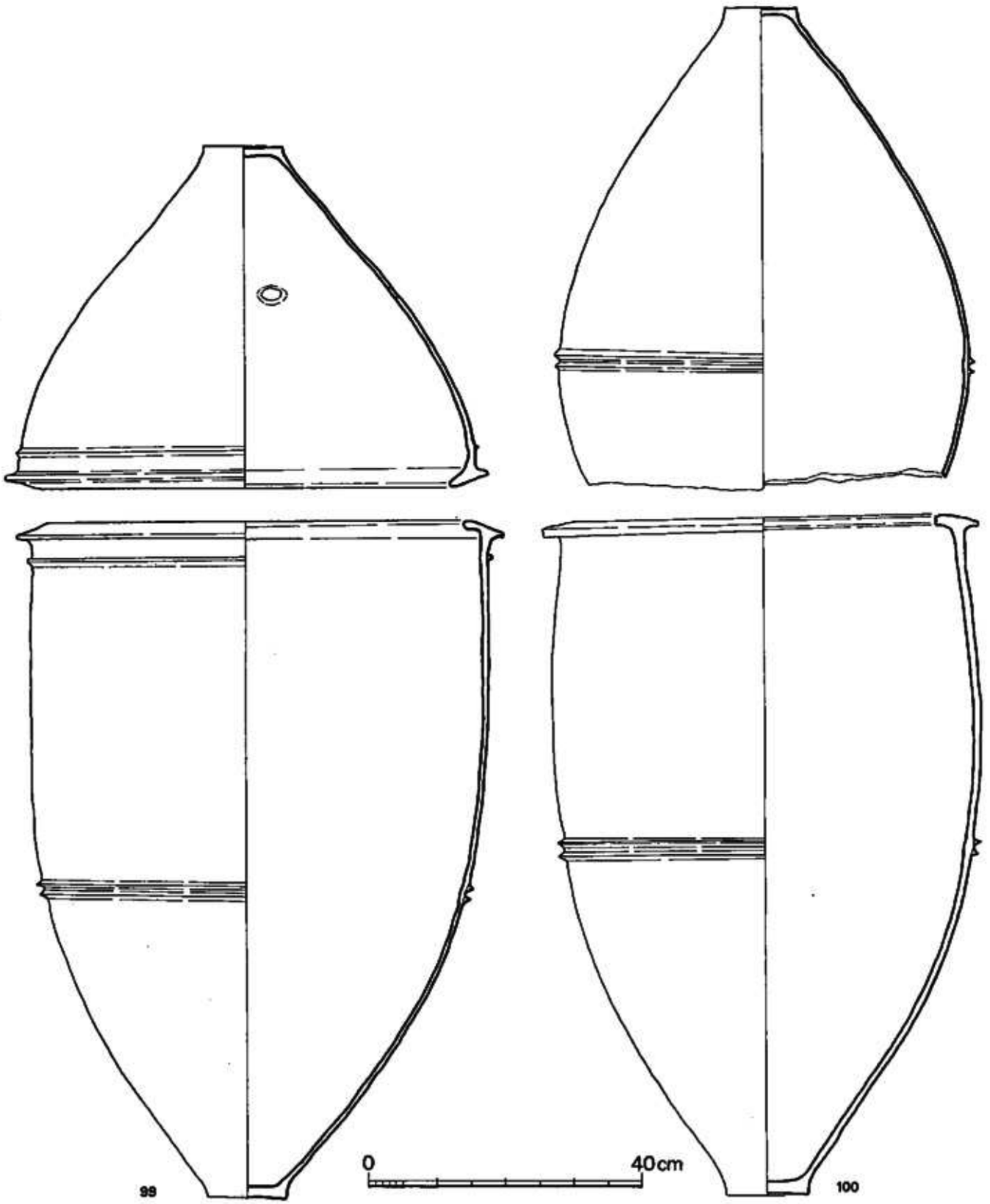
第48図　37・38・44号甕棺実測図(1/6)



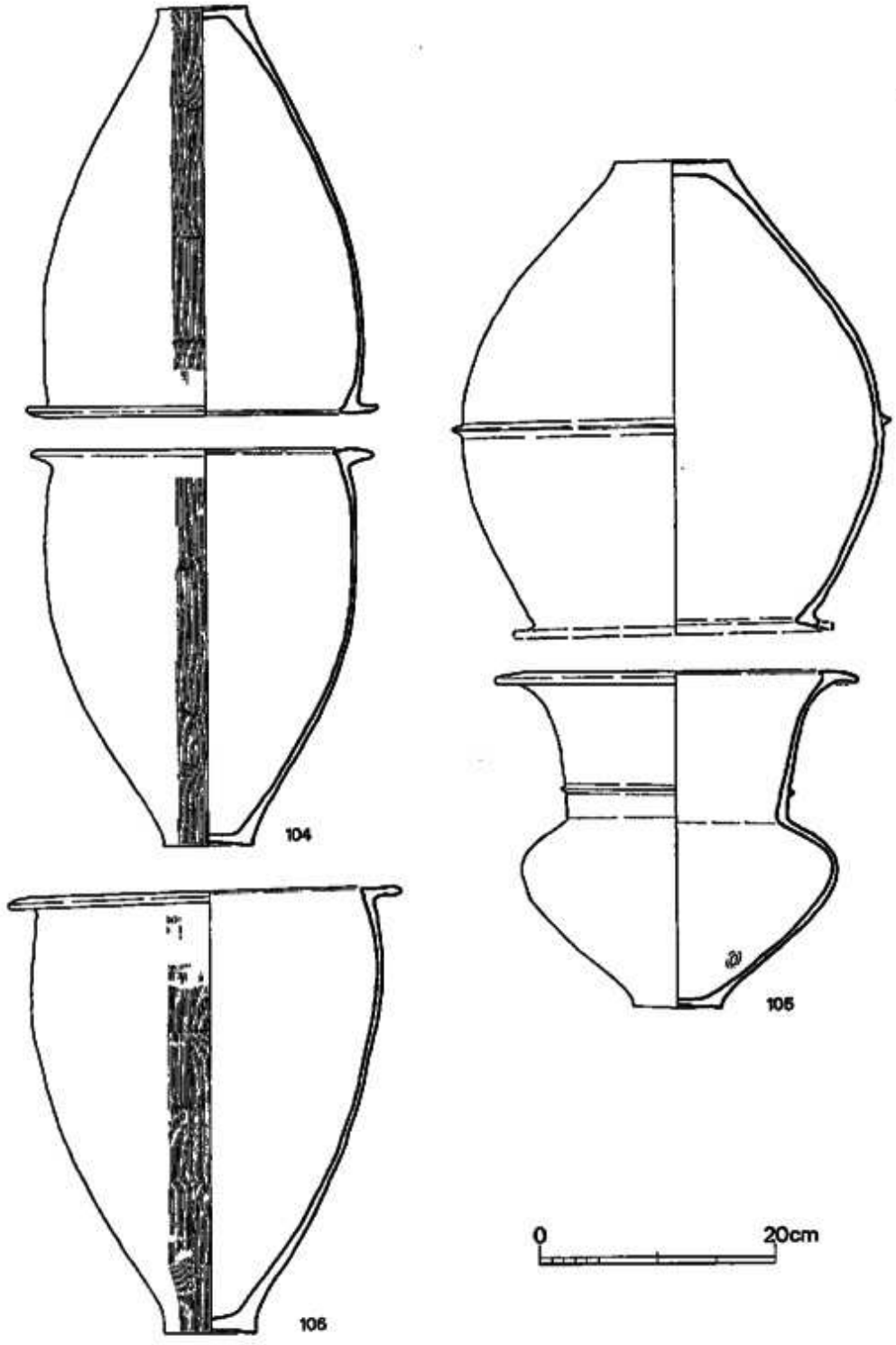
第49図　52~54号甕棺実測図(1/6)



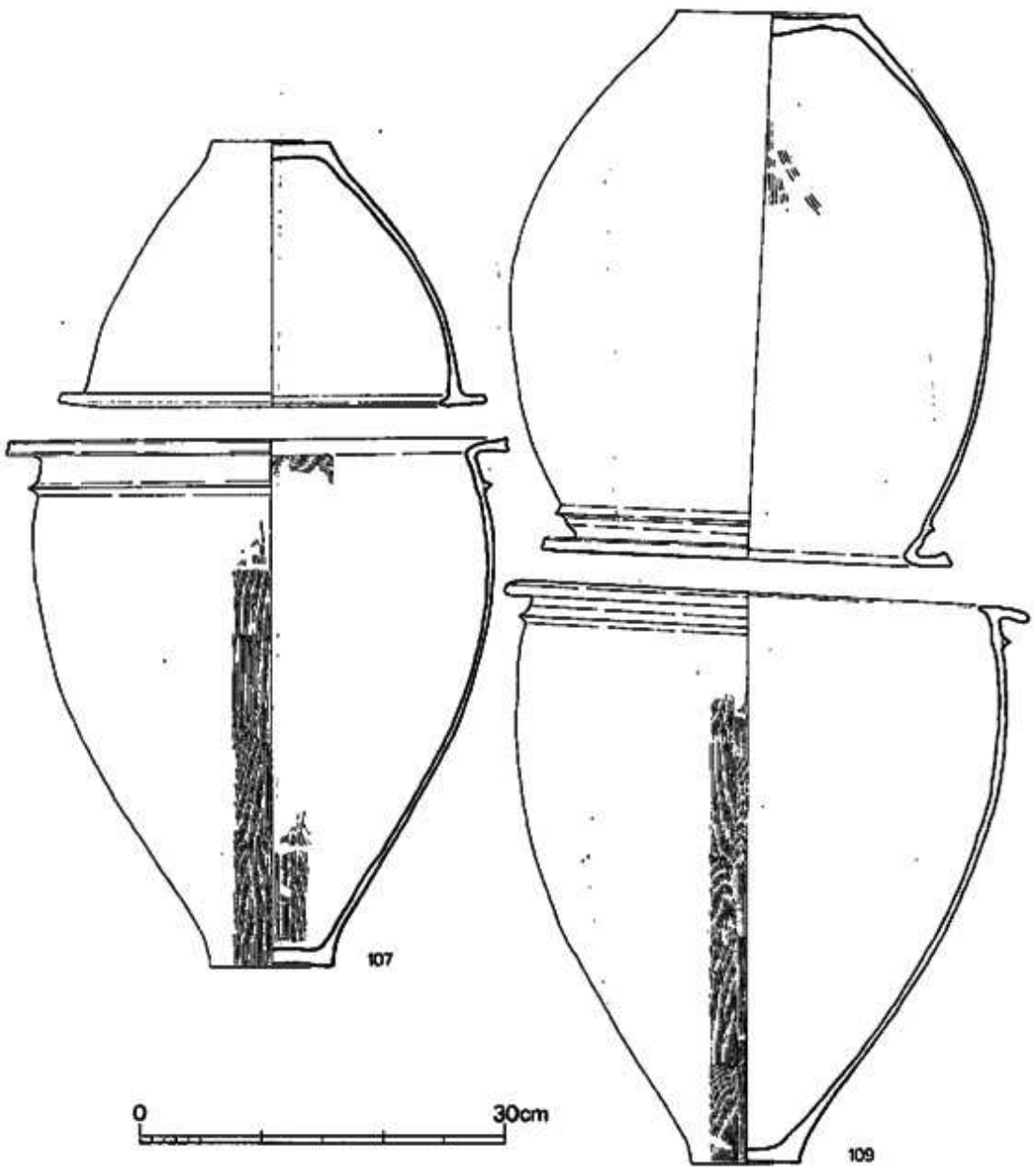
第50図　101～103号甕棺実測図(1/6)



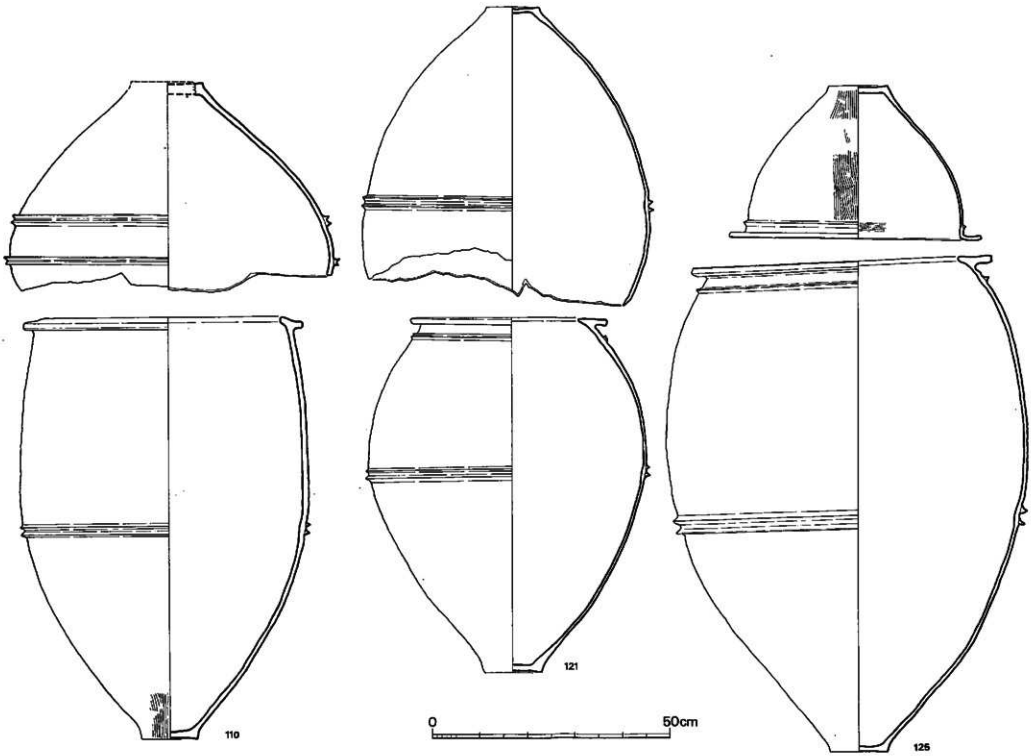
第51図　99・100号甕棺実測図(1/8)



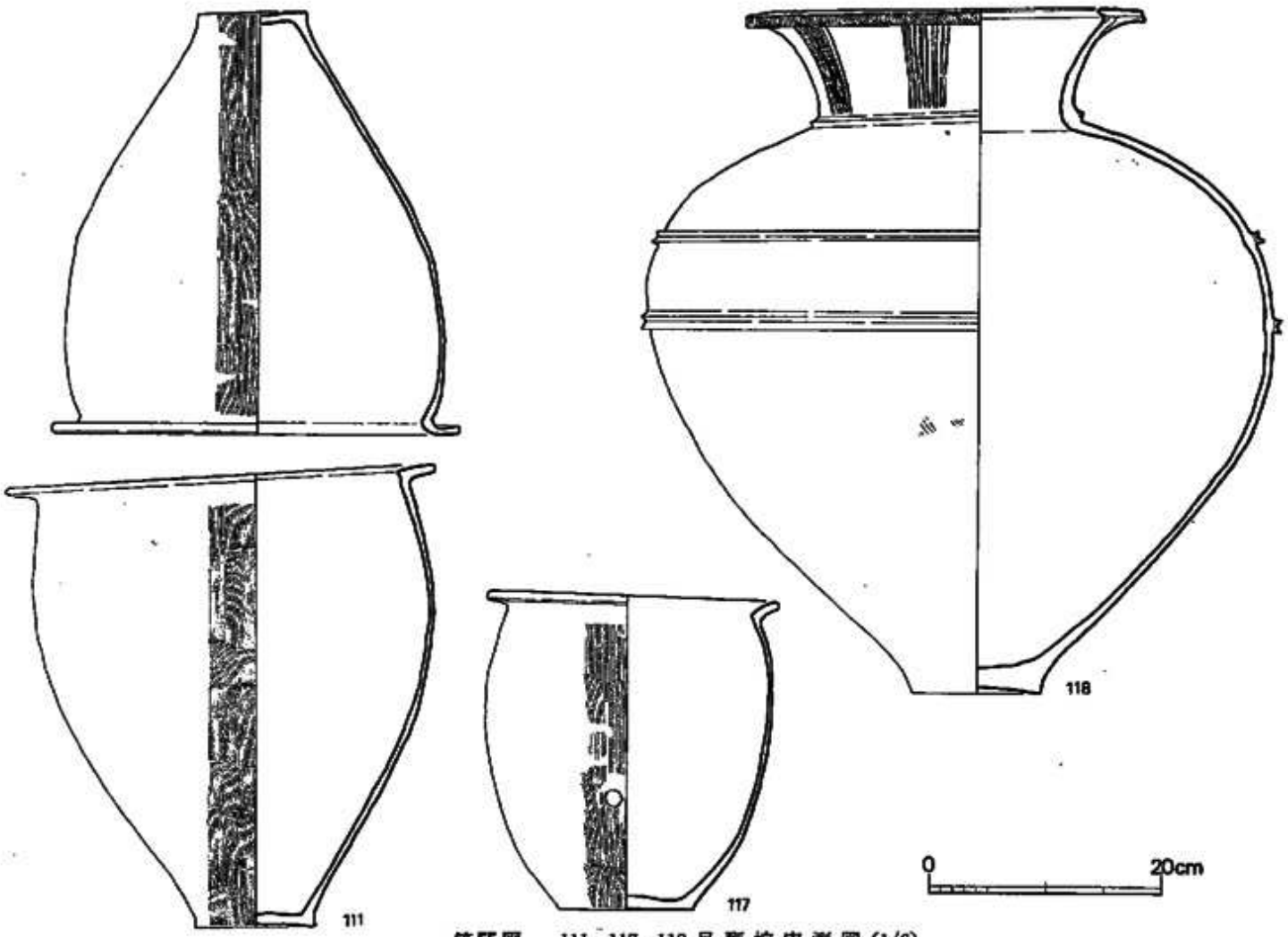
第52図　104～106号甕棺実測図 (1/6)



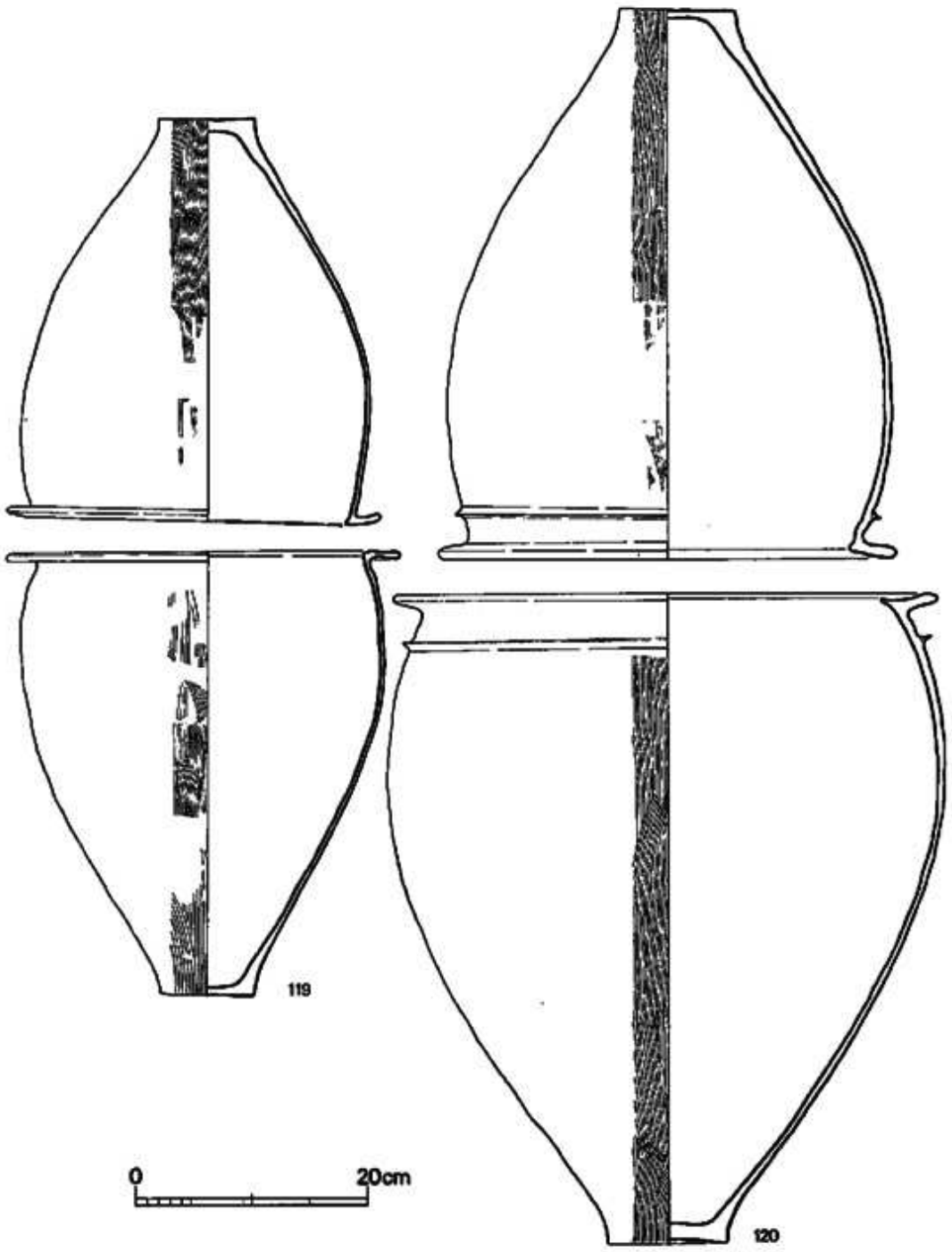
第53図　107・109号甕棺実測図(1/6)



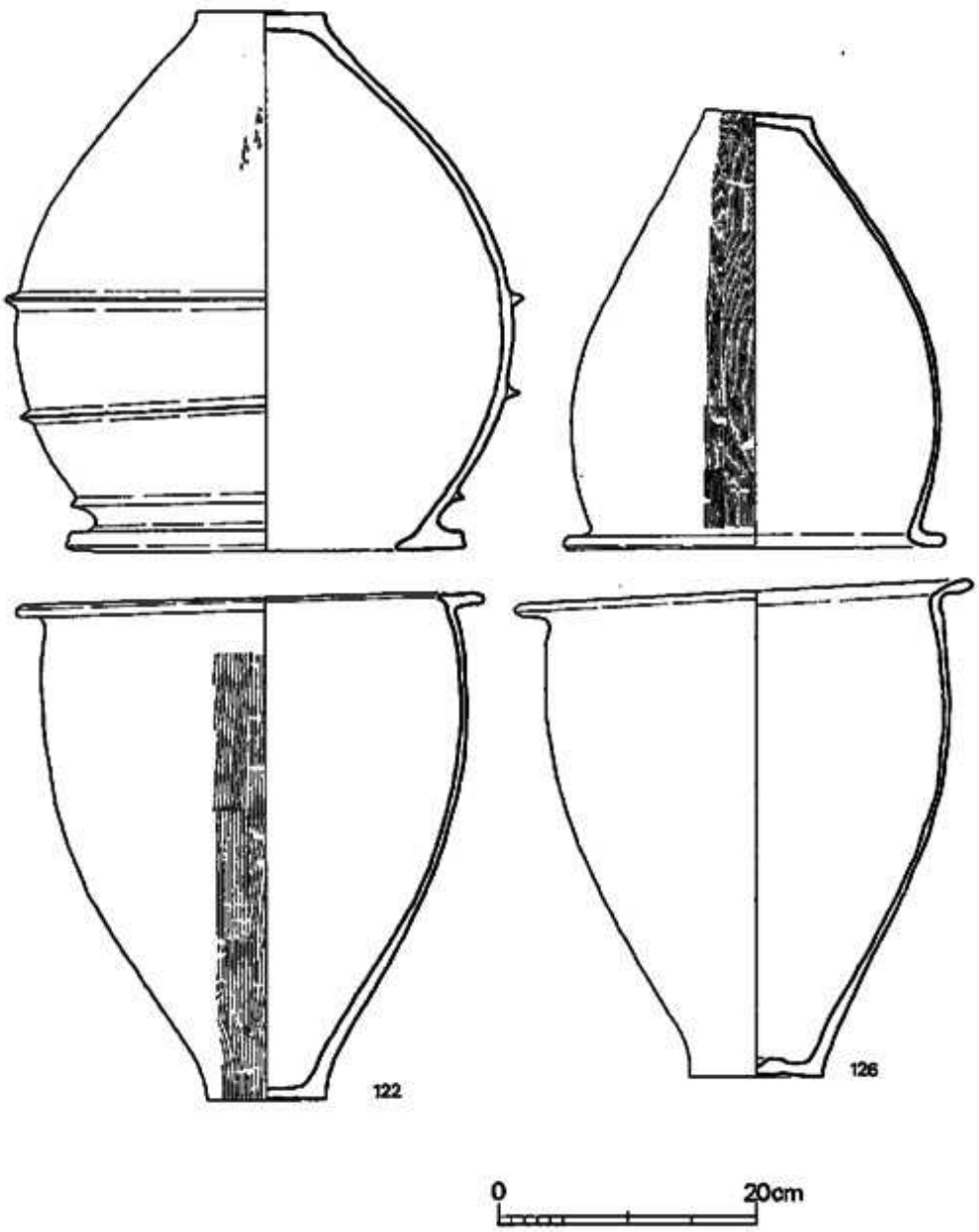
第54図　110・121・125号甕棺実測図(1/8)



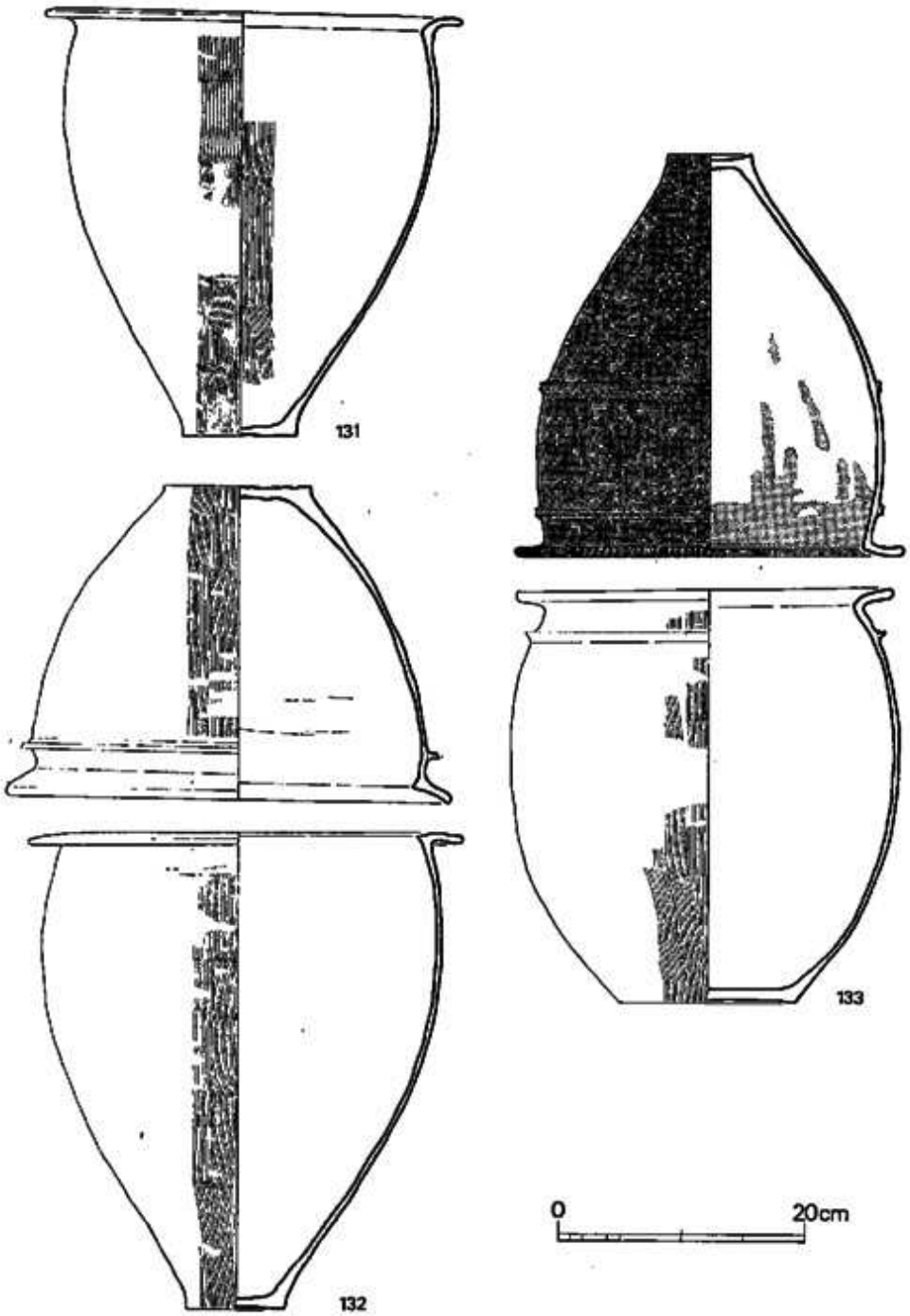
第55図　111・117・118号甕棺実測図(1/6)



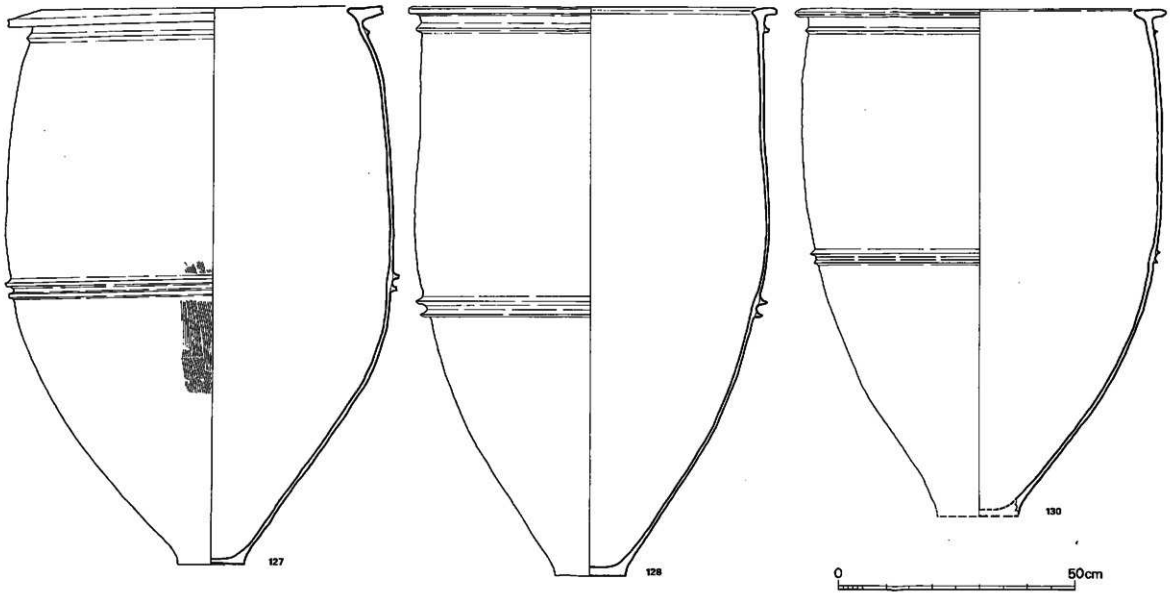
第56図　119・120号甕棺実測図(1/6)



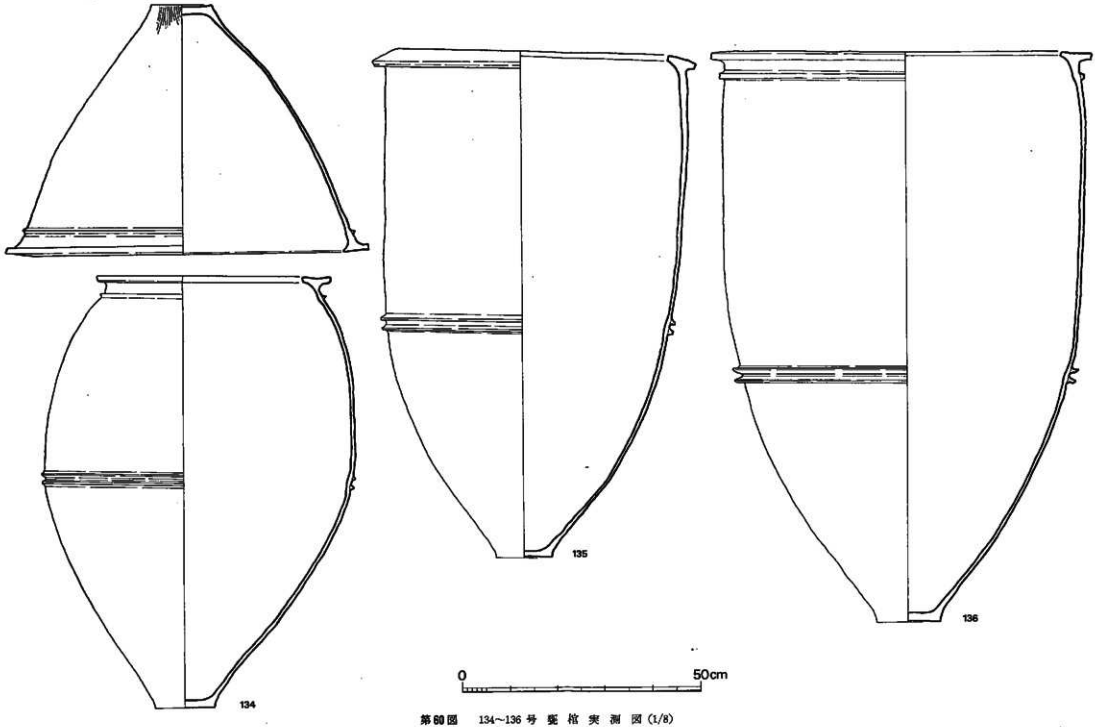
第57図　122・126号甕棺実測図（1/6）



第58図　131～133号甕棺実測図(1/6)



第59図　127・128・130号 甕 棺 実 測 図 (1/8)



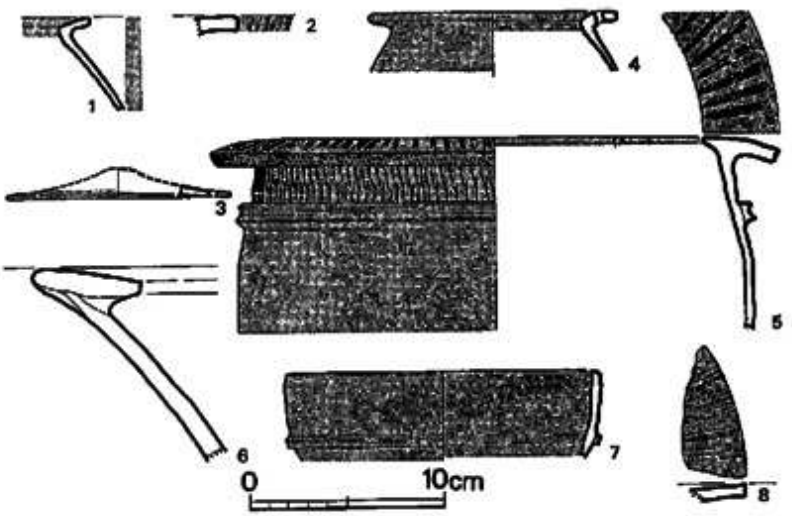
第60図　134～136号 甕 棺 実 測 図 (1/8)

2. 墓壙内供献土器（第61・62図）

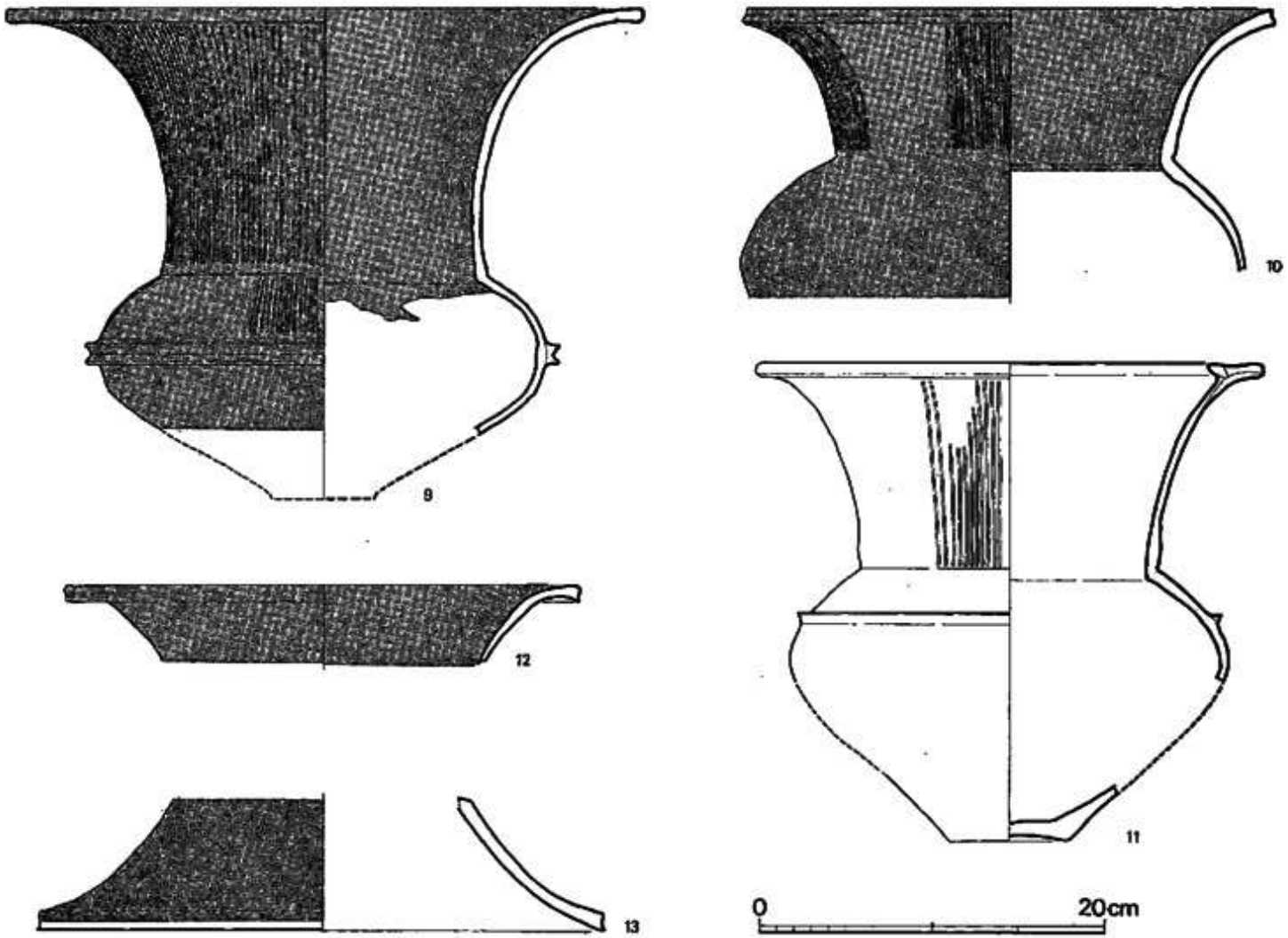
甕棺墓13基及び土壙墓１基内より丹塗り土器が出土した。いずれも意識的に破砕され，完形土器は無い。出土状態は甕棺本体の胴上半以上が多く，半分近く埋めた状態で投棄されたと思われる。土器は壺・甕・高杯・傘蓋・筒形器台で，53号甕棺出土の大形甕形土器口縁部片を除いて，すべて丹塗り磨研土器である。このうち，３は52号甕棺と８号土壙墓，10は121号甕棺と136号甕棺の墓壙内出土破片と接合した。

１・２は23号甕棺墓壙内より出土した。ともに小片のため復原しえなかった。１は丹塗りの無頸壺形土器で，外面は横方向に研磨されている。内面はヨコナデで仕上げられ淡明褐色を呈する。胎土は良質で細砂を含み，焼成は良好。２は口縁端部に細い刻み目を施こす丹塗りの甕形土器。胎土は良質で細砂を含み，焼成は良好。３は52号甕棺墓壙内と８号土壙墓の破片が接合した。口径11.6cmを測り，天井部を欠く丹塗りの蓋形土器である。口辺部には器面に垂直な孔が焼成前に穿たれているが，２孔が対峙して穿たれていたと考えられる。外面は研磨・内面はナデでいずれも丁寧に仕上げられている。

４～６は53号甕棺墓壙内より出土した。４は復原口径12.8cmを測る無頸壺形土器である。口縁部は肥厚し，端部は平坦になる。口縁部上面には２cm間隔に２孔が焼成前に穿たれているが，原状では２孔１対とする４孔が考えられる。口縁部内外と胴部外面は丹塗り，内面はナデで仕上げ明淡褐色。５は口径29.2cmを測る甕形土器。外傾する「T」字状口縁の端部には斜めの刻み目を施こし，上面に暗文を施こす。口縁直下には１条の断面「M」字形凸帯を貼りつけ，口縁との間にはやはり暗文を施こしている。凸帯下は横方向の研磨，内面はナデで仕上げ，淡明褐色を呈し，丹がながれている。両者とも胎土は良質で，砂粒・雲母を含み，焼成は良好。６は復原口径46cmを測る大形の甕形土器である。厚くわずかに外



第61図　墓壙内出土供献土器実測図１（1/4）



第62図　墓壙内出土供献土器実測図 2 (1/4)

傾した「T」字状の口縁は外帯が薄くなり，胴部は大きく膨らむ。口縁部内外がヨコナデの他は内外面ともにナデで仕上げ明褐色を呈する。胎土は石英砂・雲母を含み焼成は堅緻。

7は110号甕棺墓壙内より出土した。復原口径16.2cmを測る高杯杯部で，口縁部は内彎ぎみに直口し1条の断面「M」字形凸帯を貼りつけている。風化による摩滅が顕著だが，部分的に丹塗りの痕跡がある。胎土は良質で細砂を含み，焼成は良く，明淡褐色を呈す。

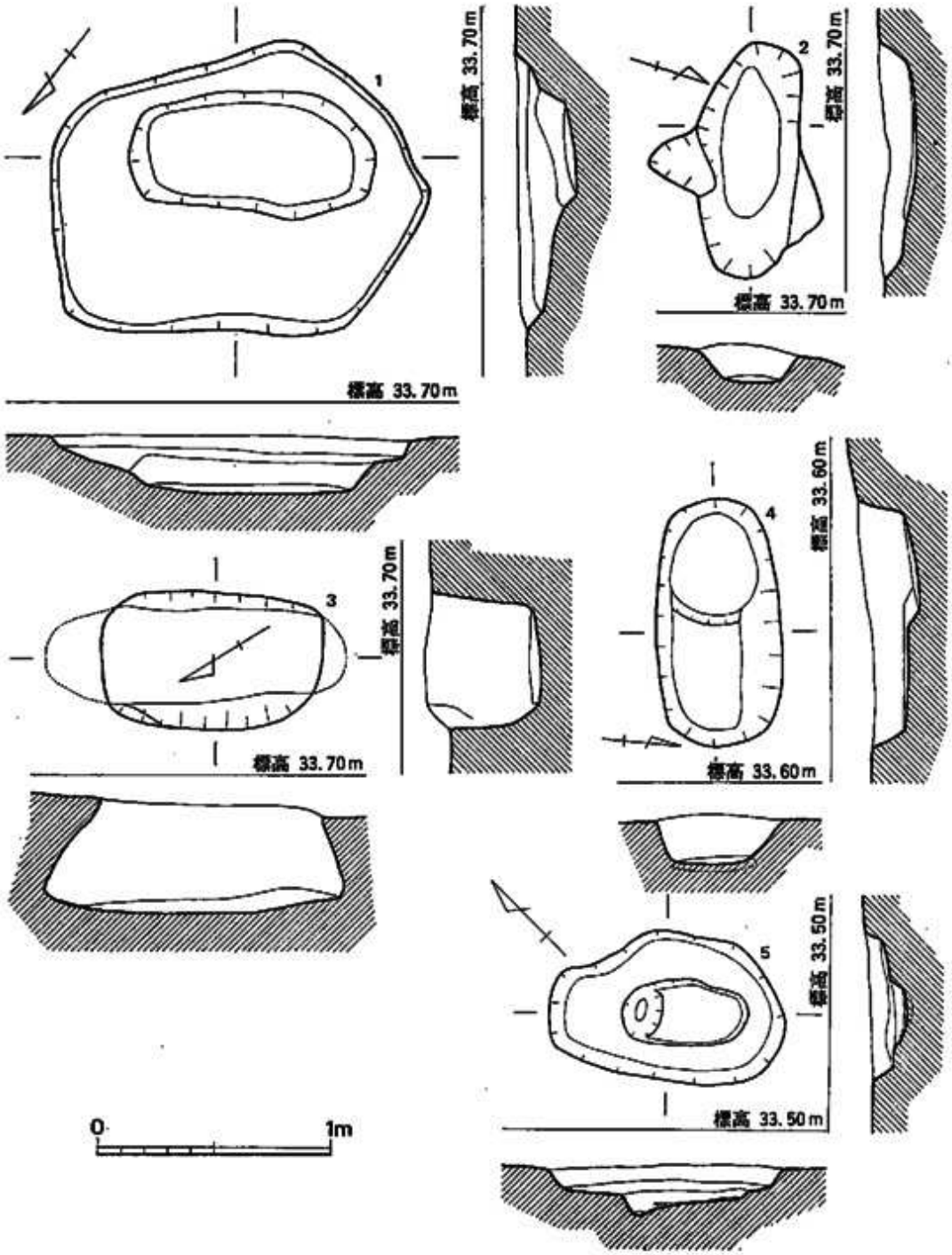
8は120号甕棺墓壙内より出土した。丹塗りの甕形土器であるが小片である為に復原しえない。わずかに内傾する口縁部は上面に横方向の研磨を施こした後に暗文を施こす。胎土は細砂粒・雲母を含み，焼成は良好。

9は47号甕棺墓壙内より出土した胴部下半を欠く広口壺形土器で，口径37.2cm，現存する器高24.8cmを測る。朝顔状にひらく頸部は長くのび篦がきの暗文を下から上へ施こし，口縁部は外端で平坦面をつくる。大きく膨らむ胴部中位に断面「M」字形凸帯を1条巡らし，更に胴部上半には15本からなるヘラ先状細刻文を施こしている。頸部内外および凸帯上部は横方向に研磨され，胴部内面はナデで仕上げられ暗明褐色を呈するが，全体に摩滅が著しく，胴部内面には調整時の爪痕が残る。胎土は良質で砂粒・雲母を含み，焼成は良好。

10・11は121号甕棺墓壙内より出土した。10は口径30.8cmで胴下半以下を欠く。現存する器高15.1cmを測る広口壺形土器で，136号甕棺墓壙・No.156・No.175遺構内黒色土中より出土した破片と接合した。朝顔状にひろがる口縁部は端部がわずかに凹み，頸部には30～31本を一単位とする暗文を施こしている。頸部と胴部の接合点は厚みを増し，沈線状にくぼむ。外面および頸部内面は丹塗り研磨，胴部内面はナデで仕上げ淡褐色を呈する。胎土は砂粒・雲母を少量含み，焼成は良好・堅緻。11は口径29.5cm，底径6.8cm，復原器高27.8cmを測る広口壺形土器である。「鋤」状口縁は平坦で，上面はナデによりわずかにくぼむ。朝顔状にひらく頸部には，11本を一単位とする暗文が下から上方向へ施こされている。頸部と胴部の接合面は厚くなり内面に段をなす。調整は，口縁部・頸部内外および凸帯部上下がヨコナデの他はナデで仕上げられ，口縁下から凸帯にかけて炭様の黒色顔料が塗布されているが摩滅が著しい。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成は良く，暗明褐色を呈する。

12・13は128号甕棺墓壙内より出土した。12は口径30.0cmを測る丹塗りの広口壺形土器で，頸部は朝顔状にひろがり口唇が平坦になる。内面は横方向に研磨されているが，外面は風化による摩滅が著しい。13は底径32.6cmを測る丹塗りの筒形器台で端部はヨコナデ調整により凹む。外面は縦方向の研磨が施こされ，内面はヨコナデ・ナデによって仕上げ淡褐色を呈す。胎土は良質で細砂・雲母を含み，焼成は堅緻。

他にも筒形器台の透し部が数片出土しているが接合しない。



第63図　1～5 号土壙墓実測図 (1/30)

3. 土 壙 墓

土壙墓は10基調査した。その他にもNo.2・3・6も土壙墓であるが保存されるため調査を完了していない。また，東側部分にも存在が予想される。全体的に見ると墓域の北端と南端，それに西縁に沿って占地しているのが特徴としてあげられる。

1号土壙墓〔No.1〕（図版61—1，第63図）

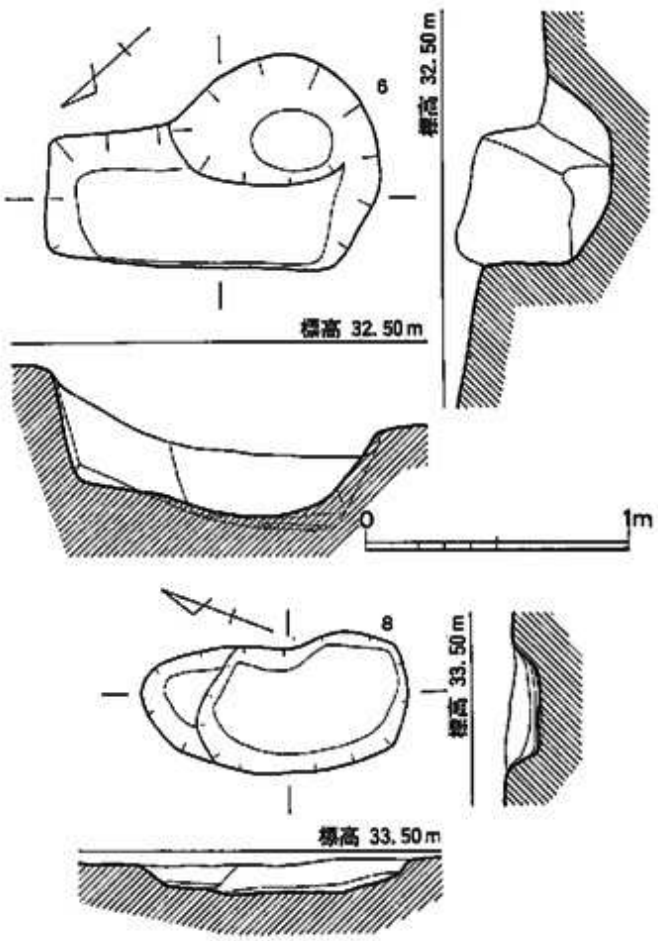
墓域の北端の土壙墓群の1つで，最北端に位置する。長辺1.63m，短辺1.36mを測る不整長方形を呈す2段掘りの土壙墓で，埋葬部は墓壙の東にかなり寄り，長方形を呈し長辺1.06m，短辺0.52m，深さ14cmで，底面は中央部がやや下がる。主軸はN—38°—Eにとる。

2号土壙墓〔No.9〕（第63図）

原3号墳の東南周溝端に検出された。素掘りの土壙墓で長辺1m，短辺0.42m，深さ16cmを測る。底面は中央部で若干へこみ，墓壙の西偏に寄っている。土壙の南・北側は一部攪乱され，北側には浅い落ち込みがみられる。この落ち込みは3号墳周溝の調査時に検出された甕棺墓の墓壙の可能性がある。主軸方位はN—109°—Wにとる。遺物は出土しなかった。

3号土壙墓〔No.23〕（第63図）

1号土壙墓と同様に北端の一群を形成する。1号土壙墓とは2.5mの間隔を有す。隅丸長方形を呈す素掘りの土壙墓で上辺は長辺95cm，短辺58cmで深さは50cm前後を測る。下辺は狭長な長方形のプランを呈し，長辺1.28mと上辺より33cm程長い。



第64図　6・8号土壙墓実測図（1/30）

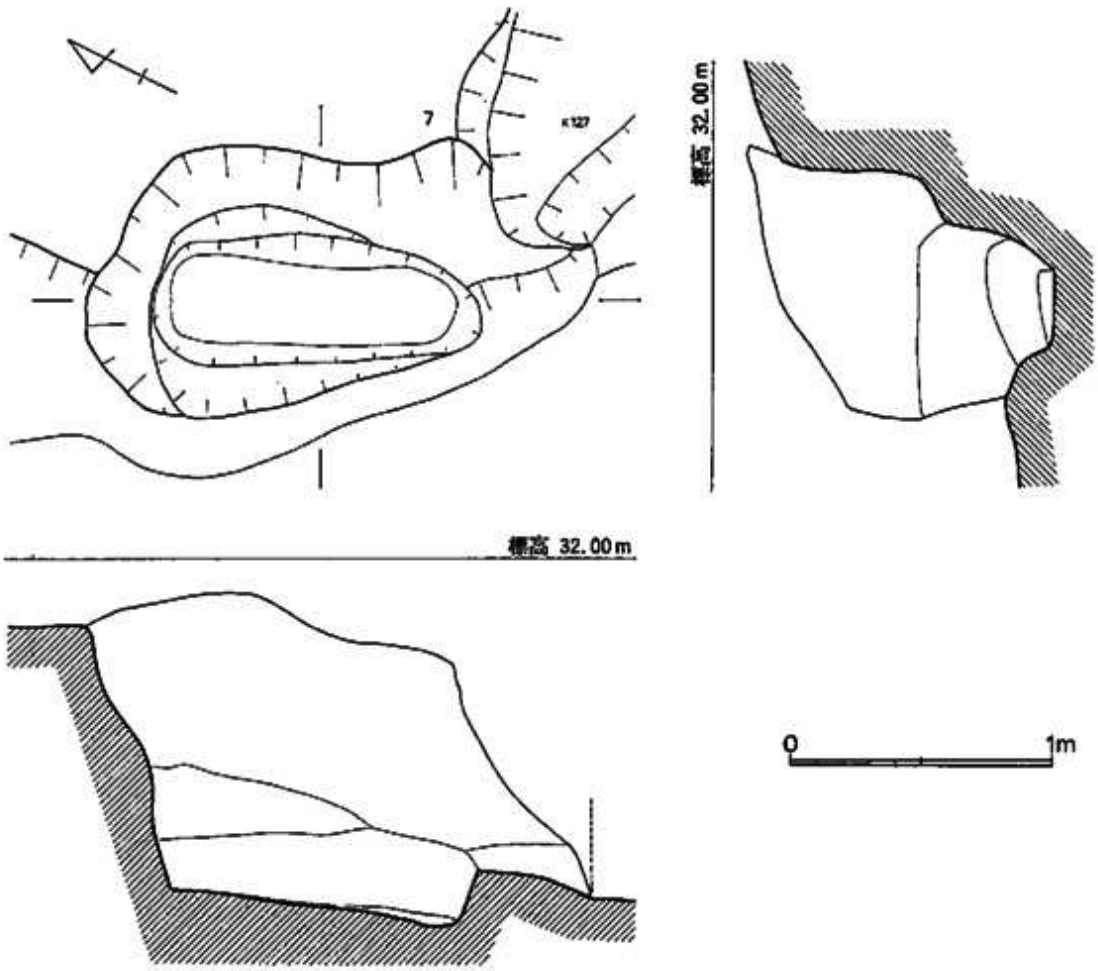
特に北側へ24cm程抉り込み，長辺の断面は梯形状を呈す。このことから南側を枕として遺骸を納めた可能性が強い。主軸方位をN—31°—Eにとる。遺物は出土していない。

4号土壙墓〔No.71〕（図版61—2，第63図）

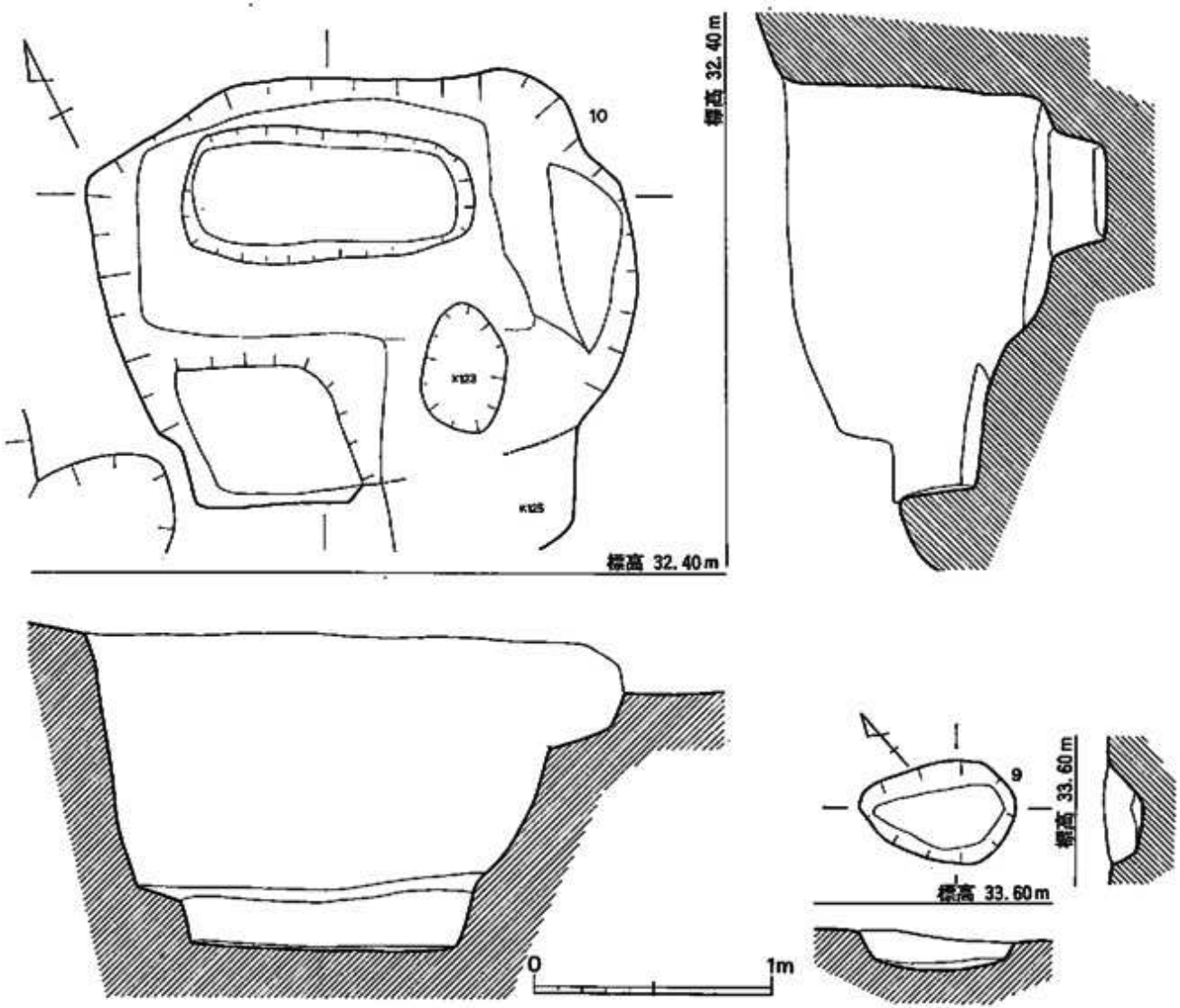
120号甕棺墓の南に接して検出された素掘りの土壙墓である。隅丸長方形を呈する上辺は長辺1.05m，短辺0.54mである。底面は西側にテラス面を有し，東側の円形に近い掘り込みより5cm程高い。従って深さはテラス側で14cm，最も深い箇所で24cmを測る。この円形の掘り込みは中央部近くより壁側に高く傾斜している。主軸方位をS—85°—Eにとる。土壙内より丹塗りの甕形土器の破片が出土した。

5号土壙墓〔No.174〕（図版62—1，第63図）

墓域の中央部西端に位置する2段掘りの土壙墓で，上面観は不整長方形を呈し，南側に広い。上辺は100cm，短辺62cm，下段部は若干東に寄り隅丸長方形を呈し，長辺54cm，短辺28cm



第65図　7号土壙墓実測図（1/30）



第66図　9・10号土壙墓実測図(1/30)

を測る。この下段部の底面中央部に5㎝程深い部分があり，東側に高く傾斜する。深さは上段部で10㎝，最下部で20㎝である。主軸をN—45°—Wにとる。内より壺形土器の胴部小破片が出土した。

6号土壙墓〔№156〕（図版62—2，第64図）

墓域の南半，西端部に位置し，台地の傾斜方向に主軸N—41°—Eをとる素掘りの土壙墓である。長方形プランを呈すが，東南側はピット状の遺構によって大きく切られている。長辺1.25m，短辺0.53mを測る。底面は東から西方向へ15度ほど傾斜し，丸味を有す。深さは45㎝を測る。

7号土壙墓〔№189〕（図版63—1，第65図）

墓域の南西端で，台地の崖斜面を切り，ほぼ地形の流れに沿った2段掘りの土壙墓である。墓壙は127号甕棺墓によって切られている。台地の南端部は葬状遺構をはじめ，125～127号甕棺墓の状況から若干削平されている可能性が強い。上辺は不整長方形を呈し，長辺1.9m前後短辺1m強を測る。2段目の掘方は隅丸長方形を呈し，長辺1.24m，短辺0.49mで，底面は北から南へ傾斜しているが，全体に平坦である。深さは上段まで0.7m，底面まで1mと非常に深い。主軸方位はN—26°—Wにとる。遺物は出土しなかった。

8号土壙墓〔№73〕（第64図）

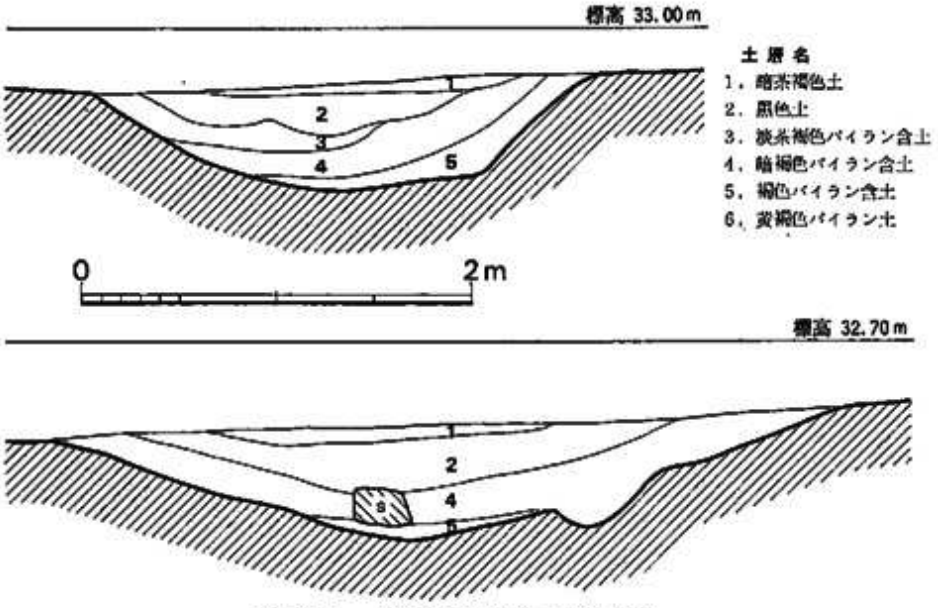
4・9号土壙墓間に位置し，上部は原6号周溝墓の周溝と重複して検出された。楕円形を呈し，北側にテラス面を設ける。長辺1.02m，短辺0.46～0.51mで南側に若干拡い。北端から25㎝で，約3㎝ほど下がり底面に移行する。底面はわずかな凹凸がみられる。上面から底部まで12㎝と非常に浅いが，これは6号周溝墓で削平されているためである。墓壙の形態から北側を頭部としたもので，主軸をN—22°—Wにとる。土壙内より丹塗りの傘蓋形土器片が出土し，その破片は52号甕棺墓壙内出土片と接合した（第61図3）。

9号土壙墓〔№153〕（第66図）

8号土壙墓の南に接して検出された素掘りで小型の土壙墓で，卵形を呈す。長辺は65㎝，最大幅43㎝，深さ15㎝を測る。底面は中央部がへこむ。小児用の土壙墓であろう。主軸方位N—48°—Wにとる。遺物は出土してしない。

10号土壙墓〔№182〕（図版63—2，第66図）

墓域南端で，台地の南崖に検出された2段掘りの土壙墓である。墓壙内は123号甕棺墓，墓壙の南東隅は125号甕棺墓に切られている。上面は不整長方形を呈し，長辺2.28m，短辺1.78mを測る大きなものである。上端から1.1mほど掘り下げてから，北寄りに埋葬施設を設ける。下段部は長辺1.24m，短辺0.53mで，長方形を呈す。深さは25㎝前後で，床面は中央部が若干へこむ。床面の標高は30.8mで，7号土壙墓より若干高い。墓壙内の南西側にテラス面を設けているが性格は不明である。主軸はN—62°—Wにとる。遺物は出土していない。

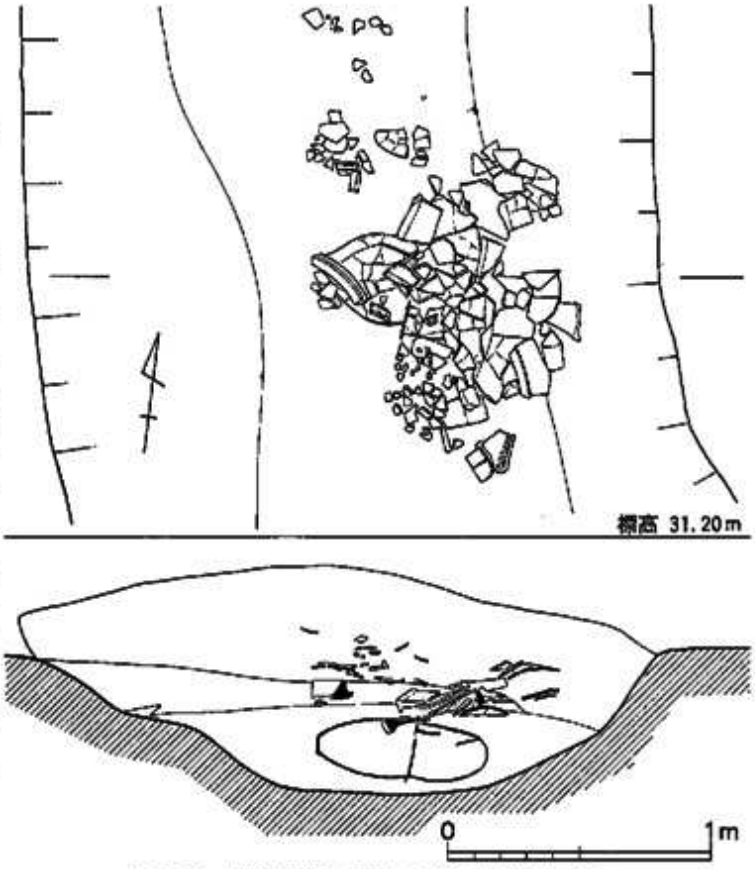


第67図　溝状遺構土層断面図（1/40）

4. 溝状遺構

（図版64—2，第67・68図）

台地の南斜面から南北方向に走る溝で全長12.1mを測る。南端は崖端に抜け，若干西偏しながらK 99・100甕棺墓の東側1mの間隔をあけて北へ延び，B 9区の境界杭の手前で終る。標高は南端で31.3m，北端で33.1mと1.8mの比高差を有す。断面は浅いU字形で，深さ50～60cm。特に中央部底面は平坦に近くなる。溝内には4ないし



第68図　溝状遺構内遺物出土状態実測図（1/30）

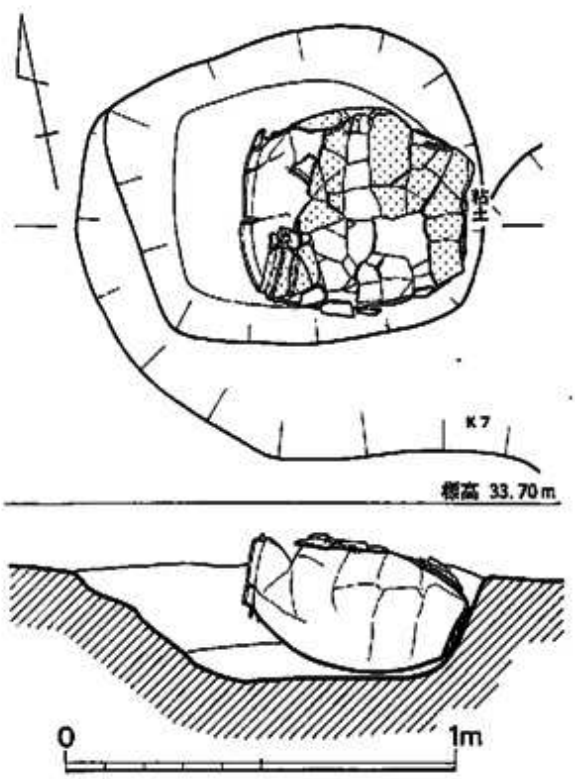
5枚の土層堆積が認められる（第67図）。そのうち2層の黒色土内に多量の甕棺片が破棄された状態で出土した（第68図）。この溝が切れる北端から，幅2m前後の甕棺の空白部が墓域の北側まで続いている。これを調査時点では墓域が東西に分離される現象面のみで把えていたが，溝状遺構との関連からして，墓域内の通路として把握し，溝状遺構も墓地に登る道としての機能を本来は有していたと考えてみたい。そして，溝内に破棄された土器片から中期後葉頃に道としての機能が失なわれる。

5. 祭祀遺構

墓壙内に丹塗磨研土器のみを納めた遺構である。類似した遺構は福岡市宝台遺跡・諸岡遺跡，三輪町栗田遺跡等の甕棺遺跡で検出され，祭祀的な性格を有する遺構として注意されている。当遺跡でも4ヶ所検出された。

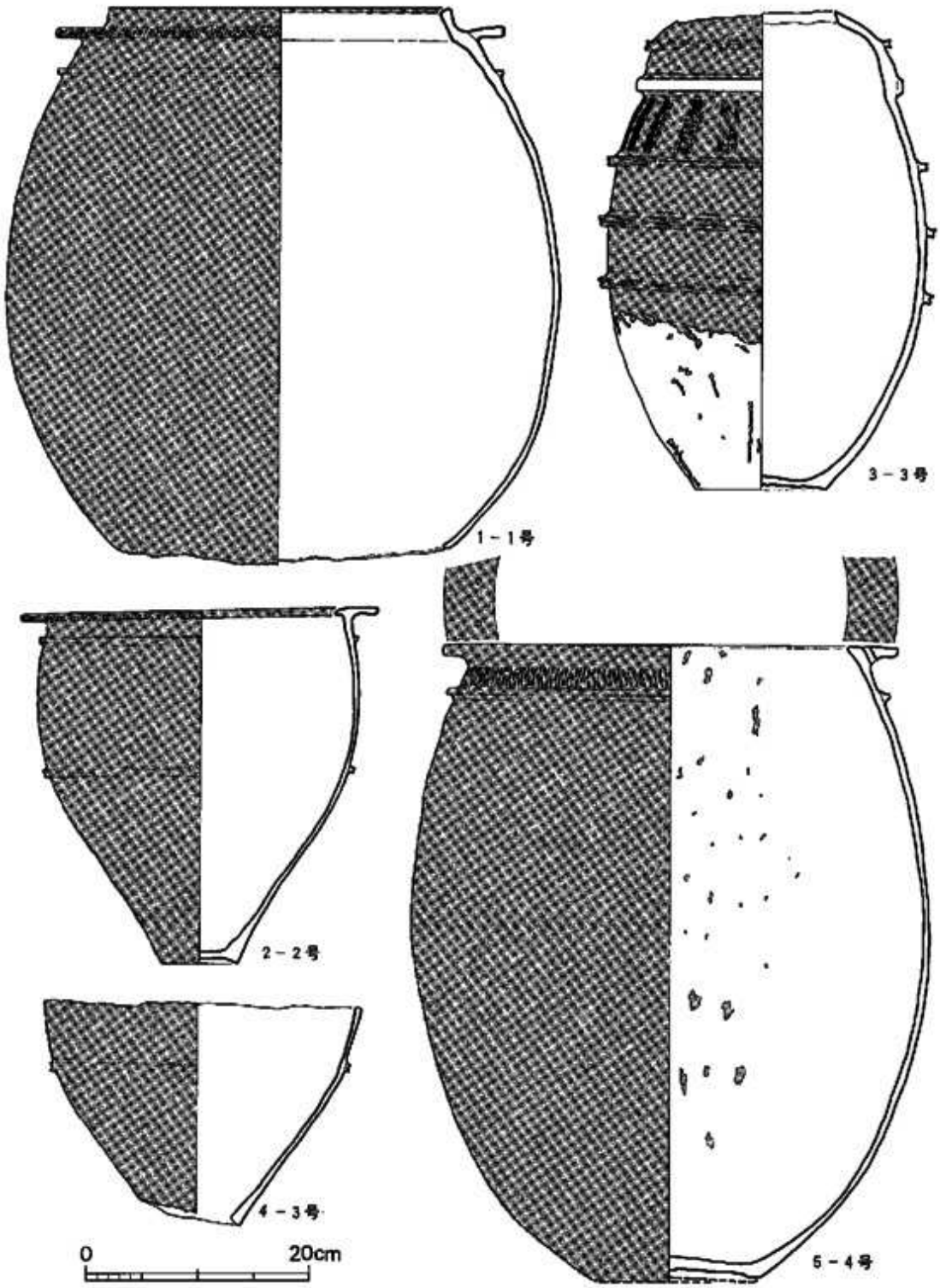
1号祭祀遺構〔No.11〕（図版66—1・68—1，第69・70図1）

墓域の北部西側に位置し，7号甕棺墓を切って検出された。壙は隅丸長方形を呈し，長辺93cm，短辺85cmを測り，台形状の断面は深さ25cmであるが，上部は削平されている。壙の南東寄りに納められた樽形の壺形土器は，口縁部を西に向けて約16度の傾きで置かれ，底部は打ち欠いている。その底部周辺には青灰色の粘土が填てられている。

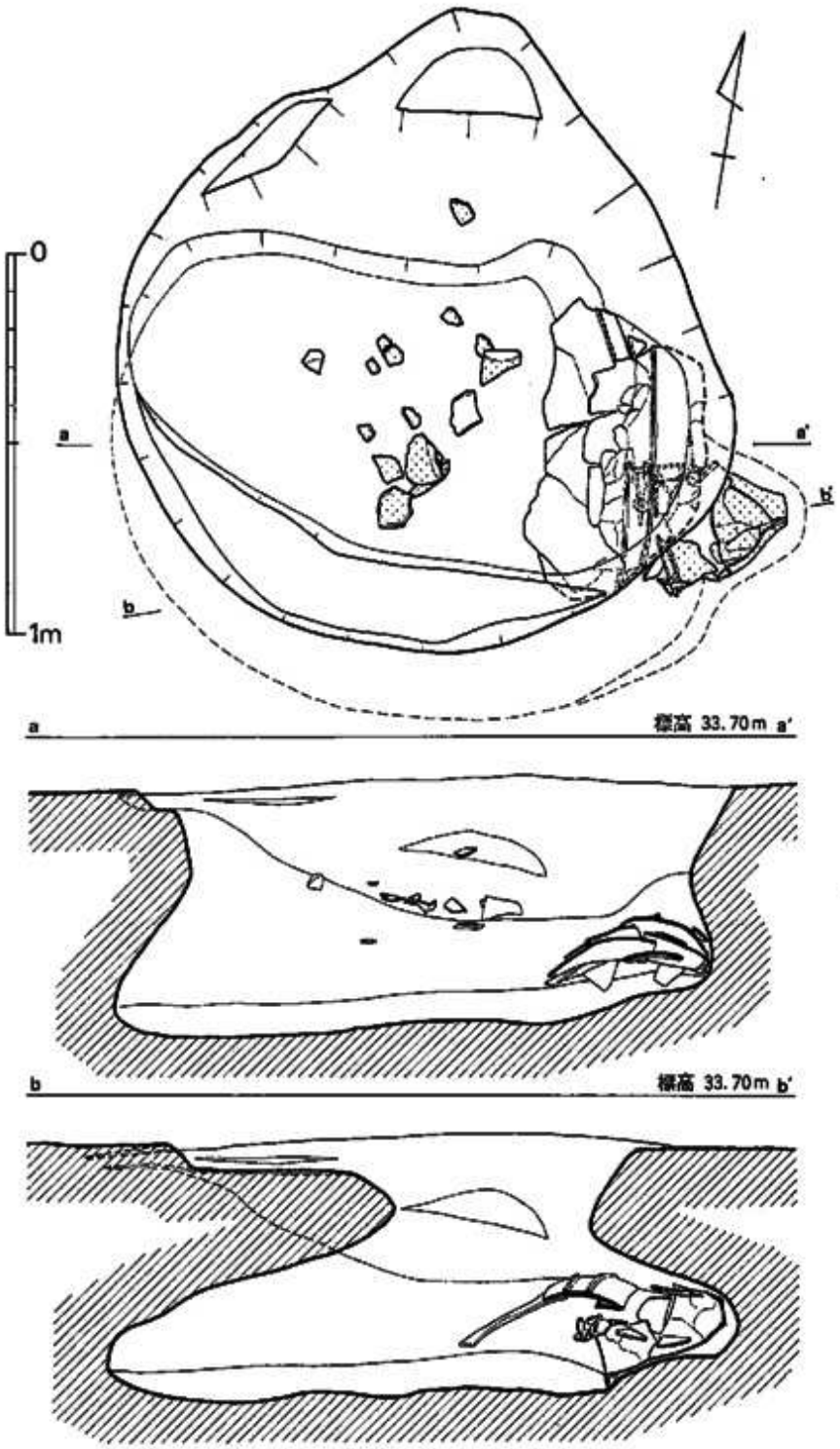


第69図　1号祭祀遺構実測図（1/20）

第70図1は口径30.5cm，現存する器高48.5cmを測る底部を打ち欠いた丹塗り樽形の壺形土器である。直口して立ちあがる口縁下に，ゆるやかに内傾した幅3cmの鍔を有し，内側に弱い稜をもつ。鍔部外唇はわずかに肥厚し，細かい斜方向の刻み目を施こす。胴部はゆるやかな膨らみを持ち，鍔部下に断面「コ」字形の凸帯を1条貼り付けている。37号下甕に比べて，胴部はやや膨らみ口縁は直口する器形である。鍔部以上は，祭祀用の特殊



第70図　1～4号祭祀遺構出土土器実測図 (1/6)



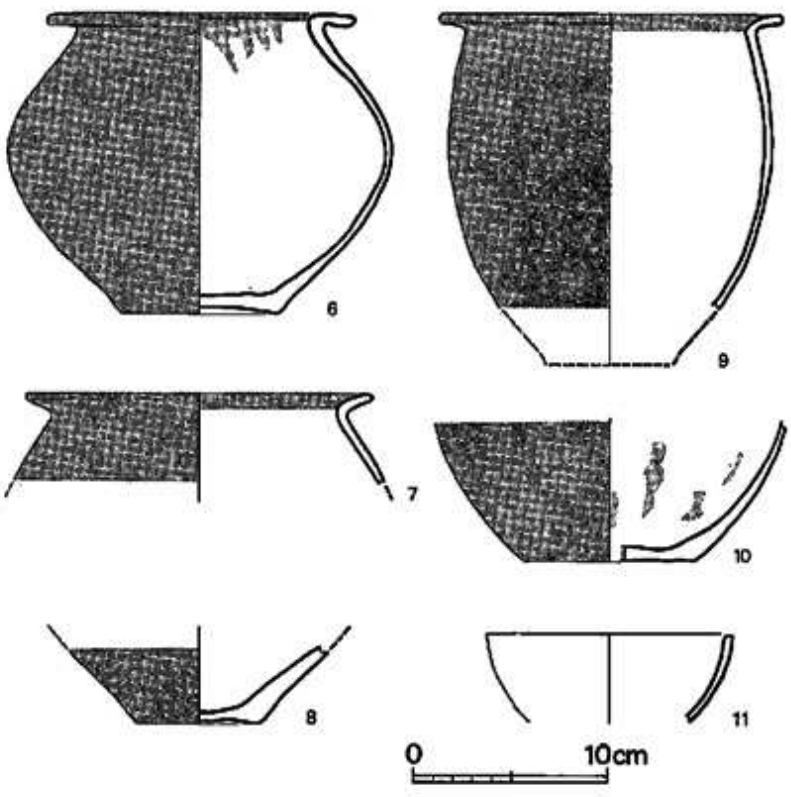
第71図　2号祭祀遺構実測図 (1/20)

な器形を保つために延ばしたと考えられ，さすれば鍔部を口縁部として４号祭祀遺構出土の甕形土器にきわめて類似する。口縁部と凸帯間は横方向，凸帯下は縦方向の研磨が施こされる。内面の調整は口縁部がヨコナデの他はナデで仕上げ，色調は明赤褐色を呈す。胎土は良く精選され，焼成は良好で堅緻。

２号祭祀遺構〔No.21〕（図版66—２・67—１・68—２，第70図２・71・72図）

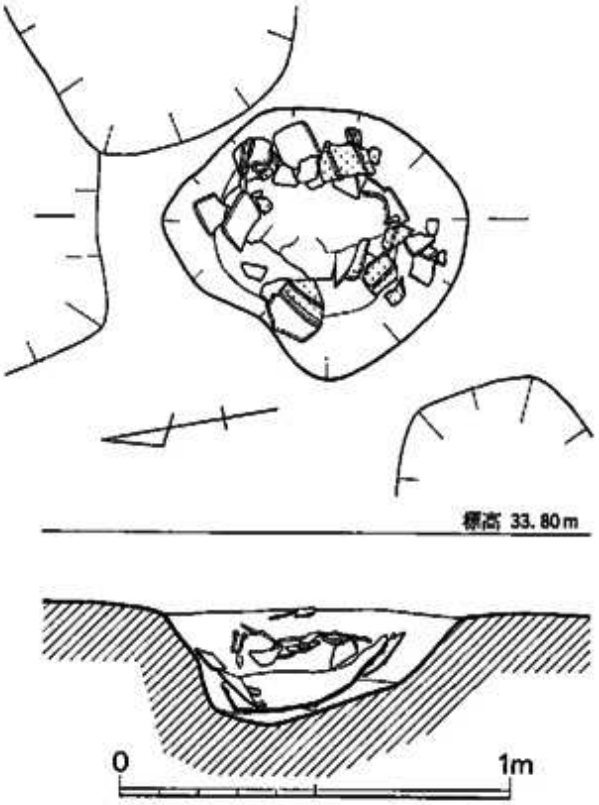
10号甕棺墓を巡る溝の南西端部から50cm程南に検出された。不整円形を呈す上面からオーバーハングして65cmほど掘り込んだ壙内に成人用甕棺用に作られた２条の「コ」字形凸帯を有す甕の胴部が３段に積み重ねた状態で東側に寄せられ，その下に丹塗り甕形土器がつぶれた状態で出土した。その他，壙上半部には破砕された丹塗り無頸壺２，甕１のほか鉢形土器の破片が出土した。

２は口径31.8cm，底径6.7cm，器高31.4cmを測る小型の甕形土器で，口縁部は平坦で，逆「L」字状を呈し，刻み目を施こす端部はやや厚みを増す。内唇は小さく張り出し，口縁下に断面「M」字形凸帯を１条巡らし器壁は厚い。底部は上げ底で，反りぎみに倒卵形の胴部へつづき，胴部中位に下向きの断面「M」字状凸帯を一条巡らす。外面は全体に赤色顔料が塗布され，胴部下位は縦，それより上は横方向に丁寧に研磨され，内面は口縁部がヨコナデの他はナデで仕上げられ，明淡褐色を呈する。胎土は良く精選され，石英砂・雲母を含み，焼成は良好・堅緻。第72図６は口径15.8cm，底径8.0cm，器高15.4cmを測る無頸の壺形土器で丹塗りである。内唇が肥厚した口縁部は平坦で，端部は丸く納めている。胴部は中位で最大径19.8cmを測



第72図　２号祭祀遺構出土土器実測図（1/4）

り，大き膨らみ，あげ底の底部へつながる。口縁部と外面は横方向に研磨しているが，全体的に摩滅が著しい。7も無頸の壺形土器で，口径17.8cmを測る。口縁部が「く」字状を呈し，胴部は大きく膨らむ。器面の摩滅が著しく，調整は不明だが口縁部外面に丹の痕跡がみられる。8の底部が接合するものと考えられる。9は底部を欠く甕形土器で，口径17.8cm，現存高15.1cmを測る。「く」字状口縁は内側に弱い稜を有し，端部が肥厚し，胴部の張りは弱い。全体に風化が著しいが，胎土は良好で，若干の細砂粒・雲母を含む。胴上半に丹塗りの痕跡が残り，内面の色調は淡黄褐色を呈す。10は底部破片で，径8.8cm。胴部はかなり膨らむようだ。丹塗りの痕跡がのこる。11は椀形土器で，口縁部近くで直口ぎみに立ちあがる。全体に摩滅が著しいが，外面に一部丹塗りの痕跡がある。色調は明淡褐色を呈す。



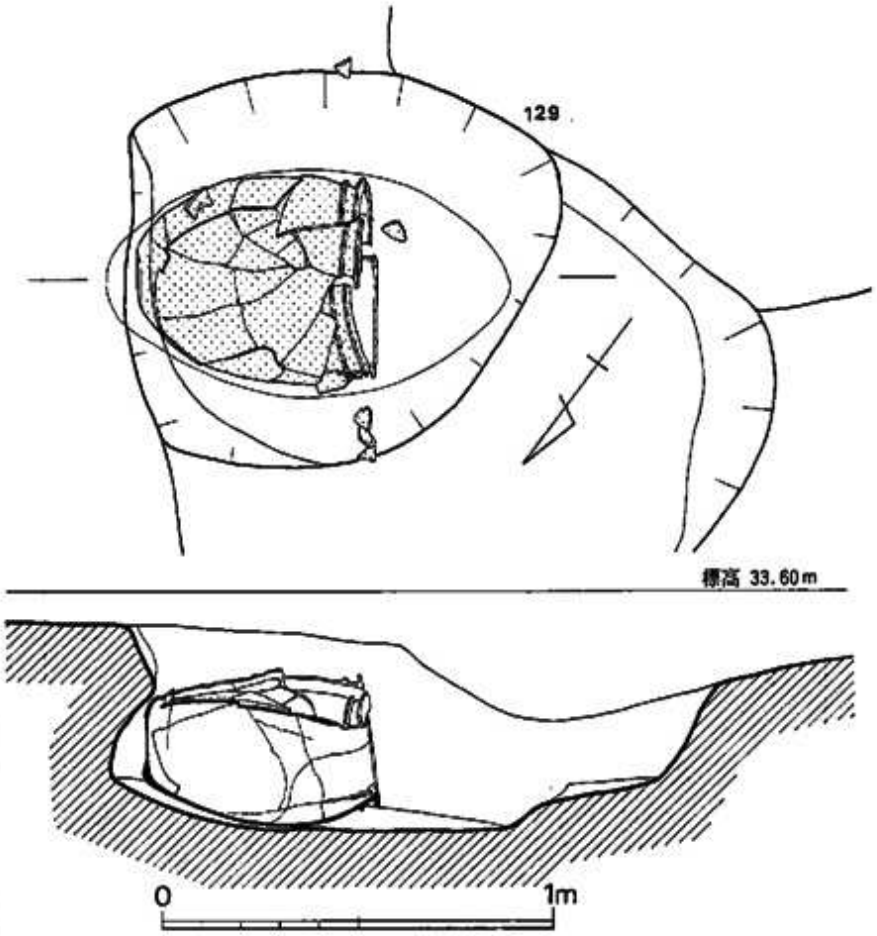
第73図　3号祭祀遺構実測図（1/20）

3号祭祀遺構〔No.107〕（図版25—2 67—2・68—3，第70図3・4，73図）

墓域の北西側に位置し，4号祭祀遺構の東側に接して検出された。径70cm内外のほぼ円形プランを呈す壙は約30cmほど斜めに掘り込まれている。壙内下底部には口縁部を打ち欠いた甕形の壺形土器と上部に口縁・底部を欠く甕形土器の2個体が出土した。特に甕形の壺形土器は器表面を上に向けた部分が壙内に円弧状に存在し，意識的な破砕状態を示していよう。この甕形土器上半の頸部片は4号祭祀遺構出土の甕形土器片と接合した。

第70図3は口縁部を打ち欠いた，いわゆる甕形の壺形土器で，現存高43cm，底径11.8cmを測る。計5条の凸帯をほぼ等間隔に有し，上から2条目で屈曲し，その上部は大きく内彎し，下部はゆるやかに膨らみ，4条目の凸帯から徐々にすぼまり，11.8cmと広めの底部へ移行する。2条目の凸帯を境にして基本的に異なる器形の土器を合成したものであろう。凸帯は2条目が鈍状のもので丹塗り後に箆状工具にて削って低平なものにした他は「M」字形凸帯である。2，3条の凸帯間に約2cm間隔の暗文帯(10～12本を単位とする)を形成している。丹は5条目の凸帯下2cmまで施こされ，それ以下には丹のこぼれが観察される。外面は5条目の凸帯まで

が丁寧な横方向の研磨が施こされ，それ以下はナデ。内面は屈曲部がヨコナデ，他はナデで仕上げている。胎土・焼成とも良好で，内面の色調は淡明褐色を呈している。4は甕形土器で胴部のみの破片である。現存高20.1cmを測る。胴中部に1条の「M」字形凸帯が巡る。外面は丹塗り研磨，内面はナデで丁寧に仕上げられる。



第74図　4号祭祀遺構実測図（1/20）

4号祭祀遺構〔№92〕（図版42—1・48—4，第70図5・74図）

130号甕棺墓の東側で，その墓壙を切って検出された。径約1～1.1mの不整円形を呈す墳内北東寄りに棒状の甕形土器を納めている。土器は口縁を南西向きにし，ほぼ水平に置かれた完形品で，当初は単棺墓として扱かっていたが，器形が特殊な点から祭祀遺構と解釈した。

第70図5は口径40.9cm，底径14.3cm，器高56.9cmを測る平坦な逆「L」字状の口縁下に1条の断面「コ」字形の凸帯を貼りつけている。胴部はゆるやかに内湾して上げ底の底部へ移行する。広く中央部の厚い底部など109号甕棺上甕ときわめてよく似た形状を呈し，甕形土器の中では特異な形できわめて壺形に近い甕形土器である。口唇部には上から下方向へ焼成前に2孔が相対する位置に穿たれている。外面が全体に赤色顔料が塗布・研磨され，凸帯と口縁部間に暗文が施こされる。口縁部内面がヨコナデの他はナデ仕上げである。色調は淡明褐色を呈す。胎土は精選されているが，砂粒を含み，焼成は良好。

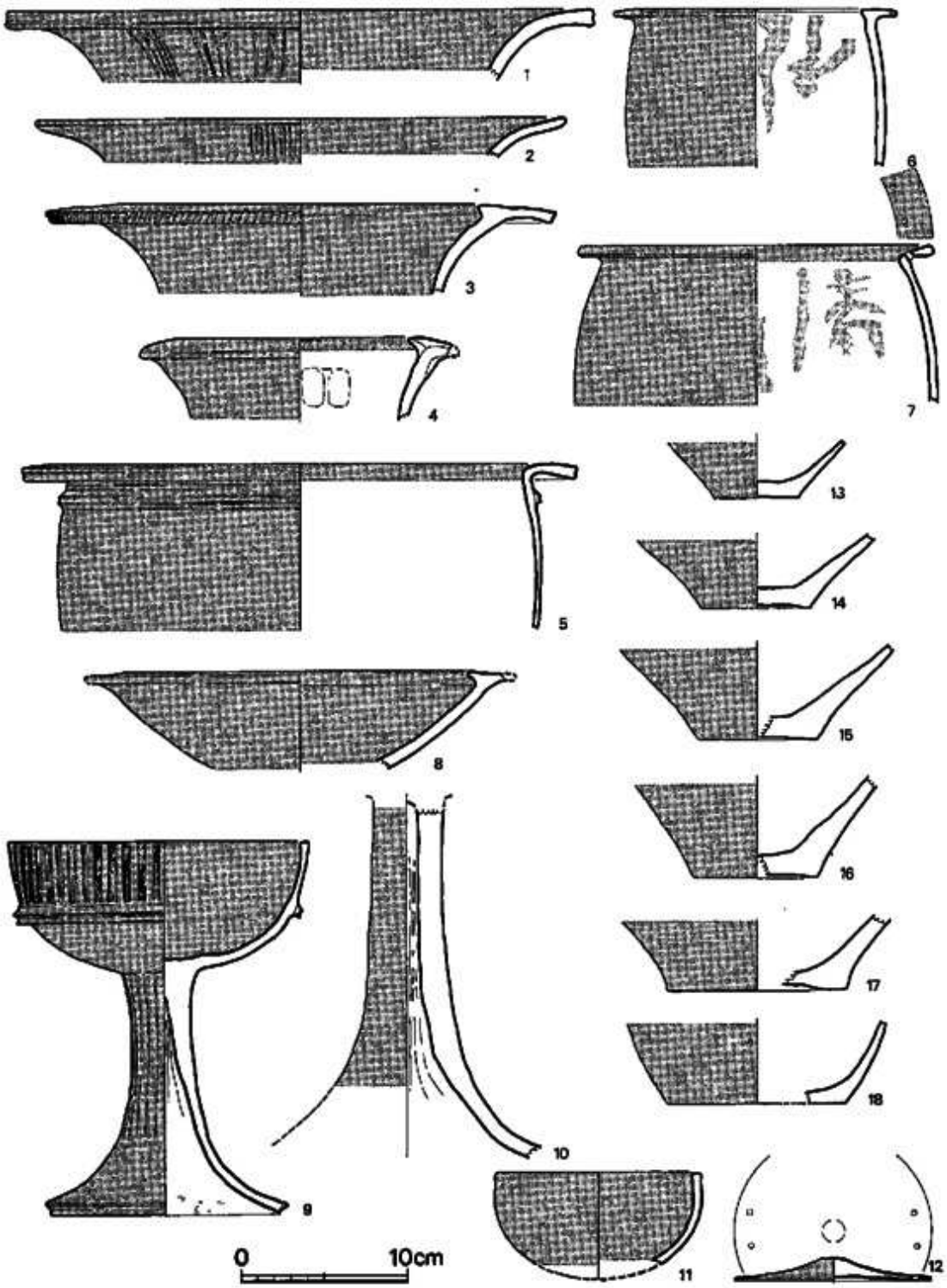
6. 包含層出土の土器（第75・76図）

弥生時代及び古墳時代の調査で出土し，遺構が不確実なものや表土層出土の土器を一括した。第75図は丹塗り土器，第76図はその他の土器である。

1～4は壺形土器である。1は復原口径35.4cmを測る丹塗りの広口壺形土器である。口唇部はナデにより凹み，頸部には4～5本一単位とする暗文を施こす。内面は斜め，外面は横方向に研磨されている。胎土は良質で，細砂粒・雲母を含み，焼成は良好。2は朝顔状にひらく口縁をもつ丹塗りの広口壺形土器である。口縁下は竹先による暗文を間をあけて施し，内外面とも横方向に（丹塗り）研磨されている。胎土は良質で細砂を含み，焼成は良好。3は口径30.6cmを測る丹塗りの広口壺形土器。朝顔状にひろがる頸部に鋤先状口縁をのせ，端部に刻み目を施す。口縁部内外はヨコナデ後丹塗り，頸部内面はナデで仕上げ暗明褐色を呈する。胎土に石英砂・雲母を含み，焼成は良好。4は復原口径19.2cmを測り，口唇部を欠く。外傾する口縁下の器壁は厚みを増す。外面は横方向に丹塗り研磨され，内面はナデで仕上げられ，口縁下には丹塗りの痕跡がみられる。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成は良く，色調は暗赤褐色。

5～7は甕形土器である。5は口径33.3cmを測る丹塗りの甕形土器である。逆「L」字状の口縁は端部がわずかに垂れ，口縁直下には断面「M」字形の凸帯を1条貼りつけている。胴部の張りは弱い。外面は横方向の研磨，内面はナデで仕上げ，色調は淡明褐色。胎土は良質で細砂粒を若干含み，焼成は良好。6は口径17.1cmを測る丹塗りの甕形土器。逆「L」字状の口縁は端部が細くわずかに垂れ，胴部は厚く，あまり張らない。外面は横方向に丁寧に研磨され，内面はナデで仕上げ，淡明褐色を呈し，丹がながれている。胎土は良質で砂粒を含み，焼成は良好。7は口径21.3cmを測る甕形土器。ゆるく内傾する口縁部は端部が肥厚し，器面にはほぼ垂直に1.9cm間隔で穿っており，恐らくは2孔を1対として2対計4孔が穿たれていたと考えられる。口縁部内外および外面は横方向に丹塗り研磨され，内面はナデで仕上げ明褐色を呈するが一部で丹が流れている。胎土は良質で若干の細砂・雲母を含み，焼成は良好。

8～10は高杯である。8は復原口径26cmを測り，わずかに外傾する鋤先状口縁をもつ高杯である。胴部の器壁は厚い。風化による摩滅が著しいが内外面とも丹塗りである。胎土に砂粒・雲母を若干含み，焼成は良好。9はNo.190遺構上部出土で，杯部口径18.1cm，脚部径13.7cm，器高22.4cmを測る丹塗りの高杯である。杯部はゆるやかに膨らみ直口する口縁は内彎ぎみに立ち上がる。杯部中位には下向きの断面「M」字形凸帯を1条貼りつけ口縁部との間に3～4本を単位とする暗文帯をつくる。脚部は細くしまり，裾部はゆるやかにひろがる。杯部内外面は横方向，脚部は縦方向に研磨され，脚部内面はしぼり，裾部はナデで仕上げている。胎土は良質で，細砂・雲母微細を含み，焼成は良好・堅緻。脚部内面は淡明褐色を呈し，丹がこぼれて



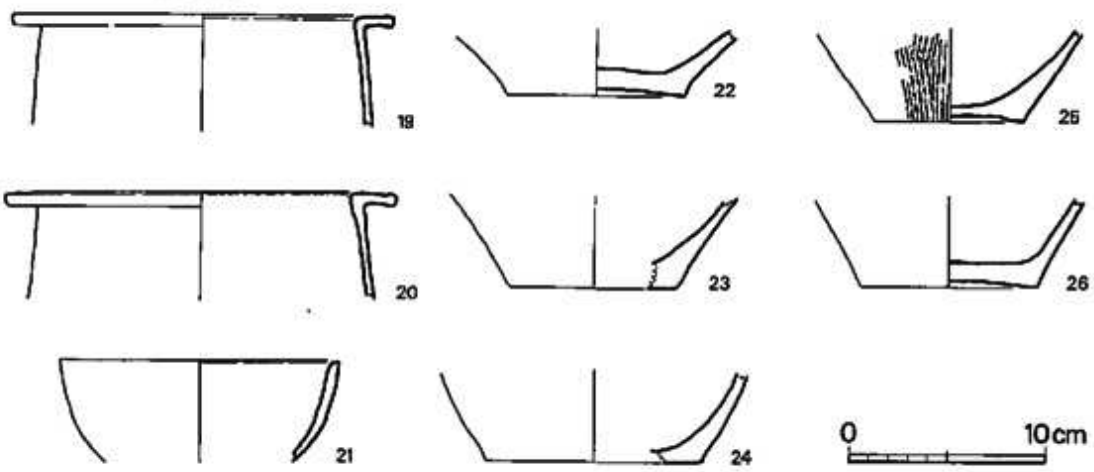
第75図　包含層出土土器実測図 1 (1/4)

いる。10は杯部と脚部を欠く細長い高杯の脚部で内面にしぼりの痕がみられ，裾部はナデで仕上げている。外面の調整は風化による器面のあれが顕著なために不明ではあるが部分的に丹塗りの痕跡がある。胎土に砂粒を含み焼成は普通で色調は暗明褐色。

11は口径12.4cm，現存する器高5.5cmを測る椀形土器である。直口する口縁部を有し，口唇部は平坦である。内外面とも丹塗りが施こされ，よく研磨されているが外面は風化が顕著である。胎土は良質で，細砂・雲母を含み，焼成は良好。

12は口径11.7cm，器高1.4cmを測る傘蓋形土器で，器面に垂直に2孔がおよそ1.7cmの間隔をもって焼成前に穿たれている。外面は丹塗りでよく研磨され，内面はわずかに凹み，頂部は平坦でナデで仕上げ，淡明褐色を呈する。胎土は良質で，砂粒・雲母を含み，焼成は良好・堅緻。

13～18は底部を一括した。13は底径5.2cmを測る壺形土器で，中央がわずかに凹む。調整は摩滅が著しく不明瞭。胎土は良質で細砂を含み，焼成は良好。色調は内面が暗明褐色，外面が淡褐色。14は底径6.5cmを測る丹塗り壺形土器底部である。内外面ともに摩滅が著しく調整は不明。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成は良く，内面は暗明褐色。15は底径6.9cmを測る壺形土器の底部である。厚手の底部はわずかに凹み反りぎみに胴部へ移る。外面は剝落が著しいが丹塗りであり，内面はナデで仕上げられ淡褐色を呈する。胎土は良質で，細砂・雲母を含み，焼成は良好。16は底径7.4cmを測り，外面は丹塗研磨，内面はナデで仕上げ暗明褐色を呈する。胎土は石英砂・雲母を含み，焼成は良好。17は底径10.8cmを測り，内面はナデで仕上げ，外面は摩滅が著しいが丹塗りである。底部外面にも丹が塗られている。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成は良好。色調は淡明褐色。18は平底で底径10.4cmを測り，胴部は内彎して立ち上がる。外面は縦方向に丹塗研磨され，底部外面も丹塗りである。胎土は石英砂・雲母を含み，焼成は良く，色調は暗淡褐色。



第76図　包含層出土土器実測図2 (1/4)

19は甕形土器で復原口径19.5cmを測り，逆「L」字状を呈する口縁部は，内側に弱い稜をもち，胴はあまり張らない。口縁部内外がヨコナデの他はナデで仕上げ，色調は淡褐色。胎土は石英砂・雲母を含み，焼成は良好。20は胴部のあまり張らない甕形土器で，復原口径20.0cmを測る。口縁部はわずかに外傾する逆「L」字状を呈し，内側は厚みを増す。口縁部内外はヨコナデ，内面はナデで仕上げている。胎土に細砂粒・雲母を含み，焼成は普通。色調は内面が灰黄褐色，外面は暗灰褐色。

21は口径14.2cm，現存する器高5.1cmを測る椀形土器で，口縁部は外反ぎみに直口し，端部は丸味をもつ。内外面とも丁寧にナデで仕上げられ，明褐色を呈する。胎土は砂粒と若干の雲母を含み，焼成は良好。

22～26は底部である。22は上げ底の底部で，底径は9.0cmを測る。調整は風化が著しく不明。胎土は砂粒・雲母を含み焼成は良く，色調は淡褐色。23は底径8.4cmを測る。内面はナデで仕上げているが外面は摩滅が著しく不明。胎土に石英砂・雲母を含み，焼成は良。色調は内面が暗明褐色，外面は淡褐色。24は平底で，底径11.2cmを測り，膨らみをもって立ち上がる。内外面ともナデで仕上げ，淡褐色を呈する。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成は良好。25は底径7.6cmを測る上げ底で，内面はナデで仕上げ，外面は刷毛調整を施こしている。底部外面に黒斑を有し，色調は淡黄褐色。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成は良好。26は底径9.0cmを測る上げ底の底部で，風化が著しく調整は不明。胎土は砂粒・雲母を含み，焼成は良く，淡褐色を呈する。

7. 出土人骨について

原遺跡の甕棺内埋葬人骨9体の鑑定結果は次の通りである。

表 6　　人　骨　一　覧　表

甕棺番号	性別	年令	保存状態	推定身長(cm)	頭形示数	抜歯痕跡	備　考
K5	♀	熟年	△	158.3	74.7	な し	
K10	♂	熟年	◐	(164.2)	74.5	な し	顔面に赤色顔料付着
K29	♂	幼児	◐	——	——	な し	2才前後
K30	♂	熟年	○	——	73.9	な し	
K46	♂	熟年	○	158.1	73.6	な し	
K56	♂	成年	◐	156.8	——	な し	
K99	♀	成年	○	144.5	76.2	な し	20才前後
K100	♀	熟年	△	146.8	77.3	な し	
K134	♀	熟年	◎	152.5	76.7	な し	40才代

保存状態　最良 ◎　良好 ○　不良 △　部分的残存 ◐

凡例　♂……性別不明

成人…20才以上なるもの，成年・熟年・老年の区別不明

（　）で囲める数値はやや不確実

—— は不明

総括的特記所見

既知の弥生時代集団埋葬人骨に較べ，低身長頭に傾き縄文時代以来の形質を残す集団と考えられる。

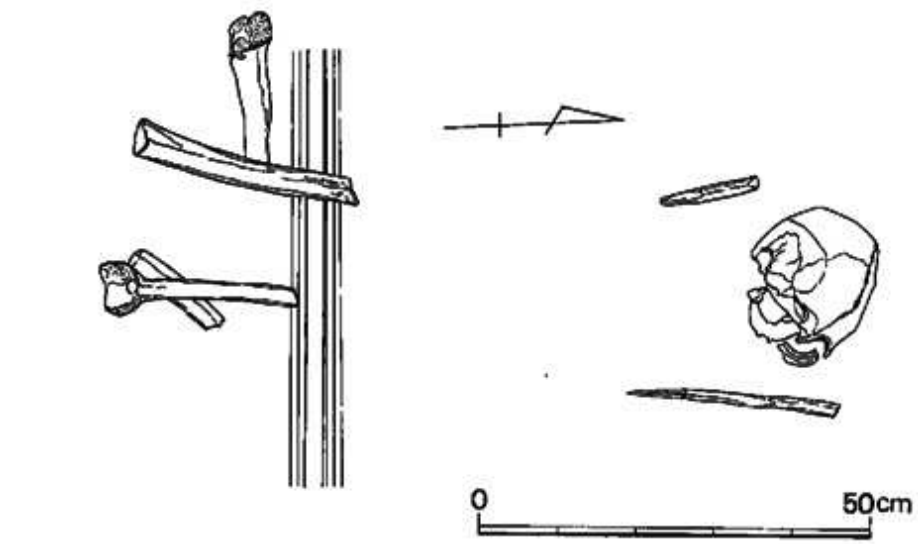
概括所見

甕棺内埋葬人骨9体の所見は次の通りである。

保存状態　昨年度報告した門田遺跡などとくらべると全般に保存は良好である。性別は男4，女4でK29は幼児骨で性別推定は困難であった。

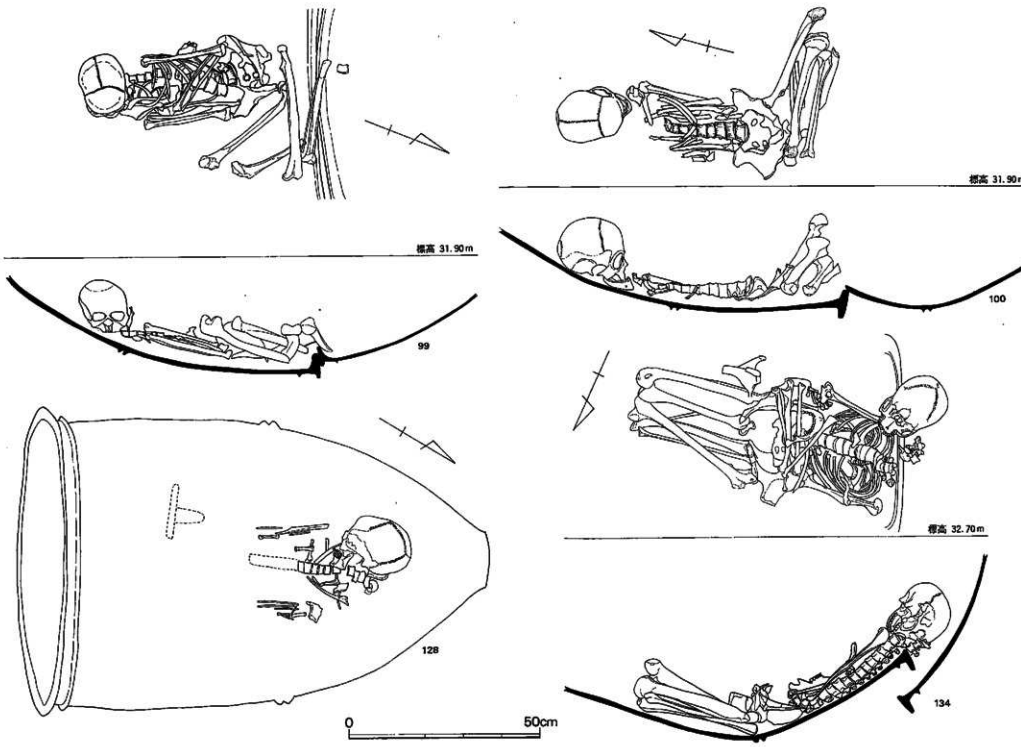
葬法姿勢　調査時の鑑定で，大部分が仰臥屈葬であるが，部分骨のものもあり確信は憚る。

総括的特記所見　金隈・門田遺跡等既知の弥生時代集団埋葬墓人骨と較べ，低身長頭に傾き，縄文時代以来の形質を残す集団と考えられる。K10は当遺跡で最も大きい墓壙内に埋葬され，男性，熟年。身長164.2㎝と最大値を示す。この人骨のみ顔面に赤色顔料が付着していた。



標高 32.40m

第77図　10号甕棺墓人骨実測図 (1/10)



第78図　99・100・128・134号甕棺墓人骨実測図(1/10)

8. 小　　結

(1) 甕棺について

原遺跡は破壊される甕棺墓のみの調査であるためにその全容は不明であるが，出土した14基の成人用甕棺を形態的に分類し，その変遷を試みてみたい。

北部九州地方においてその特異な発達を遂げる甕棺の編年は，1928年に島田貞彦・水野清一氏等によってその本格的研究の道がひらかれ，今日では伯玄式一金海式一城ノ越式一汲田式一須玖式一立岩式一桜馬場式一三津式一？一日佐原式と編年し，この間に継続的発展を求めている森編年案(註1)がもっとも普遍的に用いられている。

一方，それはこれらの型式のほとんどを内包する福岡市金隈遺跡の調査によってなされた折尾編年案(註2)とも細部に若干の相違を有するもののその大要においては一致し，検証されている。

本遺跡における甕棺の時期については中期中葉～後葉に位置づけられ，それは森編年のいわゆる須玖式～立岩式に相当する。そして，この須玖式，立岩式の甕棺は次の様な形態的特徴を有するものとされている。

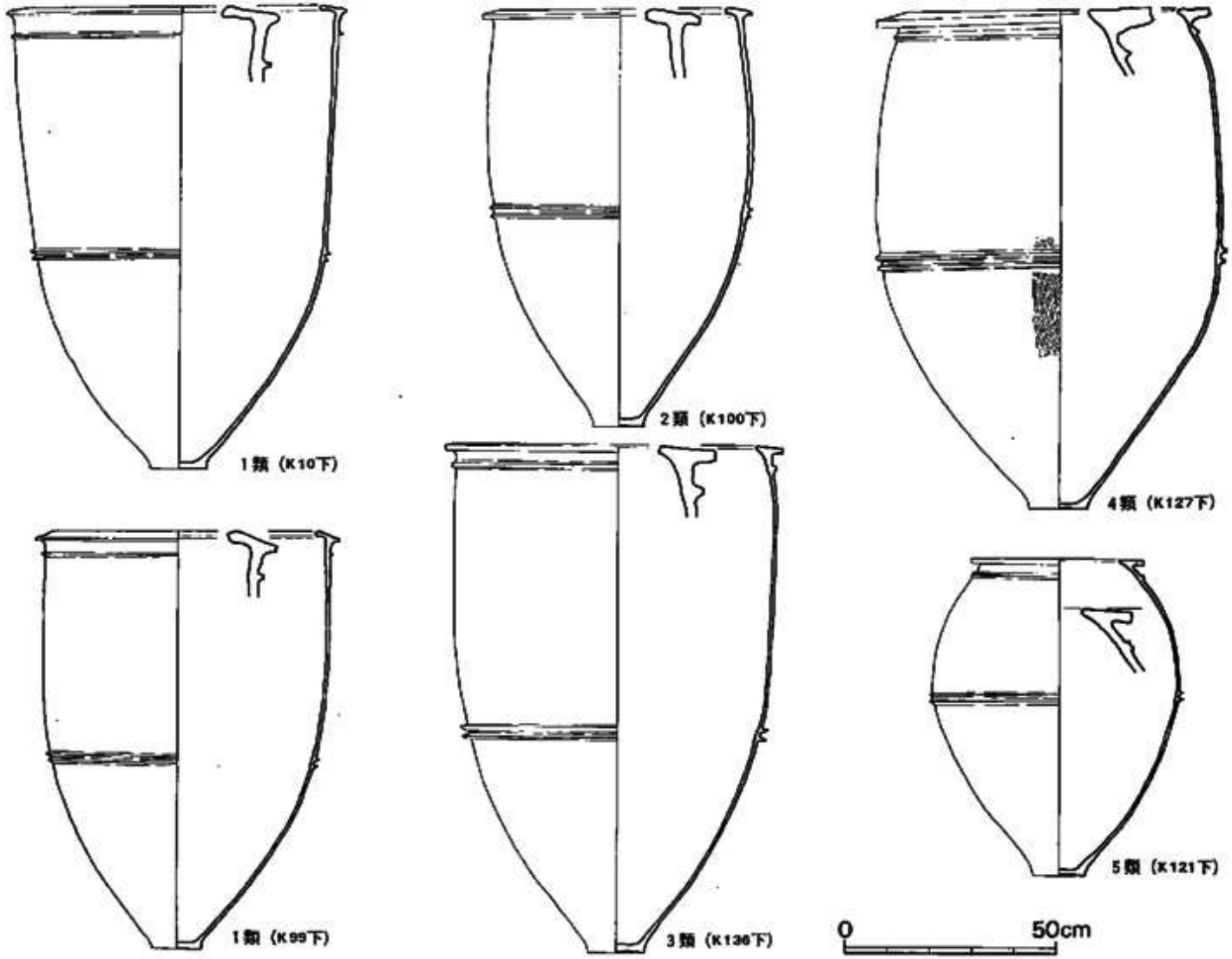
〔須玖式〕　宝台8号甕棺・須玖岡本13号甕棺等に代表される。いわゆる「T」字状の口縁部は発達し，円筒状をなす胴部上半は凸帯を境として安定感のある底部へすぼまってゆく。口縁部直下に1条，胴部に2条の断面三角形凸帯を設ける例が多い。器面は刷毛目調整のあとナデで整えている。その分布は北部九州における甕棺分布圏のほぼ全域にわたり，甕棺墓の最盛期にあたる。そのために地域差が顕著になり，同一地域においても様々な変形を生じる。

〔立岩式〕　立岩10号甕棺・一の谷18号甕棺等に代表される。断面「T」字状の口縁部は一層発達して重厚になるが，内唇の退化により「く」字状に近づく。器形は胴部凸帯より上半は丸味をおび，口縁下ですぼまる。底部は分厚く広くなり，全体として卵形にちかくなる。口縁部直下の凸帯は断面三角形か，あるいは断面「コ」字形をなし，胴部凸帯はやや下方に垂れぎみの断面「コ」字形となる。器面は刷毛目調整のあとナデで整えている。

次にこれらのことに留意しながら，本遺跡出土の14基の成人用甕棺についてみると，甕形土器はその形態差によって，5つのタイプに分類できる（第79図）。

(1)　「T」字状の口縁部は内側への張り出しが強く，口縁部直下に断面「コ」字形凸帯を1条もつ。胴部は凸帯から直線的に立ち上がりやや外開きぎみになる。胴部凸帯はシャープで胴部中位やや下にもつ。K10・下，K99・下がこのタイプに相当する。

(2)　外傾するいわゆる「T」字状口縁をその基本とする。胴部は凸帯を境として上半は直線的に立ち上がって円筒状をなし，下半は底部へゆるくすぼまっていく。口縁部直下に凸帯を有



第79図　主要甕棺実測図 (1/6)

さず胴部凸帯はシャープである。K100・下，K110・下，K135がこのタイプに相当する。

(3) 口縁部は水平な「T」字状を基本とし，内側への張り出しが弱く逆「L」字状に近い要素をもつ。胴部上半は凸帯から直線的に立ち上がり，口縁下部にいたってわずかに内彎する。胴部下半はゆるくすぼまり，凸帯は肥厚し，力強さを増すが若干だれぎみである。K5・下，K6・下，K128，K130，K136がこのタイプに相当する。

(4) 「T」字状の口縁部は厚く平坦で，一層強く外へ張り出す。胴部上半は凸帯からほぼ直線的に立ち上がり，上半は内彎して口縁部近くでその内彎度を強める。胴部凸帯下もかなりの膨らみをもち全体に頑丈で，どっしりとした重厚感をあたえる。凸帯は比較的シャープである。K125・下，K127がこのタイプに属する。

(5) 器高75～90cmと大形甕形土器の中ではやや小さく，口縁部は平坦な「T」字状を呈する。最大径を胴部中央やや上にもち，2条の凸帯を巡らし，この凸帯から胴部上半は急激に内彎してすぼまる。K121・下，K134・下をこのタイプに比定しうる。

本遺跡の甕棺はその形態差によっておおむね(1)～(5)タイプに区分され，更に，墓壙の切り合い等によって各タイプのながれを窺いうることができる。(1)タイプのK99と(2)タイプのK100とは同一墓壙内に埋置され，K99とK100との間に時間差は窺い得ない。口縁部下の凸帯の有無という相違はあるものの，外傾する「T」字状の口縁・シャープな胴部凸帯・円筒状の胴部などその形態はきわめて類似し，K99はおおむね(2)タイプに内包されると考えて間違いあるまい。しかし，K10は，この一群の中では明らかに古い様相を呈しており，(1)タイプから(2)タイプへの推移が考えられる。

次に，K10はK5およびK6によってその墓壙を切られており，その推移はおのずから(1)→(3)タイプと明確である。また外傾する「T」字状口縁と平坦な「T」字状口縁などの形態的特徴を考えあわせるならば(2)→(3)タイプへの移行も充分に理解される。

一方，(5)タイプはK134がK135の墓壙をきっていることから(2)タイプに後出するものである。このタイプの甕棺は比較的類例が少なく，その祖形は，筑紫野市永岡遺跡のK19に求めることができるとされる(註3)。しかし，「T」字状口縁・胴部凸帯などその形状は(4)タイプに比べて古い様相を呈し，(3)タイプに併行する可能性が考えられる。

この中で，外傾する「T」字状口縁をもち，円筒状の胴部は凸帯を境としてすぼまる特徴を有するK99，100，110，135の(2)タイプの一群は，従来の編年に充当すると，中期中葉のいわゆる須玖式に相当する。そして (1)・(3)タイプはおおむねその範疇に含めうるものの(1)タイプは比較的古い様相を示し，また，(3)タイプは逆「L」に近い水平な「T」字状口縁や，だれた凸帯など新しい形態的特徴を有し，須玖式の中でも新しく，(4)タイプに先行する一群と考えられる。

一方，(4)タイプはその形態的特徴から明らかに中期後葉の立岩式期に属するが，いわゆる立

岩式の様な「く」字状口縁にはいたらない。

こうしてみると，本遺跡では(1)→(2)→(3)→(4)と永岡遺跡のK19に祖形を求め得る(5)と云う二つのながれを見い出し得る。そして，この(1)→(4)のながれは，「T」字状口縁から逆「L」字状あるいは「く」字状口縁へと発展・移行する中期中葉～後葉のながれの中で充分に理解できる。その中で水平な「T」字状口縁をもつ(3)タイプはすでに，春日市高辻遺跡(註4)の調査において指摘されているように「T」字状から逆「L」字状あるいは「く」字状口縁へ移行する中間的・過渡的段階としてとらえうるものであろう。

元来，甕棺は継続的，かつ漸次的に形態的変遷を遂げているものであるから，これに明確な一線を画することは非常に困難なことであり，なおかつ極端な細分化は編年の一般的理解を一層困難なものにする。が，しかし，数少ない資料をもってしては，充分に云いえないが本遺跡の(3)タイプに属する一群の甕棺をこの地域における須玖式期から立岩式期への変遷の間の一つの過渡的なタイプとして位置づけておきたい。　　（小林　義彦）

註1　森貞次郎　「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化』金関丈夫博士古希記念論文集　1968

註2　折尾　学　「福岡市金隈遺跡第二次調査概報」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』17　1971

註3　橋口達也氏御教示。浜田信也・新原正典　「筑紫野市所在永岡甕棺遺跡（本文編）」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』5　福岡県教育委員会　1977

註4　井上裕弘　「高辻遺跡」『春日市文化財報告書』3　1973

(2)　埋葬傾斜について

人間の「死」のもつ意味も「生」と同様時代と共に変化する。当然墓制も同時に変化する。

弥生時代の共同体社会に於ける人間の死は単なる個人的な「死」を意味せず，共同体の一員としての「死」を意味する。故に葬制もすぐれて共同体的な制度となる。葬制にひそむ意識は共同体の意識でもある。共同体社会では「生」も共同体的なら「死」も共同体的である。

我々が葬制を一つの大きな課題とするのも「生」の共同体の状態や変化を窺い知る事ができるからである。従って弥生時代の「甕棺」の調査・研究は，それに使用された土器や副葬品の研究と共に，葬制つまり埋葬様式の研究も欠かせぬ重要な課題である。

埋葬様式を考える要件として以下の如き事項が考えられよう。

まず，どういう場所を選んで墓地としているかの占地条件が考えられる。それと集落との関係も忘れられない。次には被葬者の墓地内での埋葬位置―構成が考えられる。小児の墓地内に占める位置も問題となる。次に掲げられるのは，被葬者の頭位を示す埋葬方位の問題である。或いは下甕（本体甕）の開口方向も考えられる。更には埋葬傾斜が，埋葬姿勢や土器の組合わせ等とも密接に関連して欠かせぬ要件として掲げられる。

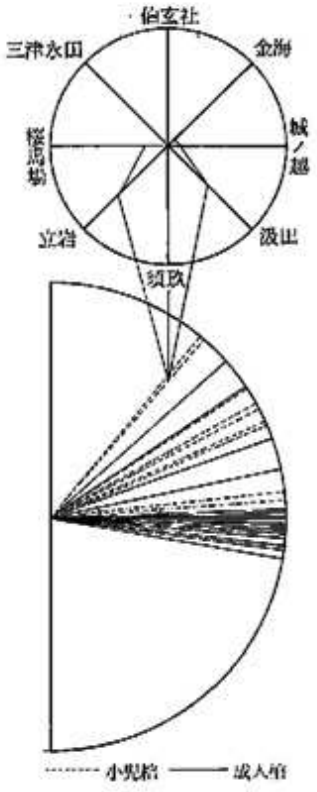
以上の要件を総合して，共同体の意識（例えば宗教観や宇宙観）或いは共同体の状態・変化

ひいてはそれを支える経済的基盤とその状態にも言及していけるであろう。また，共同体の規制—強制力と階級発生との拮抗関係にも言及が可能と考えられる。

本稿ではとりあえず埋葬傾斜について注目し，他遺跡例を引用しながら記述してみたい。他の要件については詳述を避け別の機会としたい。

記述にはいる前に，資料として操作したのは成人棺が中心である事をまずおことわりしておきたい。何故なら門田遺跡門田地区（第80図）でみられるように成人棺と小児棺とではその傾向に違いがみられるからである。また甕棺の型式編年については，最近調査例が増加し新らしい編年の必要性が説かれているが今回は従来通りの編年を基本とした。

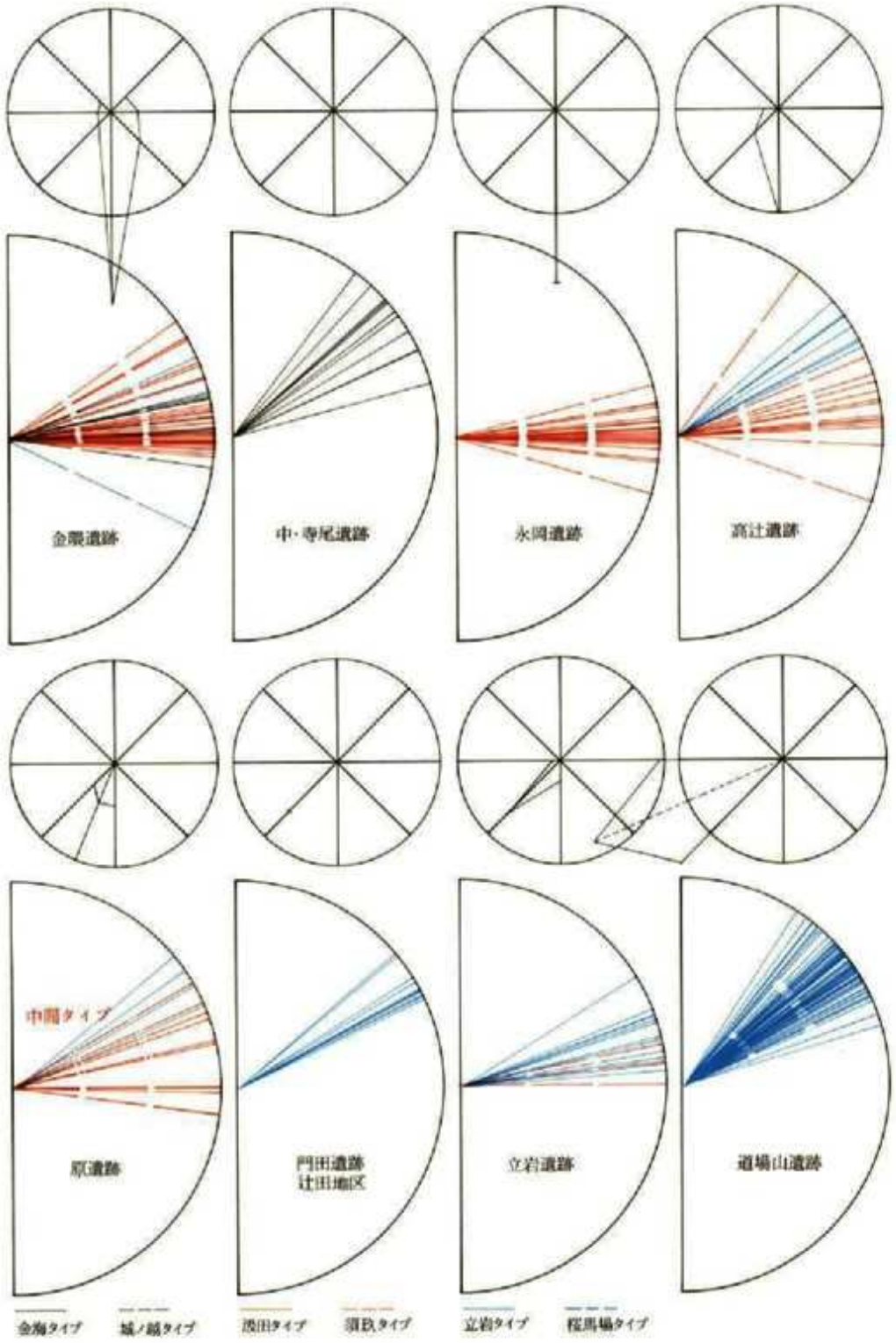
さて，本遺跡は弥生時代中期中葉の須玖式甕棺から中期後葉の立岩式甕棺にかけてが中心時期と思われる。成人棺の埋葬傾斜についてみてみると，須玖タイプは0°～7.5°にかけて分布している。立岩タイプについては30°～40°である。またそのどちらにもはいらないグループがある。角度分布は12°～30である。土器型式からみてもそのどちとも判断しがたいグループである。須玖タイプと立岩タイプの過渡期或は中間形態とも言うべきであろううか。以上の如き本遺跡にみられる傾斜角度の分布範囲の相違は，須玖タイプが甕＋甕に伸展葬で台地頂上部に位置するものが多い事，中間タイプ・立岩タイプが鉢＋甕に屈葬で台地斜面から南端にかけてが多い事からくる差異であるかとも考えられたが，他に意味なり理由が考えられないだろうか。また，そういった葬法の差異の原因は何かといった問題の設定をしてみたのが本文の契機でもある。



第80図　門田遺跡・門田地区の甕棺傾斜角度

従って以下は，他遺跡例・他時期例を引用しながら「甕棺墓」の埋葬傾斜等にどういった法則性やその分布状態がみられるかを分析し，上記の問題設定についていくらかなりとも追求してみたい考えである。

最近の弥生時代甕棺墓の調査報告書には必ず「甕棺墓一覧表」が記載されており，埋葬傾斜角度についても必ず報告されている。また葬法全体に対する記述も調査報告書の欠かせぬ要件となってきている。「甕棺墓」の埋葬傾斜について注目し言及されている最近の調査報告書は，筆者の知る限りでは1971年報告の「金隈遺跡」，1973年報告の「高辻遺跡」，1977年報告の「立岩遺跡」・「永岡遺跡」・「中・寺尾遺跡」，1978年報告の「門田遺跡」等である。以上の報告例を検討しつつ引用して記述を進めてみたい（第81図）。



第81図　各遺跡の甕棺傾斜図

まず「金海式」(註1)甕棺墓から分析してみる。金隈遺跡ではⅠ式が相当するが埋葬傾斜については〝墓壙を掘り込みそこに甕棺をほぼ水平に埋置〟していると報告されている。出土数は少ないので限界はあるが，厳密にみてみると10°～20°にかけて分布していると言えよう(註2)。やや古式のタイプに属する例もあるが，中・寺尾遺跡では，第1次調査分が15°～52°で，第2次調査分は15°～53°の分布を示している。金隈遺跡例と比べるとかなり分散しているようだが，その中でも30°前後に集中しているようである。また，小壺を副葬する古式のタイプほど傾斜角度が大きい事が判断できる(註3)。1971～1974年にかけ調査された板付遺跡では，遺物・遺構図共にこのタイプについては掲載されていないのでその当否は問い難いが，－8°～48°とかなりのばらつきを示して分布している。

以上の調査例をまとめてみると，弥生時代前期末の「金海式」甕棺で言える事は，古いタイプほど埋葬傾斜角度は大きく，新らしいタイプほど小さくなると言えよう。これは甕棺として使用された土器の変遷とも関連するであろう。つまり，壺的要素をもった土器から甕的要素をもつた土器へとこの型式が発達する事からも説明できよう。

次の弥生時代中期初頭の城ノ越式甕棺については報告事例は非常に少ない。その理由についてこのタイプが時期的に短かい事も考えられるが，成人棺の型式編年の確立が遅れている事も併せて考えられねばならない。従って全般的傾向は指摘できないと思うが，まず金隈遺跡例から分析してみる。金隈Ⅰ式はa・bの2タイプに分類してあり，時期的には城ノ越期から汲田期に及ぶとされている。従ってa式を城ノ越期，b式を汲田期と解して分析してみる。報告書では〝墓壙内に横穴を掘り，ほぼ水平に甕棺を挿入する〟となっている。しかし一覧表をみてみるとⅠa式は5基あり，－8°～12°にかけて分布している。0°を前後して均等に分布しており，ほぼ水平と言えると思う。板付G－5a地点では小児棺のみであるが，63°の埋葬傾斜をもつ壺棺という例外的事例を除いて－11°～28°にかけて分布している。特に0°付近に多くが集中しているようである。前出の板付遺跡は小児棺3基のみだが2.5°・14.5°・19°とややまちまちの傾向を示している。

城ノ越式甕棺をまとめてみると，ある程度のばらつきを示しながらほぼ水平に近くなっていると言えよう。例外が多いのも特徴と言えよう。

弥生時代中期前葉の汲田式甕棺墓の遺跡も類例が少ないが，金隈遺跡では－5°～8°という分布を示している。前時期と比べてほぼ同様の傾向であるが，一傾斜をもった事例が多いようである。板付G－5a地点は小児棺の事例だが－7°～10°という金隈遺跡と殆んど同じ傾向を示す。しかも甕棺墓数はほぼ30基というかなりの集中度を示している。板付遺跡では汲田タイプでも新らしい部類にはいるものが多いようだが，－15°～21°という分布を示している。しかし大半は0°～10°にかけて集中している。成人棺と小児棺とを区分してみると，後者は殆んどが0°～5°に集中しているが，それに比べ，成人棺はややばらつき傾向を示している(註4)。

以上，汲田式甕棺で埋葬傾斜について言える事は，ほぼ水平前後に多くが集中しているが，一傾斜をもつものが他時期と比べ多いという傾向である。

弥生時代中期中葉の須玖式甕棺になると，調査例は非常に多くなる。よく言われる事だが，甕棺墓制の隆盛期である。まず金隈遺跡では報告書は〝当初はⅠ式と大差ないが，中心時期の甕棺は30°内外の傾斜をもつ〟と記している。確かに金隈Ⅱa式はほぼ水平でⅡc式ほど埋葬傾斜角度は強いようである。次にやや古式のタイプに属し報告書では「永岡式」を提唱している永岡遺跡についてみてみたい。〝上甕を若干高くし，ほぼ水平に近い状態で置いている〟と報告してある。1号・19号甕棺墓を除けば−7°～9°に分布し，とりわけ0°前後には多くが集中している。一傾斜をもった甕棺が多いのも，汲田タイプに近い古式のタイプの様相を呈しているといえよう。1978年報告の門田遺跡門田地区も同様の傾向を示していると報告されている。立岩遺跡では，立岩第Ⅰ期が須玖タイプとされ，〝傾斜が少なく0°～11°が大半である〟と報告されている。高辻遺跡は〝殆んどが水平に近い〟と報告されている。本遺跡はこの時期から埋葬が開始されるが，傾斜角度は−7.5°～23°にかけて分布，他遺跡例と比較するとややばらつきを示していると言えよう。

以上の調査例を総合してみると，須玖式甕棺墓では古式のタイプほど埋葬傾斜角度が小さくほぼ水平に近い状態であり，新らしくなれば徐々に角度をもってくると言えよう。

弥生時代中期後半の立岩式甕棺も発掘調査例は多い。まず金隈遺跡では，金隈Ⅳ式がこれにあたり数量は少なく〝Ⅲ式と大差ない〟と記しているが，傾斜角度は3°～15.5°に分布している。立岩遺跡第Ⅱ期では〝4°～32°が多く45°を超えるものはない〟と報告されている。成人棺のみでみれば4°～32°にかけて分布している。門田遺跡門田地区例は18°～35°の分布を示し，須玖タイプとは明確な相違を呈している。本遺跡の立岩タイプも成人棺は18°～40°にかけて分布し，門田遺跡門田地区例と極めて近似している。また，門田遺跡辻田地区ではこのタイプが中心時期となるが，埋葬傾斜は26°～41°と集中した傾向がみられる。道場山遺跡例は50°前後が数例あるが，大半が26°～43°に分布している。とりわけ30°～35°にかけては大量に集中している(註5)。一の谷遺跡では類例は少ないが，他遺跡と同じように約28°～40°にかけて分布がみられる。高辻遺跡例はC地区にこのタイプが集中し，〝20°～41°の斜位に埋置されている〟と報告されている。

立岩式甕棺は概して他時期と比べ埋葬傾斜は同じ様相を示す傾向が強いようである。傾斜角度は約30°～40°にかけて大半が分布しており，ばらつきも少ないようである。

弥生時代後期初頭の桜馬場式甕棺になると調査報告例はかなり少なくなる。いわゆる甕棺墓制の衰退期である。金隈Ⅴ式ではこの時期も〝Ⅲ式と大差はない〟としているが，96号甕棺墓−26°，134号ほぼ水平，139号24°とかなり散漫となるようである。立岩遺跡は立岩第Ⅲ期がこれにあたり，〝散漫となり法則性はみられないが，0°～12°と20～30°にほぼ分類される〟と述

べられている。道場山遺跡例は24°～49°にかけて分布し，他遺跡例ほどではないにしろ，立岩タイプと比較すると集中する傾向はない。一の谷遺跡も約32°～52°にかけて分布し，前者と同様の傾向を示しているようである。

桜馬場式甕棺墓は立岩遺跡報告書で述べられているように，散漫となり法則性はみられないと言うのが他時期と比べた特徴となるであろう。

以上，甕棺墓の埋葬傾斜角度について金海タイプから桜馬場タイプまでの変遷過程について言及してきたが，その変遷他の埋葬様式や経済的・社会的背景を加味させながら概括してみたい。

「金海」タイプの時期は稲作農耕が定着し，人口も増加したと一般的に言われている。生産力が増強し，弥生時代農耕社会への発展期とも言われている。それは例えば「貯蔵穴」の爆発的な増加等にも表われている。葬制は従来までの土壙墓主体から甕棺墓主体へと移行していく。甕棺墓として須玖タイプが本来的とするならば，この「金海」タイプはそれへ向けての胎動期とも言えよう。壺的要素の強い土器が大形甕へと発展したのもその事を説明している。それに伴い埋葬傾斜も水平に近くなってくる。

城ノ越期は前時期の生産力の急激な発展に社会構造がついていけなくなり，新たな大きな社会構造の変化を準備する調整期とも呼称できよう。土器型式も地域によりかなりのばらつきをみせている。この時期の甕棺墓が不明瞭だと言う事や，甕棺・壺棺等器種が不均等な事や，埋葬傾斜が遺跡毎にある程度のばらつきをみせる事などもその反映だと考えられないだろうか。

次の汲田期は須玖期の古式タイプまでを含めて，前時期の混乱を収拾の方向へ向けていたのではないだろうか。より新たな大きな社会構造がある程度の強制力を伴いながら，完成へと向かった安定前夜期とも言えよう。従って共同体による一定程度の規制が葬制にも及んできているのではないだろうか。永岡タイプ（？）の甕棺墓が二列に配置されるという特異な現象はその証左とも考えられる。

須玖期は一般的に言われるように甕棺墓制の隆盛期である。最も甕棺が甕棺らしい様相を呈する時期でもある。経済的にも社会的にも弥生時代農耕社会の安定期と言えよう。葬制にもそれが反映し，大きく立派な甕棺が出現してくる。伸展葬の盛んな事も同様であろう。従って埋葬傾斜も水平というのが最も多いのも首肯ける。

立岩期になると弥生時代農耕社会も甕棺墓制も爛熟期を迎え，その在り様は肥大化し崩壊を準備しはじめる。つまり一般的に言われるように階級社会への移行が萌芽する事でもある。従って葬制にも共同体の規制—強制力と階級社会を形成せんとする力との拮抗関係が反映されている。階級分化せんとすればする程，共同体による集団的規制も強くなってくる。副葬品を集中させる甕棺墓も，いまだその強制力の枠内にある。埋葬傾斜は30°～40°に大半集中し，他時期と比べ規制力が強いのもその拮抗関係の故であろう。

後期にはいり桜馬場期になると，甕棺墓も衰退期を迎え，他の葬制も登場してくる。埋葬傾斜についても散漫となり法則性をもたなくなってくる。この事は共同体の葬制に対する規制力の衰えを示している。葬制の内容も変化してくる。葬制という観点からみれば，政治的指導者層の共同体規制からの脱却はこの時期になって萌芽すると言えよう。

以上これまで葬制とりわけ埋葬傾斜について言及してみたが，多くの問題点を残してしまった。例えば，まず第1に小児棺の状態に言及できなかった事である。第2に甕棺に使用された土器型式との厳密なつき合わせの問題である。更に副葬品をもった甕棺墓ともたない甕棺墓との関係である。また，被葬者の頭位との関係について等々の問題である。大方の御批判と御叱正を仰ぎたい。　　（藤瀬　禎博）

註1　以前にも述べたように「金海式」という型式名は朝鮮半島のそれとの混同を生じる。またその出自や系統についても誤解を与える。

註2　103号甕棺墓については掲載写真とさし図から判断すると上甕とされている甕に人骨の本体がはいっているので−12°でなく＋12°とすべきであろう。

註3　1号甕棺墓については上部がかなり削平されており，小壺の副葬の有無については判断できないのではないかと思う。

註4　1971〜1974年調査の板付遺跡例は3タイプ共に他の遺跡例とはやや趣を異にしているようである。この事は葬制に限る事なのかそうでないのか，今後の問題としなければならないと思う。また，その要因についても考え併せなければならない。

註5　報告書では立岩タイプを中期後葉と中期後半とに分類してあるが，本稿では従来通り一型式とした。

引用文献

宮小路賀宏他「一の谷遺跡」春日市教育委員会　1969

折尾　学「金の隈遺跡」福岡市教育委員会　1971

井上裕弘他「高辻遺跡」春日市教育委員会　1972

浜田信也「永岡遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第5集』福岡県教育委員会　1977

児嶋隆人他「立岩遺跡」立岩遺跡調査委員会報　1977

川述昭人他「中・寺尾遺跡」大野城市教育委員会　1978

橋口達也「道場山遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』ＸＸＶ　福岡県教育委員会　1978

佐々木隆彦他「門田遺跡門田地区の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』6　福岡県教育委員会　1978

井上裕弘他「門田遺跡辻田地区墓地群の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』9　福岡県教育委員会　1978

V おわりに

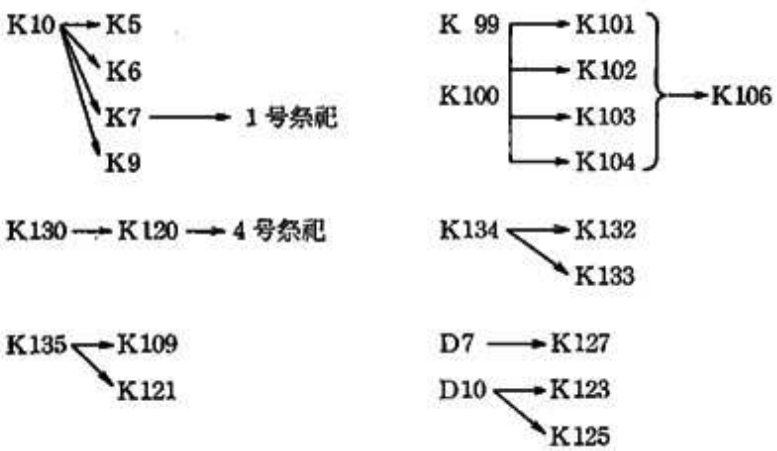
総数200基以上に及ぶ墓壙のうち，完掘したのは甕棺墓52，土壙墓10，祭祀遺構4，溝状遺構1で，他の15基については墓壙内を掘り下げ遺構の確認を行い，一部の甕棺では人骨のみを取り上げたものもある（No.2・3は土壙墓，それ以外のNo.37・38・41・47・48・57・58・59・61・63・75・105・119は甕棺墓）。従って，約120基以上の墓壙については輪郭と切り合い関係のみで，内容については未調査のまま盛土をして保存している。

ここでは，東側の小児甕棺墓を主体とした調査と，やむなく保存出来なかった西端部の墓地の調査から判明した遺跡の特長を列記しておきたい。

原遺跡の墓地は甕棺墓と土壙墓で構成されている。検出した遺構のすべてについて調査した訳ではないが，この基本に変化は無いと考えられる。その他に埋葬施設間に点存して祭祀遺構がある。また，台地の南崖下から台地上へ登る溝状遺構は長さ12m，幅2～3mで，その北端は墓地が形成されていない空間部へ続いている。墓域は用地外の東側へ約5m程延びる事が確認されており，検出された遺構は9割程度と言える。

墓地は東西に分離できる。第15図で判る通り，No.1とNo.23遺構の北端から，同じくNo.15・No.41遺構の間，No.130・No.140遺構間と，みごとに幅2m弱の空間が認められ，溝状遺構に入り，台地南崖下へ抜けている。この空間部は墓地の通路としての機能が考えられ，溝状遺構はその墓地への墓道と把えられるであろう。

切り合い関係については次の通りである。



この墓地群は弥生時代中期中葉から中期末にかけて営なまれている。最も古く位置付けられるのはK10で下甕は極端に内に張り出した口縁部を有し，胴部は2条の三角凸帯から直線的に立ち上がりやや外開きぎみになる。次いでK99・100・110・135甕棺で外傾する「T」字状口縁を有する一群，及びK5・6・128・130・136甕棺でやはり「T」字状口縁だが口縁部の平坦な一群が続くと思われる。一方，K121の下甕は器高76.8cmと中型の甕で，胴部中央やや上に最大径を有し，2条の三角凸帯を持つ。この凸帯から上は急激に内傾してすぼまり，平坦で水平な口縁部に到る。この種の甕棺にはK134の下甕が類似している。比較的類例の少ない甕棺で，永岡遺跡のK19に祖型が求められよう（註1）。このK10からK121までの甕棺を従前の編年に充当するとK99・100・110・135がいわゆる須玖式に該当すると考えられ，K10は古く，K5・6・128・136は新しい形態的特徴を有していよう。一方K121・134はK134がK135を切っている事からK5の時期ぐらいであろうか。一応全体を中期中葉としておきたい。

中期後葉に属す甕棺にはK125・127があげられる。胴部凸帯がやや下がり，そこから比較的直口して立ち上がり，口縁下部近くで内彎度を強める。口縁部はより強く外へ張り出てくるが，いわゆる立岩式のように「く」字状にはならない。底部から胴部へもかなりの膨らみを持ち，どっしりした重みを感じる。この2基は葬制上でも，台地の南崖に横穴を穿いて甕を埋置する共通性を有している。一方，小児用甕棺については，当然下部に存在した成人棺の調査に到っていないので不明な部分が多いが，切り合い関係を有する甕棺から見てみたい。K101～K104はK99・100と同一墓壙内上部に検出された甕棺で，調査結果では同時期の所産と考えている。K103の下を除いていずれも甕形土器であり，K101・102・104の下甕に共通性がみられる。つまり口縁部を肥厚させ〝ボタッ〟とした感じの逆「L」ないし「T」字状口縁部を有する土器で他の甕棺には存在しない。この甕棺の上甕はいずれも内に若干張り出した平坦で水平に近い逆「L」字状口縁部でK103の上甕も同様である。次にはK99・100を切って埋置されたK106がくる。形態的にはK101・102・104の上甕に類似し，類例としてはK52・109・111・119・122等があげられよう。特にK109はK135の成人棺を切っておりK106・109からK5・6・128等の成人棺と伴行する時期が考えられる。以上の小児棺は中期中葉に属そう。続く中期後葉から末に位置付けられるものはK23に代表される内側にほとんど明瞭な稜線を持たない程度に折り曲げた「く」字状口縁を呈し，口縁からやや下がった胴上半部で内彎し，胴最大径を有す。K37・38・44・53・126等が該当しK53では上甕が「く」字状，下甕が水平な口縁を持つ土器を組合せ，従前から言われている如く，上甕が新しい様相を呈している。従ってK23・37・126はその中でもやや新しくなると思われる。また他の器種を組合せたK13・105・133も時期的に近似すると思われる。K120・132の下甕は口縁部が明瞭に「く」字状を呈し，かつ上面をへこませる特長をもつ。時期的には後期初頭に位置付けられるが上甕は中期末としておきたい。一方，土壙墓の時期決定は難しいがD7・D10とも甕棺墓によって切られており，甕棺

と同期間内に営なまれたものであろう。

従って原遺跡の墓地は中期中葉から開始され中期末で終焉を迎え，極めて短期間に営まれた一大共同体墓地と言えよう。その内でも，墓地形成の初段階においては，K10・99・100・128・135が墓域の西端部に，甕棺をほぼ南北方向に埋置する規則性が窺われるのは注目される。

K10は墓域の北端近くにあって，墓壙は長辺3.27m，短辺2.29mの隅丸長方形を呈す。墓壙としてはK99・100の2基を納めたものに次いで2番目の大きさを有す。墓壙はK6・7・9に切られている。この墓壙の北から西にかけて約1.3～1.7mの間隔をあけて「L」字状に溝が巡る。この溝はK5・6によっても切られ，墓壙・溝に対する甕棺の重複関係からK10に付随すると考えて誤りない。そのK10は墓地群の内で最も古く位置付けられる甕棺の1つで中期中葉に属す。被葬者は熟年の男性で，身長も164.2cm前後と遺存した人骨では最大値を示している。一方，本遺跡では，青銅器・貝釧等の副葬品は何ら検出されていない。まだ，未調査の墓構が多い訳であるが，K10を凌駕する墓壙も無い点副葬品を有す甕棺の存在は考え難く，本来的に欠いていたと思われる。この副葬品等を欠く集団墓地は"なのくに"の中枢に位置する須玖岡本遺跡をささえた縁辺の共同体の墓地として把える事が可能であろう（一の谷遺跡・高辻遺跡なども同様であろう）。しかし，その内にあって，墓壙を被葬者の墓域と考えるならば，溝を巡らす行為に依って墓域の（範囲）拡大と限定の主張がK10には読みとれ，末端の共同体内部でも階層の分化が進行しつつあった点を具象しているのではなかろうか。それは，K10の人骨の頭蓋骨顔面部のみに赤色顔料の付着が認められた事とも無関係ではあるまい。

他方このK10の墓壙に溝を巡らす墓制形態が弥生時代中期中葉に現出した事は注目されるが，この墓制が単純に後の周溝墓等と係りありとするのは短絡過ぎるであろう。

K99・100は約長辺3.8m，短辺2.2mの墓壙内に並存して納められた成人用甕棺である。遺存した人骨より東側のK99は頭部を南に，K100は北と差し違えの状態で埋葬していた。両者とも女性でK99が20才前後，K100が40才前後である。この同一墓壙の50～60cm上部に4基の小児棺が埋置されている。つまり，1つの墓壙内に2基の成人棺と4基の小児棺が共伴した墓である。成人棺と小児棺の埋葬形態には春日市門田遺跡門田地区のK47（女）の墓壙内にある小児用のK4や，K15の墓壙内のK14・16(註2）や筑紫野市永岡遺跡等でも小児棺の重複が認められ，特に成人棺埋置の規則性を無視した埋置方法がとられることから，親と子という血縁的絆を考えている（註3）。本遺跡での6基の甕棺墓については埋葬の順序として成人棺が下に，小児棺が上部に埋葬されただけと考えられる。甕棺に用いられた土器をみても同時期として把えられ，したがって何らかの要因で急遽ほぼ同時に死亡した家族墓として把えられよう。血縁者のみならず共同体構成員の嘆き悲しみが目に浮かんでくる。

本遺跡は副葬品を有さない墓地であるが，それに対して比較的多くの丹塗り磨研土器が検出された。鏡山猛氏の研究により，当種土器は甕棺に対する祭祀行為を表現するとされる。

原遺跡では丹塗り磨研土器の出土状態に２つの形態が認められた。１つは墳を穿ち，その中に完形もしくは意識的に口縁部ないし底部を打ち欠いた丹塗り土器を納めたもので４基検出された（１～４号祭祀遺構）。今１つは甕棺の墓壙内に破砕した破片が認められたもので，甕棺14基，土壙墓１基の計15基から出土した。

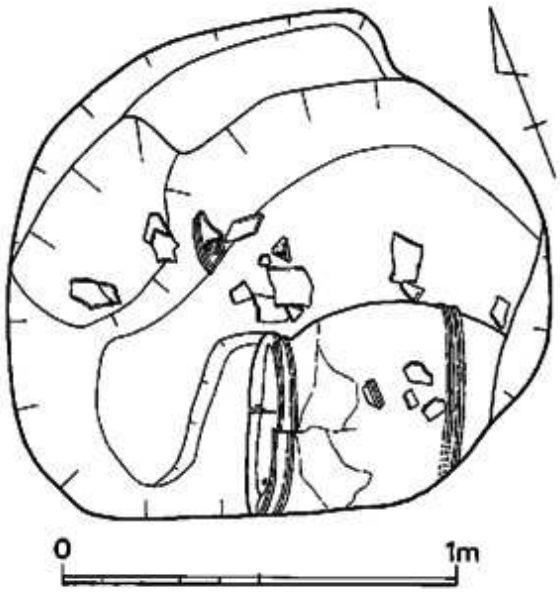
前者はいずれも径70～110㎝の不整円形に近い壙内に納められている。１号祭祀遺構はＫ７の墓壙を切った壙内に樽形の土器を納めたもので，底部を意識的に打ち欠いている。この種の土器は他に出土例を聞かない特殊なものであるが，鍔部から上の口縁部を除けば，４号祭祀遺構出土の甕形土器によく類似し，鍔部を除けばＫ37下甕に似る。２号祭祀遺構は当初成人用甕棺墓と考えられていたが，胴部に２条の「コ」字形凸帯をもつ甕棺片が３重に重ねた状態で出土し，かつ，胴上半と底部を欠いている点意識的に破砕し埋置されたと思われる。また，この土器の下に丹塗り完形甕形土器が納められていた。３号祭祀遺構は甕形土器と甕形土器の２個体が出土し，特に甕形土器は壙底に接する部分はそのままにし，上部は口縁部を打ちかいてその周辺に広げられた状態で出土した。４号祭祀遺構はＫ30を切った壙内にきわめて樽形に近い甕形土器を納めている。この壙内より３号祭祀遺構の甕形土器片が出土し接合した。

３号祭祀遺構から出土した甕形土器は類例が少なく，春日市門田遺跡辻田地区12号住居跡・高辻遺跡Ｃ地区，福岡市板付遺跡Ｊ—Ｋ25トレンチ・諸岡遺跡Ｃ区・蒲田遺跡などで出土し，高辻遺跡では８号土壙墓の供献品として転倒した状態で，蒲田遺跡では墓域を巡る溝状遺構内より出土した。一方，甘木市小田集落遺跡では住居跡内より出土している。しかし原遺跡の器形はこれらとは若干異なっている。これらの１～４号の祭祀遺構は中期後葉であろう。

表7　墓壙内供献土器一覧表

遺構	器種	接合関係
K18	広口壺口縁・胴部，高杯，甕脚部	
K23	無頸壺口縁部，甕口縁部	
K47	広口壺（½で胴下半を欠く）	
K52	傘蓋，甕胴部	D８と接合
K53	無頸壺口縁部，甕口縁部，甕棺口縁部	甕棺蓋３と接合
K110	高杯杯部	
K120	甕口縁部	
K121	広口壺①　広口壺②	①K136と接合　②№175と接合
K122	壺胴部	
K126	壺胴部（甕形上器？）	
K127	壺形土器頸・胴部	
K128	広口壺口縁部，筒形器台	
K134	甕胴部	
K136	広口壺	K121と接合
D8	傘蓋	K52と接合

後者にはK18・23・47・52・53・110・120～122・126・127・128・134・136とD8があげられる。出土した供献土器は表7の通りである。時期はK23・47・53・120・126が中期後葉で他は中期中葉に属す。この供献土器間で接合関係が認められる。K52出土の傘蓋（第61図3）はD8内と接合し，K121の広口壺（第62図10）はK136と同じくK121の広口壺（第62図11）はNo.175遺構出土の破片と接合した。また，K53墓壙内から出土した成人用甕棺口縁部片（第61図6）は溝状遺構の底から20cmほど浮いて出土した破片と接合している。第82図はK47における供献された広口壺の出土状態を表わしている。レベルは甕棺より若干高く，破砕された土器は全体の傾向として北西から南東に向って傾斜しており投棄の方向が推定できる。接合された土器（第62図9）は口縁から胴部の½と底部を欠いている。



第82図　47号甕棺墓供献土器出土状態（1/20）

原遺跡では墓に対するこの2つの形態の祭祀行為を見出しうる。前者をAタイプ・後者をBタイプと呼べばBタイプの祭祀行為は甕棺に埋葬された被葬者個人に対する行為と見做しうる。一方Aタイプについては個々の墓を限定したものとは言えず，現在のところ不特定のグループないし，祭祀行為を行う場所として，そこに存在したものと考えておきたい。

他の遺跡の供献土器の出土状態をみてみよう。筑紫野市永岡遺跡では墓域を示す溝と竪穴があり，その内に丹塗り高杯・壺・筒形器台の破片が出土した。また，福岡市蒲田遺跡A地区の溝状遺構(註4)は墓域をとりまく溝であるが，その内から丹塗り土器・底部穿孔土器・筒形器台等が出土している。この2つの遺跡から丹塗り磨研土器のもつ別の祭祀行為が指摘できる。この，墓域全体に関連する共同の祭祀行為をCタイプとする。この様に丹塗り磨研土器の供献に3つのタイプが認められるが，原遺跡ではCタイプの祭祀行為は存在しなかったようだ。Aタイプは諸岡遺跡・宝台遺跡・蒲田遺跡D地点，Bタイプは高辻遺跡C地区8号土壙墓・諸岡遺跡5・45号甕棺墓・蒲田遺跡D地点1号甕棺墓・道場山遺跡第1地点40号甕棺墓に，Cタイプは甘木市栗田遺跡が該当しよう。

当遺跡を取り巻く自然環境は，新幹線車輌基地建設を基点として急速な変貌をとげている。現在も開発の波は多くの文化財を浮き上がらせ，波間に消して行く。こうした中で地元春日市の「歴史と自然を守る会」を中心にした市民団体が，失なわれる文化財を守ろうとの運動を展

開した。一方，春日市・那珂川町も当初の側道計画を変更して保存されるよう国鉄に要望し，国鉄も遺跡の重要性を認め，保存が決定した。その結果弥生時代中期中葉から後葉の甕棺墓・土壙墓を中心とする墓地の大部分が永久保存される事になった。

国鉄をはじめとした関係各位の御配慮に深く感謝の意を表するとともに，遺跡の再活用を計っていく事が我々に与えられたこれからの使命であろう。　　（木下　修）

註1　甕棺の形態・編年等全般にわたって橋口達也氏の御教示を得た。
浜田信也・新原正典「筑紫野市所在永岡甕棺遺跡・本文編」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』5　福岡県教育委員会　1977

註2　佐々木隆彦編「春日市・門田遺跡門田地区甕棺墓群の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』6　福岡県教育委員会　1978

註3　註1に同じ

註4　飛高憲雄編「雀居遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』33　1975

第83図　99・100号甕棺人骨清掃風景

図　　版

山陽新幹線博多車輌基地建設前の原遺跡航空写真　1972.8（南から）

山陽新幹線博多車輌基地全景航空写真　1975.5（北から）

1　原遺跡遠景（西から）

2　原遺跡と原古墳群航空写真（南から）

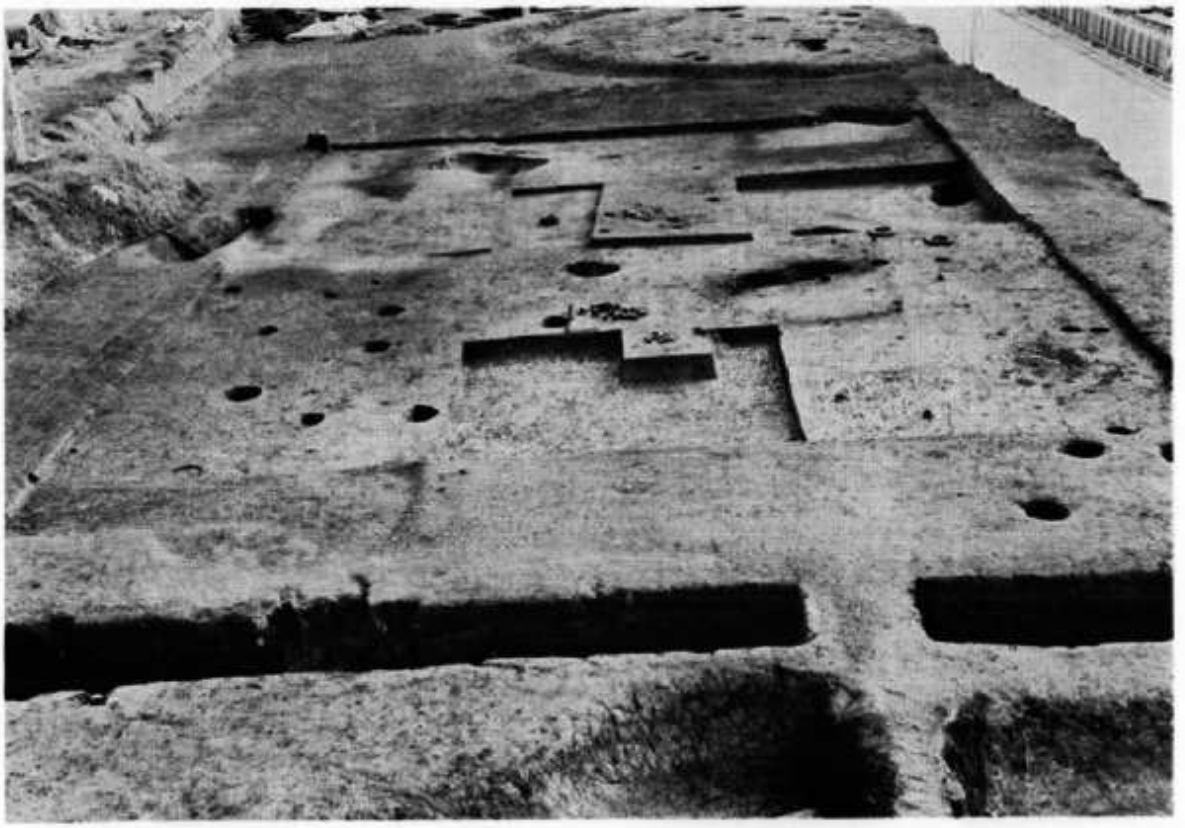
図版　4

原遺跡全景航空写真（南西から）

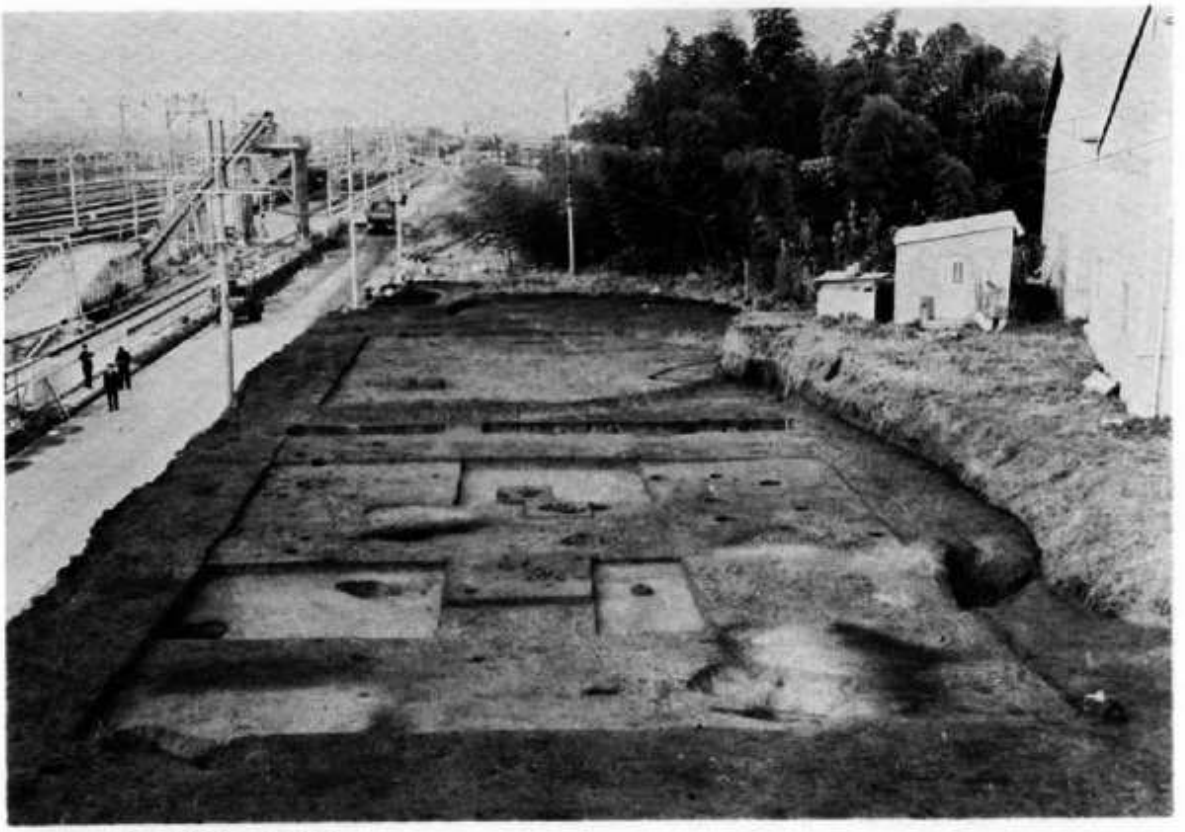
1　原遺跡全景航空写真（西から）

2　原遺跡甕棺墓群全景航空写真（北から）

図版　6



1　原遺跡北半全景



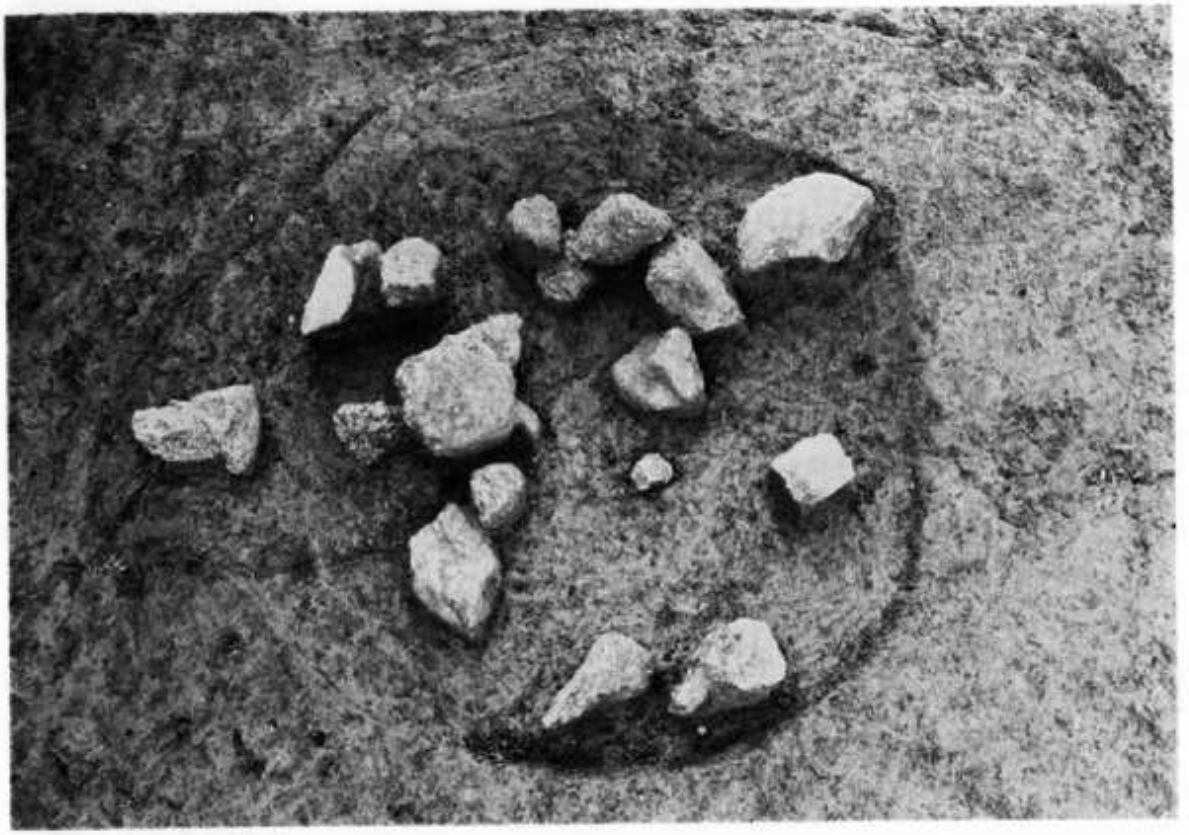
2　原遺跡Ｂ６区全景

1 B 6 区土層断面

2 B 8 区遺物出土状態

図版　8

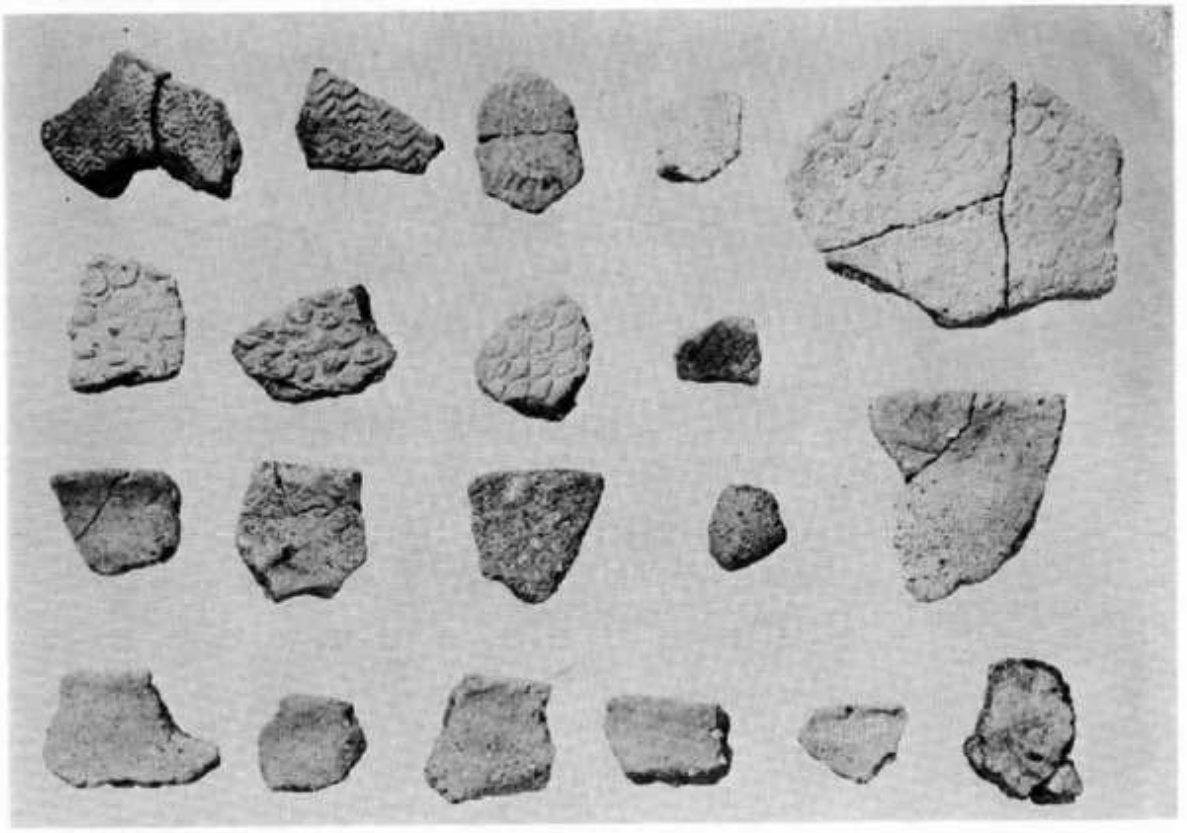
1　2号石組炉跡



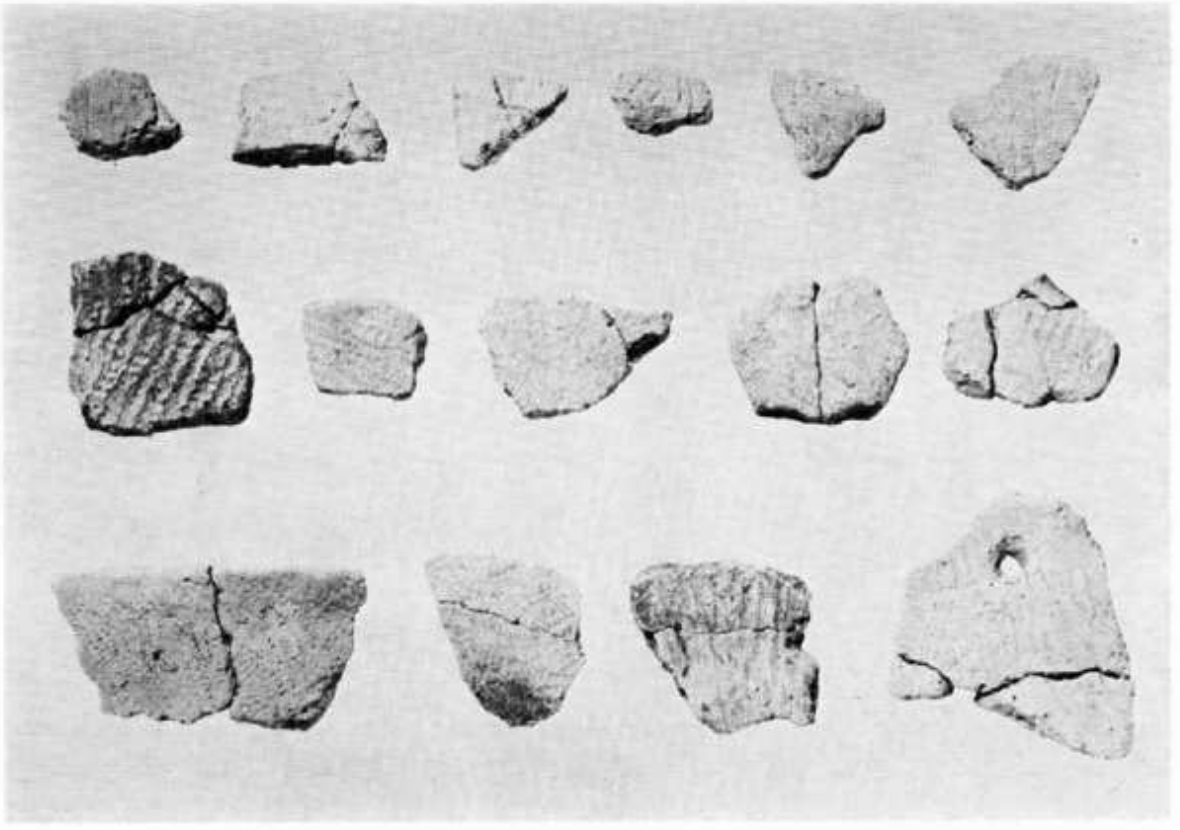
2　4号石組炉跡

1　5号石組炉跡

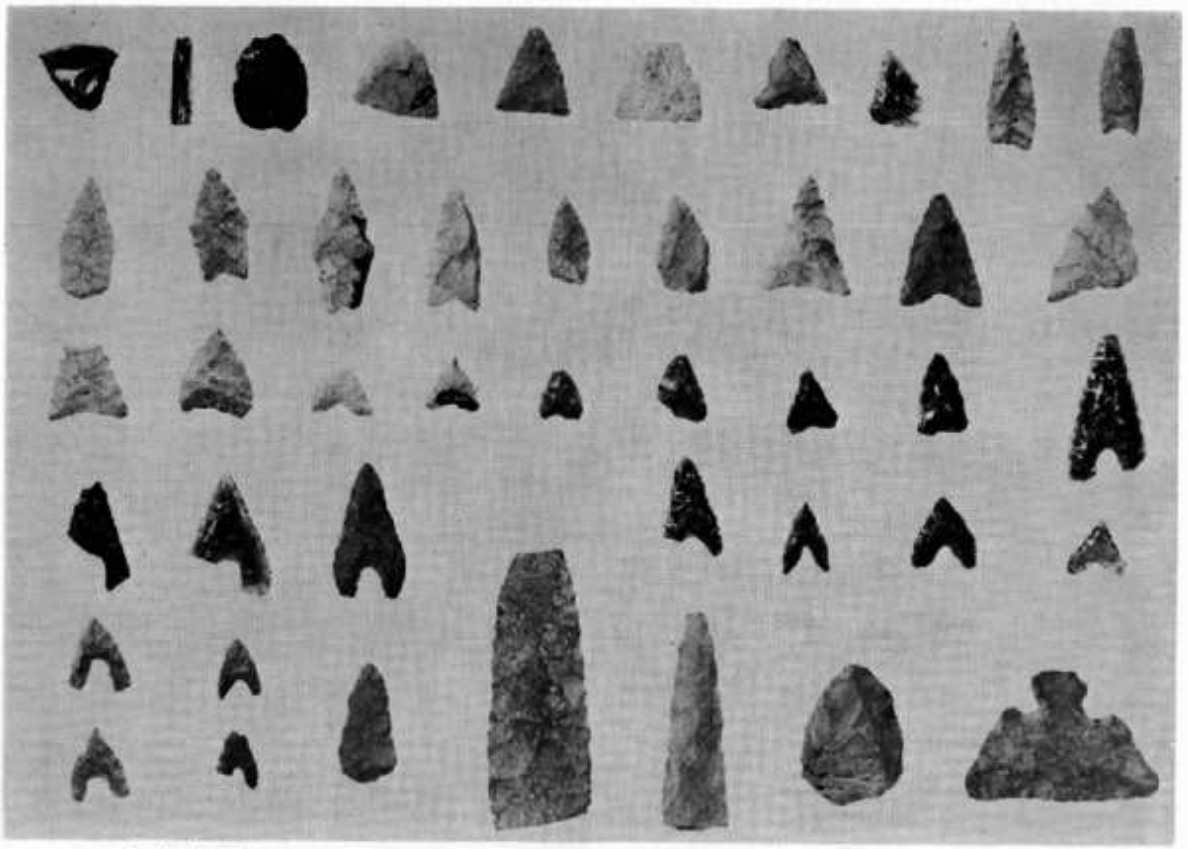
2　5号石組炉跡下底面



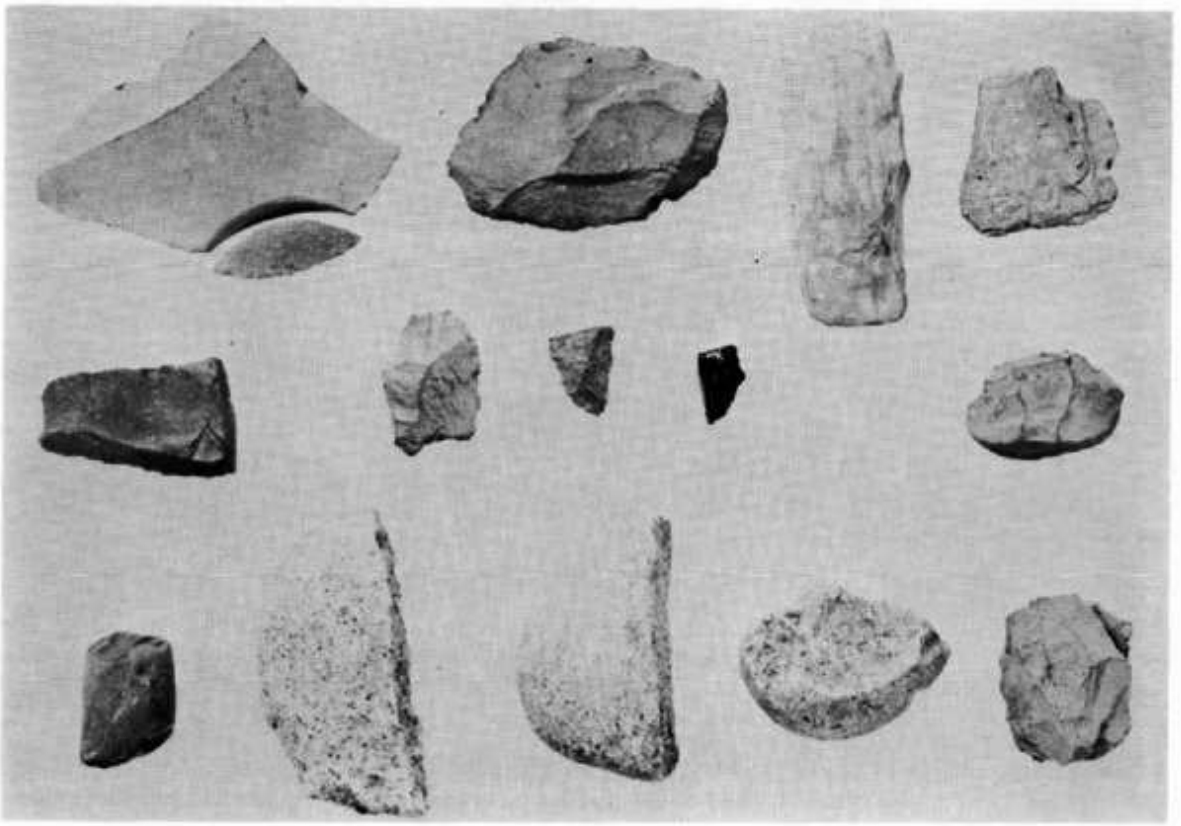
1 出土縄文土器



2 出土縄文土器



1 出土石器



2 出土石器

図版 12

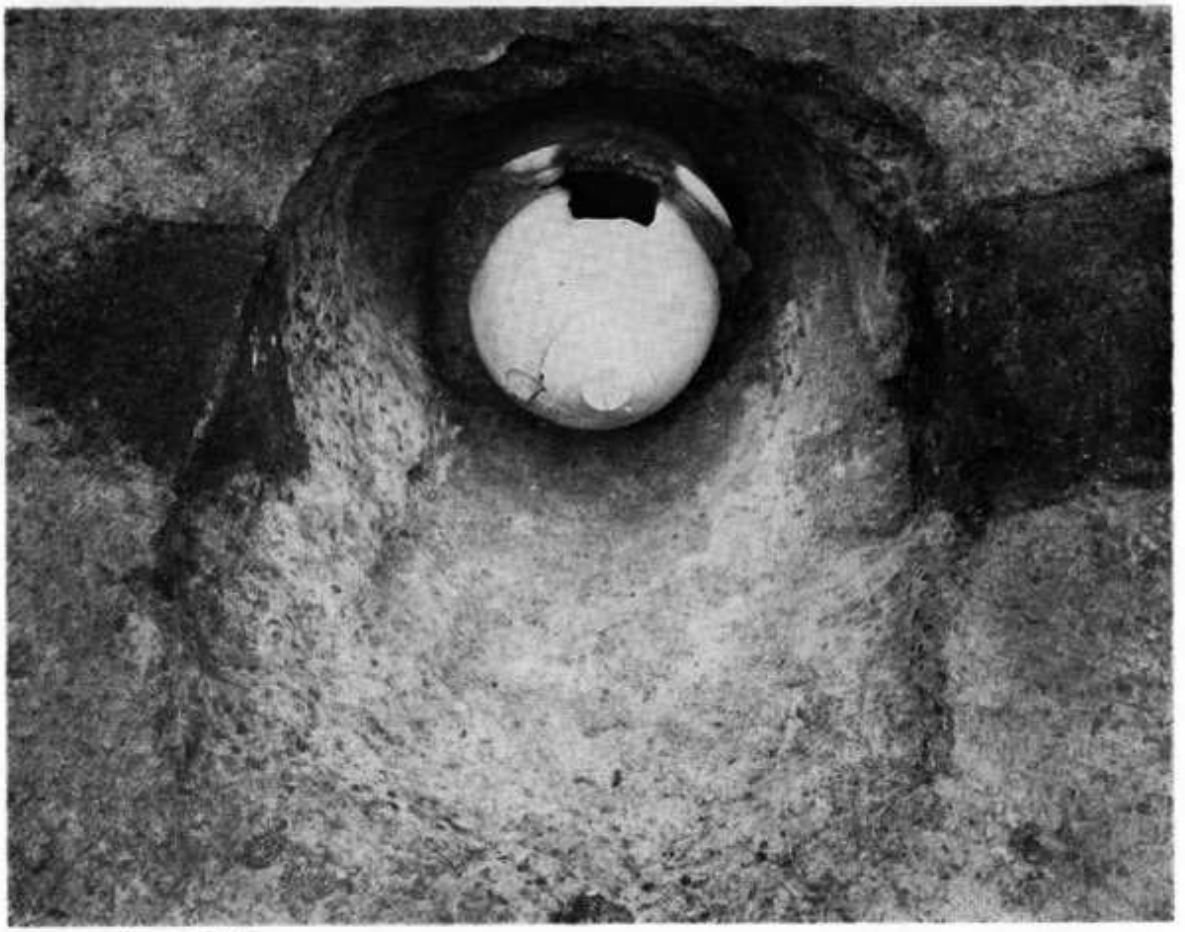
1　甕棺墓群全景（北から）

2　甕棺墓群全景（南から）

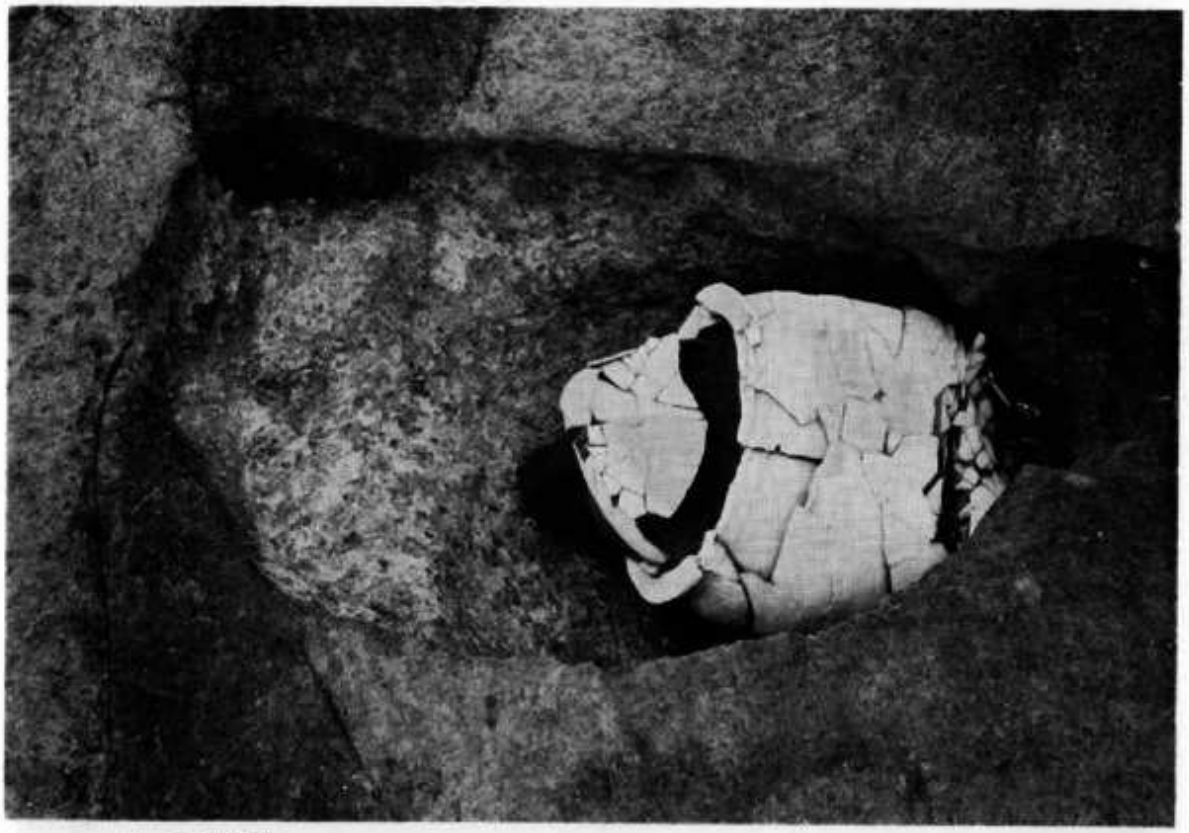
1 135・136号甕棺墓付近近景

2 131～134号甕棺墓付近近景

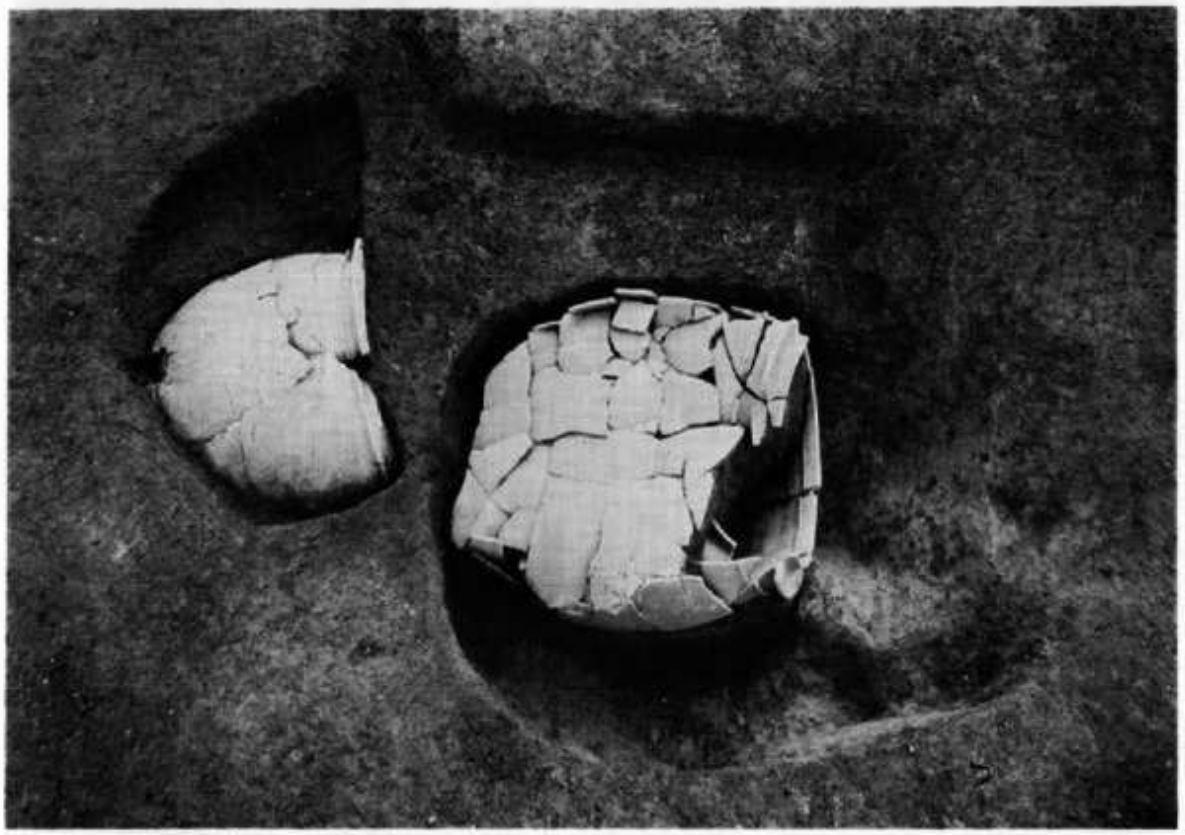
1　1号甕棺墓



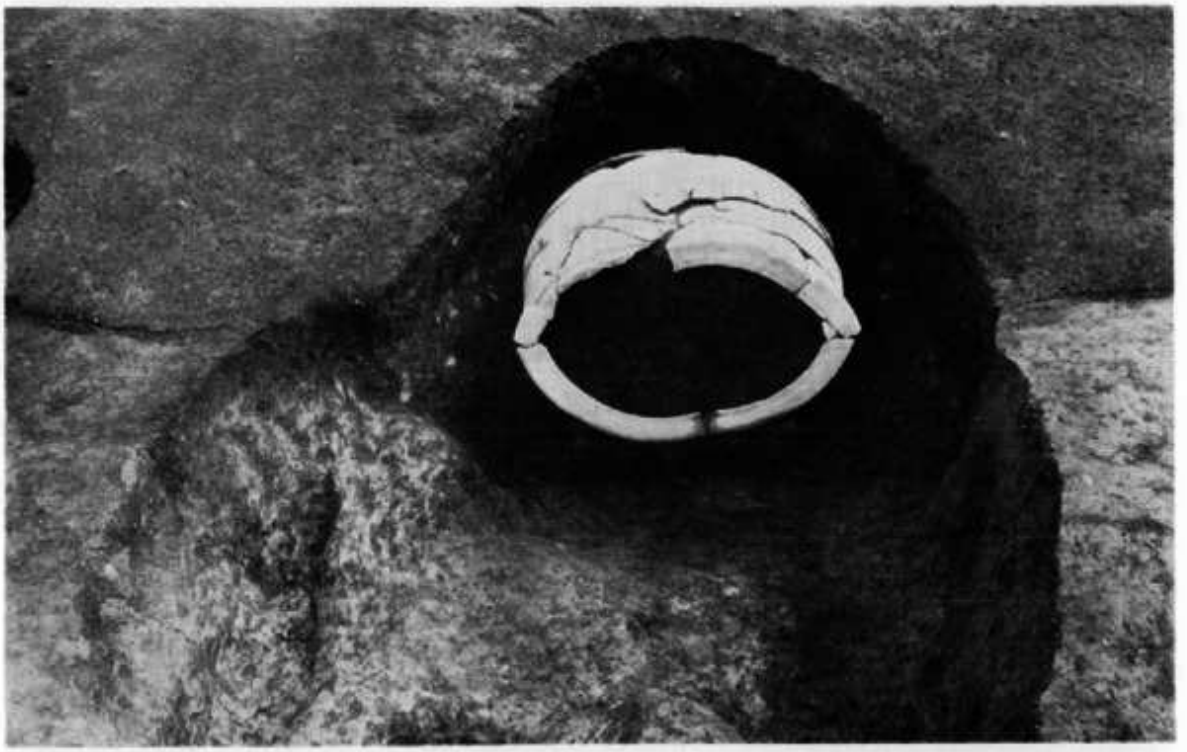
2　5号甕棺墓



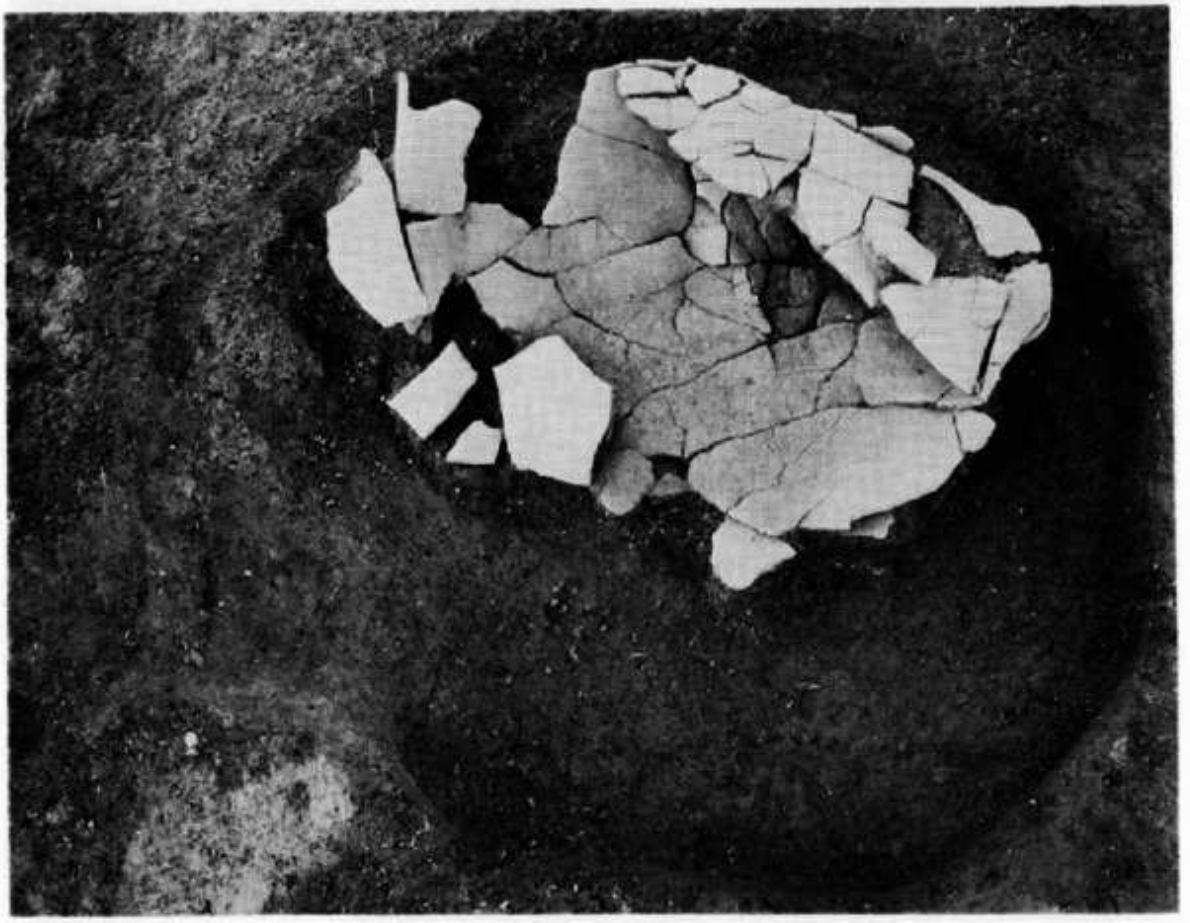
1　6号甕棺墓



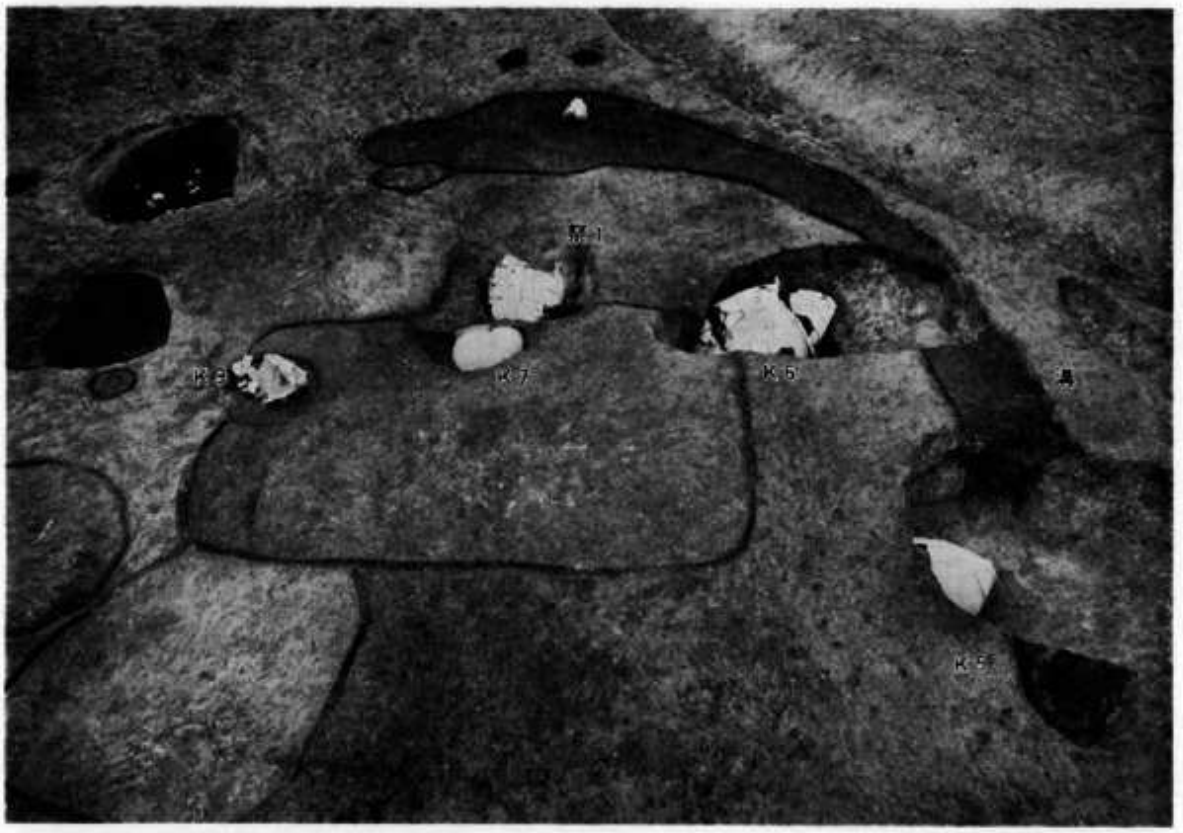
2　7号甕棺墓と1号祭祀遺構



1　7号甕棺墓



2　9号甕棺墓

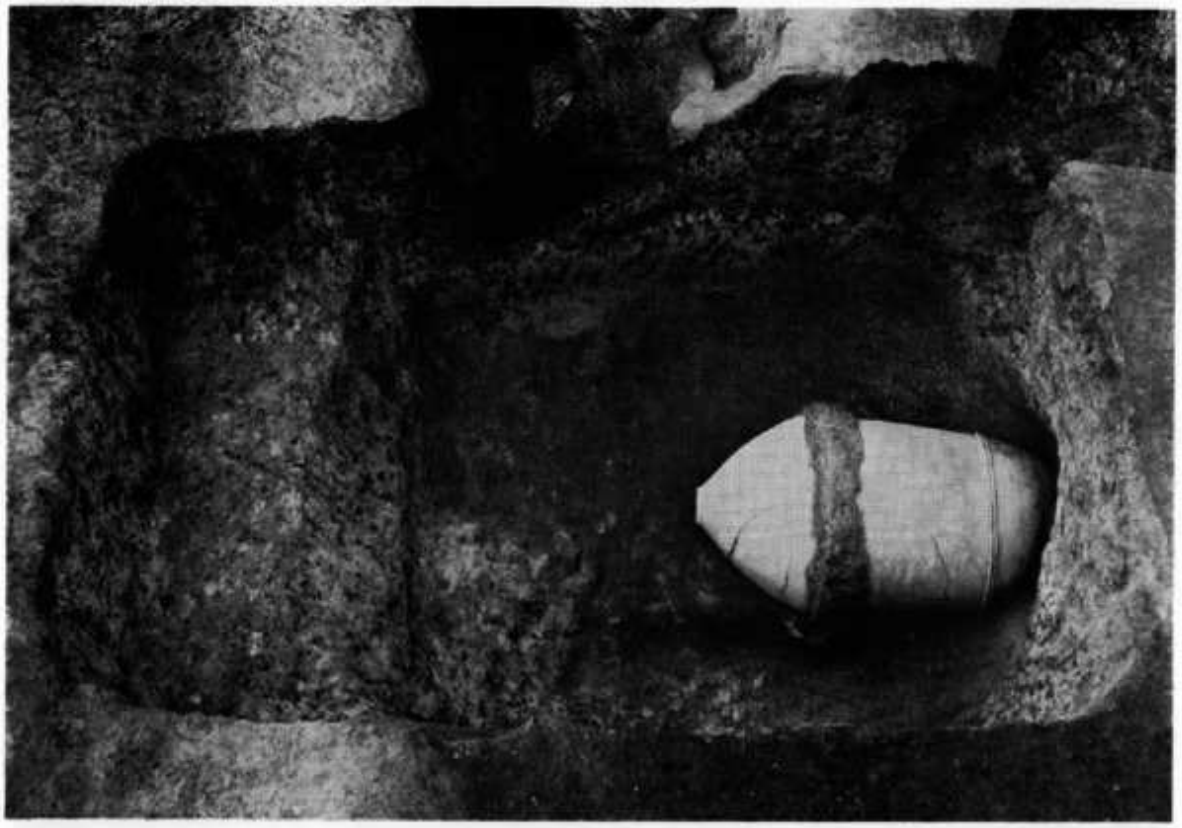


1 10号甕棺墓遺構検出状態

2 10号甕棺墓と溝状遺構及び重複関係

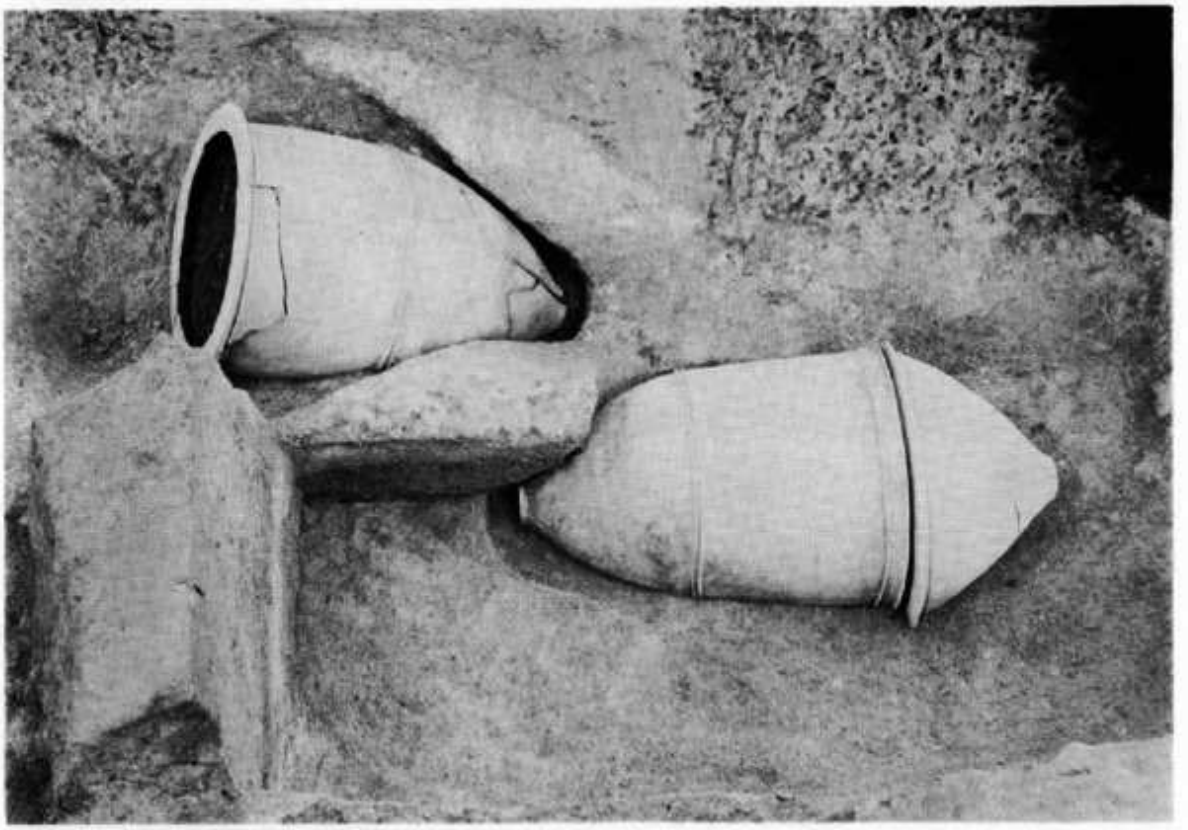
1 10号甕棺墓全景（東から）

2 10号甕棺墓全景（南から）

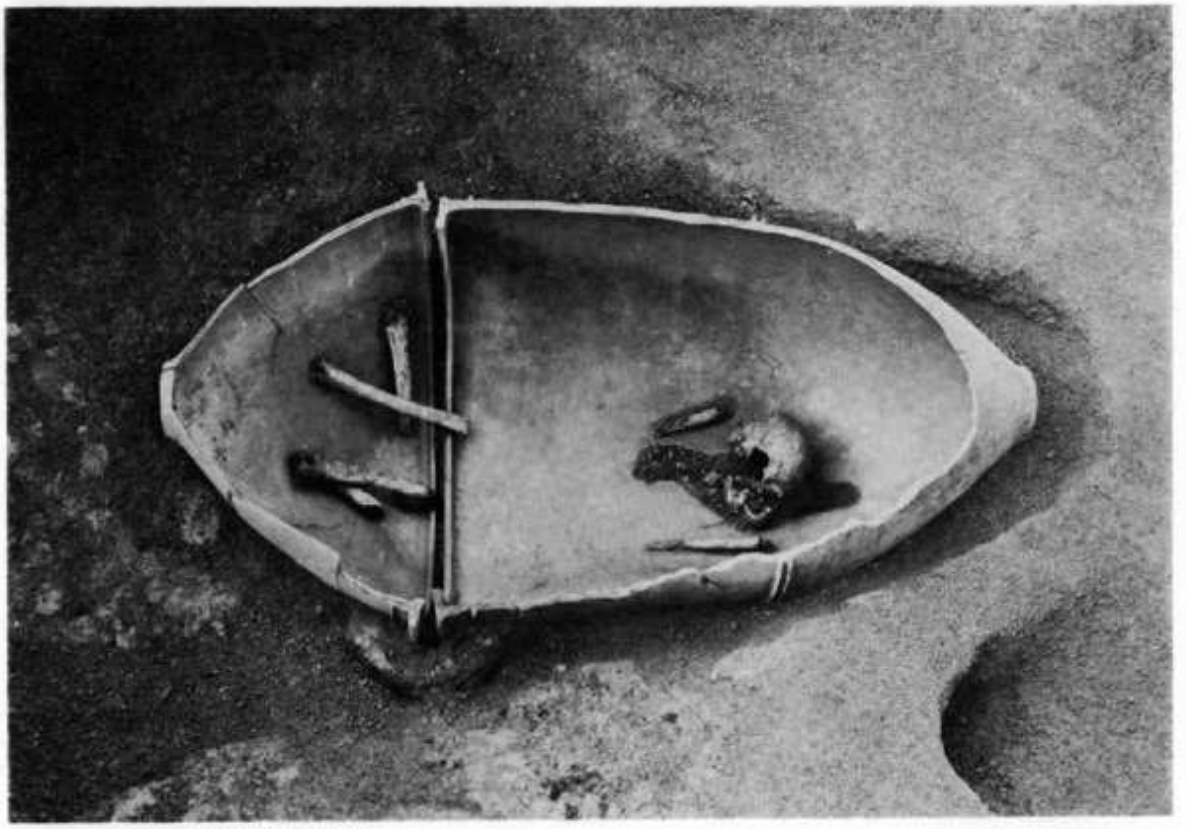


1 10号甕棺墓

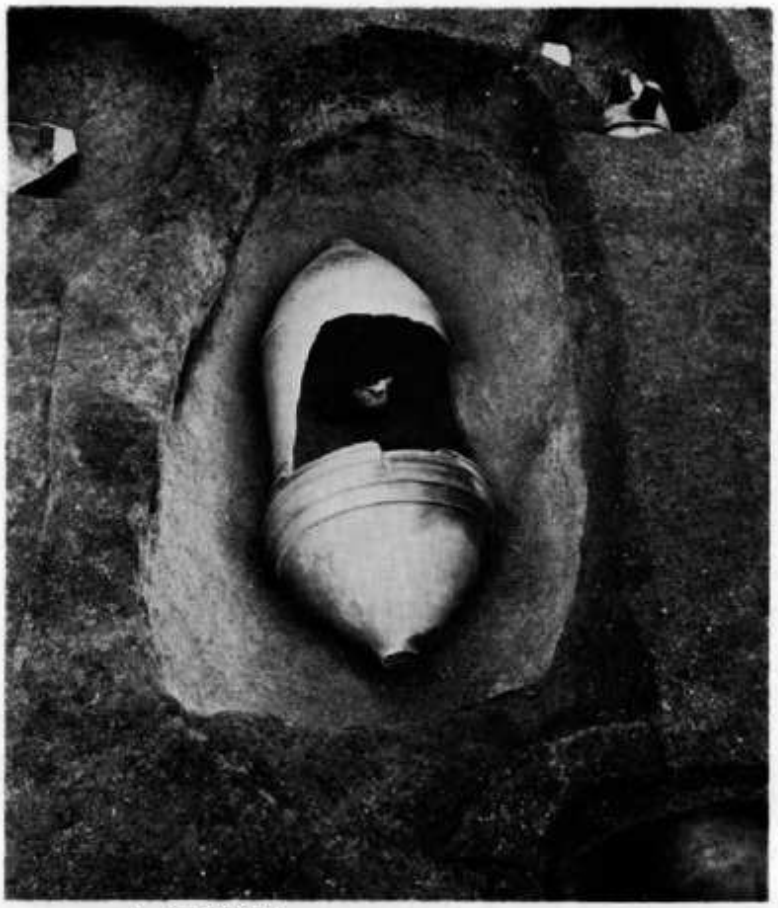
2 10号甕棺墓の挿入方法



1　5・10号甕棺墓の埋置状態

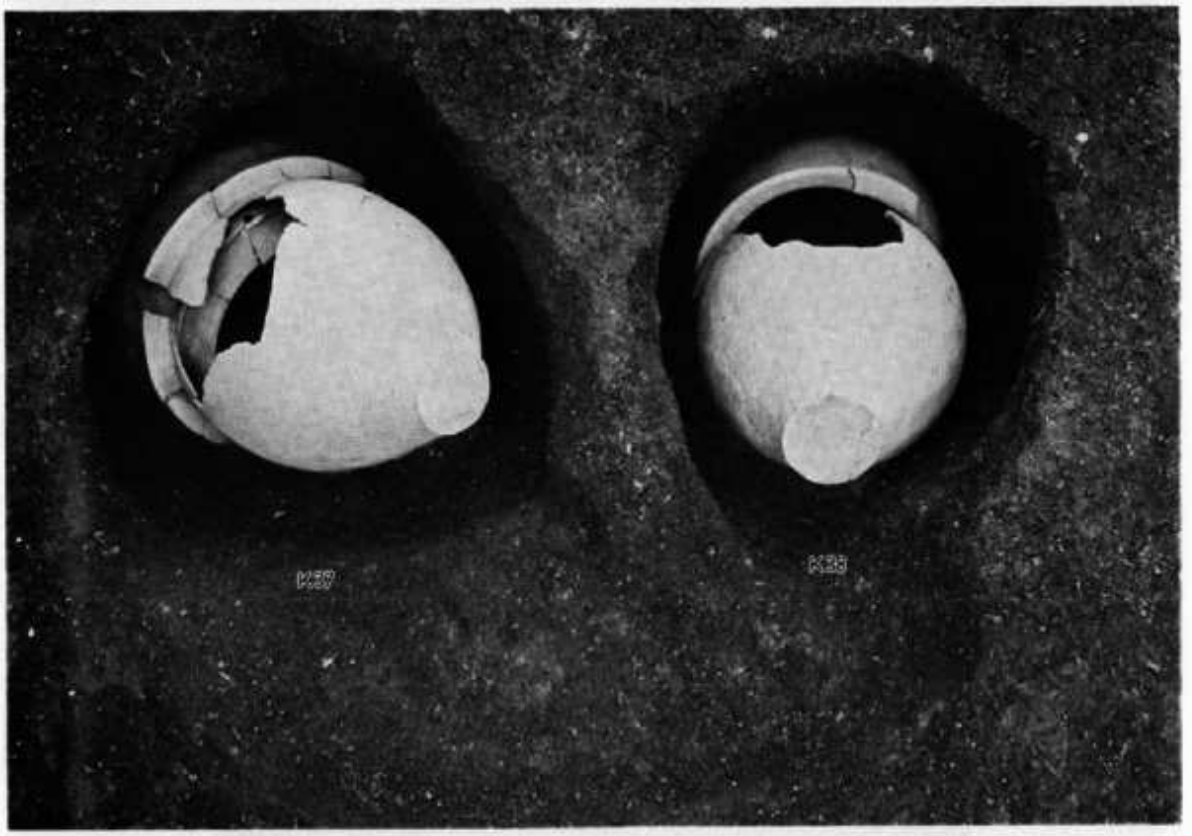


2　10号甕棺墓人骨出土状態

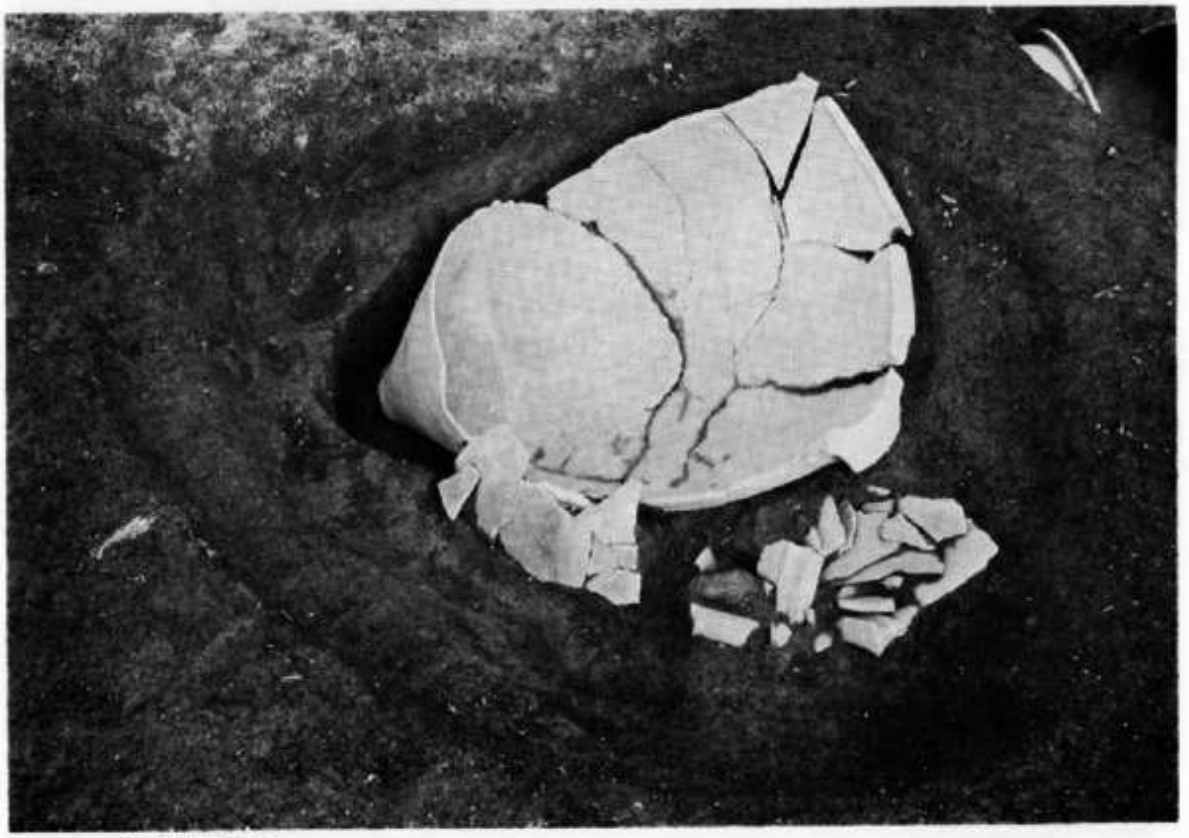


1 30号甕棺墓

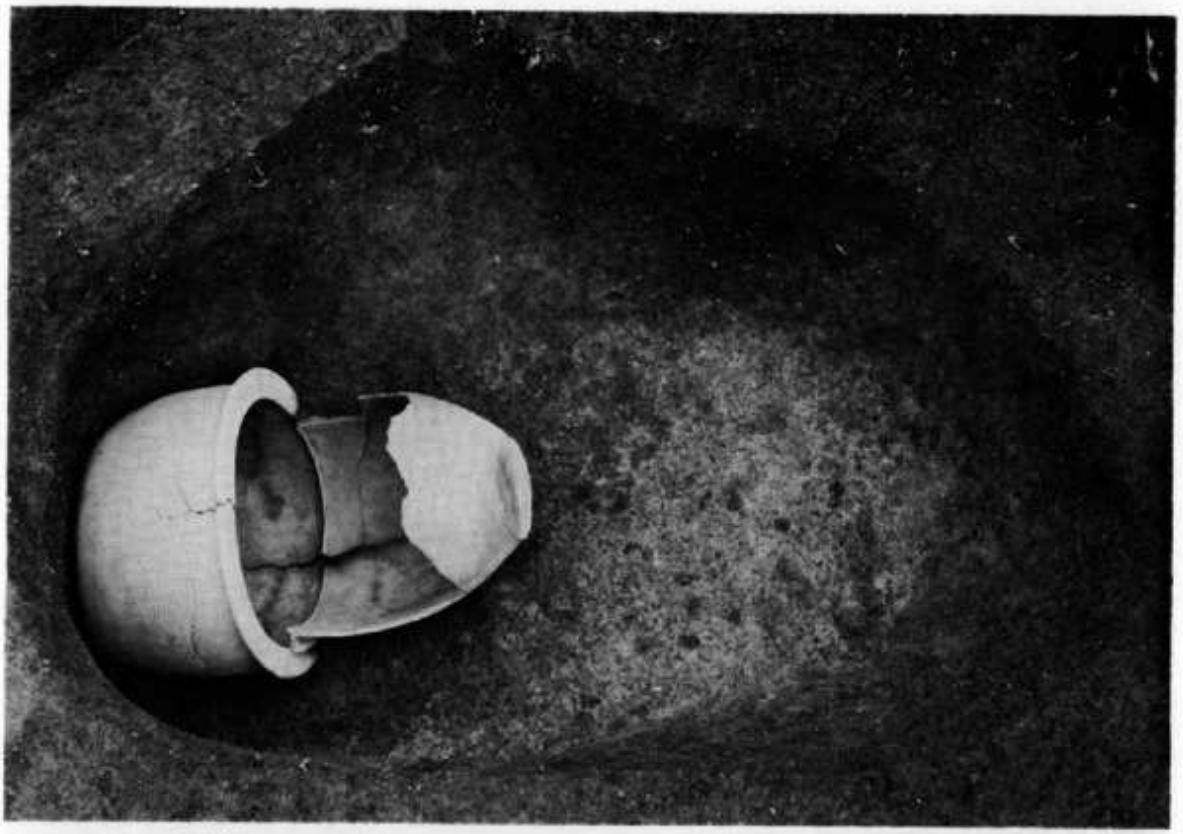
2 32号甕棺墓



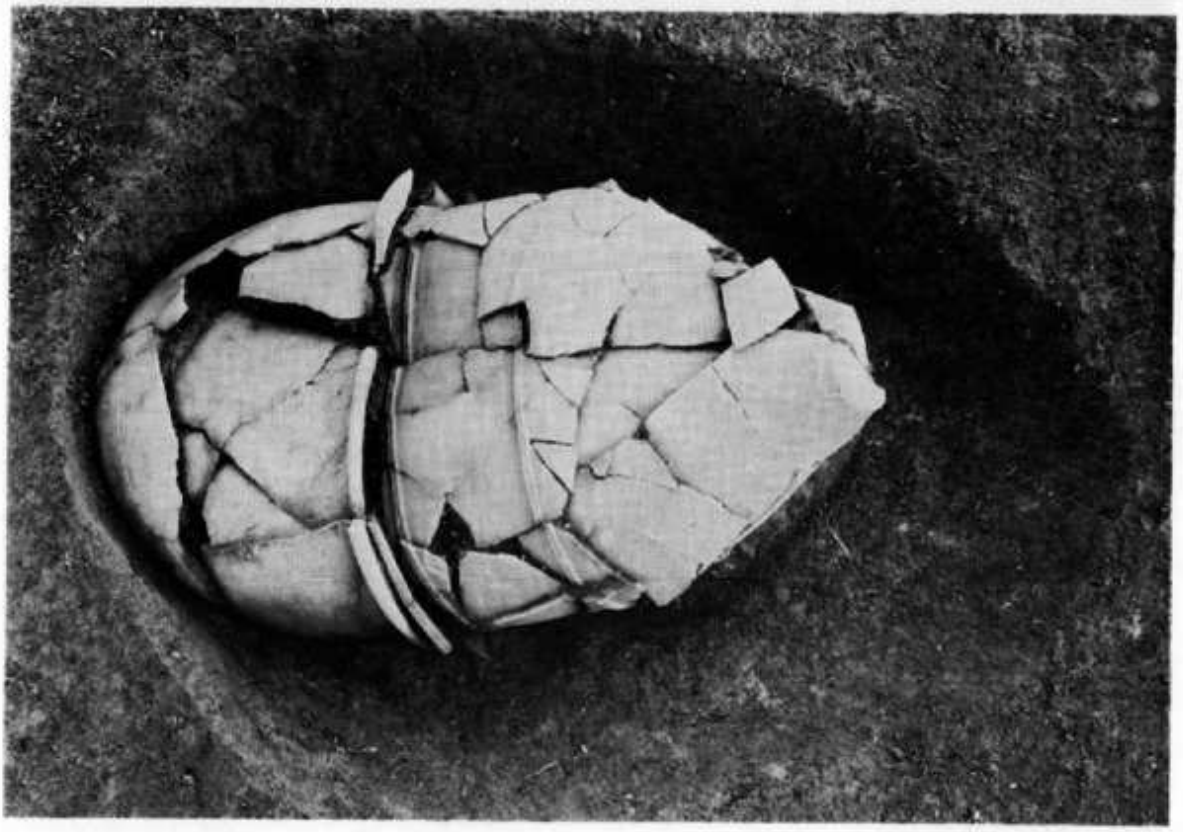
1 37・38号甕棺墓



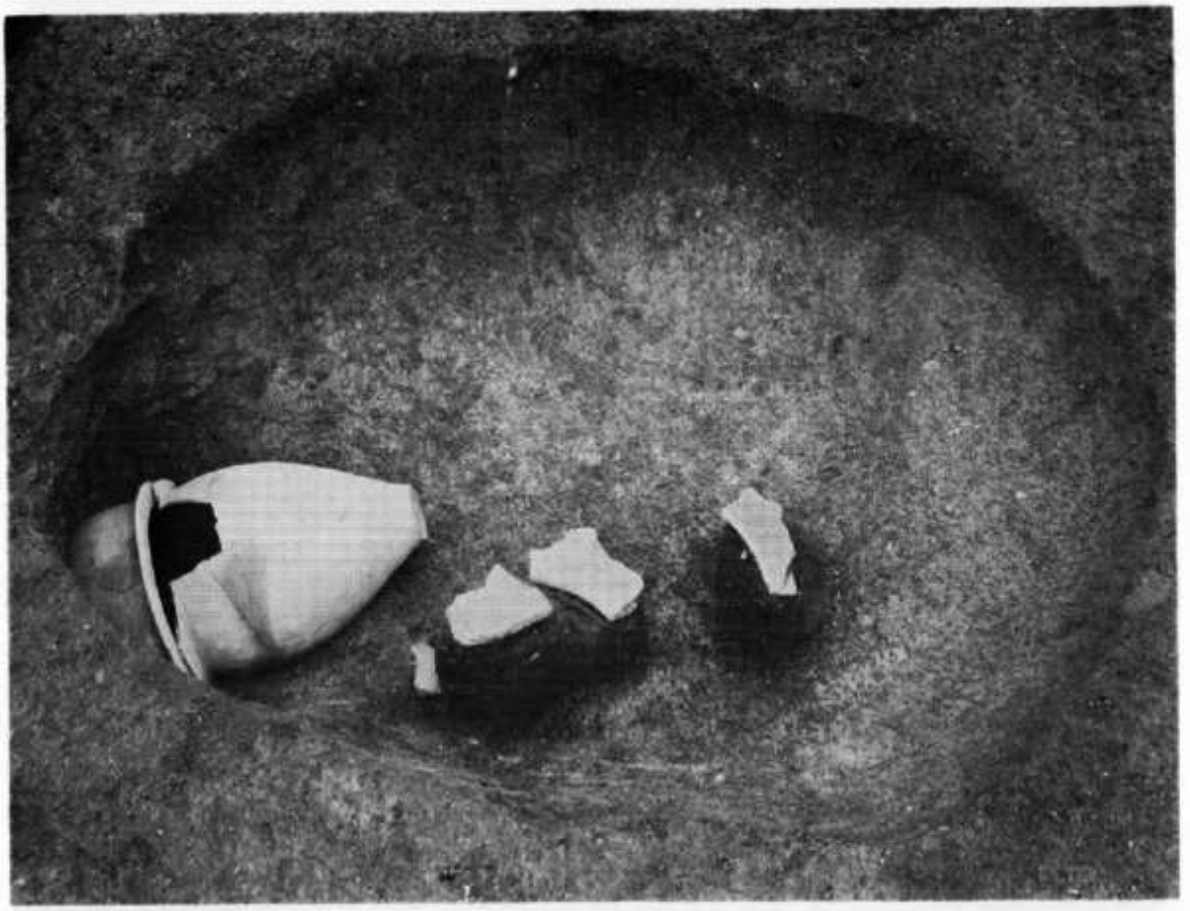
2 41号甕棺墓



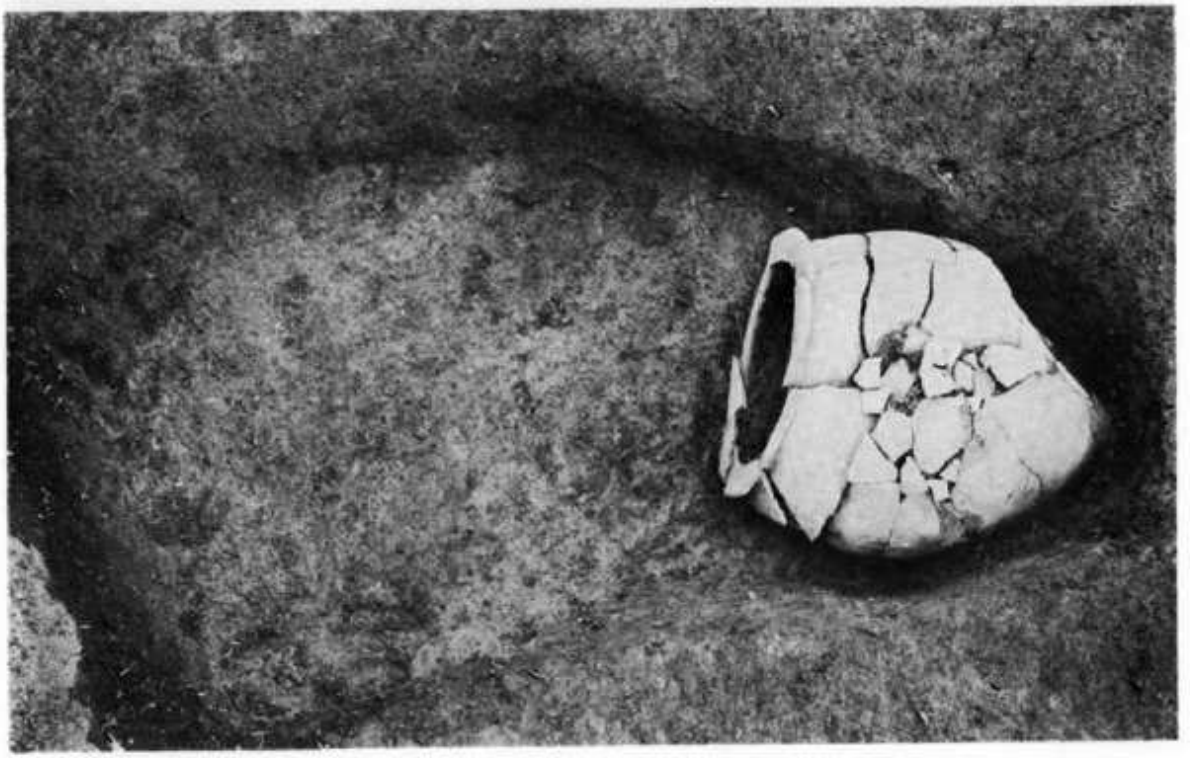
1 42号甕棺墓



2 44号甕棺墓

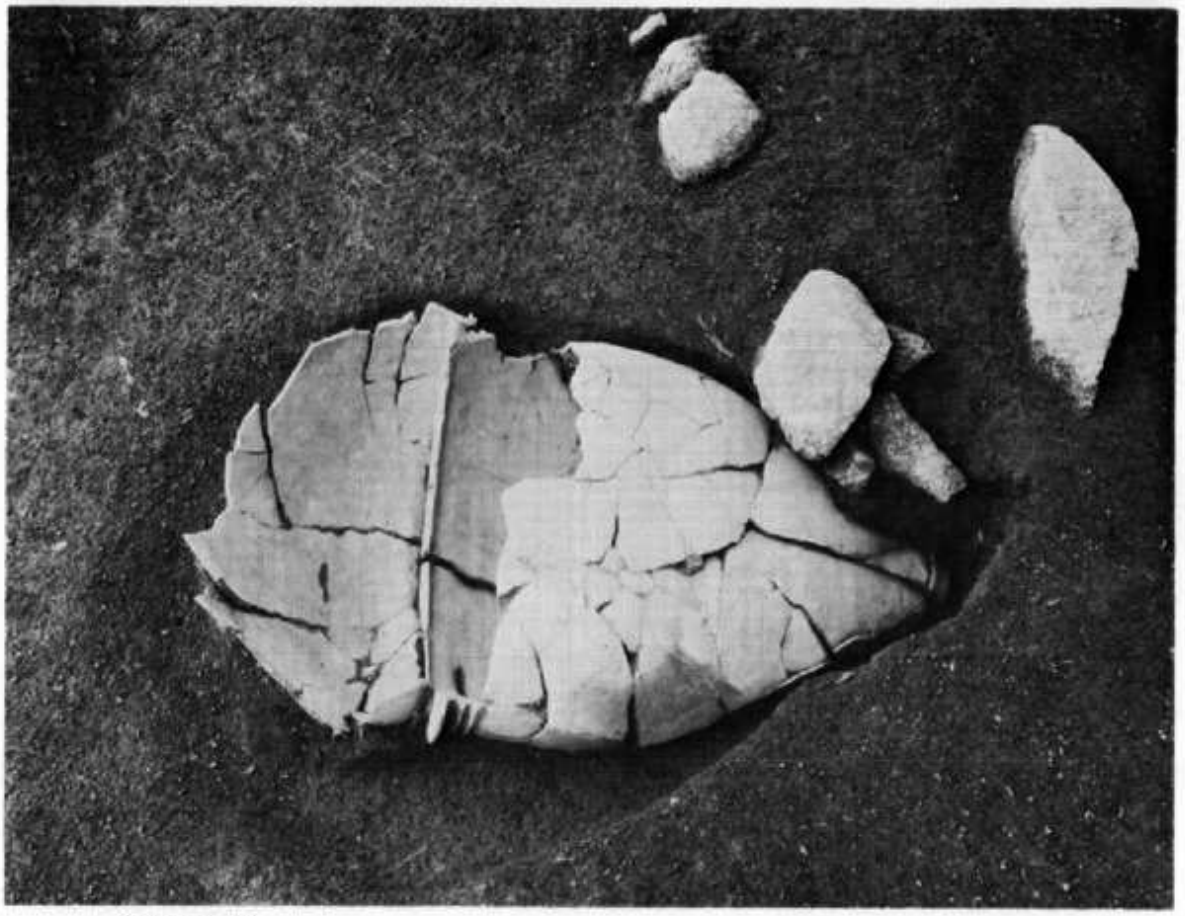


1 53号甕棺墓

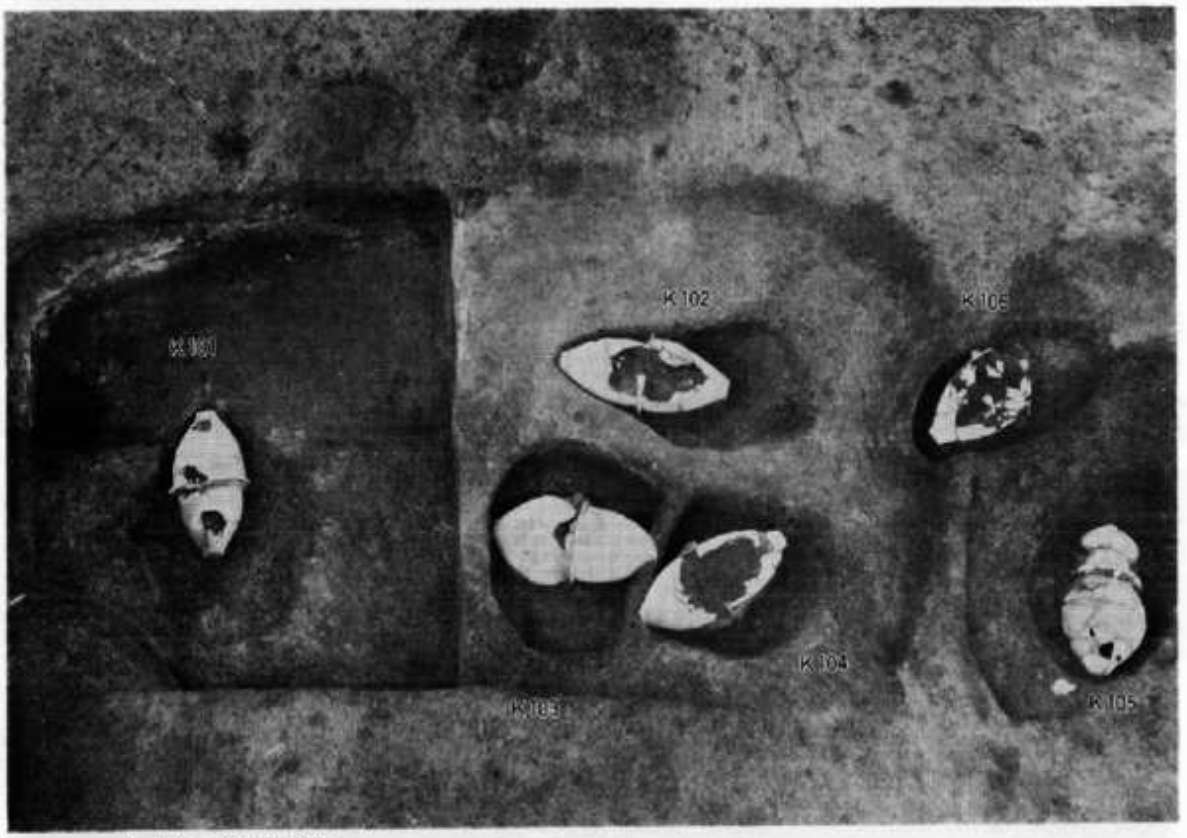


2 54号甕棺墓

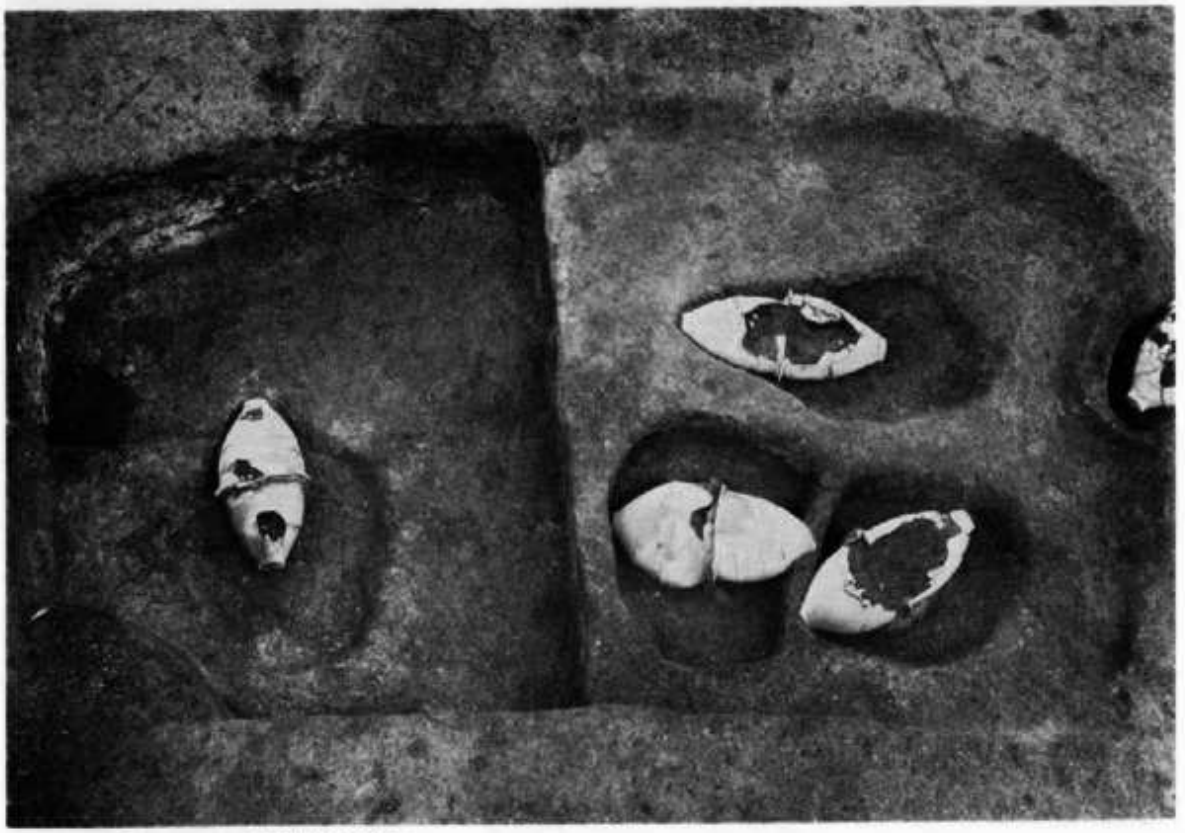
1 61号甕棺墓と3号祭祀遺構



2 65号甕棺墓

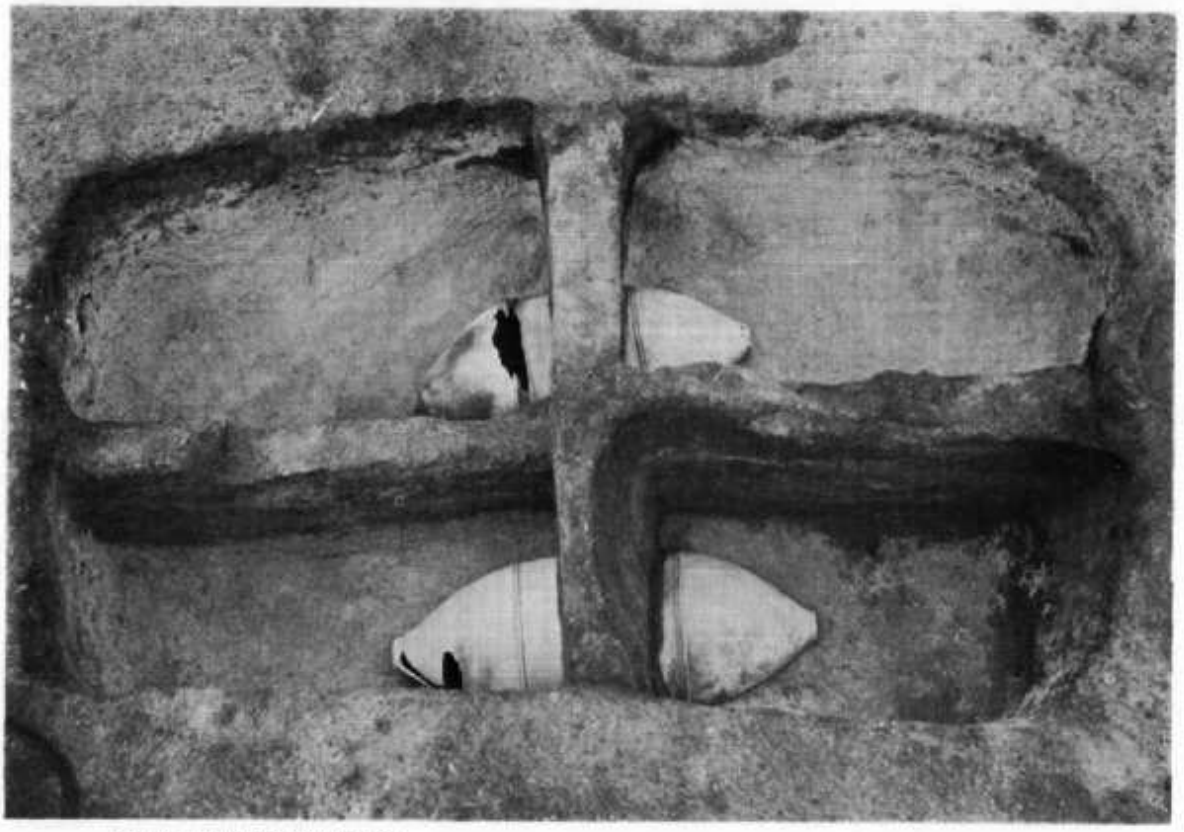


1 101～106号甕棺墓

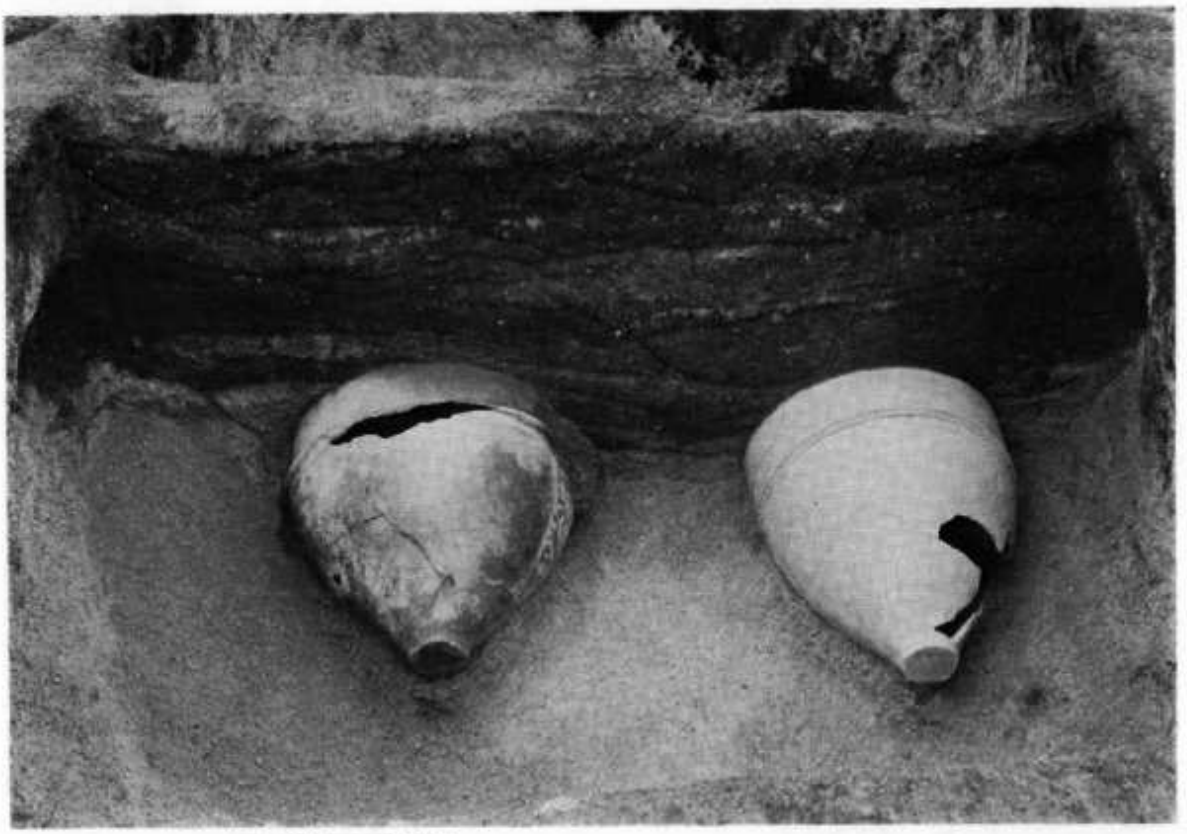


2 101～104号甕棺墓検出状態

1 99・100号甕棺墓付近全景

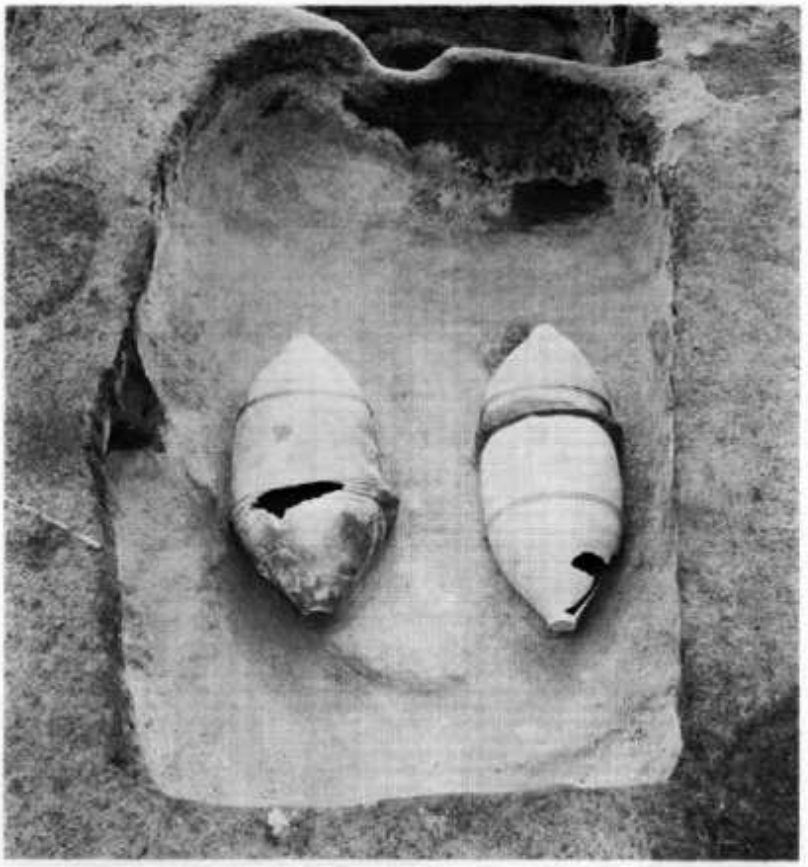


2 99・100号甕棺墓出土状態

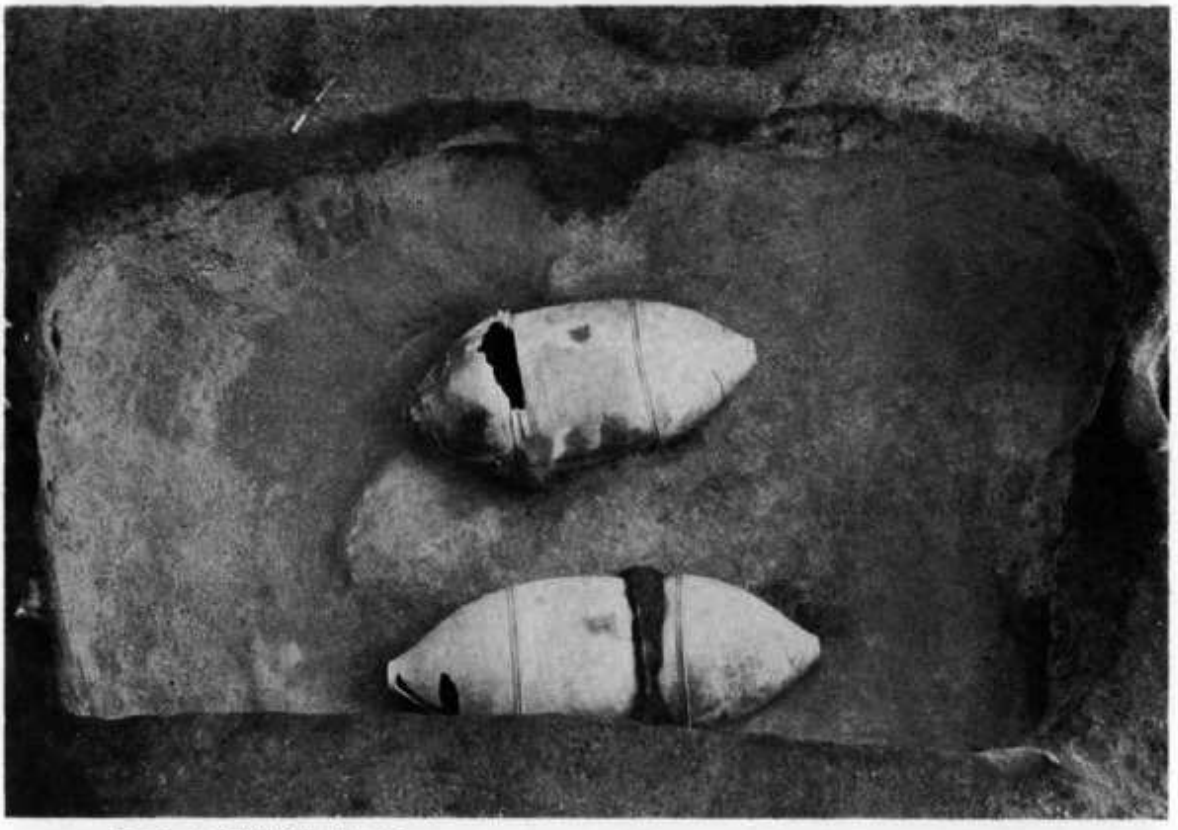


1 99・100号甕棺底墓壙埋土状態

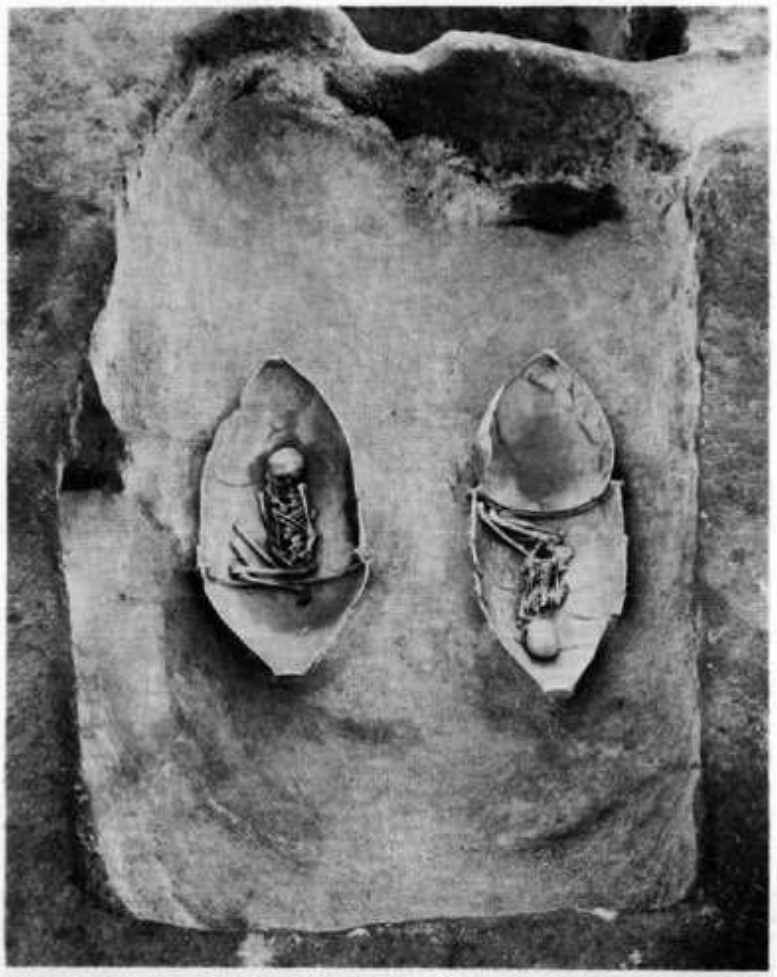
2 99・100号甕棺底と溝状遺構全景



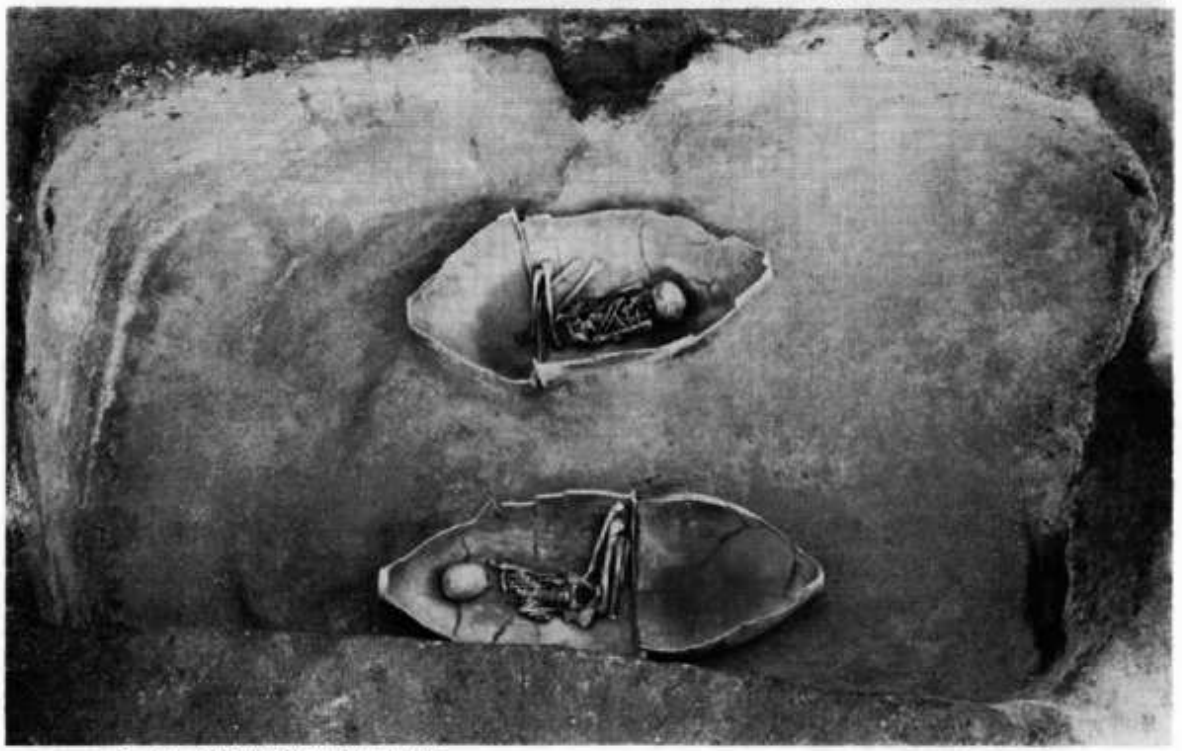
1 99・100号甕棺墓（北から）



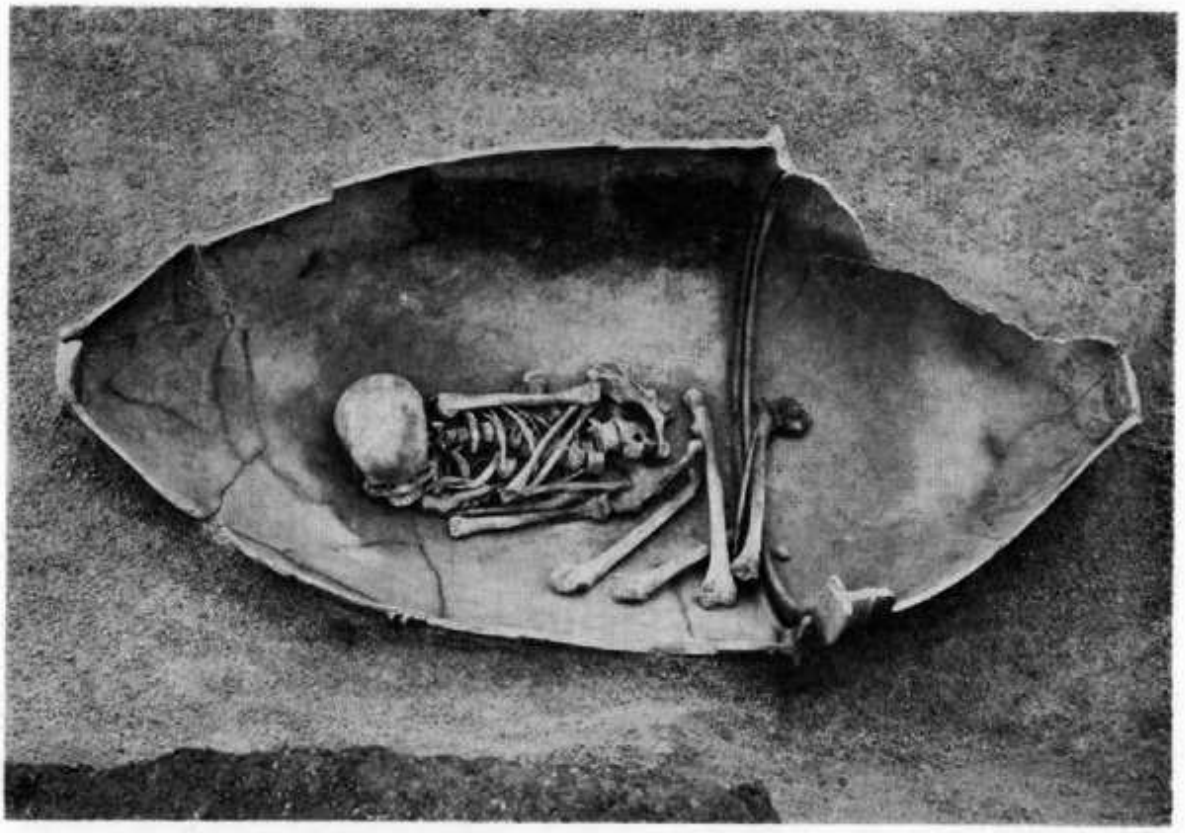
2 99・100号甕棺墓（西から）



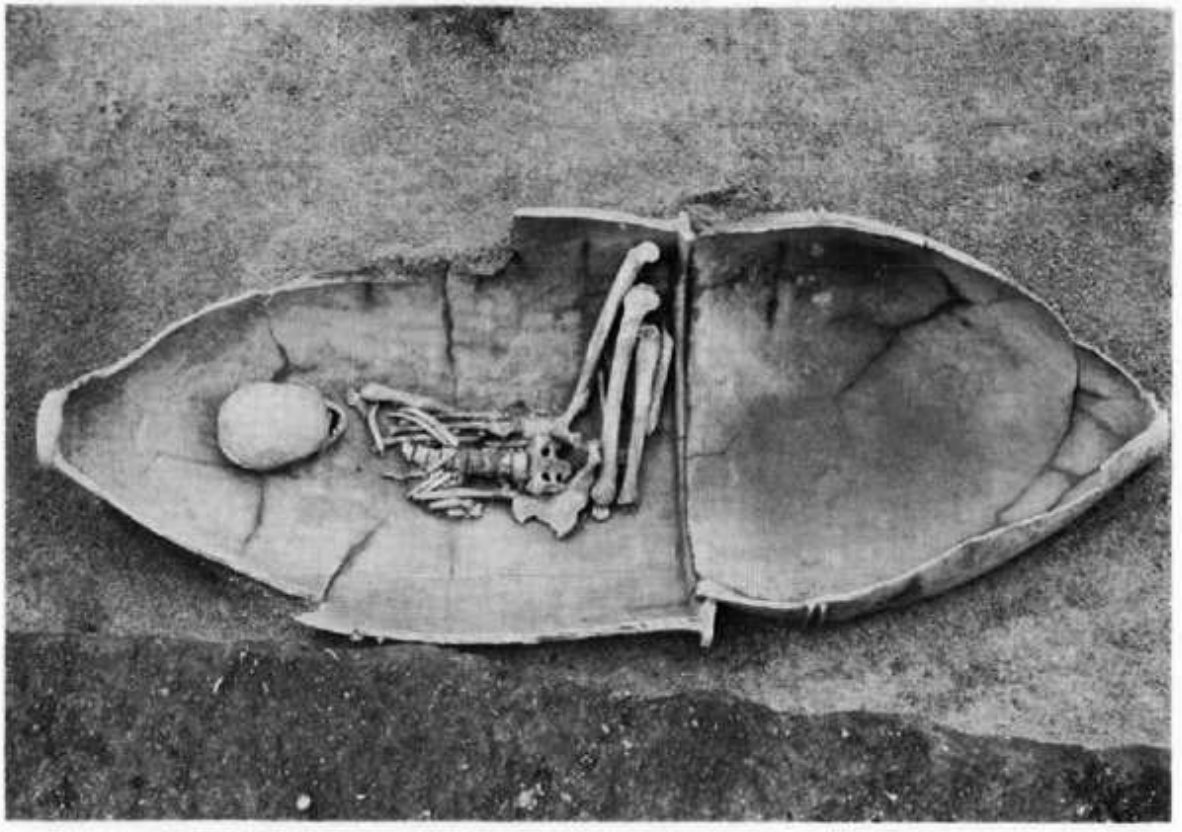
1 99・100号甕棺墓人骨出土状態



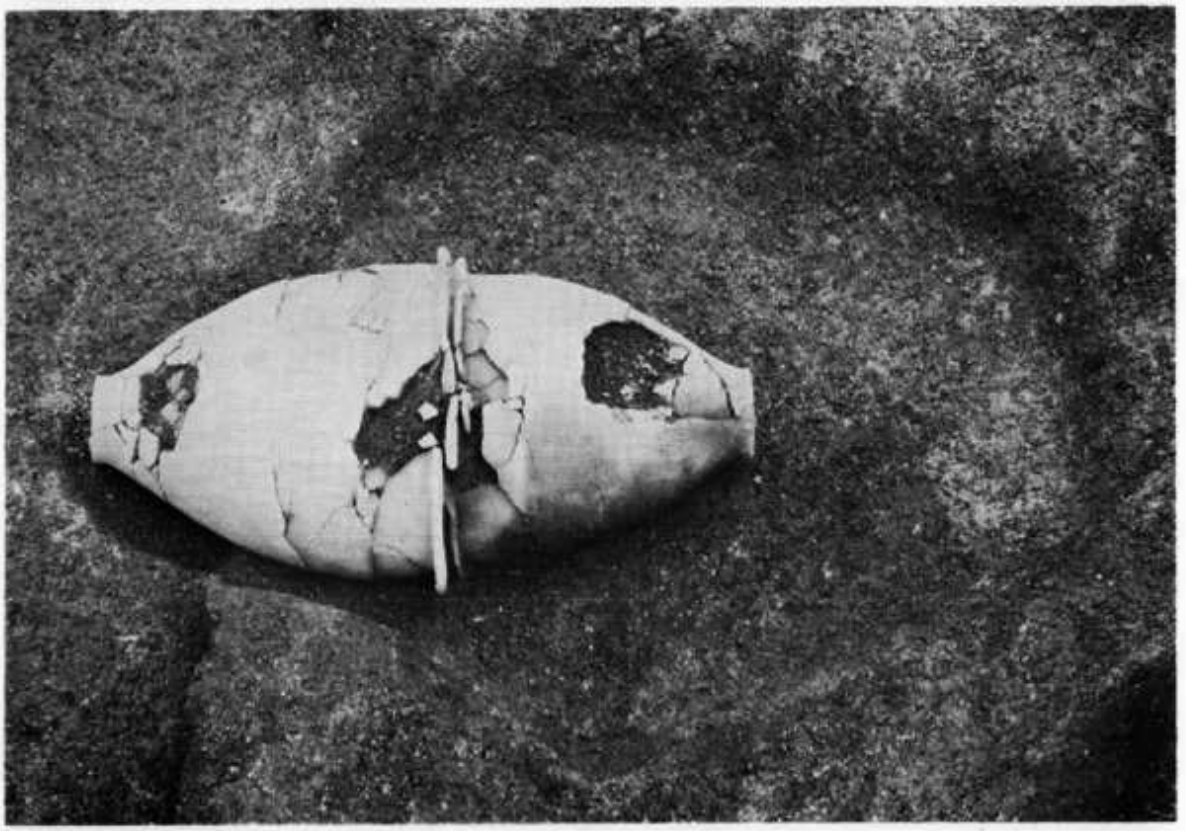
2 99・100号甕棺墓人骨出土状態



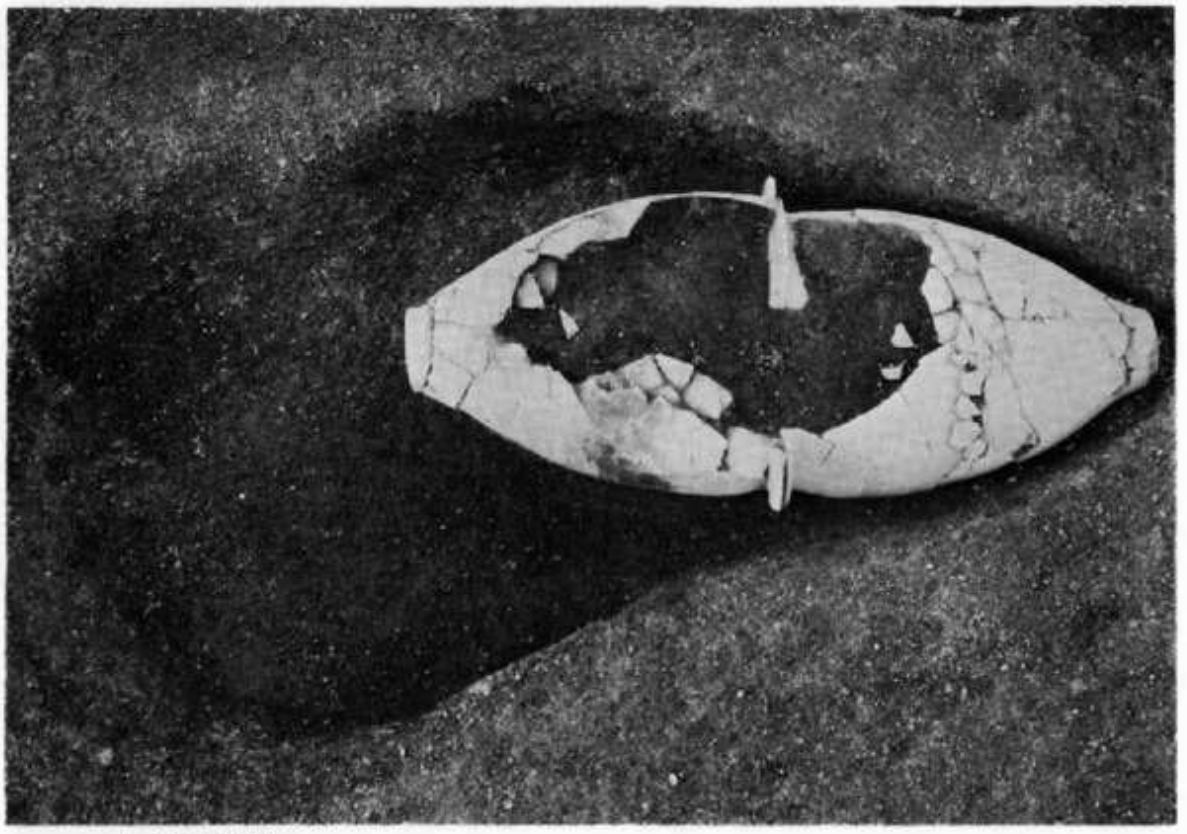
1 99号甕棺墓人骨出土状態



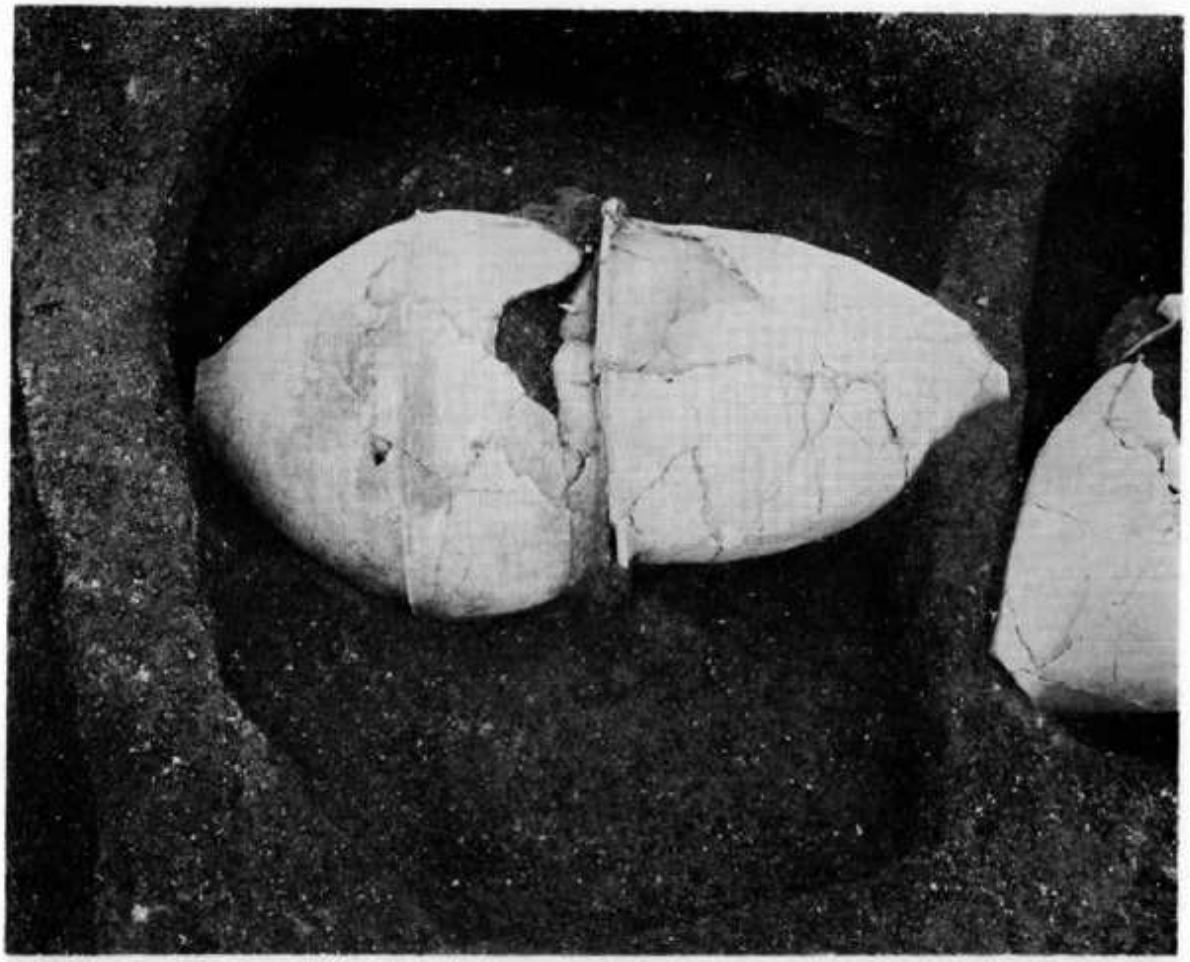
2 100号甕棺墓人骨出土状態



1 101号甕棺墓

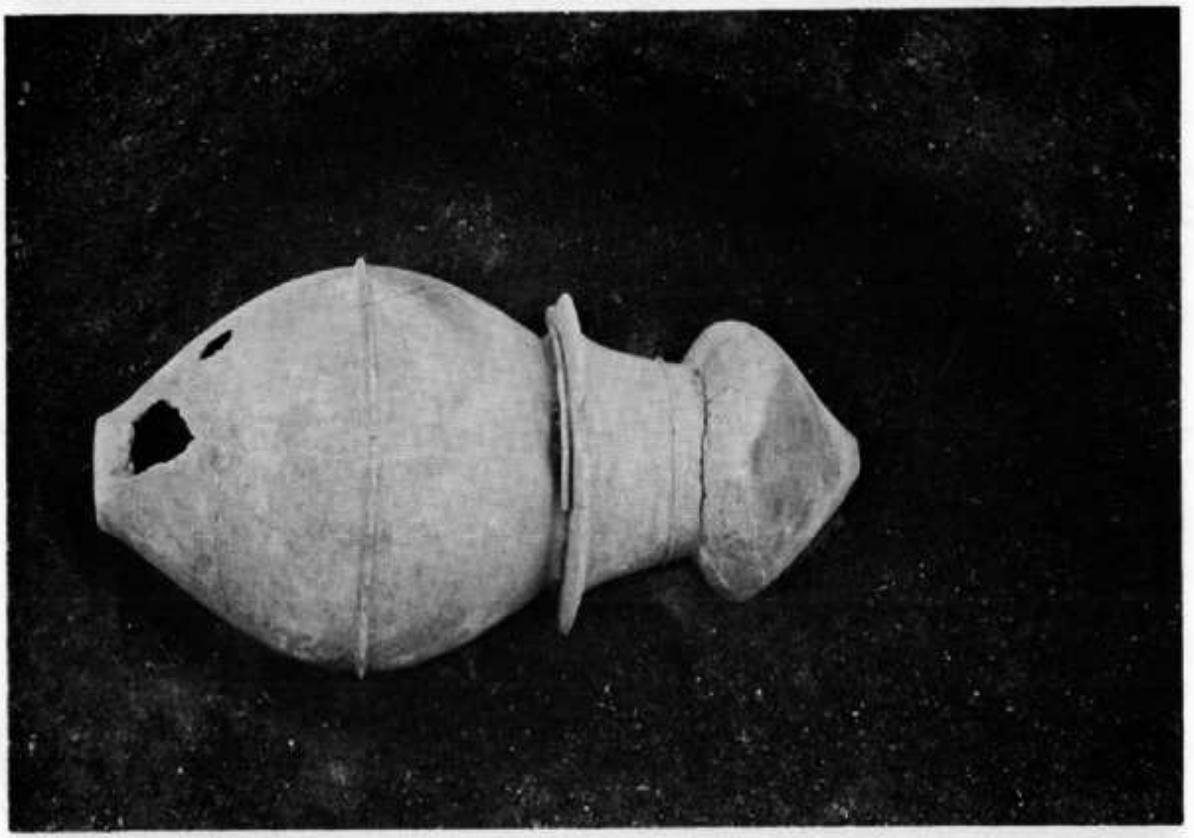


2 102号甕棺墓



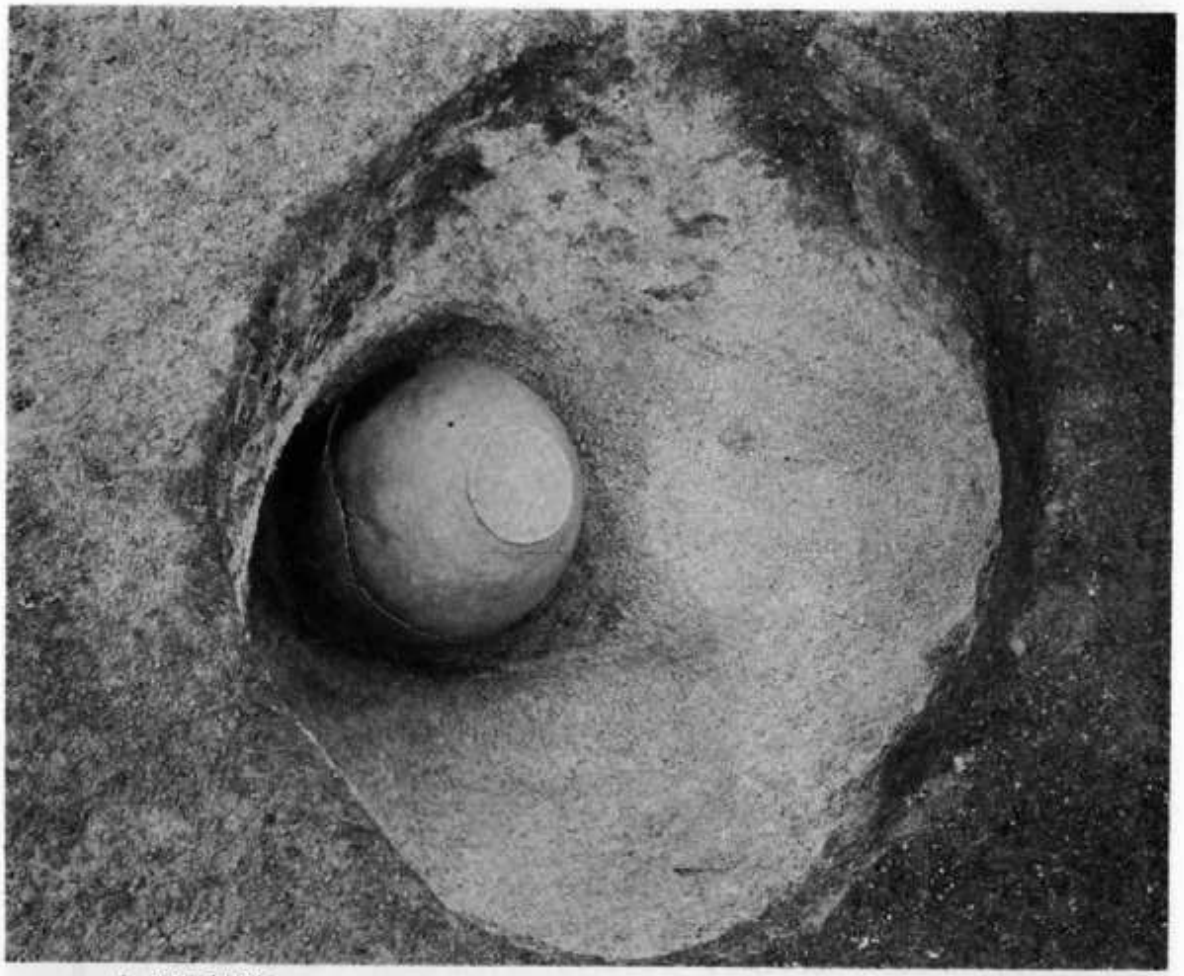
1 103号甕棺墓

2 104号甕棺墓

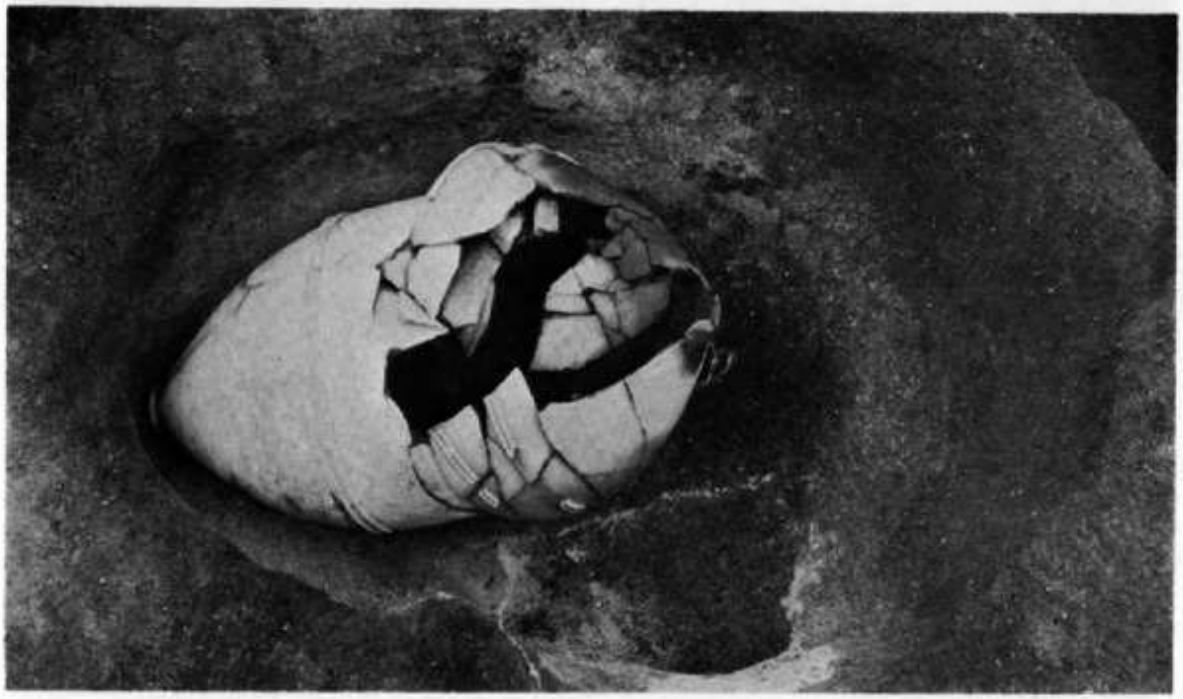


1 105号甕棺墓

2 106号甕棺墓



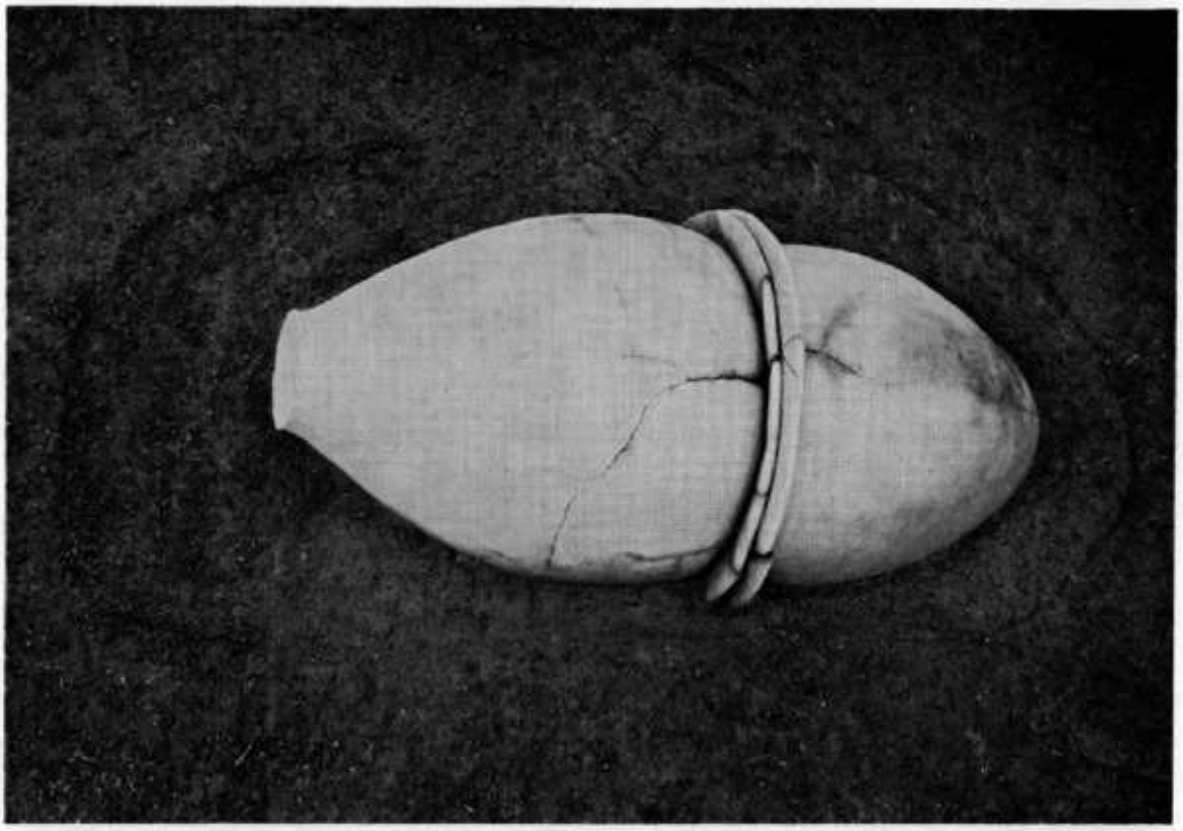
1 109号甕棺墓



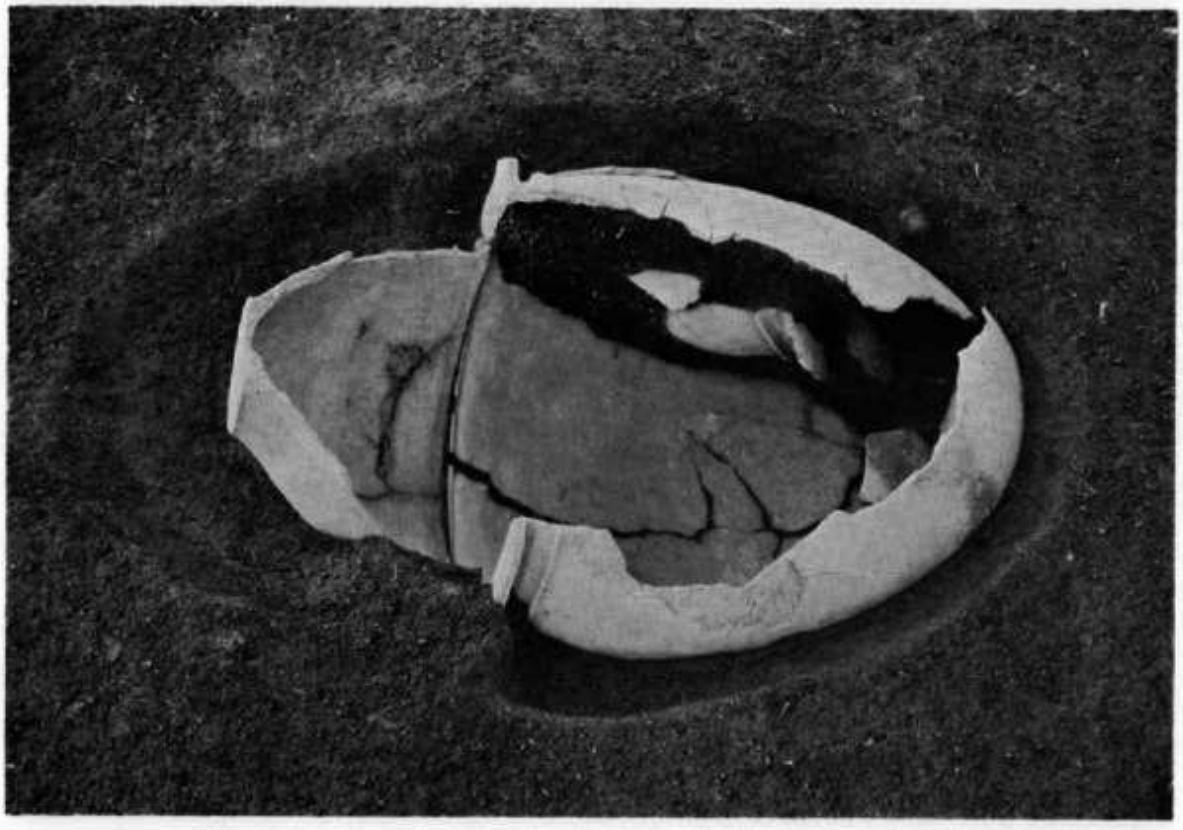
2 110号甕棺墓

1 111号甕棺墓

2 113号甕棺墓

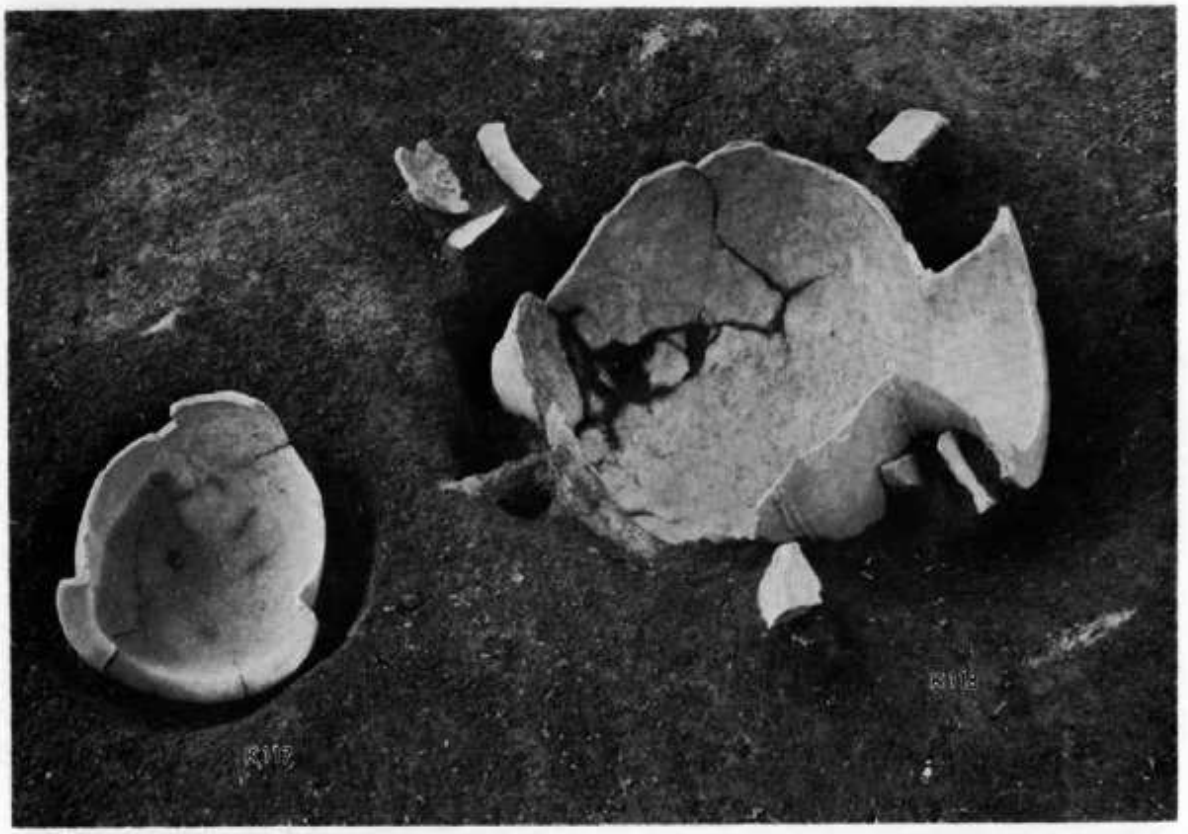


1 114号甕棺墓



2 115号甕棺墓

1 115・116号甕棺墓

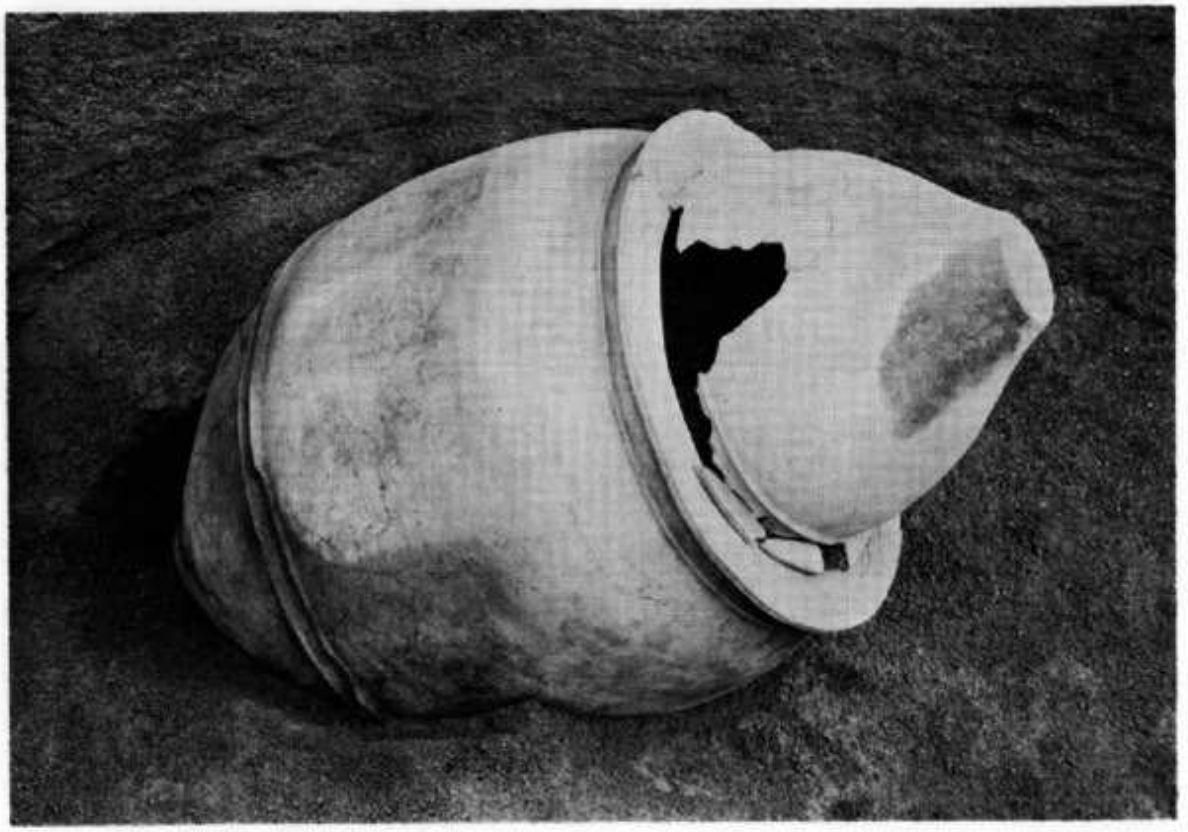


2 117・118号甕棺墓

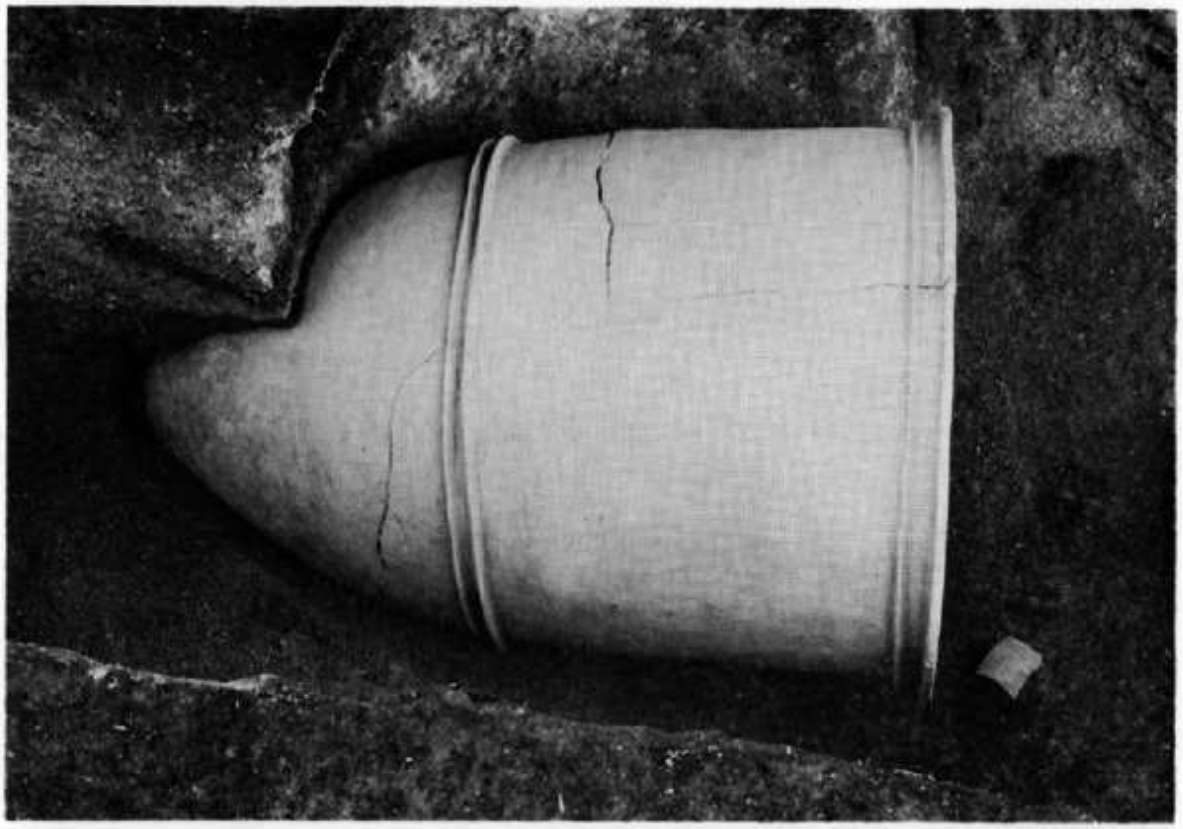
1 120号甕棺墓

2 121号甕棺墓

1 125号甕棺墓

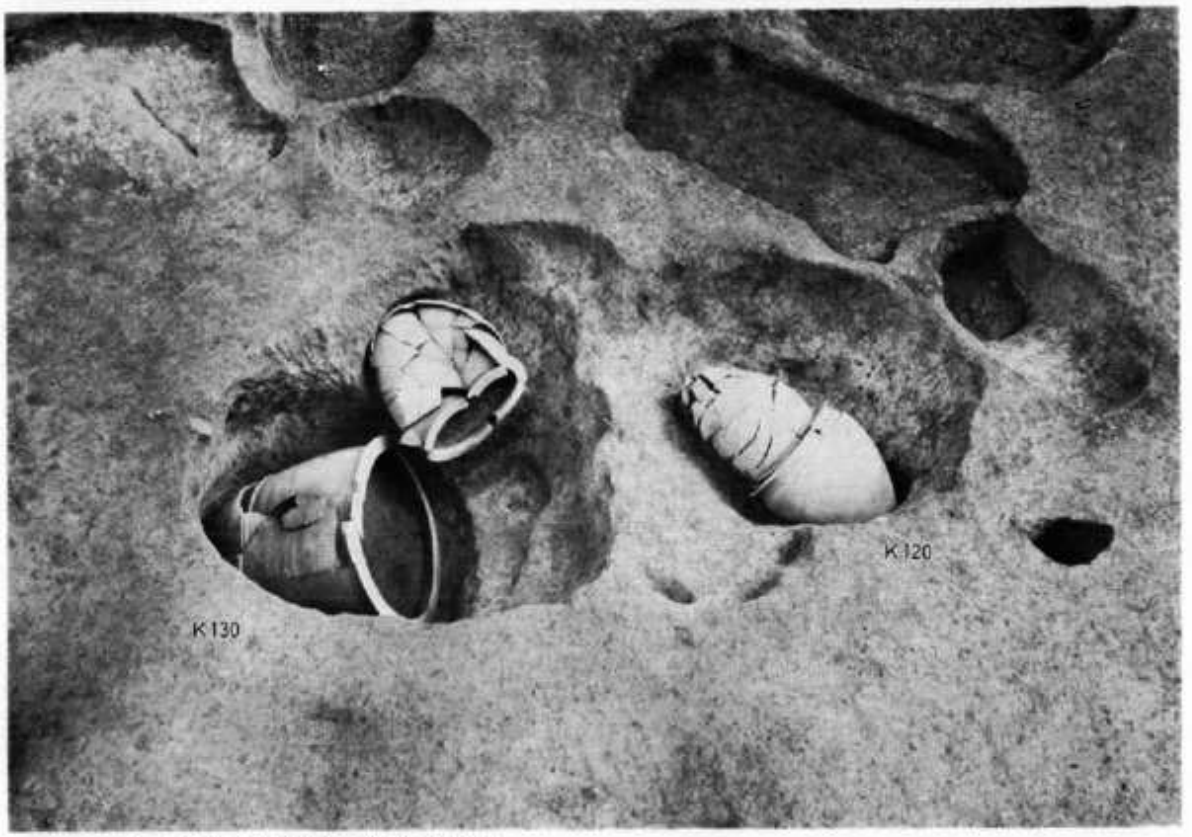


2 125号甕棺墓埋置状態



1 128号甕棺墓

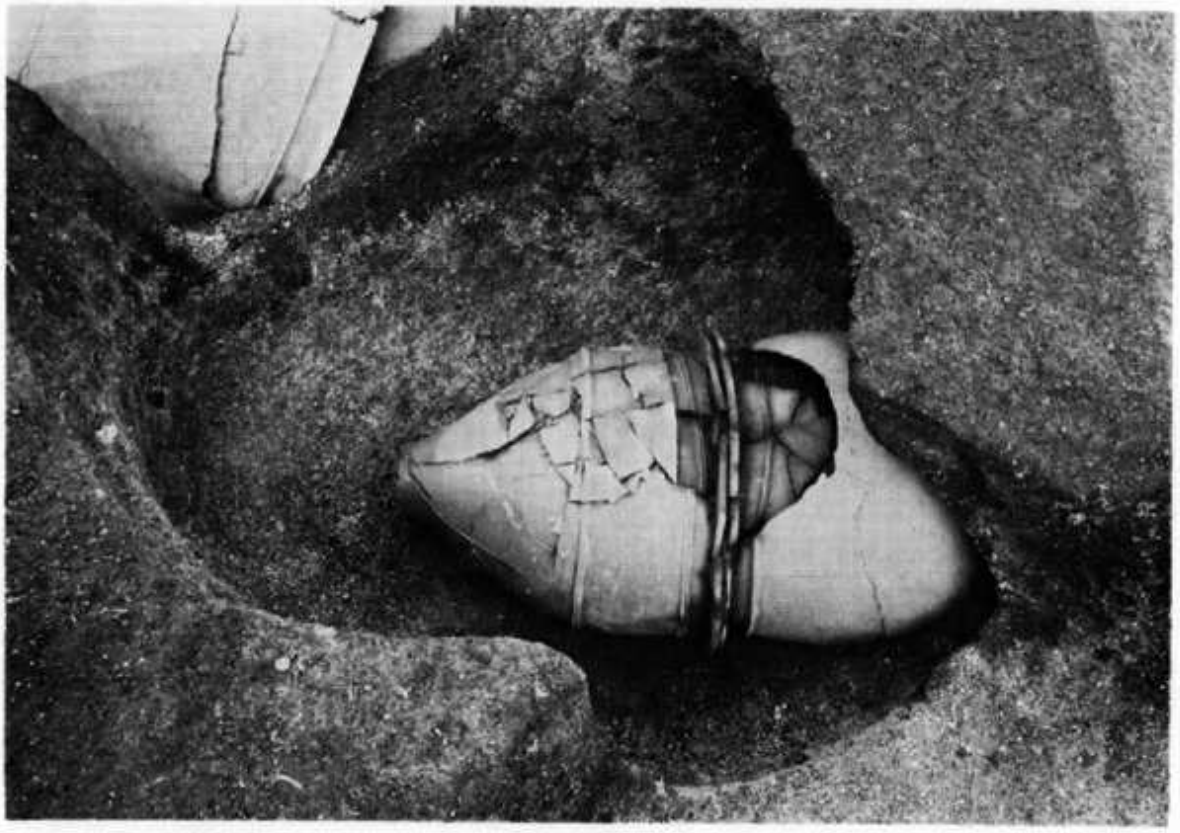
2 128号甕棺墓人骨出土状態



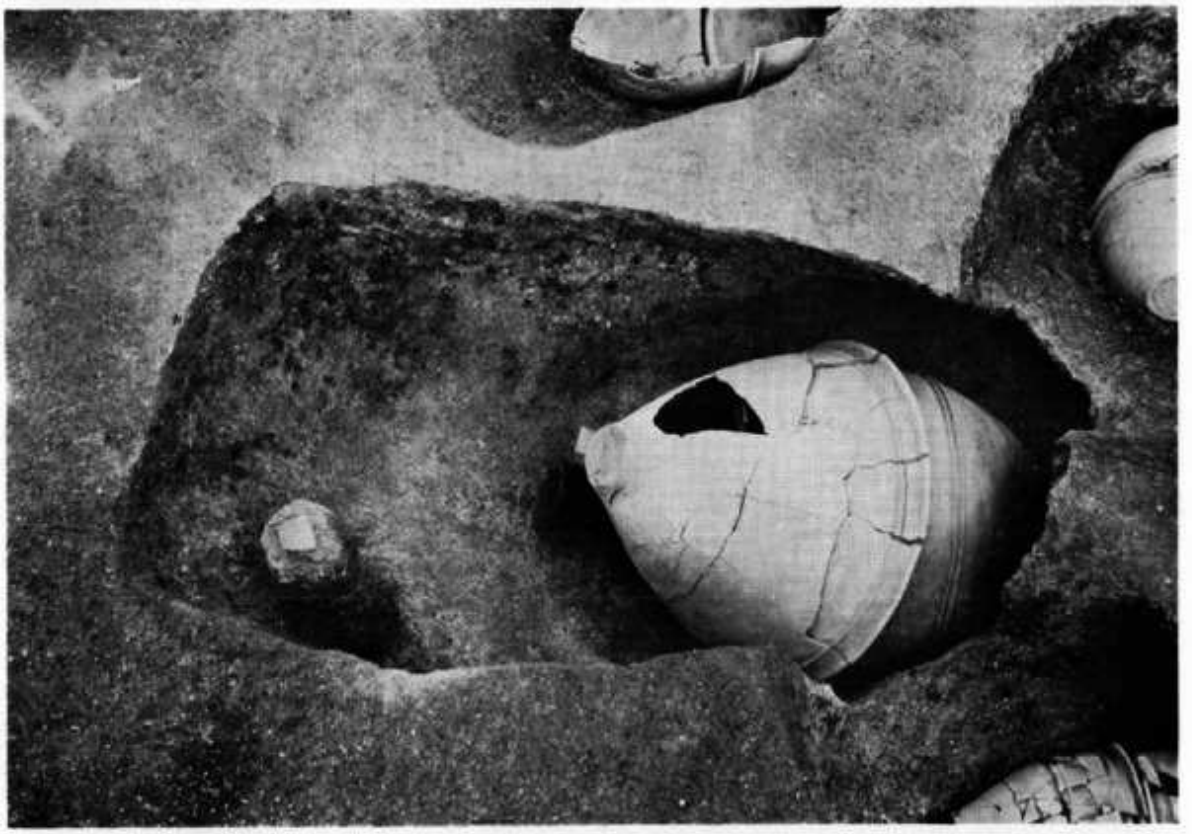
1 120・130号甕棺墓・4号祭祀構近景

2 130号甕棺墓

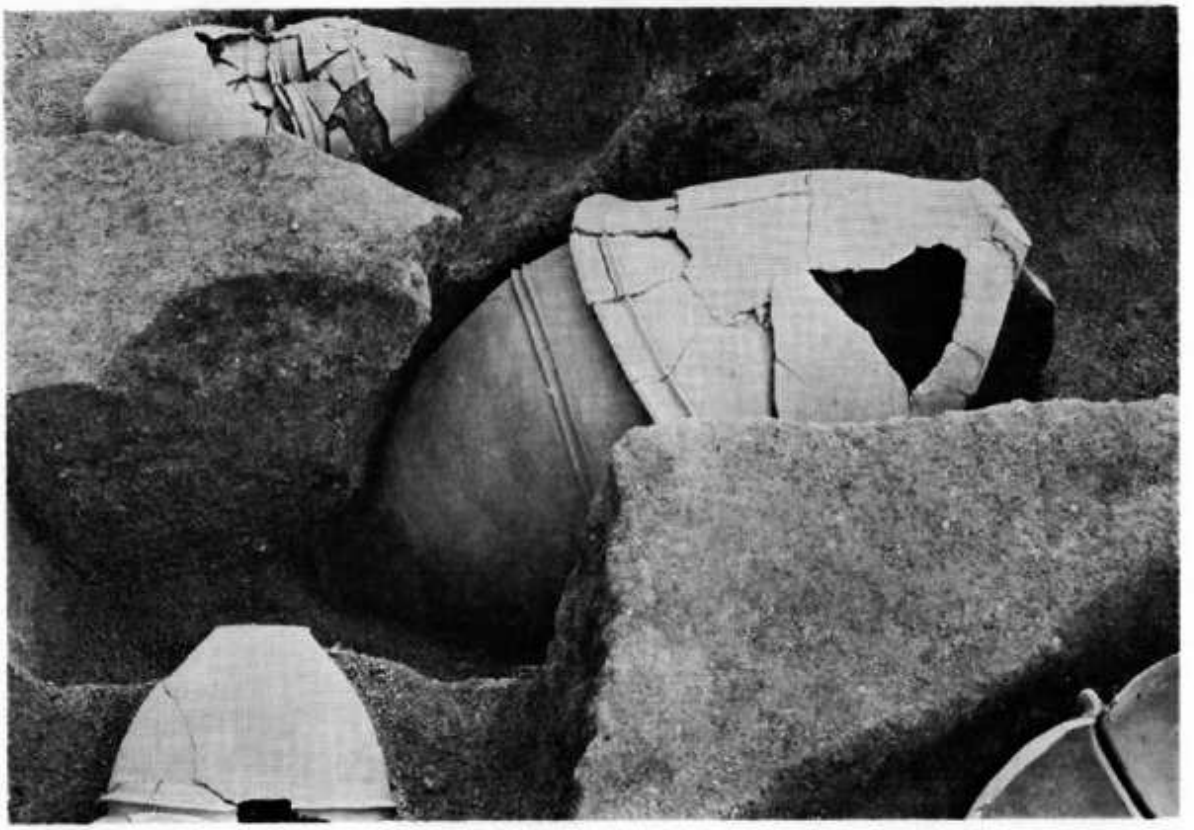
1 130号甕棺墓埋置状態



2 133号甕棺墓

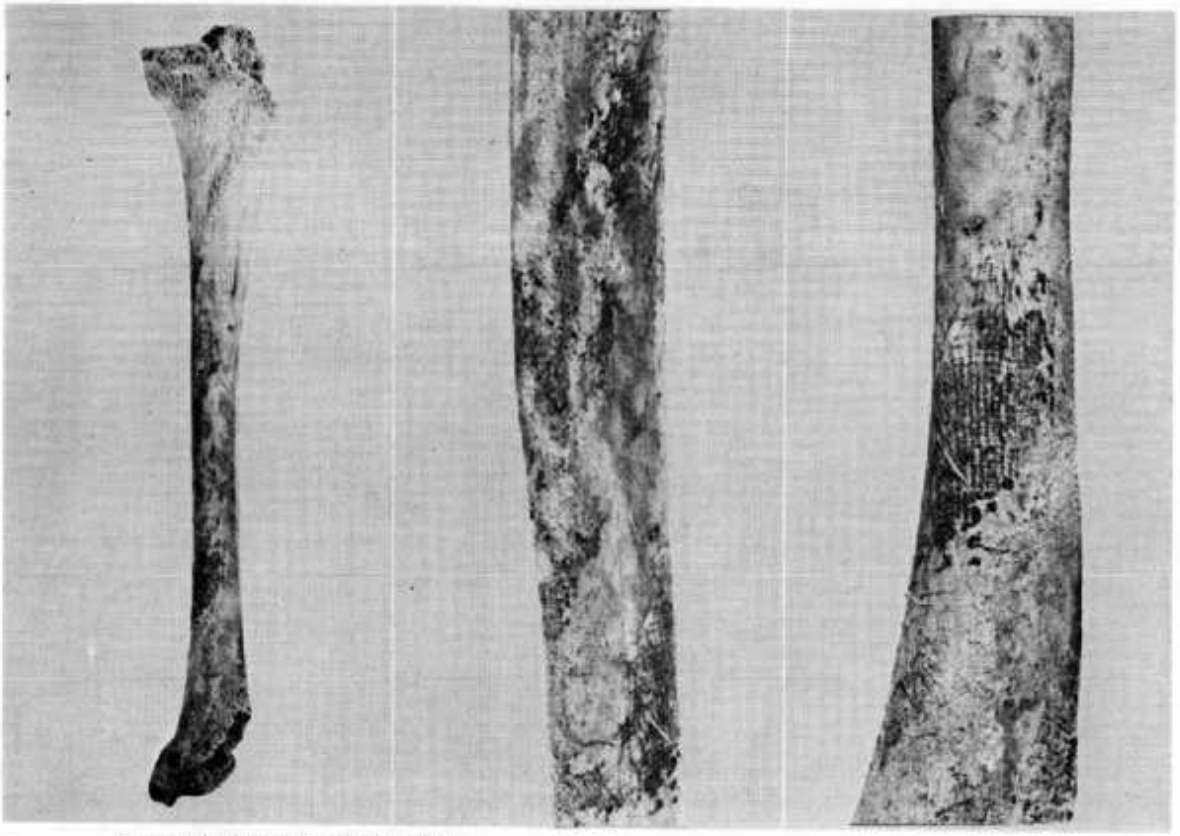


1 134号甕棺墓

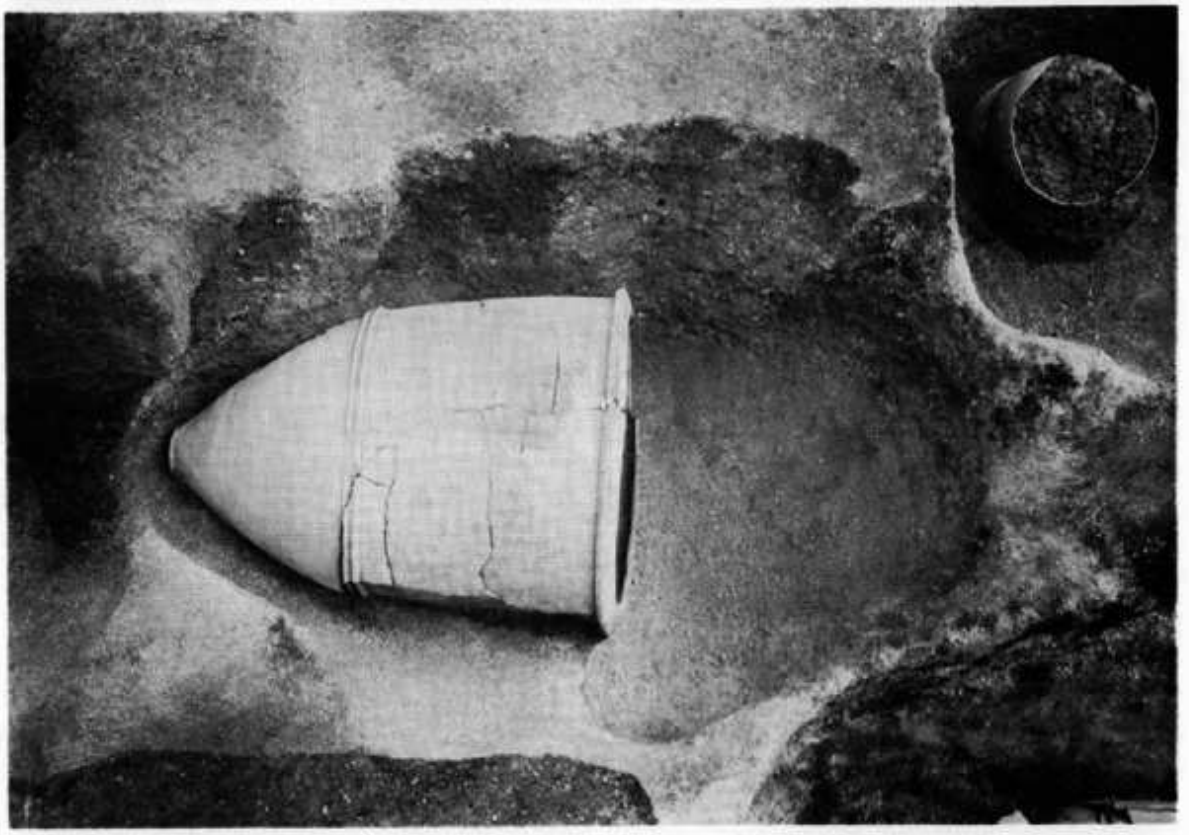


2 134号甕棺墓埋置状態

1 134号甕棺墓人骨出土状態



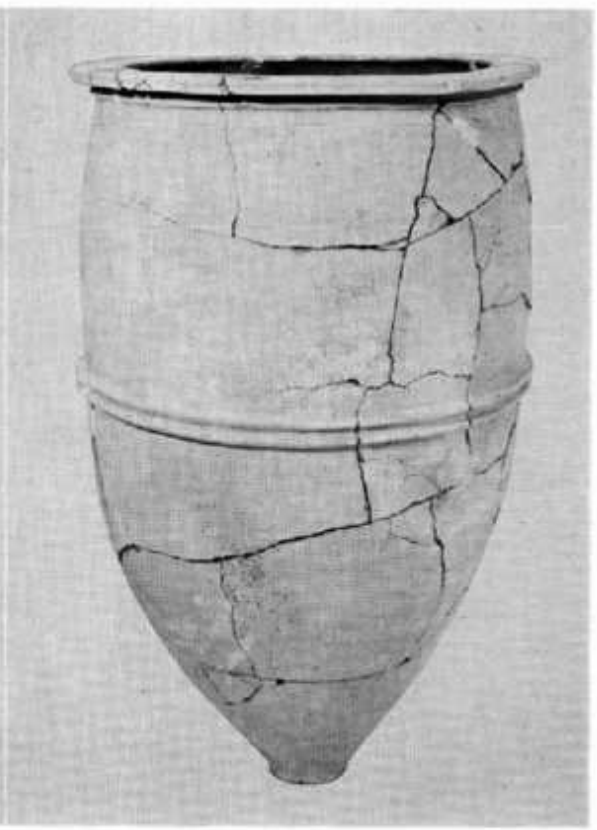
2 134号甕棺墓人骨の苧麻付着状態



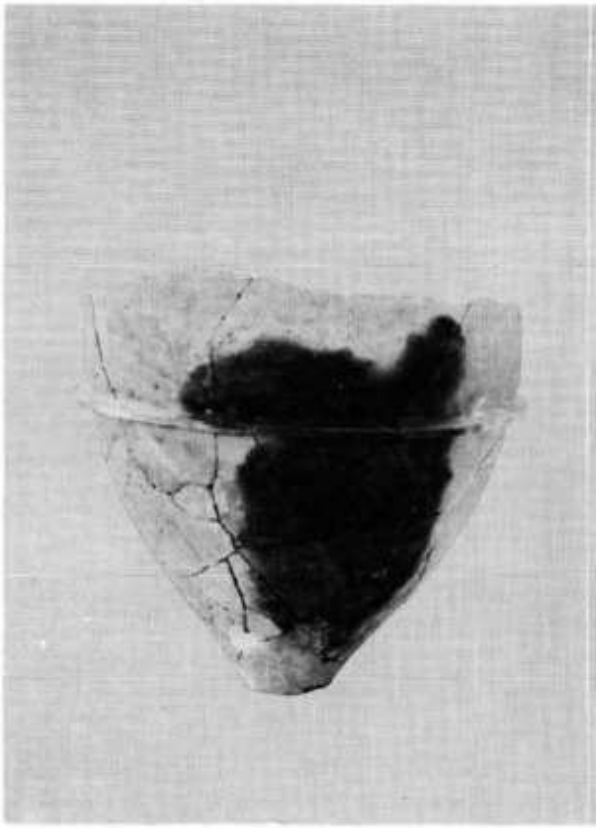
1 135号甕棺墓

2 136号甕棺墓

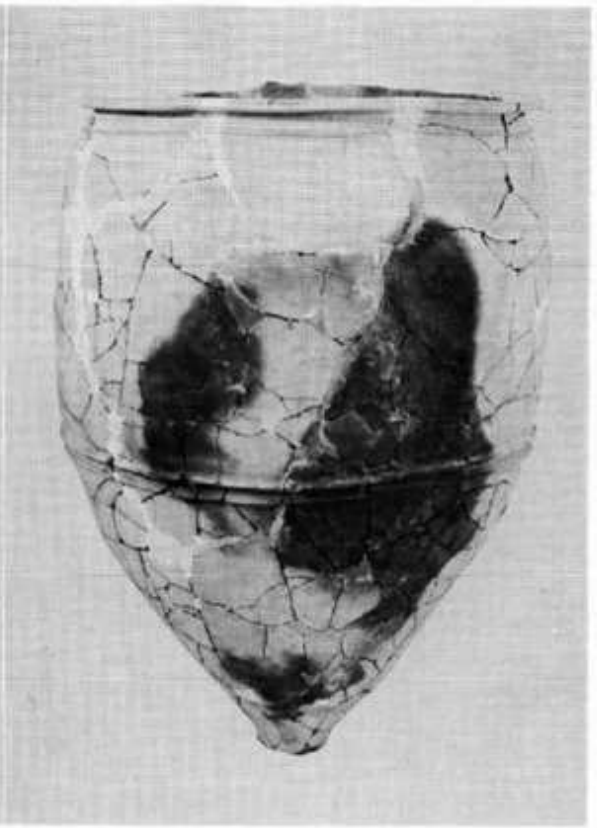
1　5号甕棺上甕



2　5号甕棺下甕



3　6号甕棺上甕



4　6号甕棺下甕

1 10号甕棺上甕

2 10号甕棺下甕

3 13号甕棺上甕

4 13号甕棺下甕

1 23号甕棺上甕

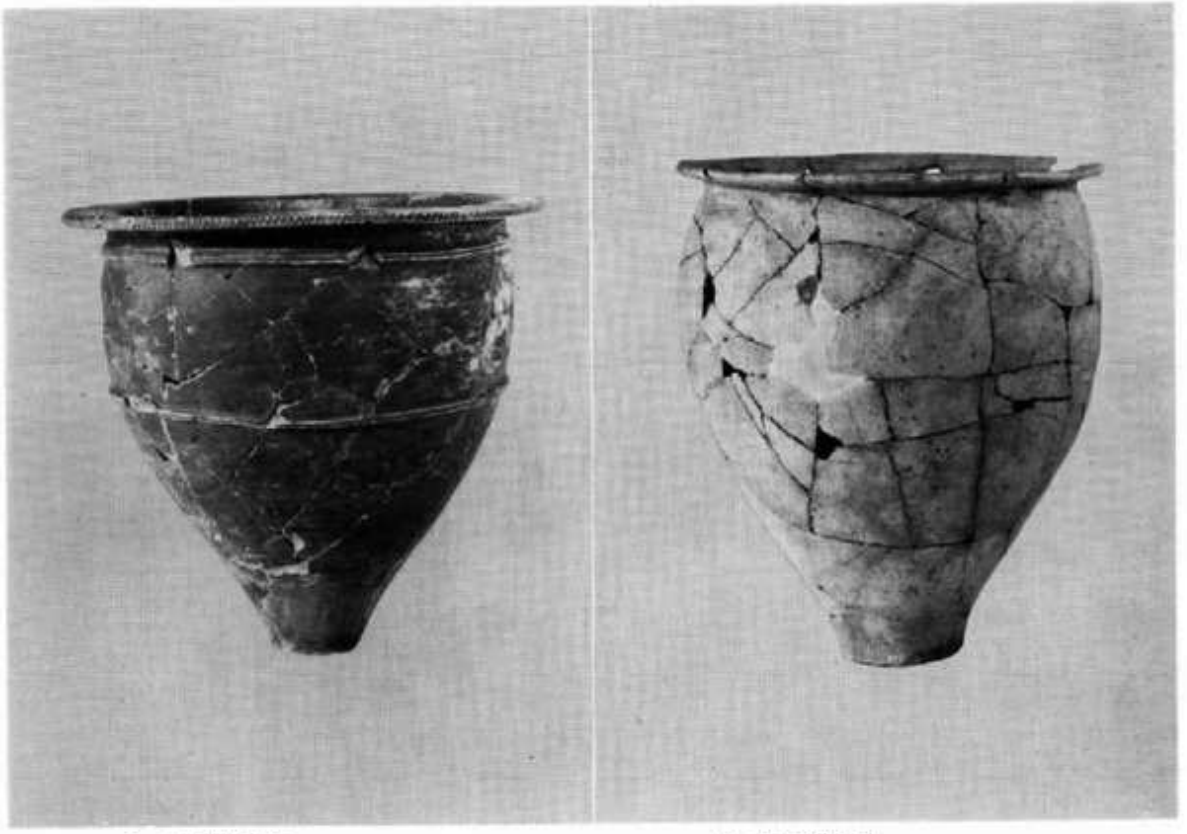
2 23号甕棺下甕

3 37号甕棺上甕

4 37号甕棺下甕

1 38号甕棺上甕

2 38号甕棺下甕



3 44号甕棺上甕

4 44号甕棺下甕

1 53号甕棺上甕

2 53号甕棺下甕

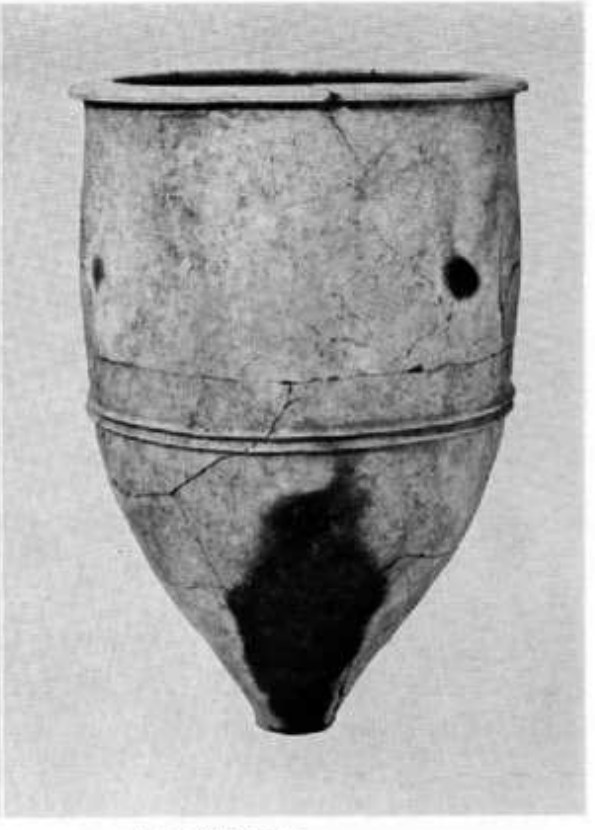
3 54号甕

4 65号甕棺下甕

1 99号甕棺上甕

2 99号甕棺下甕

3 100号甕棺上甕



4 100号甕棺下甕

1 101号甕棺上甕

2 101号甕棺下甕

3 102号甕棺上甕

4 102号甕棺下甕

1 103号甕棺上甕

2 103号甕棺下甕

3 104号甕棺上甕

4 104号甕棺下甕

1 105号甕棺上甕

2 105号甕棺下甕

3 109号甕棺上甕

4 109号甕棺下甕

1 110号甕棺上甕

2 110号甕棺下甕

3 120号甕棺上甕

4 120号甕棺下甕

1 121号甕棺上甕

2 121号甕棺下甕

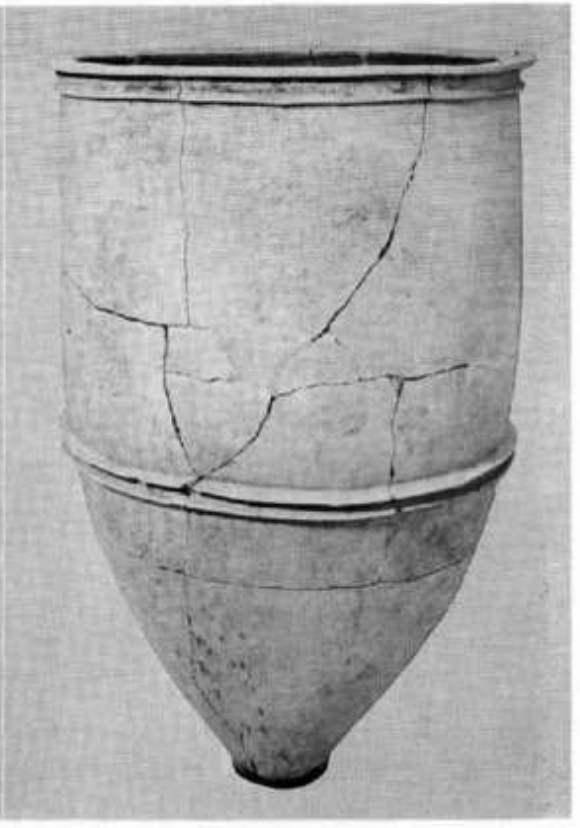
3 122号甕棺上甕

4 122号甕棺下甕

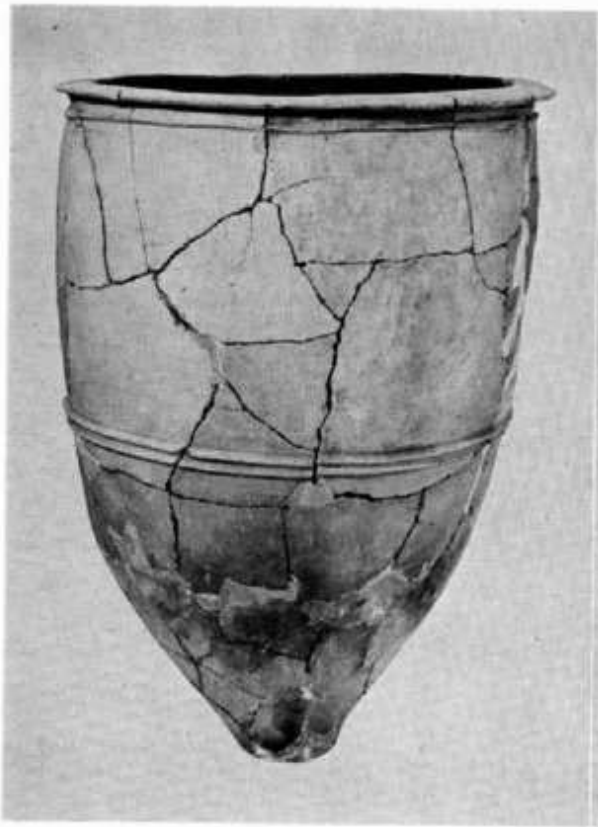
1 125号甕棺上甕

2 126号甕棺下甕

3 127号甕



4 128号甕



1 130号甕

2 132号甕棺上甕

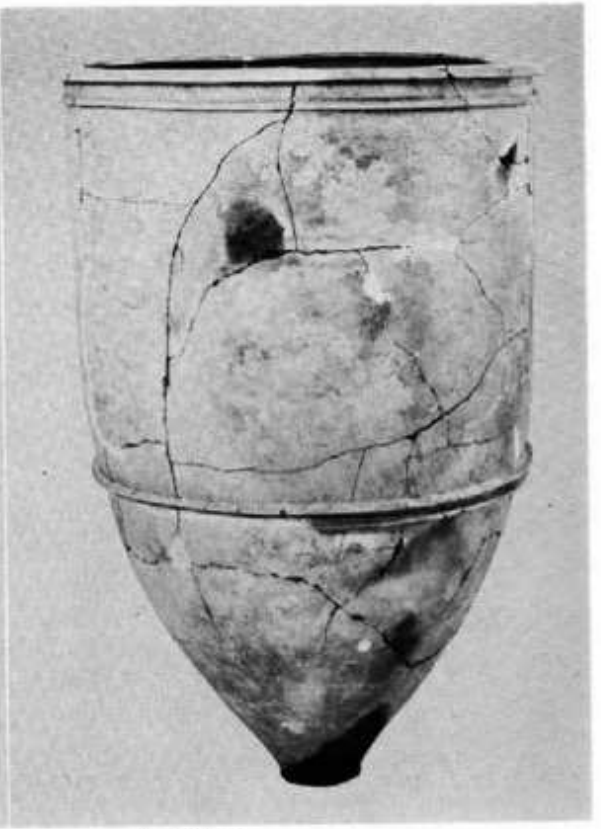
3 133号甕棺上甕

4 133号甕棺下甕

1 134号甕棺上甕

2 134号甕棺下甕

3 135号甕



4 136号甕

1　1号土壙墓

2　4号土壙墓

1　5号土壙墓

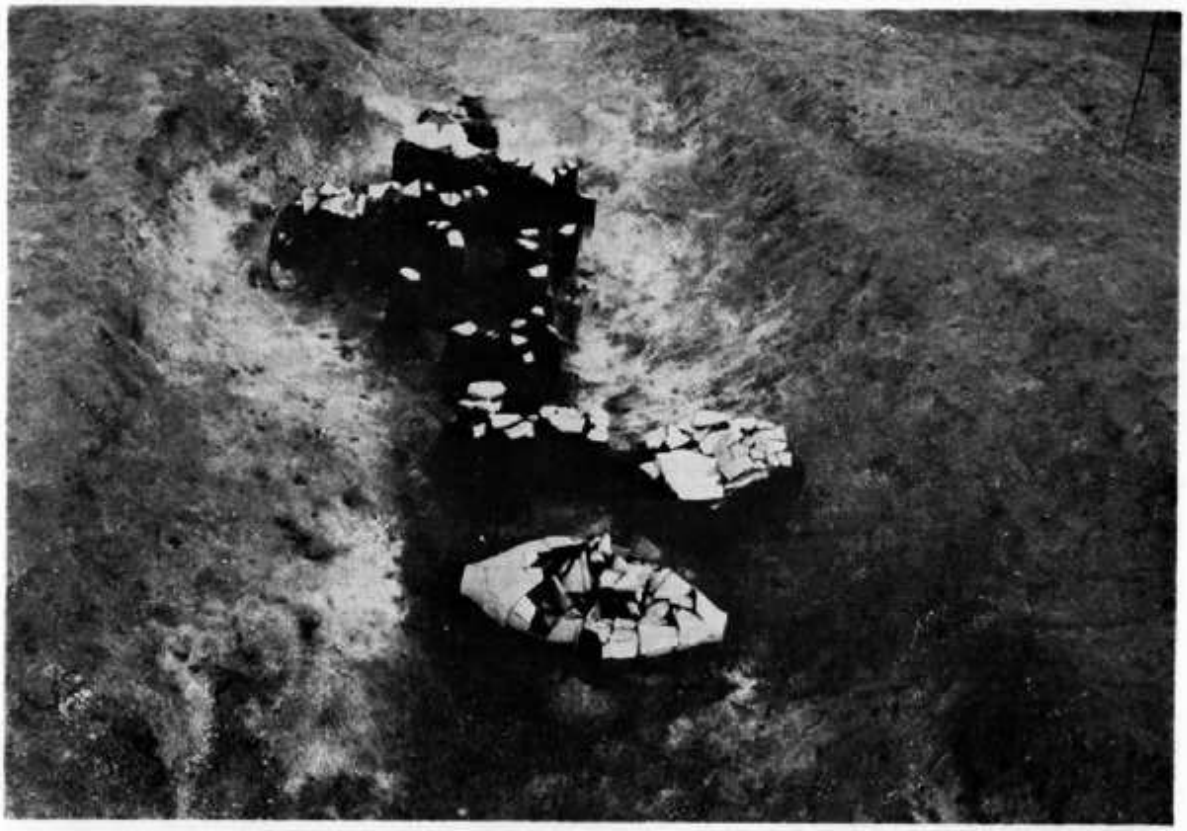
2　6号土壙墓

1 7号土壙墓

2 10号土壙墓

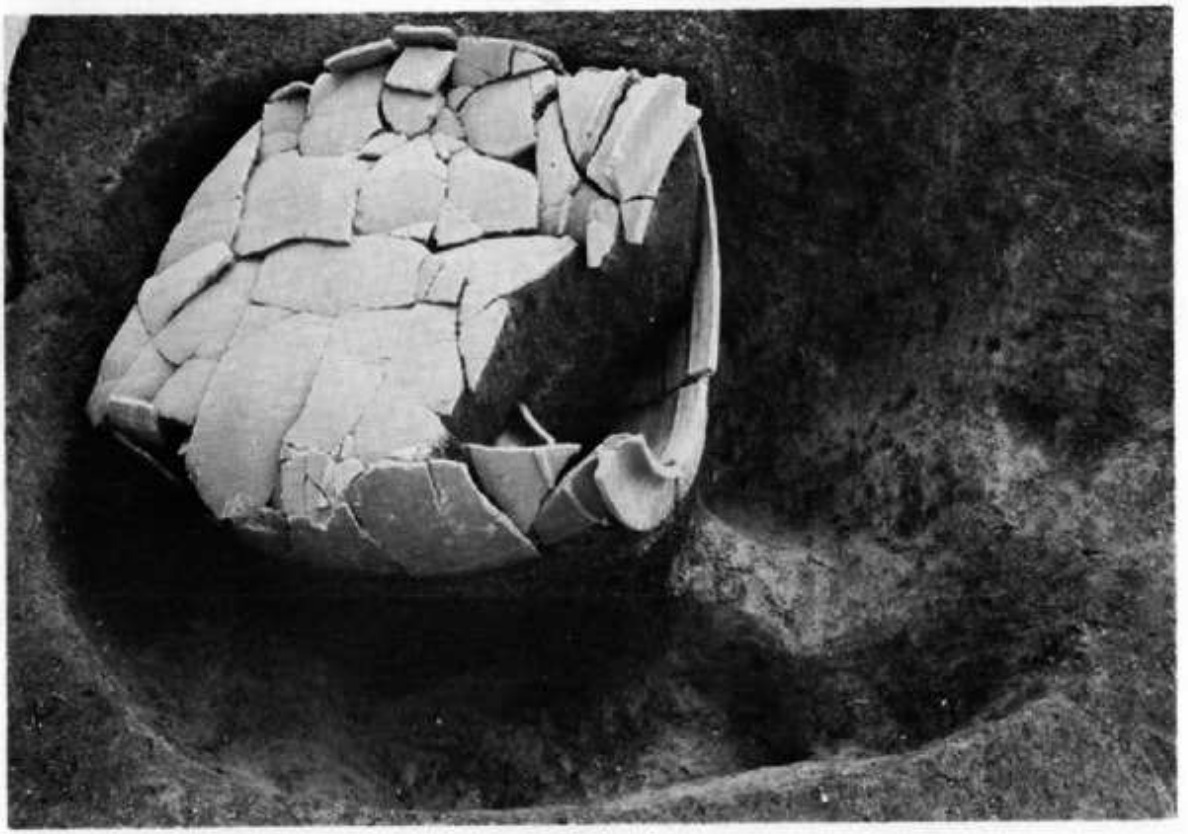
1 47号甕棺墓と供献土器出土状態

2 溝状遺構全景

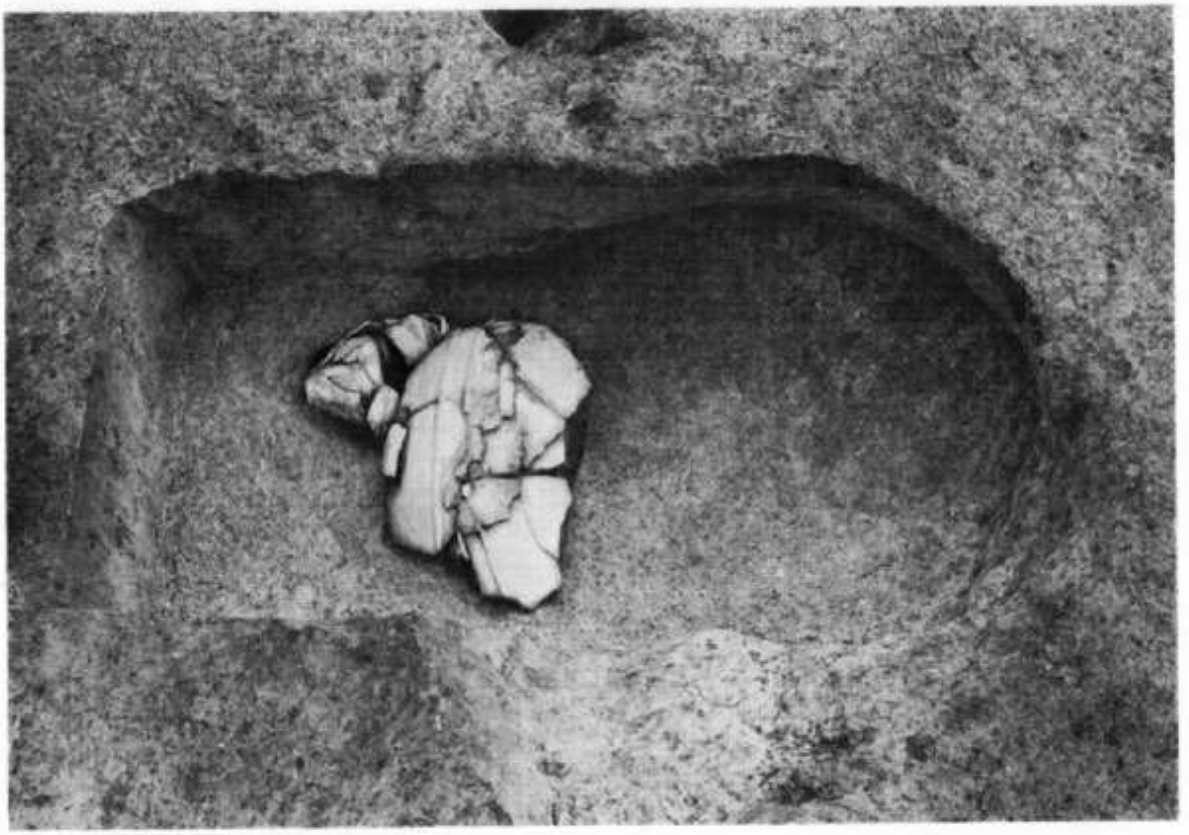


1 溝状遺構と119号甕棺墓

2 119号甕棺墓

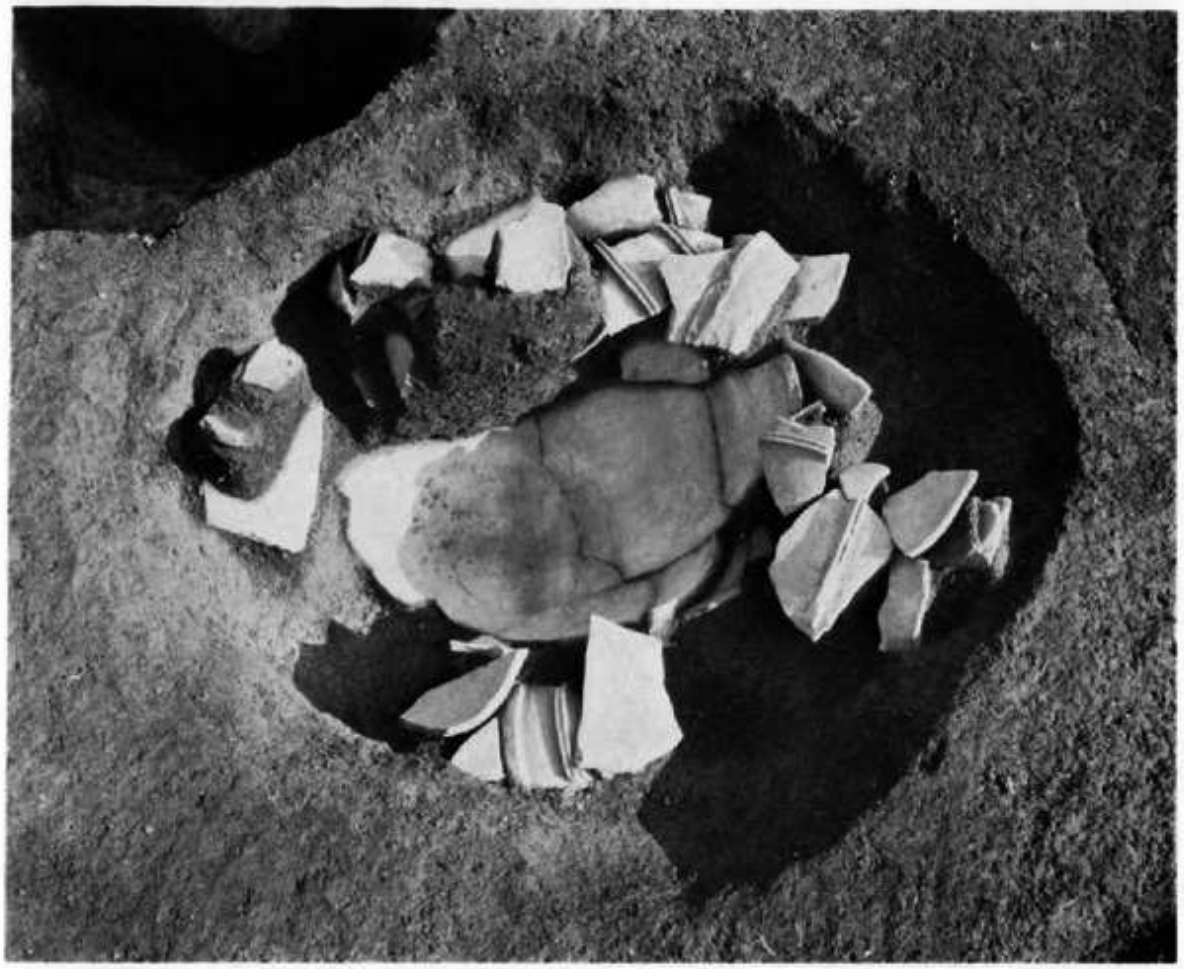


1　1号祭祀遺構



2　2号祭祀遺構

1　2号祭祀遺構内丹塗甕形土器出土状態



2　3号祭祀遺構

祭祀遺構出土土器（番号は遺構番号に同じ）

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告
第 10 集
昭和54年 3 月25日
発　行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6—29
印　刷　株式会社 天地堂印刷製本所
北九州市小倉北区大手町10—18